大正三年七月十二日印刷
大正三年七月十五日發行

有朋堂文庫
親鸞聖人文集（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

ル

レ

ロ

ワ

親鸞聖人集索文引　終

メ

ヒ

ネ

ハ

ナ

ニ

ツ

テ

ト

チ

ソ

ス

セ

シ

コ

ケ

キ

オ、ヲ

カ、クワ

イ、ヰ

ウ

エ、ヱ

親鸞聖人文集索引

（主要なる語句を採り發音に從ひて五十音順に排列す）

ア

我が歳きはまりて、安養浄土に還帰すといふとも、和歌の浦曲の片雄浪の、よせかけ〳〵帰らんに同じ。一人居て喜ばゝ二人と思ふべし。二人居て喜ばゝ三人思ふべし。その一人は親鸞なり。

我れなくも、法は盡きまじ、和歌の浦、
あをくさ人の、あらんかぎりは。

愚禿親鸞満九十歳、

弘長二歳十一月

——「御臨末御書」季瑛護科——

親鸞聖人文集　終

妙果—佛のさとり

も、親といひ疎といひ、この見寫をうるともがら、はなはだもてかたし。しかるにすでに製作を書寫し、眞影を圖畫せり。これ專念正業の德なり。これ決定往生の徵なり。よりて悲喜のなみだをおさへて、由來の緣をしるす。

よろこばしきかな、心を弘誓の佛地にたて、念を難思の法海にながす。ふかく如來の矜哀をしりて、まことに師敎の恩厚をあふぐ。慶喜いよ〳〵いたり、至孝いよ〳〵おもし。これによりて眞宗の詮を鈔し、淨土の要をひろふ。たゞ佛恩のふかきことをおもふて、人倫のあざけりをはぢず。もしこの書を見聞せんものは、信順を因とし、疑謗を緣として、信樂を願力にあらはし、妙果を安養にあらはさん。

安樂集にいはく、眞言をとりあつめて、往益を助修せん。いかんとなれば、さきに生ぜんものは、のちをみちびき、のちに生ぜんものは、さきをとふらひ、連續無窮にして、ねがはくば休止せざらしめんと欲す、無邊の生死海をつくさんがためのゆへなり。已上。しかれば末代の道俗、あふいで信敬すべきなり、しるべし。華嚴經の偈にいふがごとし、もし菩薩種々の行を修行するをみて、善不善の心をおこすことあれども、菩薩みな攝取す。已上。

選擇―法然上人の著書選擇集のこと

空の眞筆―法然上人の自筆

べののきたのほとり、大谷に居したまひき。おなじき二年壬の申、寅月下旬第五日、むまのときに、入滅したまふ。奇瑞稱計すべからず、別傳にみえたり。しかるに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の暦、雜行をすてゝ、本願に歸す。元久乙の丑のとし恩恕をかうふりて、選擇を書しき。おなじきとし、初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の内題の字、ならびに南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本と、釋の綽空の字と、空の眞筆をもて、これをかかしめたまひき。おなじき日、空の眞影まうしあづかりて、圖畫したてまつる。おなじき二年、閏七月下旬第九日、眞影の銘は、眞筆をもて、南無阿彌陀佛と、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の眞文とを、かかしめたまひき。またゆめのつげによりて、綽空の字をあらためて、おなじき日、御筆をもて、名の字をかかしめたまひおはんぬ。本師聖人、今年七旬三の御としなり。選擇本願念佛集は、禪定博陸、月輪殿兼實法名圓照、の敎命によりて、選集せしめたまふところなり。眞宗の簡要、念佛の奧義これに攝在せり。みるものさとりやすし。まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。としをわたり、日をわたりて、その敎誨をかうふるひと、千萬なりといへど

源信、止觀によりていはく、魔は煩惱によりて菩提をさまたぐ、鬼は病惡をおこして命根をうばふ。已上。

論語にいはく、季路とはく、鬼神につかへんかと。子ののたまはく、つかふることあたはず、ひといづくんぞよく鬼神につかへんや。已上。抄出

ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は、行證ひさしくすたれ、淨土の眞宗は、證道いまさかんなり。しかるに諸寺の釋門、教にくらくして、眞假の門戶をしらず、洛都の儒林、行にまどひて、邪正の道路を辨ずることなし。こゝをもて興福寺の學徒、太上天皇、後鳥羽の院と號す、諱尊成。今上。土御門の院と號す、諱爲仁。聖曆承元丁の卯の歲、仲春上旬の候に奏達す。主上臣下、法にそむき、義に違し、いかりをなし、うらみをむすぶ。これによりて眞宗興隆の太祖、源空法師、ならびに門徒數輩、罪科をかんがへず、みだりがはしく死罪につみす。あるひは僧儀をあらため、姓名をたまふて遠流に處す、予はそのひとつなり。しかればすでに僧にあらず俗にあらず、このゆへに禿の字をもて姓とす。空師ならびに弟子等、諸方の邊州につみして、五年の居諸をへたり。皇帝、佐渡の院諱守成。聖代建曆辛の未のとし、子月中旬第七日、勅免をかうふりて、入洛已後、空、洛陽東山のにしのふもと、とり

高麗の觀法師のいはく餓鬼道等ー四教儀の文

まだ世にのがれず、眞を論ずれば、俗をこしらふる權方なり已上。
高麗の觀法師のいはく、餓鬼道、梵語には闍梨多。この道また諸趣に徧す。福德あるものは、山林塚廣神となる。福德なきものは、不淨所に居し、飲食をえず、つねに鞭打をうく、河をふさぎ海をふさぎて、苦をうくること無量なり。諂誑の心意なり。下品の五逆十惡をつくりて、この道の身を感ず。已上。
神智法師釋していはく、餓鬼道は、つねにうえたるを餓といふ、鬼の言は尸に歸す。子のいはく、いにしへは人死となづく、歸人とす。また天神を鬼といふ、地神を祇といふ。乃至。かたち、あるひは人ににたり、あるひは獸等のごとし。心王直ならざれば、なづけて諂誑とす。
大智律師のいはく、神はいはく鬼神なり、すべて四趣、天修、鬼獄におさむ。度律師のいはく、魔はすなはち惡道の所收なり。
止觀の魔事境にいはく、二に魔の發相をあかさば、管屬に通じてみな稱して魔とす。くはしく枝異をたづぬれば、三種をいでず、一には慢惕鬼、二には時媚鬼、三には魔羅鬼なり、三種の發相各々不同なり。

光明寺の和尚のたまはく上方等—法事讃の文

慈雲大師いはく、しかるに等—樂邦文類の文

としくみな邪見なり、淸信と稱することをえざるなり。乃至。老子の邪風をすてゝ、法の眞敎に入流せよとなり。已上抄出。

光明寺の和尚のたまはく、上方の諸佛、恒沙のごとし、かへりて舌相をのべたまふことは、娑婆の十惡五逆、おほく疑謗し、邪を信じ鬼につかへ、神魔をあかしめて、みだりにおもふて、恩をもとめ福あらんとおもへば、災障禍横うたゝいよ／＼おほし、連年にやまひの床枕にふす、みゝしゐ、めしゐ、あしおれ、手ひきつり、神明に承事して、この報をうるものゝためなり、いかんぞすてゝ彌陀を念ぜざらん。已上。

天台の法界次第にいはく、一には佛に歸依す。經にいはく、佛に歸依せんもの、つゐにかへりて、その餘のもろ／＼の外天神に歸依せざれ。またいはく、佛に歸依せんもの、つゐに惡趣に墮せじといへり。二には法に歸依す、いはく、大聖の所說、もしは敎もしは理、歸依し修習せよとなり。三には僧に歸依す、いはく、心いへをいでたる三乘正行のともに歸するがゆへに、經にのたまはく、ながくまたかへりて、その餘のもろ／＼の外道に歸依せざるなり。已上。

慈雲大師のいはく、しかるに祭祀の法は、天竺には韋陀、支那祀典といへり。すでにい

外道—佛教以外の教道を云ふ

もしあきらかにしからば、しんぬ。幽王、犬戎のためにころさる、あに君父を愛して、神符をあたへて、君父をして死せざらしめざるべけんや。乃至。陸修靜が目錄をさす、すでに正本なし、なんぞあやまりのはなはだしきや。しかるに修靜、目をなすこと、すでにこれ大僞なり。いま玄都錄、またこれ僞のなかの僞なり。乃至。またいはく、大經のなかにとかく、道に九十六種あり。たゞ佛の一道、これ正道なり。その餘の九十五種においては、みなこれ外道なりと。朕、外道をすてゝもて如來につかふ。もし公卿ありて、よくこのちかひにいらんものは、おの〳〵菩薩の心をおこすべし。老子、周公、孔子等、これ如來の弟子として、しかも化をなすといへども、すでに邪なり、たゞこれ世間の善なり、凡をへだてゝ聖となすことあたはず。公卿百官侯王宗室、よろしく僞をかへして眞につき、邪をすてゝ正にいるべし。かるがゆへに經教成實論にときていはく、もし外道につかへて、心おもく、佛法は心かろし、すなはちこれ邪見なり。もし心一等なる、これ無記にしてあたらず、もし善惡、佛につかへて、孝子にこはき心すくなきは、すなはちこれ清信なり。清といふは、清はこれ表裏ともにきよく、垢穢惑累みなつくす、信はこれ正を信じて邪ならざるがゆへに、清信佛弟子といふ。その餘、ひ

の郡、玉光州、金眞の郡、天保の縣、元明の郷、定志の里を治す、災およばざるところなり。靈書經にいはく、大羅はこれ五億五萬五千五百五十五重天の上天なり。五岳の圖にいはく、鄷は覩なり、太上は大道なり、道のなかの道神なり、明君もとも靜をまもりて、太玄の都におり、諸天內音にいはく、天と諸仙と樓都のつゞみをならす、玉京に朝晏して、もて道君をたのしましむ。

道士のあぐるところの經の目を按ずるに、みないはく、宋人陸修靜によりて、しかも一千二百二十八卷をつらねたり、もと雜諸子の名なし。しかるに道士、いまつらぬるに、すなはち二千四十卷あり。そのなかにおほく、漢書藝文志の目をとりてみだりに、八百八十四卷をしるして、道の經論とす。乃至。陶朱を按ずれば、すなはちこれ范蠡なり、まのあたり越王勾踐につかへて、君臣こと〲く吳にとらはれて、屎をなめ尿をのんで、またもてはなはだし、また〲范蠡が子は、齊にころさる、父すでに變化の術あらば、なんぞもて變化して、これをまぬかるゝことあたはざる。造立天地記を按ずるに、稱すらく、老子、幽王の皇后のはらのなかに託生す、すなはちこれ幽王の子なり、また身、柱史たり、またこれ幽王の臣なり。化胡經にいはく、老子、漢にありては東方朔たり。

解脱—煩惱を解き迷界を脱す

滅す、かるがゆへにことばをわするゝなり。法身はすなはち三點四德の成ずるところ、蕭然として無累なり、かるがゆへに解脱と稱す、これその神解として患息するなり。夫子聖なりといへども、はかるにもて功を佛にゆづれり。いかんとなれば、劉向が古舊二錄を按ずるに、いはく、佛流、中夏をへて一百五十年ののち、老子まさに五千文をとく、しかれども周と老と、ならびに佛教の所說をみる言教往々たり。あきらめつべし。乃至。

正法念經にのたまはく、ひと戒をたもたざれば、諸天減少し阿修羅さかんなり。善龍ちからなし、惡龍ちからあり、惡龍ちからあれば、すなはち霜雹をくだし、非時の暴風疾雨ありて、五穀みのらず、疾疫きほひおこりて、人民飢饉し、たがひにあひ殘害す、もしひと戒をたもてば、おほく諸天威光を增足し、修羅減少す。惡龍ちからなし、善龍ちからあり。善龍ちからあれば、風雨ときに順じ、四氣和暢なり、甘雨くだりて稔穀ゆたかなり、人民安樂にして、兵戈戰息し、疾疫行ぜざるなり。乃至。

君子のいはく、道士大霄が隱書、元上が眞書等にいはく、元上大道君、治、五十五重無極大羅天のうち、玉京のうへ、七寶の臺、金床玉机にあり、仙童玉女の侍衞するところ、三十二天三界のほかに住す、神仙五岳の圖を按ずるに、いはく、大道天尊は、大玄

相輪のかげをみるがごときにいたりては、南平は應を瑞像にえ、文宣はゆめを聖牙に感ず、蕭后ひとたび鑄て尅成し、宋皇よたび摸してならず、その例ははなはだおほし。つぶさにのぶべからず。あになんぢが無目をもて、しかもかの有靈をきらはんや。

しかるに德としてそなはらざるものなし、これをいふて涅槃とす。道として通ぜざるものなし、これをなづけて菩提とす。智としてあまねからざるものなし、これを稱して佛陀とす。この漢語をもてかの梵言を譯す、すなはち彼此の佛、照然として信ずべきなり。なにをもてかこれをあかすとならば、それ佛陀といふは、漢には大覺といふ。菩提といふは、漢には大道といふ。涅槃といふは、漢には無爲といふ。しかるに吾子ひめもすに菩提の地をふんで大道をしらず、すなはち菩提の異號なり。かたちを大覺のさかひにうけて、いまだ大覺をならはず、すなはち佛陀の譯名なり。かるがゆへに莊周公また大覺あれば、しかうしてのちに、その大夢をしる。郭が註にいはく、覺は聖人なり、いふこゝろは患こゝろにあるは、みなゆめなり。註にいはく、夫子と子游と、いまだことばをわすれて神解することあたはず、かるがゆへに大覺にあらず。君子のいはく、孔丘の談こゝにまたつきぬ。涅槃寂照、識としてさとるべからず、智としてしるべからず、すなはち言語たえてしかも心行

比丘―男の出家したるを云ふ
比丘尼―女の出家

文、周孔その教をたかくす。謙をあきらかにし、質をまもる、すなはち聖にのぼる階梯なり。三畏五常は人天の由漸とす、けだし冥に佛理にかなふ、正辨極談にあらずや。なを道を瘖聾にそしる、方をさしまねいで、遠迴をきはむることなし。津を兎馬にとふ、わたるをしりて淺深をはからず。これによりて談ずるに、殷周の世は、釋教のよろしく行ずべきところにあらず。なを炎威ひかりをかゞやかす。童子、目をたゞしくして、みることあたはず、迅雷、ふるひうつ、儒夫、耳をはりて、きくことあたはず。こゝをもて河池わきうかぶ。昭王、神を誕ずることをおそる、雲霓いろを變ず。穆后、聖をうしなはんことをよろこぶ。（周書異記にいはく、昭王二十四年四月八日、江河泉水こと〳〵く泛漲せり、穆王五十二年二月十五日、暴風おこりて樹木をれ天くもり、くもくらくして白虹の怪あり。）あによく葱河をこえて、化をうけ、雲嶺をこえて、まことをいたさんや。淨名にいはく、これ盲者まうあへり、日月のとがにあらずと。たま〳〵その鑿竅の辨をきはめんとす、おそらくば吾子混沌の性をいたむ、それしるところにあらず、その盲一なり。

内に像塔を建造する指の二。漢明より已下、齊梁におはるまで、王公守牧清信の士女、および比丘、比丘尼等、冥に至聖を感じ、くにに神光をみるもの、おほよそ二百餘人。あとを萬山にみ、ひかりを滬瀆にうかべ、淸臺のもとに、滿月のかたちをみ、雍門のほかに、

原壤、はゝ死して騎棺してそしらず、子桑、死するとき、子貢とぶらふ、四子あひみてうたふ、しかるに孔子、ときにまつりをたすけてわらふ。荘子妻死す、はとぎをたゝきてわらふ。かるがゆへに、これをおしふるに孝をもてす、天下の人父たるを敬するゆへなり、これをおしふるに忠をもてす、天下の人君たるを敬するゆへなり。化、萬國にあまねし、すなはち明辟のいたれるなり、仁、四海にあらはる、まことに聖王の臣孝なり。佛經にいはく、識體六趣に輪廻す、父母にあらざることなし。生死三界に變易す、たれか怨親をわきまへん。またいはく、無明、慧眼をおほふ、いまだ生死のなかにゆかず、ゆききたりてなすところ、さらにたがひに父子たり、怨親しば〳〵知識たり、知識しば〳〵怨親たり、こゝをもて沙門、俗をすてゝ眞におもむく、庶類を天屬にひとしくす、榮をすてゝ道につく、含氣を己親にひとしくす、あまねくたゞしき心を行じて、あまねくしたしきこゝろざしをひとしくす。また道は淸虛をたつとぶ、それ恩愛をおもくせんや。法は平等をたつとぶ、それ怨親をきらはんや、あにまどひにあらずや。勢競、親をわすれ、文史、事をあかす、齊桓楚穆これそのともがらなり。もて聖をそしらんとおもふ、あにあやまれるにあらずや。それ道の劣、十なり。乃至。二皇、化をすべて、須彌四域經にいはく、應聲菩薩を伏義とす、吉祥菩薩を女媧とす。渟風のはじめにおり、三聖、ことばをたてゝ、空寂所問經にいはく、迦葉を老子とす、儒童を孔子とす、光淨を顔回とす。已澆のすゑをおこす。玄虛沖一のむね、黃老その談をさかりにし、詩書禮樂の

調達―提婆達多のこと

もて釋門には、右に轉ずることまた人用をたのしくす。張陵、左道にす、まことに天の常にたがふ。いかんとなれば、釋迦、無緣の慈をこえて、有機の召に應ず、そのあとをかたるなり。乃至。それ釋氏は、天上天下に介然として、その尊に居す、三界六道卓爾としてその妙をおす。乃至。

外論にいはく、老君を範となす、たゞ孝たゞ忠、世をすくひひとを度す、慈をきはめ愛をきはむ、こゝをもて聲教ながくつたへ、百王あらたまらず、玄風ながくかうふらしめて、萬古たがふことなし。このゆへにくにをおさめ、いへをおさむるに、常然たり楷式たり。釋教は義をすて親をすて、仁ならず孝ならず、闍王、父をころせる、飜じてとがなしととく。調達、兄を射て、無間につみをう、これをもて凡をみちびく、さらに惡をますことをなす、これをもて世にのりとする、なんぞよく善を生ぜんや、これ逆順の異十なり。

内にさとしていはく、義はすなはち道德のいやしくするところ、禮は忠信のうすきより生ず。瑣仁、匹婦をそしり、大孝は、不匱を存す。しかふして凶にむかひて、うたひわらふ、中夏のかたちにたがふ。喪にのぞんで、ほとぎをたゝく、華俗のおしへにあらず。

ろは、はじめ老子をもて、免縛形の仙とす、いますなはち非なり、嗟、そのいつはれる典、ひとのこゝろをとる、かるがゆへに死をまぬがれず、わが友にあらず。乃至。内の十喩、外の十異を答す。外は生より左右ことなる一なり、内は生より勝劣あり。内にさとしていはく、左袵はすなはち戎狄のたふとぶところ、右命は中華のたふとぶところとす。かるがゆへに春秋にいはく、冢卿は命なし、介卿はこれあり、またひだりならずや。史記にいはく、藺相如は功おほきにして、くらゐ廉頗が右にあり、これをはづ。またいはく、張儀相、秦を右にして、魏を左にす、犀首相、韓を右にして、魏を左にす、蓋しいはく、たよりあらず。禮にいはく、左道亂群をば、これを殺す。あに右はまさりて、左はおとれるにあらずや。皇甫謐が高士傳にいはく、老子は、楚の相人、溫水のきたにいへゐす、事を常從子にひとしくす、常子、疾あるにおよんで、李耳、ゆきてやまひをとふ。嵇康がいはく、李耳、涓子にしたがひて、九仙の術をまなぶ。太史公等が衆畫を撥するに、老子、左腋をひらきてむまるといはず、すでにまさしく、いでたることとなし、承信すべからざること、あきらけし。あきらかにしんぬ、戈をふるひ輪をあやつるは、けだし文武の先、五氣三光は、まことに陰陽のはじめなり。こゝを

開士のいはく、孔子、周にいたりて、老聃をみて、禮をとふ、史記につぶさにあらはる。文王の師たること、すなはち典證なし、周のすゑにいでたり、そのこと周のはじめにたづぬべし、史文にのせず。乃至。

外の七異にいはく、老君はじめて周の代にむまれて、のちに流沙にゆく、始終をはからず、方所をしることなし。釋迦は、西國に生じて、かの提河におはりぬ。弟子むねをうけて、群胡おほきにさけぶ。

內の七喩にいはく、老子は、賴鄕にむまれて、槐里にはうふらる。秦佚か弔をつまびらかにす、せめ遁天の形にあり。瞿曇はかの王宮にいでて、慈鵠樹にかくれたまふ。漢明の世につたはりて、ひそかに蘭臺の書にまします。

開士のいはく、莊子の內篇にいはく、老聃死して、秦佚とふらふ、こゝにみたびさけんでいづ。弟子あやしんでとふ、夫子のともがらにあらざるかと。秦佚がいはく、さきにわれいりて少者をみるに、これを哭す、その父を哭するがごとし。老者これを哭す、その子を哭するがごとし。いにしへにこれを遁天の形といふ、はじめはおもへらく、そのひとなりと、しかるにいま非なり。遁は隱なり、天は免縛なり、形は身なり。いふこゝ

浄飯－浄飯王のこと梵語首圖馱那の譯也、釋迦の父

はく、官をしりぞきてくらゐなきは、左遷せらる。論語にいはく、左衽は禮にあらずと、もし左をもて、右にすぐれたりとせば、道上行道するに、なんぞ左にめぐらずして、しかもかへりて右にめぐるや。くにの詔書にみないはく、右のごとしと、ならびに天の常にしたがふてなり。乃至。

外の四異にいはく、老君は、文王の日、隆周の宗師たり。釋迦は、莊王のとき、罽賓の教主たり。

内の四喩にいはく、伯陽は、職、小臣におり、かたじけなく藏吏にあたれり、文王の日にあらず。また隆周の師にあらず。牟尼は、くらゐ、太子に居して、身、特尊を證したまへり。昭王の盛年にあたれり、閻浮の教主たり。乃至。

外の六異にいはく、老君は、世に降して、はじめ周文の日より孔丘のときにおはれり。釋迦は生をくだして、浄飯のいへにはじまりて、わが莊王の世にあたれり。

内の六喩にいはく、迦葉は、桓王丁卯のとしにむまれて、景王壬午のとしにおふ。孔丘のときにおふといへども、姫昌の世にいでず。調御は、昭王甲寅のとしに誕じて、穆王壬申のとしにおふ、これ浄飯の胤たり。もと莊王のさきにいでたまへり。

よせて、右脇をひらきていでたり。乃至。内の一喩にいはく、老君は常にたがひて、牧女に託して、左よりいづ。世尊は化にしたがひて聖母によりて、右よりいでたまふ。開士のいはく、慮景裕、戴詵、韋處玄等が解五千文、および梁の元帝周弘政等が老義類を案ずるにいはく、太上に四あり、いはく、三皇および堯舜これなり。いふこゝろは上古にこの大德の君あり、萬民のかみにのぞめり、かるがゆへに太上といふ。郭莊がいはく、ときにこれを賢とするところのものを、君とす、材、世に稱せられざるものを、臣とす。老子、帝にあらず、皇にあらず、四種のかぎりにあらず、なんの典據ありてか、たやすく太上と稱するや。

道家玄妙および、中胎、朱韜、王禮等の經、ならびに出塞記をかんがふるに、いはく、老はこれ李母がうめるところ、玄妙玉女ありといはず、すでに正說にあらず、もともかりの謬談なり。

仙人玉錄にいはく、仙人は妻なし、玉女は夫なし、女形をうけたりといへども、つゐに産せず、もしこの瑞あるは、まことに嘉とすべしといふ。なんすれぞ史記にも文なし、周書にものせず、虛をもとめて實をせめば、矯盲者のことばを信ずならくのみ。禮にい

三昧—三摩地同じ、等持と譯す

ふり、おほく宿し、おほくやまひす、その心懈怠なり。あるひはにはかに精進をおこして、のちにはすなはち休廢す、不信を生じて、うたがひおほく、おもんぱかりおほし、あるひはもとの勝行をすてゝ、さらに雜業を修せしめ、もしは世事に著せしめ、種々に牽纏せらる、またよくひとをして、もろ〳〵の三昧の少分相似せるをえしむ。みなこれ外道の所得なり、眞の三昧にあらず。あるひはまたひとをして、もしは一日、もしは二日、もしは三日、乃至七日、定中に住して、自然香味の飲食をえしむ。身心適悅して、飢せず渴せず、ひとをして愛著せしむ、あるひはまたひとをして、食に分齊なからしむ、たちまちにおほく、たちまちにすくなくして、顏色變異す。この義をもてのゆへに、行者つねに智慧をして、觀察して、この心をして邪網に墮せしむることなかるべし。まさにつとめて正念にして、とらず著せずして、すなはちよくこのもろ〳〵の業障を遠離すべし。しるべし、外道の所有の三昧は、みな見愛我慢の心をはなれず、世間の名利恭敬に貪著するがゆへなり。已上。

辨正論（法琳の撰）にいはく、十喩九箴の篇、答李道士、十異九迷、外の一異にいはく、太子老君は、神を玄妙玉女に託して、左腋をさきてむまれたり。釋迦牟尼は胎を摩耶夫人に

また〳〵むなしくかの苦行を修しき、今日おなじく、この法をすつること、なをし蛇のふるき皮をぬぐがごとくするをや。そのときに、かの舅迦葉三人、おなじくともに偈をもて、その外甥優婆斯那に報じて、かくのごときの言をなさく、われらむかし、むなしく火神をまつりて、また〳〵いたづらに苦行を修しき、われら今日、この法をすつること、まことに蛇のふるき皮をぬぐがごとくす。抄出。

起信論にいはく、あるひは衆生ありて、善根力なければ、すなはちもろ〳〵の魔、外道、鬼神のために誑惑せらる、もしは座中にして、かたちを現じて恐怖せしむ。あるひは端正の男女等の相を現ず。まさに唯心の境界を念ずべし。すなはち滅してつるに惱をなさず。あるひは天像、菩薩像を現じ、また如來像の相好具足せるをなして、もしは陀羅尼をとき、もしは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をとき、あるひは平等、空無相、無願、無怨、無親、無因、無果、畢竟空寂、これ眞の涅槃なりとゝかん、あるひはひとをして宿命過去の事をしらしめん、また未來の事をしる他心智をえ、辨才無礙ならしむ、よく衆生をして、世間の名利の事に貪著せしむ。またひとをして、しば〳〵いかり、しば〳〵よろこばしめ、性無常の准ならしむ、あるひはおほく慈愛し、おほくね

三迦葉―優留頻羅迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉

本願藥師經にのたまはく、もし淨信の善男子、善女人等ありて、乃至盡形までに餘天につかへざれ。またのたまはく、また世間の邪魔、外道、妖孽の師の妄說を信じて、禍福すなはち生ぜん、おそらくば、やゝもすれば、心、みづからたゞしからず。卜問してわざはひをもとめ、種々の衆生を殺せん、神明に解奏し、もろ〳〵の魍魎をよばふて、福祐を請乞し、延年をねがはんとするに、つゐにうることあたはず、愚癡迷惑して、邪を信じ倒見して、つゐに橫死せしめ、地獄にいりていづる期あることなけん。乃至。八にはよこざまに毒藥、厭禱、呪咀し、起死鬼等のために、中害せらる。已上抄出。

菩薩戒經にのたまはく、出家のひとの法は、國王にむかひて禮拜せず、父母にむかひて禮拜せず、六親につかへず、鬼神を禮せず。已上。

佛本行集經の第四十二卷、優婆斯那品にのたまはく、闍那崛多の譯 そのときにかの三迦葉兄弟に、ひとりの外甥の螺髻梵志といふものあり、その梵志を優婆斯那となづく。乃至。つねに二百五十の螺髻梵志弟子とともに、仙道を修學しき。かれその舅迦葉三人をきくに、もろ〳〵の弟子、かの大沙門の邊に往詣して、阿舅、鬚髮を剃除して袈裟衣をきる。みおはりて舅にむかひて、しかも偈をときていはく、舅等むなしく火をまつること百年、

三歸―歸依佛、歸依法、歸依僧

衆ありて、各々にみづからいはん、無上道をなりて、わが滅度ののち、末法のなかに、この魔民おほからん、この鬼神おほからん、この妖邪おほからん、世間に熾盛にして、善知識となりて、もろ〳〵の衆生をして、愛見のあなにおとさしめん、菩提のみちをうしなひ、泣惑無識にして、おそらくば心をうしなはしめん、所過のところに、そのいへ耗散して、愛見の魔となりて、如來の種を失せん。已上。

灌頂經にのたまはく、三十六部の神王、萬億恒沙の鬼神を眷屬として、相をかくし番にかはりて、三歸をうくるひとをまもる。已上。

地藏十輪經にのたまはく、つぶさにまさしく歸依して、一切の妄執吉凶を遠離せんもの、つゐに邪神外道に歸依せざれ。已上。またのたまはく、あるひは種々に、もしは少、もしは多、吉凶の相を執して、鬼神をまつりて、乃至、しかうして極重の大罪惡業を生じ、無間罪にちかづかん。かくのごときのひと、もしいまだかくのごときの大罪惡業を懺悔し除滅せずば、出家しおよび具戒をうけしめざらんも、もしは出家し、あるひは具戒をうけしめんも、すなはちつみをえん。已上。

集一切福德三昧經のなかにのたまはく、餘乘にむかはざれ、餘天を禮せざれ。已上。

とはすなはち三世の諸佛の眞實の報身を壞するなり、すなはち一切天人の眼目をはらふなり。このひと、諸佛所有の正法、三寶の種を隱沒せんとおもふがためのゆへに、もろもろの天人をして利益をえざらしむ。地獄に墮せんがゆへに、三惡道增長し盈滿することをなすなり。已上。

またのたまはく、そのときにまた一切天、龍乃至一切迦吒富單那、人、非人等ありて、みなこと〴〵く合掌して、かくのごときの言をなさく、われら、佛一切聲聞弟子、乃至もしまた禁戒をたもたざれども、鬚髮を剃除し、袈裟のかたはしをきんものにおいて、師長のおもひをなさん、護持養育して、もろ〳〵の所須をあたへて、乏少なることなからしめん。もし餘の天、龍乃至迦吒富單那等、その惱亂をなし、乃至惡心をもて、まなこをもてこれをみば、われらこと〴〵くともに、かの天、龍、富單那等をして、所有の諸相、缺減し醜陋ならしめん。かれをしてまた、われらともに住し、ともに食をあたふることをえざらしめん。また〳〵同處にして戲咲することをえじ、かくのごとく擯罰せん。已上。

またのたまはく、占相をはなれて、正見を修習せしめ、決定して、ふかく罪福の因緣を信ずべし。抄出。

首楞嚴經にのたまはく、われらの諸魔、かのもろ〳〵の鬼神、かれらの群邪、また徒

またのたまはく
占相等ー華嚴經の文

護持し養育せば、なんぢをして長壽にして、もろ〳〵の衰患なからしめんと。そのときにまた百億の提頭賴吒天王、百億の毗樓勒叉天王、百億の毗樓博叉天王、百億の毗沙門天王あり。かれら同時に、および眷屬と、座よりしてたちて、衣服を整理し、合掌し敬禮して、かくのごときの言をなさく、大德婆伽婆、われら各々に、おのれが天下にして、ねんごろに佛法を護持し養育することをなさん。三寶の種をして、熾然としてひさしく住し、三種の精氣、みなことごとく增長せしめん。乃至。われいままた上首毘沙門天王と同心に、この閻浮提と北方との諸佛の法を護持す。已上略抄。

月藏經卷第八、忍辱品第十六にのたまはく、佛ののたまはく、かくのごとし〳〵、なんぢがいふところのごとし。もしおのれが苦をいとひ、樂をもとむるを愛することあらん、まさに諸佛の正法を護持すべし。これよりまさに無量の福報をうべし。もし衆生ありてわがために出家し、鬚髮を剃除し、袈裟を被服せん、たとひ戒をたもたざらん。かれらことごとく、すでに涅槃の印のために印せらるゝなり。もしまた出家して戒をたもたざらんもの、非法をもてしかも惱亂をなし、罵辱し毀呰せん。手をもて刀杖打縛し斫截することあらん。もし衣鉢をうばひ、および種々の資生の具をうばはんもの、このひ

し養育して、三寶の種を熾然ならしめて、ひさしく世間に住せしめ、いま地の精氣、衆生の精氣、法の精氣、みなことぐく增長せしむべし。もし世尊聲聞の弟子ありて、法に住し法に順し、三業相應して、しかも修行せば、われらみなことぐく護持し養育して、一切の所須、ともしきところなからしめん。乃至。この娑婆界にして、はじめ賢劫にいりしとき、拘樓孫如來、すでに四天、帝釋、梵天王に囑せしめて、護持し養育せしめ、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を增長せしめたまひき、拘那含牟尼、また四天下を梵、釋、諸天王に囑して、護持し養育せしむ。迦葉もまたかくのごとし、すでに四天下を梵、釋、護世王に囑して、行法のひとを護持せしめて、過去の諸仙衆、および諸天仙星辰、もろもろの宿曜また囑し分布せしめき。われ五濁世にいでて、もろ〱の魔のあだを降伏して、しかも大集會をなして、佛の正法を顯現せしむ。乃至。一切のもろ〱の天衆、ことごとくともに、佛にまふしてまふさく、われら王のところをところにして、みな正法を護持し三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を增長せしめ、もろ〱の病疫、飢饉、および鬪諍をやめしめん。乃至略出。

提頭賴吒天王護持品にいはく、佛ののたまはく、日天子、月天子、なんぢわが法において

を休息し、もろ〳〵の善道にむかへしむ。拘那含牟尼、また大梵王、他化、化樂天、乃至四天王に囑したまふ。つぎのちに迦葉佛、また梵天王、化樂等の四天、帝釋、護世王、過去のもろ〳〵の天仙に囑したまふ。もろ〳〵の世間のためのゆへに、もろ〳〵の曜宿を安置して、護持し養育せしめたまへり。濁惡世にいたりて、白法盡滅せんとき、われ獨覺無上にして、人民を安置しまもらん。いま大衆のまへにして、しば〳〵われを惱亂せん。まさにすつべし。法をときてわれをおいて護持せしめよ。十方のもろ〳〵の菩薩、一切こと〴〵く來集せん。天王もまたこの娑婆佛國土にきたらしめん。われ大梵王にとはく、たれかむかし護持するものと、帝釋大梵天、餘の天王をさししめす。ときに釋梵王、とがを導師に謝していはく、われら、王のところをところとして、一切の惡を遮障し、三寶の種を熾然ならしめ、三精氣を增長せん、諸惡の朋を遮障して、善朋黨を護持せしむ。已上略出

月藏經卷第七、諸魔得敬信品第十にのたまはく、そのときにまた百億の諸魔あり、ともに同時に座よりしてたちて、合掌して、佛にむかひたてまつり、佛足を頂禮して、しかも佛にまふしてまふさく、世尊、われらまたまさに大勇猛をおこして、佛の正法を護持

六波羅密―布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧

慧增長するなり。なんたち長夜に利益安樂をえん、この因緣をもて、なんたちよく六波羅密をみてん、ひさしからずして一切種智を成ずることをえん。

ときに娑婆世界の主、大梵天王を首として、百億のもろ〳〵の梵天王とともに、こと〴〵くこの言をなさく、かくのごとしかくのごとし、大德婆伽婆、われら各々におのれが境界、弊惡麤獷惱害において、他において慈愍の心なく、後世のおそれを觀ぜざらん、乃至われまさに遮障し、かの施主と五事を增長すべしと。

佛ののたまはく、よいかな〳〵、なんぢかくのごとくなるべしと。そのときにまた一切の菩薩摩訶薩、一切の諸大聲聞、一切の天龍、乃至一切の人非人等ありてほめてまふさく、よひかな〳〵大雄猛子、なんたちかくのごときの法、ひさしく住することをえ、もろもろの衆生をして惡道をはなるゝことをえ、すみやかに善道におもむかしめんと。そのときに世尊、かさねてこの義をあかさんとおぼして、しかも偈をときてのたまはく。

われ、月藏につけていはく、これ賢劫のはじめにいりて、鳩留孫佛、梵等に四天下を付屬したまふ。諸惡を遮障するがゆへに、正法のまなこを熾然ならしむ、もろ〳〵の惡事を捨離し、行法のものを護持し、三寶の種を斷ぜず、三精氣を增長し、もろ〳〵の惡趣

の精氣、正法の精氣、損減の因縁をなさしめば、なんぢ遮止して、善法に住せしむべし。もし衆生ありて、善をえんとおもはんもの、法をえんとおもはんもの、生死の彼岸に度せんとおもはんもの、檀婆羅密を修行することあらんところのもの、乃至般若波羅密を修行せんもの、所有の行法、法に住せん衆生、および行法のために、事をいとなまんもの、かのもろ〳〵の衆生、なんたちまさに護持養育すべし。もし衆生ありて、受持讀誦して、他のために演說し、種々に經論を解說せん、なんたちまさに、かのもろ〳〵の衆生と、念持方便して、堅固力をうべし。所聞にいりてわすれず、諸法の相を智信して、生死をはなれしめ、八聖道を修して、三昧の根相應せん。もし衆生ありて、なんぢが境界において、法に住せん。奢摩他、毗婆舍那、次第に方便して、もろ〳〵の三昧と相應して、ねんごろに三種の菩提を修習せんともとめんもの、なんたちまさに遮護し攝受して、ねんごろに捨施をなして、乏少せしむることなかるべし。もし衆生ありて、その飮食、衣服、臥具をほどこし、病患に因縁の湯藥をほどこさんもの、なんたちまさにかの施主をして、五利増長せしむべし。なんらをか五とす。一には、いのち増長せん、二には、たから増長せん、三には、たのしみ増長せん、四には、善行増長せん、五には、

八聖道―涅槃に到る道、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八種なり

三種の菩提―聲聞、緣覺、諸佛の三菩提

ろにして熾然ならしむ。地の精、氣衆生の精、氣正法のあぢはひ、醍醐の精氣、ひさしく住し增長せしむるがゆへに、またわがごときも、いま世尊のみもとにして、敎勅を頂受し、おのれが境界において言說敎令す。自在のところをえて、一切鬪諍飢饉を休息せしめ、乃至三寶の種をして、斷絕せざらしむるがゆへに。三種の精氣、ひさしく住して增長せしむるがゆへに。惡行の衆生を遮障して、行法の衆生を護養するがゆへに、衆生をして三惡道を休息せしめ、三善道に趣向するがゆへに。佛法をして、ひさしく住することをえしめんがためのゆへに。ねんごろに護持をなすと。

佛ののたまはく、よいかなよいかな妙丈夫、なんぢかくのごとくなるべしと。そのときに佛、百億の大梵天王につげてのたまはく、所有の行法、法に住し法に順じて、惡を厭捨せんものは、いまこと〴〵くなんたちが手のうちに付屬す。なんたち賢首、百億の四天下各々の境界において、言說敎令す。自在のところをえて、所有の衆生、弊惡麤獷惱害、他において慈愍あることなし、後世のおそれを觀ぜずして、刹利の心、および婆羅門、毗舍、首陀の心を觸惱せん、乃至畜生の心を觸惱せん。かくのごとし殺生をなす因緣、乃至邪見をなす因緣、その所作にしたがひて、非時の風雨あらん。乃至地の精氣、衆生

そのときに世尊、また娑婆世界の主、大梵天王に問てのたまはく、過去の諸佛、この四大天下をもて、かつてたれに付屬してか、護持養育をなさしめたまふと。ときに娑婆世界の主、大梵天王まふさく、過去の諸佛、この四天下をもて、かつてわれおよび憍尸迦に付屬したまへりき。護持をなさしめて、しかもわれ失ありやいなや。おのれが名および帝釋の名をあらはす、たゞし諸餘の天王、および宿曜辰を稱ぜしむ、護持養育すべしと。そのときに娑婆世界の主、大梵天王、および憍尸迦帝釋、佛足を頂禮して、しかもこの言をなさく、大德婆伽婆、大德修伽陀、われいまとがを謝すべし、われ小兒のごとくして、愚癡無智にして、如來のみまへにして、みづから稱名せざらんや。大德婆伽婆、やゝねがはくば、容恕したまへ。大德修伽陀、やゝねがはくば容恕したまへ。諸來の大衆、またねがはくば容恕したまへ。われ境界において、言說敎令す、自在のところをえて、護持養育すべし。乃至もろ〳〵の衆生をして、善道におもむかしめんがゆへに、われら、むかし鳩留孫佛のみもとにして、すでに敎勅をうけたまはり、乃至三寶の種をして、すでに熾然ならしむ。拘那含牟尼佛、迦葉佛のみもとにして、われ敎勅をうけたまはりしこと、またかくのごとし、三寶の種において、すでにねんご

人食せん。かれらがためのゆへに、この閻浮提をもて、天、龍、乾闥婆、鳩槃荼、夜叉等に分布せしむ。護持養育のゆへに。これをもて大集十方所有の佛土、一切無餘の菩薩摩訶薩等、こと〴〵くこゝに來集せん。乃至この娑婆佛土にして、そのところの百億の日月、百億の四天下、百億の四大海、百億の鐵圍山、大鐵圍山、百億の須彌山、百億の四阿修羅城、百億の四大天王、百億の三十三天、乃至百億の非想非々想處、かくのごとくかずを略せり。娑婆佛土、われこのところにして、しかも佛事をなす。乃至娑婆佛土の諸有のもろ〳〵の梵天王、およびもろ〳〵の眷屬、魔天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王、帝釋天王、四大天王、阿修羅王、龍王、夜叉王、羅刹王、乾闥婆王、緊那羅王、迦樓羅王、摩睺羅伽王、鳩槃荼王、餓鬼王、毗舍遮王、富單那王、迦吒富單那王等において、こと〴〵くまさに眷屬として、こゝに大集せり。法をきかんがためのゆへに。乃至こゝに娑婆佛土の所有のもろ〳〵の菩薩摩訶薩等、およびもろ〳〵の聲聞、一切餘なく、こと〴〵くこゝに來集せり。聞法のためのゆへに。われいまこの所集の大衆のために、甚深の佛法を顯示せしむ。また世間をまもらんが、ためのゆへに、この閻浮提所集の鬼神をもて分布安置す、護持養育すべしと。

しめんがゆへに、この四天下をもて、大梵およびもろ〳〵の天王に付屬したまへり。かくのごとく次第に劫つき、もろ〳〵の天人つき、白法またつき、大惡もろ〳〵の煩惱濁を增長せん。

人壽二萬歲のとき、迦葉如來、世に出興したまふ。かの佛、この四大天下をもて、娑婆世界の主、大梵天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王、憍尸迦帝釋、四天王等、およびもろ〳〵の眷屬に付屬したまへり。護持養育のゆへに、乃至一切衆生をして、三惡道を休息して、三善道に趣向せしめんがゆへに、かの迦葉佛、この四天下をもて、大梵四天王等に付屬し、およびもろ〳〵の天仙衆、七曜、十二天童女、二十八宿等につけたまへり。護持のゆへに、養育のゆへに。淸淨土を了知するに、かくのごとく次第に、いま劫濁、煩惱濁、衆生濁、大惡煩惱濁、鬪諍惡世の時、人壽百歲にいたりて、一切の白法つき、一切の諸惡闇翳ならん。世間はたとへば、海水の一味にして、大鹹なるがごとし。大煩惱のあぢはひ、世に遍滿せん。集會の惡黨、手に髑髏をとり、血をそのたなごころにぬらん、ともにあひ殺害せん。かくのごときの惡衆生のなかに、われいま菩提樹下に出世して、はじめて正覺をなれり。受提、波利にいはく、もろ〳〵の商

三惡道―地獄、餓鬼、畜生
三善道―修羅、人間、天上

そのときに佛、月藏菩薩摩訶薩につげてのたまはく、淸淨土を了知するに、この賢劫のはじめ、人壽四萬歲のとき、鳩留孫佛、世に出興したまひき。かの佛、無量阿僧祇億那由他百千の衆生のために、生死に廻して、正法輪を輪轉せしむ、おふて惡道に廻して、善道および解脫の果を安置せしむ。かの佛、この四大天下をもて、娑婆世界の主、大梵天王、他化自在天王、化樂天王、兜率陀天王、須夜摩天王等に付屬せしむ。護持のゆへに、養育のゆへに、他の衆生を憐愍するがゆへに、三寶の種をして斷絕せざらしめんがゆへに、熾然ならんがゆへに、地の精氣、衆生の精氣、正法の精氣、ひさしく住し增長せんがゆへに、もろ〳〵の衆生をして三惡道を休息せしめんがゆへに、三善道に趣向せんがゆへに、四天下をもて、大梵、およびもろ〳〵の天王に付屬せしむ。かくのごとく漸次に劫つき、もろ〳〵の天人つき、一切の善業白法つき滅して、大惡もろ〳〵の煩惱溺を增長せん。

人壽三萬歲のとき、拘那含牟尼佛、世に出興したまふ。かの佛、この四大天下をもて娑婆世界の主大梵天王、他化自在天王、乃至四大天王、およびもろ〳〵の眷屬に付屬したまふ。護持養育のゆへに、乃至一切衆生をして、三惡道を休息して、三善道に趣向せ

林、樹下、塚間、山谷、曠野、河泉、波泊、乃至海中寶洲、天祠にしたがひて、かの卵生、胎生、濕生、化生において、もろ〳〵の龍、夜叉、羅刹、餓鬼、毗舍遮、富單那、迦吒富單那等、かのなかに生じて、かのところに還住して、繫屬するところなし、他の敎をうけず。このゆへにねがはくば佛、この閻浮提の一切國土において、かのもろ〳〵の鬼神分布し、安置して、護持のためのゆへに、一切のもろ〳〵の衆生をまもらんがためのゆへに、われら、この說において、隨喜せんとおもふと。

佛ののたまはく、かくのごとし、大梵、なんぢが所說のごとしと。そのときに世尊、かさねてこの義をあかさんとおぼして、しかも偈をときてのたまはく、世間に示現するがゆへに、導師、梵王にとはまく、この四天下において、たれか護持し養育せん。かくのごときの天師梵諸天王を首として、兜率、他化天、化樂、須夜摩、よくかくのごときの四天下を護持し養育せしむ。四王および眷屬、また〳〵よく護持せしむ。二十八宿等、および十二辰、十二天童女、四天下を護持せしむ。その所生のところにしたがひて、龍、鬼、羅刹等、他の敎をうけずば、かしこにかへりて護をなさしめん。天神等差別して願じて、佛分布せしめたまへり。衆生を憐愍せしがゆへに、正法のともしびを熾然ならしむと。

七宿のなかに、房、心の二宿は、これ熒惑の土境なり。毗利支迦はこれ辰なり。尾、箕、斗の三宿は、これ歳星の土境なり。檀兗婆はこれ辰なり。牛、女の二宿は、これ鎭星の土境なり。摩伽羅はこれ辰なり。大徳婆伽婆、かくのごときの天仙七宿、三曜、三天童女、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大徳婆伽婆、この四天下に南閻浮提は、もとも殊勝なりとす、なにをもてのゆへに、閻浮提のひとは、勇健聰慧にして、梵行、佛に相應す、婆伽婆、なかにおいて出世したまふ。このゆへに四大天王、こゝに倍增して、この閻浮提を護持し、養育せしむ。十六の大國あり、いはく鴦伽摩伽陀國、傍伽摩伽陀國、阿槃多國、支提國、この四の大國をば、毗沙門天王、夜叉衆と圍繞して、護持し養育せしむ。迦尸國、都薩羅國、婆蹉國、摩羅國、この四の大國をば、提頭賴吒天王、乾闥婆衆と圍繞して、護持し養育せしむ。鳩羅婆國、毗時國、槃遮羅國、疎那國、この四の大國をば、毗樓勒叉天王、鳩槃茶衆と圍繞して、護持し養育せしむ。阿濕婆國、蘇摩國、蘇羅吒國、甘滿闍國、この四の大國をは毗樓博叉天王、もろ〳〵の龍衆と圍繞して、護持し養育せしむ。大徳婆伽婆、過去の天仙、この四天下を護持し養育せしむ。かるがゆへにまたかくのごとく分布安置せしむ。のちにおいて、その國土、城邑、村落、塔寺、園

婆伽婆―世尊のこと

提を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は。昴、畢、觜、參、井、鬼、柳なり。三曜は太白、星歳、星月なり。三天童女は、毗利沙、彌偸那、羯迦吒迦なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿のなかに、昴、畢の二宿は、これ太白の土境なり。毗利沙はこれ辰なり。觜、參、井の三宿は、これ歳星の土境なり。彌偸那はこれ辰なり。鬼、柳の二宿は、これ月の土境なり。羯迦吒迦はこれ辰なり。大德婆伽婆、かくのごときの天仙七宿、三曜、三天童女、東弗婆提を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、天仙七宿、三曜、三天童女、南閻浮提を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は、星、張、翼、軫、角、亢、氐なり。三曜は日辰星、太白星、なり。三天童女は、綽訶、迦若、兜羅なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿のなかに、星、張、翼はこれ日の土境なり。綽訶はこれ辰なり。軫、角の二宿は、これ辰星の土境なり。迦若はこれ辰なり。亢、氐の二宿は、これ太白の土境なり。兜羅はこれ辰なり。大德婆伽婆、かくのごときの天仙七宿、三曜、三天童女、南閻浮提を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、かの天仙七宿、三曜、三天童女、西瞿陀尼を護持し、養育せしむ。かの天仙七宿は、房、心、尾、箕、斗、牛、女なり。三曜は熒惑星、歳星、鎭星なり。三天童女は、毗離支迦、檀菟婆、摩伽羅なり。大德婆伽婆、かの天仙

北鬱單越—北俱盧洲とも云ふ須彌山の北側にある一洲
東弗婆提—東弗于提とも云ふ須彌山の東側にある一洲
南閻浮提—單に閻浮提とも云ふ須彌山の南側にある一洲
西瞿陀尼—須彌山の西側にある一洲

なさく、大德婆伽婆、兜率陀天王、無量百千の兜率陀天子とともに、北鬱單越を護持し養育せしむ。他化自在天王、無量百千の他化自在天子とともに、東弗婆提を護持し養育せしむ。化樂天王、無量百千の化樂天子とともに、南閻浮提を護持し養育せしむ。須夜摩天王、無量百千の須夜摩天子とともに、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、毘沙門天王、無量百千の諸夜叉衆とともに、北鬱單越を護持し養育せしむ。提頭賴吒天王、無量百千の乾闥婆衆とともに、東弗婆提を護持し養育せしむ。毘樓勒天王、無量百千の鳩槃荼衆とともに、南閻浮提を護持し養育せしむ。毘樓博叉天王、無量百千の龍衆とともに、西瞿陀尼を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、天仙七宿、三曜、三天童女、北鬱單越を護持し養育せしむ。かの天仙七宿は、虛、危、室、壁、奎、婁、胃なり、三曜は鎭星、歲星、熒惑星なり。三天童女は、鳩槃、彌那、迷沙なり。大德婆伽婆、かの天仙七宿のなかに、虛、危、室の三宿は、これ鎭星の土境なり。鳩槃はこれ辰なり。壁、奎の二宿は、これ歲星の土境なり。彌那はこれ辰なり。婁、胃の二宿は、これ熒惑の土境なり。迷沙はこれ辰なり。大德婆伽婆、かくのごときの天仙七宿、三曜、三天童女、北鬱單越を護持し養育せしむ。大德婆伽婆、天仙七宿、三曜、三天童女、東弗婆

切善根、衆生を莊嚴せん、そのくにに來生して、天神を信ぜず、惡道のおそれをはなれて、かしこにして命終して、かへりて善道に生ぜん。略抄。
月藏經卷第六、諸惡鬼神得敬信品の第八の下にのたまはく、佛の出世はなはだかたし、法僧もまたかたし、衆生の淨信もかたし、諸難をはなるゝこともまたかたし、衆生を哀愍することかたし、知足第一にかたし、正法をきくことをうることかたし、よく修することと第一にかたし。かたきをしることをえて、平等なれば、世においてつねに樂をうく、この十平等處は、智者つねにすみやかにしらんと。乃至。そのときに世尊、かのもろもろの惡鬼神衆のなかにして、法をときたまふ。ときにかのもろもろの惡鬼神衆のなかにして、かの惡鬼神は、むかし佛法において、決定の信をなせしかども、かれのちのときにおいて、惡知識にちかづきて、心に他のとがをみる、この因緣をもて、惡鬼神とむまる。略抄。
大方等大集經卷第六、月藏分のなかに、諸天王護持品第九にのたまはく、そのときに世尊、世間にしめすがゆへに、娑婆世界の主、大梵天王に問てのたまはく、この四天下に、これたれかよく護持養育をなすと。ときに娑婆世界の主大梵天王、かくのごときの言を

の衆生において、平等無二の心にして、つねに歡喜し、慈悲含忍せんと。佛ののたまはく、かくのごときのときに、魔波旬、大歡喜を生じて、清淨心をおこして、かさねて佛前にして、接足頂禮し、みぎにめぐること三帀して、恭敬合掌して、しりぞきて一面に住して、世尊を瞻仰したてまつる、心に厭足なし。已上抄出

大方等大集月藏經卷第五、諸惡鬼神得敬信品第八の上にのたまはく、もろ〳〵の仁者、かの邪見を遠離する因緣において、十種の功德をえん。なんらをか十とす。一には心性柔善にして、伴侶賢良ならん、二には業報乃至奪命あることを信じて、もろ〳〵の惡をのこさず、三には三寶を歸敬して、天神を信ぜず、四には正見をえて、歲次日月の吉凶をえらばず、五にはつねに人天に生じて、もろ〳〵の惡道をはなる、六には賢善の心あきらかなることをえ、ひと讚譽せしむ、七には世俗をすてゝ、つねに聖道をもとむ、八には斷常の見をはなれて、因緣の法を信ず、九にはつねに正信、正行、正發心のひとゝともにあひあつまりあはん、十には善道に生ずることをえしむ。この邪見を遠離する善根をもて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん、このひとすみやかに六波羅密を滿せん、善淨佛土にしてしかも正覺をならん、菩提をえおはりて、かの佛土にして、功德智慧一

四梵行ー塔婆を立て、故寺を補修し、聖衆と和合し、轉法輪を請勸す、この四福行を云ふ

訶薩、佛の說法をききて、一切衆生ことごとく攀緣をはなれ、四梵行をえしむ。乃至。きよく洗浴し、鮮潔のころもを著て、菜食長齋して、からくさきものをくらふことなかるべし。寂靜處にして、道場を莊嚴し、正念結跏し、あるひは行じ、あるひは坐して、佛身の相を念じて、亂心せしむることなかれ。さらに他緣し、その餘の事を念ずることなかれ。あるひは一日夜、あるひは七日夜、餘の業をなさゞれ、至心念佛すれば、乃至佛をみたてまつる。小念は小をみたてまつり、大念は大をみたてまつる。乃至無量の念は、佛の色身の無量無邊なるをみたてまつる。略抄。

日藏經 卷第十、護塔品第十三にのたまはく、ときに魔波旬、その眷屬の八十億衆と前後に圍繞して、佛所に往至す。いたりおはりて、接足して世尊を頂禮したてまつる、かくのごときの偈をとかく、乃至、三世の諸佛の大慈悲、わが禮をうけたまへ、一切のつみを懺ぜしむ。法、僧二寶もまた〳〵しかなり、至心歸依したてまつるに、異あることなし、ねがはくばわれ今日、世の導師を供養し、恭敬し、尊重したてまつるところなり。諸惡ながくつくして、また生ぜじ。いのちをつくすまで如來の法に歸依せんと。ときに魔波旬、この偈をときおはりて、佛にまふしてまふさく、世尊如來、われおよびもろ〳〵

女かつるに須臾も害をなすことうることあたはず。如來いま涅槃道をひらきたまへり。しかも偈をときてしこにゆきて、佛に歸依せんとおもふて、すなはちその父のために、しかも偈をときていはく、乃至、三世の諸佛の法を修學して、一切の苦の衆生を度脫せん、よく諸法において自在をえ、當來にねがはくば、われかへりて佛のごとくならんと。そのときに離暗、この偈をときおはるに、父の王宮のうちの、五百の魔女、姉妹眷屬の一切、みな菩提の心を發せしむ。このときに魔王、その宮のうちの五百の諸女、みな佛に歸して、菩提心を發せしむるをみるに、おほきに瞋忿、怖畏、憂愁をます。乃至。このときに五百のもろもろの魔女等、また波旬のために、しかも偈をときていはく、もし衆生ありて、佛に歸すれば、かのひと千億の魔におそれず、いかにいはんや生死のながれを度せんとおもふて、無爲涅槃の岸にいたらん、もしよく一香華をもて、三寶佛法僧に持散することありて、堅固勇猛の心をおこさん、一切の衆魔、壞することあたはじ。乃至。われら過去の無量の惡、一切また滅して、餘あることなけん。至誠專心に佛に歸したてまつりおはらば、さだめて阿耨菩提の果をえんと。そのときに魔王、この偈をききおはりて、大瞋恚怖畏をまして、心をこがし、憔悴憂愁して、ひとり宮内に坐す。このときに光味菩薩摩

四方四維、みなこと〴〵く一切洲渚、およびもろ〳〵の城邑を擁護す。また鬼神をおきて、しかもこれを守護せしむ。そのとき佉廬虱吒仙人、もろ〳〵の天、龍、夜叉、阿修羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等、一切大衆において、みな善哉と稱して、歡喜無量なることをなす。このときに天、龍、夜叉、阿修羅等、日夜に佉廬虱吒を供養す。つぎにまたのちに無量世をすぎて、また仙人あらん、伽力伽となづく、世に出現して、またさらに別して、もろ〳〵の星宿、小大月の法、時節要略をときおかん。そのときに諸龍、佉羅坻山聖人の住處にありて、光味仙人を尊重し恭敬せん。その龍力をつくして、しかもこれを供養せん。已上。抄出

日藏經卷第九、念佛三昧品第十にのたまはく、そのときに波旬、この偈をときおはるに、かの衆のなかに、ひとりの魔女あり、なづけて離暗とす。この魔女は、むかし過去において、もろ〳〵の德本をうえたりき。この說をなしていはく、沙門瞿曇は、なづけて福德と稱す、もし衆生ありて、佛名をきくことをえて、一心に歸依せん。一切の諸魔、かの衆生において、惡をくはふることあたはず、いかにいはんや佛をみたてまつり、まのあたり法をきかんひと、種々に方便し、慧解深廣ならん。乃至。たとひ千萬億の一切魔軍、

加羅時—梵語いま實時と譯す

仙人、阿修羅、龍および緊那羅等、みなこと〴〵くたなごころをあはせて、こと〴〵くこの言をなさく、いま大仙のごときは、天人のあひだにおいて、もとも尊重とす。乃至諸龍および阿修羅、よくすぐれたるものなけん、智慧慈悲もとも第一とす。無量劫においてわすれず、一切衆生を憐愍するがゆへに福報をえ、誓願みちおはりて、功德、海のごとし。よく過去、現在、當來一切諸事、天人のあひだをしるに、かくのごときの智慧のものあることなし、かくのごときの法用、日夜刹那、および加羅時、大小星宿、月半、月滿、年滿法用、さらに衆生よくこの法をなすことなけん、みなこと〴〵く隨喜し安樂ならん。われらよきかな大德、衆生を安穩す。このときに佉盧虱吒仙人、またこの言をなさく、この十二月一年始終、かくのごとく方便す。大小星等、刹那の時法、みなすでにときおはんぬ。また〳〵四天大王を須彌山の四方面所に安置す。おの〳〵ひとりの王をおく、このもろ〳〵の方所にして、おの〳〵衆生を領す。北方天王を毘沙門となづく。これその界のうちに、おほく夜叉あり、南方天王を毘留茶となづく。ともにこれその界のうちに、おほく鳩槃茶あり、西方天王を毘留博叉となづく。これその界のうちに、おほくもろ〳〵の龍あり、東方天王を題頭隷吒となづく。これその界のうちに、乾闥婆おほし。

生を救濟すべし。なにものをか四とする、地上の人、諸龍、夜叉、乃至蝎等をたすけん、かくのごときのたぐひ、みなこと〴〵くこれをたすけん。われもろ〳〵の衆生を安樂するをもてのゆへに、星宿を布置す。おの〳〵分部乃至摸呼羅の時等あり、またみなつぶさにとかん、その國土方面のところにしたがひて、所作の事業隨順し增長せん。佉盧虱吒、大衆のまへにして、たなごころをあはせてときていはく、かくのごとく日月、年時、大小星宿を安置す。なにものをかなづけて六時ありとするや。正月二月を暄暖時となづく、三月四月を種作時となづく、五月六月は求降雨時なり、七月八月は物欲熟時なり、九月十月は寒凍の時なり、十有一月合して、十二月は大雪の時なり。これ十二月をわかちて六時とす。また大星宿そのかず八あり、いはゆる歲星、熒惑、鎭星、太白、辰星、日、月、荷羅睺星なり。また小星宿二十八あり、いはゆる昴より、胃にいたるまでの諸宿これなり。われかくのごときの次第安置をなす、その法をときおはんぬ。なんたちみな、すべからくまたみ、またきくべし。一切大衆、こころにおいていかんぞ、わがおくところの法、その事これ二十八宿、および八大星の所行諸業にあらず、なんぢが喜樂は、是のため非のためにせず、よろしくおの〳〵宣說すべし。そのときに一切天人、

四儀—行、住、坐、臥の四事に戒律に叶ふ行爲を云ふ

修多羅—佛陀所說の經のこと

のちの教をあげて比例せば、末法法爾として、正法毀壞し、三業しるしなし、四儀そむくことあらん。しばらく像法決疑經にのたまふがごとし。乃至。また遺教經にのたまはく、乃至、また法行經にのたまはく、乃至、鹿子母經にのたまはく、乃至、また仁王經にのたまはく、乃至。已上略抄。（化卷本終）

それ、もろ〳〵の修多羅によりて、眞僞を勘決して、外教邪僞の異執を教誡せば、涅槃經にのたまはく、佛に歸依せんものは、つゐにまた、その餘のもろ〳〵の天神に歸依せざれ。略出。

般舟三昧經にのたまはく、優婆夷、この三昧をきゝて、學せんと欲せば、乃至、みづから佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ。餘道につかふることをえざれ、天を拜することをえざれ、鬼神をまつることをえざれ、吉良日をみることをえざれ。已上。またのたまはく、優婆夷、三昧を學せんと欲せば、乃至、天を拜し、神を祠祀することをえざれ。抄出。

大乘大方等日藏經卷第八、魔王波旬星宿品第八の二にのたまはく、そのときに佉盧虱吒、天衆につげていはく、このもろ〳〵の月等、おの〳〵主儻あり、なんぢ四種の衆

しかもともに遊行して、かの酒家より酒家にいたらん。わが法のなかにおいて、非梵行をなさん。かれら酒の因緣たりといへども、この賢劫のなかにおいて、まさに千佛ましく〳〵て、興出したまはん、わが弟子となるべし。つぎにのちに彌勒、まさにわがところを補べし、乃至最後盧至如來まで、かくのごとく次第に、なんぢまさにしるべし。阿難、わが法のなかにおいて、たゞし性はこれ沙門の行にして、みづから沙門と稱せん。かたちは沙門に似て、ひさしく袈裟を被著することあらんものは、賢劫において、彌勒を首として乃至盧至如來まで、かのもろ〳〵の沙門、かくのごときの佛のみもとにして、無餘涅槃において、次第に涅槃にいることをえん、遺餘あることなけん。なにをもてのゆへに、如來一切沙門のなかに、乃至ひとたびも、佛のみなを稱し、ひとたびも、信を生ぜんもの、所作の功德、つゐに虛設ならじ、われ佛智をもて、法界を測知するがゆへなりと、云々。乃至。これらの諸經に、みな年代をさして、將來末世の名字の比丘を、世の導師とす。もし正法のときの制文をもて、しかも末法世の名字の僧を制せば、敎機あひそむき、人法合せず。これによりて律にいはく、非制を制すれば、すなはち三明を斷ず、記說するところ、これつみありと。このかみに、經をひきて配當しおはんぬ。

三明—宿命、天眼、漏盡の三通のこと

がごとし、衆生の善知識となること、あきらかにしんぬ、このときやうやく破戒をゆるして世の福田とす、さきの大集におなじ。つぎに像季ののちは、またくこれ戒なし、佛、時運をしろしめして、末俗をすくはんがために、名字の僧をほめて、世の福田としたまへり。

また大集の五十二にいはく、もしのちの末世に、わが法のなかにおいて、剃除鬚髮し、身に袈裟を著たらん名字の比丘、もし檀越ありて供養をなさば、無量の福をえん。

また賢愚經にのたまはく、もし檀越、將來末世に、法乘つきんとせんに、まさしく妻をたくはへ、子をわきはさましめん、四人以上の名字の僧衆、まさに禮敬せんこと、舍利弗、大目連等のごとくすべし。またのたまはく、もし破戒を打罵し、身に袈裟をきたるをしることなからん。つみは、萬億の佛身より血をいだすに、おなじからん。もし衆生ありて、わが法のために剃除鬚髮し、袈裟を被服せん。たとひ戒をたもたずとも、かれらはことごとく、すでに涅槃の印のために印せらるゝなり。乃至。大悲經にいはく、佛、阿難につげたまはく、將來世において、法、滅盡せんと欲せんとき、まさに比丘、比丘尼ありて、わが法のなかにおいて、出家をえたらんもの、おのれが手に、兒のひぢをひきて、

貯穀、貯奴婢畜犬、貯財寶、備什具、畫屏障、用鐵銅釜鍋

をなさん、すなはちこれ魔のともがらなり。これらの經のなかに、あきらかに年代をさして、つぶさに行事をとけり、さらにうたがふべからず。それ一文をあぐ、餘、みな准知せよ。つぎに像法ののち、なかばは持戒減小し、破戒巨多ならん。かるがゆへに涅槃の六にのたまはく、乃至また十輪にいはく、もしわが法によりて、出家して、惡行を造作せん、これ沙門にあらずして、みづから沙門と稱し、また梵行にあらずして、みづから梵行と稱せん、かくのごときの比丘、よく一切天龍、夜叉、一切善法功德伏藏を開示して、衆生の善知識とならん。少欲知足ならずといへども、剃除鬚髮して、法服を被著せん、この因緣をもてのゆへに、よく衆生のために善根を增長せん、もろ〳〵の天人において、善道を開示せん、乃至破戒の比丘、これ死せるひとなりといへども、しかも戒の餘才、牛黃のごとし、これ死せりといへども、しかもひとことさらにこれをとる、また麝香のごとし、のちに用あるがごとしと。云云。すでに迦羅林のうちに、ひとつの鎭頭迦樹ありといへり。これは像運すでにおとろへて、破戒濁世にみち、わづかに一二持戒の比丘あらんにたとふるなり。

またいはく、破戒の比丘、これ死せるひとなりといへども、なをし麝香の死して用ある

八不淨物ー持田宅、植草木、刈

百年には、持戒やうやく減じ、破戒やうやく増せん。戒行ありといへども、しかも證果なし。

かるがゆへに涅槃の七にのたまはく、迦葉菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊、佛の所說のごときは、四種の魔あり。もし魔の所說および佛の所說、われまさにいかんしてか、しかも分別することをうべき、もろ〳〵の衆生ありて、魔行に隨逐せん。また佛說に隨順することあらば、かくのごときらのともがら、またいかんがしらんと。佛、迦葉につげたまはく、これ涅槃して七百歲ののちに、これ魔波旬やうやくおこりて、まさにしきりにわが正法を壞すべし。たとへば獵師の身に、法衣をきるがごとし。魔波旬もまたまたかくのごとし。比丘像、比丘尼像、優婆塞、優婆夷像とならんこと、また〳〵かくのごとし。乃至。もろ〳〵の比丘、奴婢、僕使、牛羊象馬、乃至銅鐵釜鍑、大小銅盤、所須のものを受畜し、耕田種、販賣市易して、穀米をまうくることをゆるす、かくのごときの衆事、佛大悲のゆへに衆生を憐愍して、みなたくはふることをゆるさんと、かくのごときの經律は、こと〴〵くこれ魔說なりと。云云。すでに、七百歲ののちに波旬やうやくおこらんといへり。かるがゆへにしんぬ、かのときの比丘、やうやく八不淨物を貪畜せん、この妄說

像末—像法と末法の時

問、もししからば、なにをもてかしらん、涅槃等の經は、たゞ正法所有の破戒を制止して、像末の僧にあらずとは。答、ひくところの大集の所説の八重の眞寶のごとし、これその證なり。みな時にあたりて無價なりとす。かるがゆへに、たゞし正法のときの破戒の比丘は、清淨衆をけがす、かるがゆへに佛、かたく禁制して衆にいれず、しかるゆへは、涅槃の第三にのたまはく、如來いま無上の正法をもて、諸王、大臣、宰相、比丘、比丘尼に付屬したまへり。乃至。破戒あり正法をそしらば、王および大臣四部の衆、きさに苦治すべし、かくのごとき王臣等、無量の功德をえん。乃至。これわが弟子なり、眞の聲聞なり、福をうること無量ならん。乃至。かくのごときの制文の法、往々衆多なり。みなこれ正法にあかすところの制文なり、像末の教にあらず。しかるゆへは、像季末法には、正法を行ぜざれば、法としてそしるべきなし、なにをか毀法となづけん。戒として破すべきなし、たれをか破戒となづけん。またそのとき大王、行としてまもるべきなし、なにによりてか三災をいだし、および戒慧を失せんや。また像末には證果のひとなし、いかんしてか二聖に聽護せらるゝことをあかさん。かるがゆへにしんぬ。かみの所説は、みな正法の世に持戒あるときに約して、破戒あるがゆへなり。つぎに像法千年のうちに、はじめの五

三災ー水災、火災、兵災

をうくべし、ものゝためのはじめの福田なり。なにをもてのゆへに、能身をやぶる衆生、怖畏するところなるがゆへに。護持養育して、このひとを安置することあらん、ひさしからずして忍地をえん。已上。經文。この文のなかに八重の無價あり、いはゆる如來像に、緣覺聲聞および前三果、得定の凡夫、持戒破戒、無戒名字、それついでのごとし、正像末のときの無價のたからとするなり。はじめの四は、正法の時、つぎの三は、像法の時、のちの一は、末法の時なり。これによりて、あきらかにしんぬ、破戒無戒ことごくこれ眞寶なり。

問、ふしてさきの文をみるに、破戒名字、眞寶ならざることなし、なんがゆへぞ、涅槃と大集經に、國王大臣、破戒の僧を供すれば、くにに三災おこり、つゐに地獄に生ず、破戒なをしかなり。いかにいはんや無戒をや。しかるに如來、ひとつの破戒において、あるひはそしり、あるひはほむ、あに一聖の說、兩判のとがあるをや。答、この理しからず。涅槃等の經に、しばらく正法の破戒を制す、像末代の比丘にはあらず、その名、おなじといへども、しかも時に異あり、時にしたがひて制許す、これ大聖の旨破なり。世尊において、兩判のとがましまさず。

漏戒―戒律を持つこと危く、時に破り或は全く破戒をなすこと

きずなくして、みづからもていたまんや。答、この理しからず。正像末法の所有の行事、ひろく諸經にのせたり。内外の道俗、たれか披諷せざらん。あに自身の邪活を貪求して、持國の正法を隱蔽せんや。たゞしいま論ずるところの末法には、たゞ名字の比丘のみあらん、この名字を、世の眞寶とせん、福田なからんや。たとひ末法のなかに、持戒あらば、すでにこれ怪異なり、市に虎あらんがごとし。これたれか信ずべきや。

問、正像末の事すでに衆經にみえたり、末法の名字を、世の眞寶とせんことは、聖典にいでたりや。答、大集の第九にいはく、たとへば眞金を、無價のたからとするがごとし。もし眞金なくば、しろがねを無價のたからとす。もししろがねなくば、鍮石僞寶を無價とす。もし僞寶なくば、赤白銅鐵、白錫鉛を無價とす。かくのごとき一切世間のたからなれども、佛法無價なり。もし佛法なくば、緣覺無上なり。もし緣覺なくば、羅漢無上なり、もし羅漢なくば、餘の賢聖衆をもて無上なり。もし餘の賢聖衆なくば、得定の凡夫をもて無上とす。もし得定の凡夫なくば、淨持戒をもて無上とす。もし淨持戒なくば、漏戒の比丘をもて無上とす。もし漏戒なくば、剃除鬚髮して、身に袈裟を著たる名字の比丘を、無上のたからとす。餘の九十五種の異道に比するに、もとも第一とす。世の供

この千五百年ののち正法滅盡せんと。かるがゆへにしんぬ、已後はこれ末法に屬す。

問、もししからば、いまの世は、まさしくいづれのときにかあたれるや。答、滅後の年代、おほくの說ありといへども、しばらく兩說をあぐ。一には法上師等、周異の說によりていはく、佛、第五の主、穆王滿五十一年壬申にあたりて、入滅したまふ。もしこの說によらば、その壬申より、わが延曆二十年辛巳にいたるまで、一千七百五十歲なり。二には費長房等、魯の春秋によらば、佛、周の第二十の主、匡王班四年壬子にあたりて、入滅したまふ。もしこの說によらば、その壬子より、わが延曆二十年辛巳にいたるまで、一千四百十歲なり。かるがゆへに、いまのときのごときは、この最末のときなり。かのときの行事、すでに末法に同ぜり。しかればすなはち末法のなかにおいては、たゞ言教のみありて、しかも行證なけん、もし戒法あらば破戒あるべし、すでに戒法なし、いづれの戒を破せんによりてか、しかも破戒あらんや。破戒なをなし、いかにいはんや持戒をや。かるがゆへに大集にいはく、佛涅槃ののち無戒くににみたんと。云云。

問、諸經律のなかに、ひろく破戒を制して、衆にいることをゆるさず、破戒なをしかなり、いかにいはんや無戒をや。しかるにいま、かさねて末法を論ずるに、戒なし、あに

たりて、奴を比丘とし、婢を尼とせん。一千年のうちに、不淨觀をひらかん、瞋恚して欲せん　千一百年に、僧尼嫁娶せん、僧毗尼を毀謗せん。千二百年に、諸僧尼等、ともに子息あらん。千三百年に、袈裟變じてしろからん。千四百年に、四部の弟子、みな獵師のごとし、三寶物をうらん。こゝにいはく、千五百年に拘睒彌國に、ふたりの僧ありて、たがひに是非をおこして、つゐに殺害せん、よりて敎法、龍宮におさまる。涅槃の十八、および仁王等に、またこの文あり。これらの經文に准ずるに、千五百年ののち、戒定慧あることなし。

かるがゆへに大集經の五十一にいはく、わが滅度ののち、はじめの五百年には、もろ〳〵の比丘等、わが正法において解脱堅固ならん、（はじめに聖果をうるをなづけて解脱とす）つぎの五百年には、禪定堅固ならん、つぎの五百年には、多聞堅固ならん、つぎの五百年には、造寺堅固ならん、のちの五百年には、鬪諍堅固ならん、白法隱沒せんと、云云。このこゝろ、はじめの三分の五百年には、ついでのごとく、戒定慧の三法、堅固に住することをえん、すなはちかみにひくところの、正法五百年、像法一千の二時、これなり。造寺已後は、ならびにこれ末法なり。かるがゆへに、基の般若會の釋にいはく、正法五百年、像法一千年、

八敬—比丘尼の守るべき八法のこと

さんや。かるがゆへに正像末の旨際をつまびらかにして、こゝろみに破持僧の事をあらはさん。なかにおいて三あり、はじめに正像末を決す、つぎに破持僧の事をさだむ、のちに教をあげて比例す。

はじめに正像末を決するに、諸説をいだすことおなじからず、しばらく一説を述せん。大乘基に賢劫經をひきていはく、佛涅槃ののち、正法五百年、像法一千年、この千五百年ののち、釋迦の法滅盡せんと、末法をいはず。餘の所説に准ずるに、尼、八敬にしたがはずして、しかも懈怠するがゆへに、法、更増せず、かるがゆへに、かれによらずと、これは上位によるがゆへに、またおなじからず。問、もししからば、千五百年のうちの行事いかんぞや。答、大術經によるに、佛涅槃ののち、はじめの五百年には、大迦葉等の七賢聖僧、次第に正法をたもちて滅せず、五百年ののち、正法滅盡せんと。六百年にいたりて、九十五種の外道きほひおこらん。馬鳴、世にいでて、もろもろの外道を伏せん。七百年のうちに、龍樹、世にいでて、邪見のはたほこをくだかん。八百年において、比丘縱逸にして、わづかに一二、道果をうるものあらん。九百年にい

て、うるものあらじと。當今は末法にして、これ五濁惡世なり。たゞ淨土の一門のみありて、通入すべきみちなり。已上。

しかれば穢惡濁世の群生、末代の旨際をしらず、僧尼の威儀をそしる。いまのときの道俗、おのれが分を思量せよ。三時教を按ずれば、如來般涅槃の時代をかんがふるに、周の第五の主、穆王五十一年壬申にあたれり。その壬申より、わが元仁元年甲申にいたるまで、二千一百八十三歳なり。また賢劫經、仁王經、涅槃等の說によるに、すでにもて末法にいりて、六百八十三歳なり。

末法燈明記最澄製作を披閱するに、いはく、それ一如に範衞して、もて化をながすは、法王四海に光澤して、もて風に乘ずるは仁王なり、しかればすなはち、仁王、法王、たがひにあらはれてものを開し、眞諦、俗諦、たがひによりて教をひろむ、このゆへに玄籍、宇內にみち、嘉猷天下にあふる。こゝに愚僧等、率して天網にいり、ふして嚴科をあふぐ、いまだ寧處にいとまあらず。しかるに法に三時あり、ひとまた三品なり。化制のむね、ときによりて興替す。毀讃の文、ひとにしたがひて取捨す。それ三石の運、減衰おなじからず、後五の機、慧悟またことなり。あに一途によりてすくはんや、一理について、たゞ

白法隱滯—如來の正法が隱るゝこと

またいはく經等—安樂集の文

またのたまはく大集經等—同上

たるたきゞをおりて、もて水をもとめんに水うべからず、智なきがごときのゆへに。大集の月藏經にのたまはく、佛滅度ののちの第一の五百年には、わがもろ〳〵の弟子、慧を學すること堅固なることをえん。第二の五百年には、定を學すること堅固なることをえん。第三の五百年には、多聞讀誦を學すること堅固なることをえん。第四の五百年には、塔寺を造立し、福を修し、懺悔すること堅固なることをえん。第五の五百年には、白法隱滯して、おほく諍訟あらん、すこしき善法ありて、堅固なることをえん。いまのときの衆生をはかるに、すなはち佛、世をさりてのちの第四の五百年にあたれり、まさしくこれ懺悔し、福を修し、佛の名號を稱すべきときのものなり。一念阿彌陀佛を稱するに、すなはちよく八十億劫の生死のつみを除却す。一念すでにしかなり、いはんや常念を修するは、すなはちこれつねに懺悔するひとなり。

またいはく、經の住滅を辨ぜば、いはく釋迦牟尼佛一代、正法五百年、像法一千年、末法一萬年には、衆生滅じつき、諸經ことごとく滅せん、如來痛燒の衆生を悲哀して、ことにこの經をとゞめて止住せんこと、百年ならん。またのたまはく、大集經にいはく、わが末法のときのなかの億々の衆生、行をおこし道を修せんに、いまだ一人とし

またいはく教興等—安樂集の文

無佛世の衆生を、佛これを重罪としたまへり、見佛の善根をうゑざるひとなり。已上。しかれば末代の道俗、よく四依をしりて、法を修すべきなり。

しかるに正眞の教意によりて、古德の傳說をひらく、聖道淨土の眞假を顯開して、邪僞異執の外教を教誡す、如來涅槃の時代を勘決して、正像末法の旨際を開示す。

こゝをもて玄忠寺の綽和尙のいはく、しかるに修道の身、相續してたえず、一萬劫をへて、はじめて不退のくらゐを證す。當今の凡夫、現に信想輕毛となづく、また假名といへり。また不定聚となづく、また外の凡夫となづく、いまだ火宅をいでず。なにをもてか、しることをうる。菩薩瓔珞經によりて、つぶさに入道行位を辨ずるに、法爾なるがゆへに、難行道となづく。

またいはく、教興の所由をあかして、時に約し機にかうふらしめて、淨土に勸歸することあらば、もし機と教と時とそむけば、修しがたくいりがたし。正法念經にいはく、行者、一心に道をもとめんとき、つねにまさに、時と方便とを觀察すべし。もし時をえざれば方便なし、これをなづけて失とす、利となづけず。いかんとなれば、うるほへる木をきりて、もて火をもとめんに、火うべからず、時にあらざるがゆへに。もしかれ

弟子說、三には天仙說、四には鬼神說、五には變化說なり。しかれば、四種の所說は信用にたらず、この三經は、すなはち大聖の自說なり。

大論に四依を釋していはく、涅槃にいりなんとせんとき、もろ〱の比丘にかたりたまはく、今日より、法によりて人によらざるべし、義によりて語によらざるべし、智によりて識によらざるべし、了義經によりて、不了義によらざるべし。法によるといふは、法に十二部あり、この法にしたがふべし、人にしたがふべからず。義によるといふは、義のなかに、好惡罪福虛實をあらそふことなし、かるがゆへに語はすでに義をえたり、義は語にあらざるなり。ひと指をもて月をおしふ、もてわれを示教す、指を看視して、しかも月をみざるがごとし、ひとかたりていはん、われ指をもて月をおしふ、なんぢをしてこれをしらしむ、なんぢなんぞ指をみて、しかも月をみざると。これまたかくのごとし。語は義の指とす、語は義にあらざるなり、これをもてのゆへに、語によるべからず。智によるといふは、智よく善惡を籌量し分別す、識はつねに樂をもとむ、正要にいらず、このゆへに識によるべからずといへり。了義經によるといふは、一切智人います、佛、第一なり。一切諸經書のなかに、佛法第一なり、一切衆のなかに、比丘僧、第一なり、

難思議往生―弘願他力往生を云ふ廻向の信心によりて眞實報土に生るゝをうるは言語思慮の及ぶ所にあらざるを以てこの名あり

經家―佛說のこと

師釋―大祖等の釋文

く、大信海にいりがたし。まことに傷嗟すべし、ふかく悲嘆すべし。おほよそ大小聖人、一切善人、本願の嘉號をもて、おのれが善根とするがゆへに、信を生ずることあたはず、佛智をさとらず、かの因を建立せることを、了知することあたはざるがゆへに、報土にいることなきなり。こゝをもて、愚禿釋の鸞、論主の解義をあふぎ、宗師の勸化によりて、ひさしく萬行諸善の假門をいでて、ながく雙樹林下の往生をはなる。善本德本の眞門に廻入して、ひとへに難思往生の心をおこしき、しかるにいまことに方便の眞門をいでて、選擇の願海に轉入せり、すみやかに難思往生の心をはなれて、難思議往生をとげんとおもふ。果遂のちかひ、まことにゆへあるかな。こゝにひさしく願海にいりて、ふかく佛恩をしれり。至德を報謝せんがために、眞宗の簡要をひろふて、つねに不可思議の德海を稱念す、いよ〳〵これを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり。まことにしんぬ、聖道の諸教は、在世正法のためにして、またく像末法滅の時機にあらず、すでにときをうしなひ、機にそむけるなり。淨土眞宗は、在世正法、像末法滅、濁惡の群萠、ひとしく悲引したまふをや。こゝをもて經家によりて、師釋をひらきたるに、說人の差別を辨ぜば、おほよそ諸經の起說、五種にすぎず、一には佛說、二には聖

ことに佛恩を報ずるになる。

またいはく、いざいなん、他郷にはとゞまるべからず、佛にしたがひて、本家に歸せよ。本國にかへりぬれば、一切の行願、自然に成ず、悲喜まじはりながる。ふかくみづからはかるに、釋迦佛の開悟によらずば、彌陀の名願、いづれのときにかきかん。佛の慈恩をになひても、まことに報じがたし。またいはく、十方六道、おなじくこれ輪廻してきはなし、循々として愛波にしづんで、しかも苦海にしづむ、佛道の人身、えがたくしていますでにえたり、淨土ききがたくして、いますでにきけり、信心おこしがたくして、いますでにおこせり。已上。

まことにしんぬ、專修にしてしかも雜心なるものは、大慶喜心をえず。かるがゆへに宗師は、かの佛恩を念報することなし、業行をなすといへども、心に憍慢を生ず、つねに名利と相應するがゆへに、人我みづからおほふて、同行善知識に親近せざるがゆへに、このんで雜緣にちかづきて、往生の正行を自障々他するがゆへにといへり。かなしきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた、助正間雜し、定散心雜するがゆへに、出離その期なし。みづから流轉輪廻をはかるに、微塵劫を超過すとも、佛願力に歸しがた

光明寺の和尚ののたまはく等—般舟讃の文

寶國—極樂淨土のこと

娑婆本師—釋尊

またいはく佛世等—集諸經禮懺儀の文

そゝぐがごとし、日の正道をしめすがごとし、月の淨輪を轉ずるがごとし。またいはく、如來大慈悲、世間に出現して、あまねくもろ〳〵の衆生のために、無上法輪を轉じたまふ。如來、無數劫に勤苦せんことは、衆生のためなり。いかんがもろ〳〵の世間、よく大師の恩を報ぜん。已上。

光明寺の和尚ののたまはく、たゞうらむらくは、衆生のうたがふまじきを、うたがふことを。淨土對面してあひたがはず、彌陀の攝と、不攝とを論ずることなかれ、こゝろ專心にして、廻すると廻せざるとにあり。あるひはいはく、けふより佛果にいたるまで、長劫に、佛をほめて、慈恩を報ぜん。彌陀の弘誓のちからをかうふらずば、いづれのとき、いづれの劫にか、娑婆をいでん。いかんしてか、今日寶國にいたることを期せん。まことにこれ、娑婆本師のちからなり。もし本師知識のすゝめにあらずば、彌陀の淨土いかんしてかいらん。淨土に生ずることをえて、慈恩を報ぜよ。

またいはく、佛世、はなはだまうあひがたし。ひと信慧あることかたし。たま〳〵希有の法をきくこと、これまたもともかたしとす。みづからも信じ、ひとをおしへても、信ぜしむること、かたきがなかにうたゝさらにかくし。大悲ひろくあまねく化するは、ま

がゆへに、善知識となづく。なにをもてのゆへに、やまひをしり、くすりをしりて、やまひに應じて、藥をさづくるがゆへに。たとへば良醫のよき八種の術のごとし。まづ病相を觀ず、相に三種あり、なんらをか三とする、いはく風熱水なり。風病のひとには、これに蘇油をさづく。熱病のひとには、これに石蜜をさづく。水病のひとには、これに薑湯をさづく。病根をしるをもて、くすりをさづくるに、いゆることをう、かるがゆへに良醫となづく。佛および菩薩も、またかくのごとし、もろ〳〵の凡夫のやまひをしるに、三種あり。一には貪欲、二には瞋恚、三には愚癡なり。貪欲のやまひには、おしへて骨相を觀ぜしむ。瞋恚のやまひには、慈悲の相を觀ぜしむ。愚癡のやまひには、十二緣相を觀ぜしむ。この義をもてのゆへに、諸佛菩薩を善知識となづく。善男子、たとへば船師の、よくひとを度するがゆへに、大船師となづくるがごとし。諸佛菩薩も、またかくのごとし、もろ〳〵の衆生をして、生死の大海を度す。この義をもてのゆへに善知識となづく。抄出。

華嚴經にのたまはく、なんぢ善知識を念ぜよ。われを生ずること父母のごとし、われをやしなふこと乳母のごとし、菩提分を增長す。醫の衆疾を療するがごとし、天の甘露を

またのたまはく善男子等―涅槃經の文

沒となづく。

如來にすなはち二種の涅槃あり、一には有爲、二には無爲なり。有爲涅槃は無常なり。常樂我淨は無爲涅槃なり。常人ありて、ふかくこの二種の戒、ともに因果ありと信ぜん、このゆへになづけて戒とす。戒不具足、このひとは、信戒の二事を具せず、所樂多聞にして、また不具足なり。いかなるをか、なづけて聞不具足とする。如來の所說は、十二部經なり。たゞ六部を信じて、いまだ六部を信ぜず、このゆへになづけて、聞不具足とす。またこの六部の經を受持すといへども、讀誦にあたはずして、他のために解說するは、利益するところなけん、このゆへになづけて、聞不具足とす。またこの六部の經をうけおはりて、論議のためのゆへに、勝他のためのゆへに、利養のためのゆへに、諸有のためのゆへに、持讀誦說せん、このゆへになづけて聞不具足とす。略抄。

またのたまはく、善男子、第一眞實の善知識は、いはゆる菩薩諸佛なり。世尊、なにをもてのゆへに、つねに三種の善調御をもてのゆへなり。なんらをか三とする、一には畢竟軟語、二には竟畢呵責、三には軟語呵責なり。この義をもてのゆへに、菩薩諸佛はすなはちこれ眞實の善知識なり、またつぎに、善男子、佛、および菩薩を、大醫とする

非想非々想處—三界の最上位の天、こゝは有想、無想を全く離れたる處なるを以てこの名あり

三有—欲、色、無色の三界のこと

邪となづく。このひと、佛法僧寶を信ずといへども、三寶同一の性相を信ぜず、因果を信ずといへども、得者を信ぜず、このゆへになづけて、信不具足とす。このひと、不具足信を成就す。乃至。

善男子、四の善事あり、惡果を獲得せん。なんらをか四とする、一には、勝他のためのゆへに、經典を讀誦せん。二には、利養のためのゆへに、禁戒を受持せん。三には、他屬のためのゆへに、しかうして布施を行ぜん。四には非想悲々想處のためのゆへに、繫念思惟せん。この四の善事、惡果報をえん。もしひと、かくのごときの四事を修習せん、これを沒となづく。沒しおはりてかへりていづ、いでおはりてかへりて沒す。なんがゆへぞ沒となづくる、三有をねがふがゆへに、なんがゆへぞ出となづくる、明をみるをもてのゆへに、明はすなはちこれ戒施定をきくなり。なにをもてのゆへにか、かへりて出沒する、邪見を增長し、憍慢を生ずるがゆへに。このゆへにわれ經のなかにおいて偈をとかく。もし衆生ありて、諸有をねがふて、有のために善惡の業を造作する、このひとは涅槃道を迷失するなり、これを暫出還復沒となづく。黑闇生死海を行じて、解脱をうといへども、煩惱を雜するは、このひと、かへりて惡果報をうく、これを暫出還復

梵行―梵は清淨の義、清淨の慈悲心を以て働く行

またのたまはく善男子等―涅槃經の文

く修行すべし。已上。

涅槃經にのたまはく、經のなかにとくがごとし、一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因は無量なりといへども、善知識をとけば、すなはちすでに攝盡しぬ。わが所說のごとし。一切の惡行は邪見なり。一切の惡行の因、無量なりといへども、もし邪見をとけば、すなはちすでに攝盡しぬ。あるひはとく、阿耨多羅三藐三菩提は、信心を因とす。これ菩提の因、また無量なりといへども、信心をとけば、すなはちすでに攝盡しぬ。またのたまはく、善男子、信に二種あり、一には信、二には求なり。かくのごときのひと、また信ありといへども、推求にあたはず、このゆへに、なづけて信不具足とす。信にまた二種あり、一には聞より生ず、二には思より生ず。このひとの信心、聞よりして生じて、思より生ぜず、このゆへになづけて、信不具足とす。また二種あり、一には道あることを信ず、二には得者を信ず。このひとの信心、たゞ道あることを信じて、すべて得道のひとあることを信ぜず、これをなづけて、信不具足とす。また二種あり、一には信正、二には信邪なり。因果あり、佛法僧ありといはん、これを信正となづく。因果、三寶の性、ことなることなしといひて、もろ／＼の邪語富蘭那等を信ずる、これを信

づ餘善を貶して少善根とす、いはゆる布施持戒、立寺、造像、禮誦、座禪、懺念、苦行、一切福業、もし正信なければ、廻向願求するに、みな少善とす。往生の因にあらず。もしこの經によりて名號を執持せば、決定して往生せん、すなはちしんぬ稱名はこれ多善根多福德なり。むかしこの解をなしゝひと、なを遲疑しき。ちかく襄陽の石碑の經の本文を得て、理冥符なり、はじめて深信をいだく。かれにいはく、善男子、善女人、阿彌陀佛をとくをききて、一心にしてみだれず、名號を專稱せよ、稱名をもてのゆへに、諸罪消滅す、すなはちこれ多功德多善根、多福德因緣なり。已上。孤山の疏にいはく、執持名號といふは、執はいはく執受なり、持はいはく住持なり。信力のゆへに執受心にあり。念力のゆへに住持してわすれず。已上。

大本にのたまはく、如來の興世、まうあひがたく、みたてまつりがたし、諸佛の經道えがたく、ききがたし。菩薩の勝法諸波羅密、きくことをうることまたかたし、善知識にあひ、法をきき、よく行ずること、これまた難とす。もしこの經をききて、信樂受持すること、難がなかにかたし、これにすぎてかたきことなし。このゆへにわが法、かくのごとくなし、かくのごとくとき、かくのごとくおしふ。まさに信順して、法のごと

またいはく種々の文―同上

またのたまはく一切の如來等―般舟讚の文

れども、他のために破壊せられて、かへりてもとのごとし。曠劫よりこのかた、つねにかくのごとし、これ今生にはじめてみづからさとるにあらず、まさしくよく強縁にあはざるによりて、輪廻して得度しがたからしむることをいたす。またいはく、種々の法門みな解脱すれども、念佛して西方にゆくにすぎたるはなし。かみ一形をつくし、十念、三念、五念にいたるまでも、佛來迎したまふ、たゞちに彌陀の弘誓のおもきをもて、凡夫をして念ずれば、すなはち生ぜしむることをいたす。

またのたまはく、一切の如來、方便をまうけたまふこと、また今日の釋迦尊におなじ。機にしたがひて法をとくに、みな益をかうふる、おの〳〵悟解をえて眞門にいれ。乃至。佛教多門にして八萬四なり、まさしく衆生の機の不同なるがためなり。安身常住のところをもとめんとおもはゞ、まづ要行をもとめて、眞門にいれ。

またのたまはく、余、このごろみづから諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして專雜異あり。たゞしこゝろをもはらにしてなさしむれば、十はすなはち十ながら生ず。雜を修して至心ならざれば、千がなかにひとりもなし。已上。

元照律師の彌陀經義疏にいはく、如來、持名の功すぐれたることをあかさんと欲す、ま

をうること、かならずうたがひなきなり。このゆへに一佛の所説をば、一切佛おなじく、その事を證誠したまふ。これを人について信をたつとなづくるなり。要を抄す。

またのたまはく、しかるに佛の願意にのぞむれば、たゞ正念にして、みなを稱ぜしむることをすゝめたり。往生の義のときこと、雜散の業にはおなじからず、この經および諸部のなかに、處々にひろく嘆ずるがごときは、すゝめてみなを稱ぜしむるを、まさに要益とせんとするなり、しるべし。（またのたまはく　しかるに等—散善義の文）

またのたまはく、佛告阿難、汝好持是語といふより已下は、まさしく彌陀の名號を付屬して、遐代に流通することをあかす。かみよりこのかた、定散兩門の益をとくといへども、佛の本願にのぞむれば、こゝろ衆生をして、一向にもはら彌陀佛のみなを稱ぜしむるにあり。（またのたまはく　佛告阿難等—同上）

またのたまはく、極樂は無爲涅槃界なり。隨縁の雜善、おそらくは生じがたし。かるがゆへに如來、要法をえらびて、おしへて彌陀を念ぜしめて、もはらにして、またもはらならしめたまへり。（またのたまはく　極樂等—法事讚の文）またのたまはく、劫つきなんと欲するとき、五濁さかんなり、衆生、邪見にしてはなはだ信じがたし。もはらにしてもはらなれと、指授して西路に歸せしむ（またのたまはく　劫等—同上）

ず、たとひ釋迦、さして一切の凡夫をすゝめて、この一身をつくして、專念專修して、いのちをすてゝのち、さだめてかの國に生ずといふは、すなはち十方の諸佛こと〳〵くみな、おなじくほめ、おなじくすゝめ、おなじく證したまふ。なにをもてのゆへに、同體大悲のゆへに。一佛の所化は、すなはちこの一切佛の化なり。一切佛の化は、すなはちこれ一佛の所化なり。すなはち彌陀經のなかにとかく、乃至、また一切の凡夫をすゝめて、一日七日、一心にして彌陀の名號を專念すれば、さだめて往生をうと。つぎしもの文にのたまはく、十方におの〳〵恒河沙等の諸佛まし〳〵て、おなじく釋迦をほめたまはく、よく五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡煩惱、惡邪無信のさかんなるときにおいて彌陀の名號を指讃して、衆生を勸勵して、稱念せしむれば、かならず往生をうと、すなはちその證なり。また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所說を信ぜざらんことをおそれて、すなはちともに、同心同時に、おの〳〵舌相をいだして、あまねく三千世界におほふて、誠實の言をときたまはく、なんたち衆生、みなこの釋迦の所說、所讃、所證を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近をとはず。たゞよく、かみ百年をつくし、しも一日七日にいたるまで、一心に彌陀の名號を專念すれば、さだめて往生

光明寺の和尚ののたまはく等―定善義の文

またのたまはくまた決定して等―散善義の文

まうあひがたし、信慧ありていたるべからず、もし聞見せば精進してもとめよ。已上。

觀經にのたまはく、佛、阿難につげたまはく、なんぢよくこのことばをたもて、このことばをたもてといふは、すなはちこれ無量壽佛のみなをたもてとなり。已上。

阿彌陀經にのたまはく、少善根福德の因緣をもて、かのくにに生ずることをうべからず阿彌陀佛をとくをききて、名號を執持せよ。已上。

光明寺の和尚ののたまはく、自餘の衆行は、これ善となづくといへども、もし念佛にならぶれば、またく比挍にあらず。このゆへに諸經のなかに、處々にひろく念佛の功能をほめたり。無量壽經の四十八願のなかのごときは、たゞ彌陀の名號を專念して、生ずることをうとあかす。また彌陀經のなかのごときは、一日七日、彌陀の名號を專念して、生ずることをう。また十方恒沙の諸佛、證誠むなしからざるなり。またこの經の定散の文のなかには、たゞ名號を專念して、生ずることをうと標す。この例ひとつにあらず。ひろく念佛三昧をあらはしおはんぬ。

またのたまはく、また決定して、ふかく彌陀經のなかに、十方恒沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決定して生ずることをうと信ず。乃至。諸佛の言行あひ違失したまは

無量壽經上卷

またのたまはく諸智等—同經下卷

またのたまはくもしひと等—同上

まはく、たとひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、わが名號をききて、念をわがくににかけて、もろ〳〵の德本をうへて、心をいたし廻向して、わがくにに生ぜんとおもはん。果遂せずといはゞ、正覺をとらじ。またのたまはく、諸智において、疑惑して信ぜず、しかるになを罪福を信じて、善本を修習して、そのくにに生ぜんと願ぜん　このもろもろの衆生、かの宮殿に生ぜん。

またのたまはく、もしひと善本なければ、この經をとくことをえず。清淨に戒をたもてるもの、いまし正法をきくことをえん。已上。

無量壽如來會にのたまはく、もしわれ成佛せんに、無量國のなかの所有の衆生、わが名をとかんをききて、もておのれが善根として、極樂に廻向せん、もしむまれずといはば、菩提をとらじ。已上。

平等覺經にいはく、この功德あるにあらざるひとは、この經の名をきくことをえず。ただし清淨に戒をたもてるもの、いましかへりてこの正法をきく。惡と、憍慢と、蔽と、懈怠とは、もてこの法を信ずることかたし。宿世のときに、佛をみたてまつれるもの、このんで世尊の教を聽聞せん。ひとのいのちまれにうべし。佛は世にましませども、はなはだ

こゝをもて大經の願に等一大無

るべし。三經一心の義こたへおはんぬ。

それ濁世の道俗、すみやかに圓修至德の眞門にいりて、難思往生をねがふべし。眞門の方便につきて、善本あり、德本あり。また定專心あり、また散專心あり、また定散雜心あり。雜心といふは、大小凡聖、一切善惡、おの〳〵助正間雜の心をもて、名號を稱念す、まことに教は頓にして、根は善機なり。行は專にして、心は間雜す。かるがゆへに雜心といふ。定散の專心は、罪福を信ずる心をもて本願力を願求す、これを自力の專心となづくるなり。善本といふは、如來の嘉名なり、この嘉名は萬善圓備せり、一切善法の本なり、かるがゆへに善本といふなり。德本といふは、如來の德號なり、この德號は、一聲稱念するに、至德成滿し、衆禍みな轉ず、十方三世の德號の本なり、かるがゆへに德本といふなり。

しかればすなはち、釋迦牟尼佛は、功德藏を開演して、十方濁世を勸化したまふ。阿彌陀如來は、もと果遂のちかひ（果遂の願といふは二十の願なり。）をおこして、諸有の群生海を悲引したまふ。すでにして悲願います、植諸德本の願となづく、また係念定生の願となづく、また不果遂者の願となづく、また至心廻向の願となづくべきなり。こゝをもて大經の願にのた

四依弘經の大士―釋尊のこと
三朝淨土の宗師―印度、支那、日本三國の祖高僧

ちに彌陀の弘誓のおもきによりて、凡夫をして、念ずればすなはち、生ぜしむることをいたすといへり。これはこれ隱彰の義をひらくなり。

經に執持といへり、また一心といへり。執の言は、心堅牢にして、しかも移轉せざることをあらはすなり。持の言は、不散不失になづくるなり。一の言は、無二の言になづくるなり。心の言は、眞實になづくるなり。この經は大乘修多羅のなかの、無問自說の經なり。しかれば如來、世に興出したまふゆへは、恒沙の諸佛、證護の正意、たゞこれにあるなり。こゝをもて四依弘經の大士、三朝淨土の宗師、眞宗念佛をひらきて、濁世の邪僞をみちびきたまふ。

三經の大綱、顯彰隱密の義ありといへども、信心をあらはして能入とす、かるがゆへに經のはじめに、如是と稱す。如是の義は、すなはちよく信ずる相なり。いま三經を按ずるに、みな金剛の眞心をもて、最要とせり、眞心はすなはちこれ大信心なり。大信心は希有最勝眞妙淸淨なり。なにをもてのゆへに。大信心海は、はなはだもていりがたし、佛力より發起するがゆへに。眞實樂邦は、はなはだもてゆきやすし、願力によりて、すなはち生ずるがゆへに。いままさに、一心一異の義を談ぜんとす、まさにこのこゝろな

小本—阿彌陀經のこと。

釋には九品ともに等—五會法事讃の文

釋にたゞちに彌陀の等—同じく法事讃の文

また問、大本、觀經の三心と、小本の一心と、一異いかんぞ。答、いま方便眞門の誓願について、行あり信あり、また眞實あり、方便あり。願といふは、すなはち植諸德本の願これなり。行といふは、これに二種あり、一には善本、二には德本なり。信といふは、すなはち至心迴向欲生の心これなり。二十の願なり。機について定あり、散あり。往生といふは、これ難思往生これなり。佛といふはすなはち化身なり。土といふはすなはち疑城胎宮これなり。

觀經に准知するに、この經に、また顯彰隱密の義あるべし。顯といふは、經家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本、德本の眞門を開示し、自利の一心をはげまして、難思の往生をすゝむ。こゝをもて經には、多善根、多功德、多福德因緣とときき、釋には、九品ともに迴して、不退をうといへり。あるひは、念佛して西方にゆくにすぎたるはなし。三念、五念までも、佛、來迎したまふといへり。これはこの經の顯の義をしめすなり、これすなはち眞門のなかの方便なり。彰といふは、眞實難信の法をあらはす、これすなはち不可思議の願海を光闡して、無碍の大信心海に歸せしめんとおぼす。まことにすゝめ、すでに恒沙のすゝめなれば、信もまた恒沙の信なり、かるがゆへに甚難といへるなり。釋に、たゞ

り、雜心あり。五專といふは、一には專禮、二には專讀、三には專觀、四には專名、五には專讃嘆、これを五專修となづく。專修そのことばひとつにして、そのこゝろこれことなり、すなはちこれ定專修なり、たま散專修なり。專心といふは、五正行をもはらにして、しかも二心なきがゆへに專心といふ、すなはちこれ定專心なり、またこれ散專心なり。雜修といふは、助正兼行するがゆへに雜修といふ。雜心といふは、定散心雜するがゆへに雜心といふなり、しるべし。

おほよそ淨土の一切諸行において、綽和尚は萬行といひ、導和尚は雜行と稱し、感禪師は諸行といへり。信和尚は感師によれり。空聖人は導和尚によりたまふ。經家によりて師釋をひらくに、雜行のなかの雜行雜心、雜行專心、專行雜心あり。また正行のなかの專修專心、專修雜心、雜修雜心は、これみな邊地胎宮懈慢界の業因なり。かるがゆへに極樂に生ずといへども、三寶をみたてまつらず、佛心光明、餘の雜業の行者を照攝せざるなり。假令の誓願、まことにゆへあるかな。假門の敎、忻慕の釋、これいよ〳〵あきらかなり。二經の三心、顯の義によれば異なり、彰の義によれば一なり。三心一異の義、こたへおはんぬ。

綽和尚―道綽禪師のこと
導和尚―善導大師のこと
感禪師―懷感禪師のこと
信和尚―源信和尚のこと
空聖人―源空聖人のこと
二經―大經と觀經のこと

横超他力ー獲信の一念に現當二世の益を得る弘願眞如門を云ふ頓即の證法なるを以て横超と名く

雜行といふは、正助をのぞきて已外を、こと〲く雜行となづく。これすなはち横出、漸教、定散、三福、三輩、九品、自力假門なり。横超といふは、本願を憶念して、自力の心をはなる。專修といふは、たゞ佛名を稱念して、自力の心をはなる、これを横超他力となづくるなり。これすなはち專のなかの專、頓のなかの頓、眞のなかの眞、乘のなかの一乘なり。これすなはち眞宗なり。すでに眞實行のなかに、あらはしおはんぬ。それ雜行雜修、そのことばひとつにして、そのこゝろこれことなり。雜の言において萬行を攝入す。五種の正行に對して、五種の雜行あり。雜の言は、人天菩薩等の解行、雜せるがゆへに、雜といふ。もとより往生の因種にあらず、廻心廻向の善なり。かるがゆへに淨土の雜行といふなり。また雜行について、專行あり、專心あり。また雜行あり、雜心あり。專行といふは、もはら一善を修す、かるがゆへに專行といふ。專心といふは、廻向をもはらにするがゆへに專心といへり。雜行雜心といふは、諸善兼行するがゆへに雜行といふ、定散心雜するがゆへに雜心といふなり。また正助について、專修あり、雜修あり。この雜修について專心あり雜心あり、專修について二種あり。一にはたゞ佛名を稱す、二には五專あり。この行業について、專心あ

立相住心—差別事相を立てゝそれに心をそゝぎ觀想すること（事觀）

無相離念—眞如理體を觀じてあらゆる念想を拂ふ觀法を云ふ（理觀）

宗師のこゝろによるに、心によりて勝行をおこすに、門、八萬四千にあまれり、漸頓すなはちおの〳〵所宜にかなふて、縁にしたがふもの、すなはちみな解脱をかうふるといへり。しかるに常沒の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆへに。散心行じがたし、廢惡修善のゆへに。こゝをもて立相住心なを成じがたし。かるがゆへに、たとひ千年の壽をつくすとも、法眼いまだかつて、ひらけじといへり。いかにいはんや、無相離念まことにえがたし。かるがゆへに如來、末代罪濁の凡夫は、立相住心なをうることあたはじと懸知したまへり。いかにいはんや、相をはなれて、しかも事をもとめんは、術通なきひとの、空に居して、舍をたてんがごとしといへり。門餘といふは、門はすなはち八萬四千の假門なり、餘はすなはち本願一乘海なり。おほよそ一代の教について、この界のうちにして、入聖得果するを、聖道門となづく、難行道といへり。この門のなかについて、大小漸頓、一乘二乘三乘、權實顯密、竪出竪超あり、すなはちこれ自力利他教化地、方便權門の道路なり。安養淨刹にして、入聖證果するを淨土門となづく、易行道といへり。この門のなかについて、横出横超、假眞、漸頓、助正、雜行、雜修專修あるなり。正といふは五種の正行なり。助といふは、名號をのぞきて已外の四種これなり。

正助雜の三行―正行とは淨土に往生する正しき行と云ふことにて讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆供養の五種あり、この中第四の稱名を正定業とし前三後一を助の行業とす、雜行とはこの五種の正行を除きし諸善を迴向して往生せんとする所のもの

德の善なり。信といふは、すなはちこれ至心發願欲生の心なり。この願の行信によりて、淨土の要門方便權假を顯開す。この要門より正助雜の三行をいだせり。この正助のなかについて、專修あり、雜修あり。機について二種あり。一には定機、二には散機なり。また二種の三心あり、また二種の往生あり。二種の三心といふは、一には定の三心、二には散の三心なり。定散の心は、すなはち自利各別の心なり。二種の往生といふは、一には卽往生、二には便往生なり。便往生といふは、すなはちこれ胎生邊地、雙樹林下の往生なり。卽往生といふは、すなはちこれ報土化生なり。またこの經に眞實あり、これすなはち金剛の眞心をひらきて、攝取不捨をあらはさんとす。しかれば濁世能化釋迦善逝、至心信樂の願心を宣說したまふ、報土眞因は信樂を正とするがゆへなり。こゝをもて大經には信樂といへり。如來の誓願疑蓋まじはることなし、かるがゆへに信とのたまへるなり。觀經には深心ととけり、諸機の淺信に對せるがゆへに、深といへるなり。小本には一心とのたまへり。二行まじはることなきがゆへに、一とのたまへるなり。また一心について、深あり淺あり。深といふは、利他眞實の心これなり。淺といふは、定散自利の心これなり。

五濁―劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁

はすなはちこれ女人の相、貪瞋具足の凡夫のくらゐなり。已上。
論の註にいはく、二種の功德の相あり、一には有漏の心より生じて、法性に順ぜず、いはゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顚倒す、みなこれ虛僞なり、かるがゆへに不實の功德となづく。已上。
安樂集に、大集經の月藏分をひきていはく、わが末法のときのなかの億々の衆生、行をおこし道を修せんに、いまだ一人として、うるものあらじと。當今は末法、これ五濁惡世なり。たゞ淨土の一門のみありて、通入すべきみちなり。またいはく、いまだ一萬劫にみたざるこのかたは、つねにいまだ火宅をまぬがれず、轉倒墜墮するがゆへに。おのおの功をもちゐることはいたりておもく、報をうることは僞なり。已上。
しかるにいま大本によるに、眞實方便の願を超發す。また觀經には、方便眞實の敎を顯彰す。小本にはたゞ眞門をひらきて、方便の善なし。こゝをもて三經の眞實は、選擇本願を宗とするなり。また三經の方便は、すなはちこれもろ〳〵の善根を修するを要とするなり。これによりて方便の願を按ずるに、假あり、眞あり、また行あり、信あり。願といふは、すなはちこれ臨終現前の願なり。行といふは、すなはちこれ修諸功

またいはくすべて餘の等―觀念法門の文
またいはく如來五濁等―法事讚の文
群萠―衆生のこと

またいはく萬劫に劫を等―般舟讚の文

三惡―地獄、餓鬼、畜生
四趣―地獄、餓鬼、畜生、修羅
またいはく定散ともに等―般舟讚の文

つゐにこれ益なし。なさゞるものにたがはんや、しるべし。流涙流血等にあたはずといへども、たゞよく眞心徹倒するものは、すなはちちかみとおなじ。已上。

またいはく、すべて餘の雜業の行者を照攝すといふことを論ぜず。

またいはく、如來、五濁に出現して、よろしきにしたがひて、方便して群萠を化したまふ。あるひは多聞にして、しかも得度すとき、あるひはすこしくさとりて三明を證すとゞく、あるひは福慧ならべてさはりをのぞくとおしへ、あるひは禪念して、坐して思量せよとおしふ、種々の法門みな解脱す。

またいはく、萬劫に功を修せんこと、まことにつきがたし。一時に煩惱もゝたびちたびへだつ。もし娑婆にして法忍を證せんことをまたば、六道にして恒沙劫にも、いまだ期あらん。門々不同なるを漸敎となづく。萬劫苦行して無生を證す。畢命は期としてもはら念佛すべし。須臾に命斷すれば、佛、迎將したまふ。一食のときなをひまあり、いかんぞ萬劫に貪瞋せざらん。貪瞋は人天をうくるみちをさふ、三惡四趣のうちに身を安ず。要を抄す。

またいはく、定散ともに廻して、寶國にいれ、すなはちこれ如來の異の方便なり。韋提

またいはくもし等―往生禮讃の文

またいはく、もし專をすてゝ、雜業を修せんとするものは、百のときに、まれに一二をえ、千のときに、まれに五三をう。なにをもてのゆへに、いまし雜緣亂動して、正念を失するによるがゆへに、佛の本願と相應せざるがゆへに、敎と相違せるがゆへに、佛語に順ぜざるがゆへに、係念相續せざるがゆへに、憶想間斷するがゆへに、迴願慇重眞實ならざるがゆへに、貪瞋諸見の煩惱、きたりて間斷するがゆへに、慚愧懺悔の心あることなきがゆへに。懺悔に三品あり、乃至、上中下なり。上品の懺悔といふは、身の毛孔のうちより血ながれて、まなこのうちより血いだすものを、上品の懺悔となづく。中品の懺悔といふは、偏身にあつきあせ、毛孔よりいで、まなこのうちより、血ながるゝものを、中品の懺悔となづく。下品の懺悔といふは、偏身にとほりあつくして、まなこのうちより、なみだいづるものを、下品の懺悔となづく。これらの三品、差別ありといへども、これひさしく解脫分の善根をうえたるひとなり。今生に法をうやまひ、ひとをおもくして、身命をおしまず、乃至小罪も、もし懺すれば、すなはちよく心髓にとほりて、よくかくのごとく懺すれば、久近をとはず、所有の重障、みな頓に滅盡せしむることをいたす。もしかくのごとくせざれば、たとひ日夜十二時に、急にもとむれども、

またいはく淨土等―散善義の文
またいはく觀經等―往生禮讃の文

四修―無餘修、長時修、無間修、尊重修

く、淨土の要あひがたし。抄出。

またいはく、觀經の說のごとし、まづ三心を具して、かならず往生をう。なんらをか三とする。一には至誠心、いはゆる身業に、かの佛を禮拜し、口業にかの佛を讃嘆し、稱揚し、意業にかの佛を專念し、觀察す。おほよそ三業をおこすに、かならず眞實をもちゐるがゆへに、至誠心となづく。乃至。三には廻向發願心、所作の一切の善根、こと〴〵くみな廻して往生を願ず。かるがゆへに廻向發願心となづく。この三心を具して、かならず生ずることをう。もし一心かけぬれば、すなはち生ずることをえず。觀經につぶさにとくがごとし、しるべし。乃至

菩薩はすでに生死をまぬがれて、所作の善法、廻して佛果をもとむ、すなはちこれ自利なり。衆生を敎化して未來際をつくす、すなはち利他なり。しかるにいまのときの衆生、こと〴〵く煩惱のために繫縛せられて、いまだ惡道、生死等の苦をまぬがれず。緣にしたがひて行をおこして、一切の善根、つぶさにすみやかに廻して、阿彌陀佛のくにに往生せんと願ぜん。かのくににいたりおはりて、さらにおそるゝところなけん、かみのごときの四修、自然任運にして、自利々他具足せざることなし、しるべし。

世出世の善根─世間、出世間のよきこと

またいはく定善等─序分義の文

またいはく散善等─序分義の文

はち一心にもはら、かの佛を禮する。もしくちに稱するには、すなはち一心にもはらかの佛を稱する。もし讃嘆供養するには、すなはち一心にもはら讃嘆供養する。これをなづけて正とす。またこの正のなかについて、また二種あり。一には一心にもはら、彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近をとはず、念々にすてざるもの、これを正定の業となづく。かの佛の願に順ずるがゆへに。もし禮誦等によるをば、すなはちなづけて助業とす。この正助二行をのぞきて已外、自餘の諸善をば、こと〴〵く雜行となづく。もしさきの正助二行を修するは、心つねに親近して、憶念たえず、なづけて無間とす。もしのちの雜行を行ずるは、すなはち心つねに間斷す。廻向して生ずることをうべしといへども、すべて疎雜の行となづくるなり。かるがゆへに深心となづく。

三には廻向發願心。廻向發願心といふは、過去および今生の身口意業に、修するところの世出世の善根、および他の一切の凡聖の身口意業に、修するところの世出世の善根を隨喜して、この自他所修の善根をもて、こと〴〵くみな眞實の深信の心のうちに廻向して、かのくにに生ぜんと願ず、かるがゆへに廻向發願心となづくるなり。またいはく、定善は觀をしめす縁なり。またいはく、散善は行をあらはす縁なり。またいは

三業—身、口、意業
つしんで—欽んで也

の依正二報の苦惡の事を毀厭す。また一切衆生の三業所爲の善を讃嘆す、もし善業にあらずば、つしんでしかもこれをとをざかれ、また隨喜せざれ。また眞實心のうちの身業に、合掌し禮敬し、四事等をもて、かの阿彌陀佛および依正二報を供養す。また眞實心のうちの身業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕慢し、厭捨す。また眞實心のうちの意業に、かの阿彌陀佛および依正二報を思想し、觀察し、憶念して、目のまへに現ずるがごとくす。また眞實心のうちの意業に、この生死三界等の自他の依正二報を、輕賤し厭捨す。乃至。また決定して、ふかく釋迦佛、この觀經の三福九品、定散二善をときて、かの佛の依正二報を證讃して、ひとをして忻慕せしむと信ず。乃至。また深心は深信なりといふは、決定して自心を建立して、教に順して修行し、ながく疑錯をのぞきて、一切の別解、別行、異學、異見、異執のために、退失傾動せられざるなり。乃至。つぎに行について信をたつとふは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。正行といふは、もはら往生經の行によりて行ずるものは、これを正行となづく。なにものかこれや。一心にもはら、この觀經、彌陀經、無量壽經等を讀誦する。一心に、かのくにの二報莊嚴を專注し思想し、觀察し憶念する。もし禮するには、すな

樂のごとし、遠をとくこと遠のごとし、近をとくこと近のごとし、同をとくこと同のごとし、別をとくこと別のごとし、淨をとくこと淨のごとし、穢をとくこと穢のごとし、一切の法をとくこと千差萬別なり。如來の觀知、歷々了然として、心にしたがひて行をたて、おの〳〵益することおなじからず、業果法然としてすべて錯失なし、また稱して是とす、かるがゆへに如是といふ。

またいはく、欲生彼國者より、しも名爲淨業にいたるこのかたは、まさしく三福の行を勸修することをあかす。これは一切衆生の機に、二種あることをあかす。一には定、二には散なり。もし定行によれば、すなはち生を攝するにつきず、こゝをもて如來方便して、三福を顯開して、もて散動の根機に應じたまへり。

またのたまはく、また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。自利眞實といふは、また二種あり。一には眞實心のうちに、自他の諸惡、および穢國等を制作して、行住坐臥に、一切菩薩の諸惡を制捨するにおなじく、われもまたかくのごとくせんとおもふ。二には眞實心のうちに、自他凡聖等の善を勤修す。眞實心のうちの口業に、かの阿彌陀佛および依正二報を讃嘆す、また眞實心のうちの口業に、三界六道等の自他

またいはく欲生等―序分義に文
三福―世福、戒福、行福

またのたまはく
また眞實等―散善義の文

凡聖―凡夫と聖者

またのたまはく いまこの等―玄義分の文

二藏―聲聞藏、菩薩藏

二教―頓教、漸教

またいはくまた如是等―序分義の文

弘願といふは、大經の說のごとし。

またのたまはく、いまこの觀經は、すなはち觀佛三昧をもて宗とす、また念佛三昧を宗とす。一心に廻願して、淨土に往生するを體とす。教の大小といふは、問ていはく、この經は二藏のなかには、いづれの藏にか攝する、二教のなかには、いづれの教にかおさむるや。こたへていはく、いまこの觀經は、菩薩藏におさむ、頓教の攝なり。

またいはく、また如是といふは、すなはちこれ法をさす、定散兩門なり、これすなはちさだむることばなり。機、行ずればかならず益す、これ如來の所說のみこと錯謬なきことをあかす、かるがゆへに如是となづく。また如といふは、衆生のこゝろのごとし、心の所樂にしたがひて、佛すなはちこれを度したまふ、機教相應せるを、また稱して是とす、かるがゆへに如是といふ。また如是といふは、如來の所說、漸をとくこと漸のごとし、頓をとくこと頓のごとし、相をとくこと相のごとし、空をとくこと空のごとし、人法をとくこと人法のごとし、天法をとくこと天法のごとし、小をとくこと小のごとし、大をとくこと大のごとし、凡をとくこと凡のごとし、聖をとくこと聖のごとし、因をとくこと因のごとし、果をとくこと果のごとし、苦をとくこと苦のごとし、樂をとくこと

すなはちこれ定散の諸善は、方便の敎たることをあらはす。以佛力故、見彼國土といへり、これすなはち他力のこゝろをあらはす。若佛滅後、諸衆生等といへり、すなはちこれ未來の衆生往生の正機たることをあらはす。若有合者、名爲麁想といへり、これ定觀成じがたきことをあらはす。於現身中、得念佛三昧といへり、すなはちこれ定觀成就の益は、念佛三昧をうるをもて、觀の益とすることをあらはす、すなはち觀門をもて、方便の敎とせるなり。發三種心卽便往生といへり、また復有三種衆生、當得往生といへり。これらの文によるに、三輩について、三種の三心あり、また二種の往生あり。まことにしんぬ、これいましこの經に顯彰隱密の義あることを。二經の三心まさに一異を談ぜんとす、よく思量すべきなり。大經觀經、顯の義によれば異なり、彰の義によれば一なり、しるべし。

しかるに等—玄義分の文

しかれば光明寺の和尙のたまはく、しかるに娑婆の化主、その請によるがゆへに、すなはちひろく淨土の要門をひらく。安樂の能人、別意の弘願を顯彰す。その要門といふは、すなはちこの觀經の定散二門これなり、定はすなはち慮をやめてもて心をこらす、散はすなはち惡を廢してもて善を修す、この二行を廻して往生を求願せよとなり。

定散の諸機―定善の機は息慮凝心の機、散善の機は廢惡修善の機

大本の三心―至心、信樂、欲生

觀經の三心―至誠心、深心、迴向發願心

ところをもて經には―觀經のこと

のなかの別願なりと、顯開したまへり。觀經の定散の諸機は、極重惡人唯稱彌陀と勸勵したまへり。濁世の道俗、よくみづからおのれが能を思量せよ、しるべし。

問、大本の三心と觀經の三心と一異いかんぞ。答、釋家のこゝろによりて、無量壽佛觀經を按ずれば、顯彰隱密の義あり。顯といふは、すなはち定散諸善をあらはし、三輩三心をひらく。しかるに二善三福は、報土の眞因にあらず、諸機の三心は、自利各別にして、しかも利他の一心にあらず、如來の異の方便、忻慕淨土の善根なり、これはこの經のこゝろなり、すなはちこれ顯の義なり。彰といふは、如來の弘願をあらはし、利他通入の一心を演暢す。達多闍世の惡逆によりて釋迦微咲の素懷をあらはし、韋提別選の正意によりて、彌陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの經の隱彰の義なり。こゝをもて經には、教我觀於淸淨業處といへり、淸淨業處といふは、すなはちこれ本願成就の報土なり。教我思惟といふは、すなはち方便なり、教我正受といふは、すなはち金剛の眞心なり、諦觀彼國淨業成者といへり、本願成就の盡十方無礙光如來を觀知すべしとなり。廣說衆譬といへり、すなはち十三觀これなり。汝是凡夫心想羸劣といへり、すなはちこれ惡人往生の機たることをあらはす。諸佛如來、有異方便といへり。

憬興師のいはく—述文讃

著して—執著すること

憬興師のいはく、佛智をうたがふによりて、かのくにゝむまれて、しかも邊地にありといへども、聖化の事をかふらず、もし胎生せば、よろしくこれをおもくすつべし。已上。

首楞嚴院の要集に、感禪師の釋をひきていはく、問、菩薩處胎經の第二とかく、西方、この閻浮提をさること、十二億那由他に懈慢界あり。乃至。こゝろをおこせる衆生、阿彌陀佛のくにに生ぜんとおもふもの、みなふかく懈慢國土に著して、すゝんで阿彌陀佛のくにに生ずることあたはず、億千萬衆、ときに一人ありて、よく阿彌陀佛のくにに生ずと。云云。この經をもて、准難するに、生ずることをうべしや。答、群疑論に善導和尚のさきの文をひきて、しかもこの難を釋して、またみづから助成していはく、この經のしもの文にいはく、なにをもてのゆへに、みな懈慢によりて執心牢固ならずと、こゝにしんぬ、雜修のものは、執心不牢のひととす、かるがゆへに懈慢國に生ず。もし雜修せずして、もはらこの業を行ぜば、これすなはち執心牢固にして、さだめて極樂に生ぜん。乃至。また報の淨土に生ずるものは、きはめてすくなし。化の淨土に生ずるものは、すくなからず。かるがゆへに經の別說、實に相違せざるなり。已上略抄。

しかればそれ楞嚴の和尚の解義を按ずるに、念佛證據門のなかに、第十八の願は、別願

大經―大無量壽經下卷
またいはく―如來會
光明寺釋―善導大師の定善義

のなかに住せん。乃至。阿逸多、なんぢ殊勝智のものを觀ずるに、かれは廣慧のちからによるがゆへに、かの蓮華のなかに化生することをうけて結跏趺座せん。なんぢ下劣のともがらを觀ずるに、乃至、もろ〳〵の功德修習することあたはず、かるがゆへに因なくして、無量壽佛に奉事せん、このもろ〳〵のひと等は、みなむかしの緣、疑悔をなしていたすところなればなり。乃至。佛、彌勒につげたまはく、かくのごとしかくのごとし、もし疑悔にしたがひて、もろ〳〵の善根をうえて、佛智乃至廣大智を希求することあらん、みづからの善根において、信を生ずることあたはず、佛のみなをきくによりて、信心をおこすがゆへに、かのくにに生ずといへども、蓮華のなかにして、出現することをえず、かれらの衆生、華胎のなかに處すること、なをし園苑宮殿のおもひのごとし。要を抄す大經にのたまはく、もろ〳〵の小行の菩薩、および少功德を修習するもの、稱計すべからず、みなまさに往生すべし。またいはく、いはんや餘の菩薩、少善根によりて、かのくにに生ずるもの、稱計すべからず。已上。

光明寺の釋にのたまはく、はなにふくまれていまだいでず、あるひは邊界に生じ、あるひは宮胎に墮す。已上。

疑惑して信ぜず、しかもなを罪福を信じて善本を修習して、そのくにに生ぜんと願ぜん、このもろ〳〵の衆生、かの宮殿に生じて、いのち五百歲、つねに佛をみたてまつらず、經法をきかず、菩薩聲聞聖衆をみず、このゆへにかの國土には、これを胎生といふ。乃至。彌勒、まさにしるべし、かの化生のものは、智慧すぐれたるがゆへに、その胎生のものは、みな智慧なし。乃至。佛、彌勒につげたまはく、たとへば轉輪聖王の七寶の牢獄あらんがごとし、種々に莊嚴し、牀帳を張設し、もろ〳〵の繒幡をかけたらん、もしもろ〳〵の小王子、つみを王にえたらん、すなはちかの獄のなかにいれて、つなぐに金鏁をもてせん。乃至。佛、彌勒につげたまはく、このもろ〳〵の衆生、また〳〵かくのごとし、佛智を疑惑するをもてのゆへに、かの胎宮にむまれん。乃至。もしこの衆生、そのもとのつみをしりて、ふかくみづから悔責して、かのところをはなるゝことをもとめん。乃至。彌勒、まさにしるべし、それ菩薩ありて、疑惑を生ぜば、大利を失すとす。已上抄出。

如來會にのたまはく、佛、彌勒につげたまはく、もし衆生ありて、疑悔にしたがひて善根を積集して、佛智、普徧智、不思議智、無等智、威德智、廣大智を希求せん。みづからの善根において、信を生ずることあたはず、この因緣をもて、五百歲において、宮殿

またいはく―大無量壽經下卷
胎生―母胎より生ずる者
化生―托する所なくして忽爾として生ずる者

尼、持海輪寶、衆寶の王たるをもて、しかもこれを莊嚴せり。乃至。阿難、もしかのくにの人天、この樹をみるものは、三法忍をえん、一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍なり。これみな無量壽佛の威神力のゆへに、本願力のゆへに、滿足願のゆへに、明了願のゆへに、堅固願のゆへに、究竟願のゆへなり。乃至。また講堂、精舍、宮殿、樓觀、みな七寶をもて莊嚴し、自然に化成せり。また眞珠、明月摩尼、衆寶をもて交露とす、そのうへに覆蓋せり。内外左右に、もろ〳〵の浴地あり、十由旬、あるひは二十三十、乃至百千由旬なり、縱廣深淺おの〳〵みな一等なり。八功德水、湛然として盈滿せり。淸淨香潔にして、あぢはひ甘露のごとし。またいはく、その胎生のものは、處するところの宮殿、あるひは百由旬、あるひは五百由旬なり。おのおのそのなかにして、もろ〳〵の快樂をうくること、忉利天上のごとし、またみな自然なり。そのときに慈氏菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊なんの因なんの緣ありてか、かのくにの人民、胎生、化生なると。佛、慈氏につげたまはく、もし衆生ありて、疑惑の心をもて、もろ〳〵の功德を修して、かのくにに生ぜんと願ぜん、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了せずして、この諸智において、

来迎引接願―臨終の時その人の前に現はれて淨土に導かんと誓ふ願

大經―大無量壽經上卷

大經―大無量壽經上卷

く、また臨終現前の願となづく。また現前導生の願となづく、また來迎引接の願となづく、また至心發願の願となづくべきなり。

こゝをもて大經の願にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、菩提心をおこし、もろ〳〵の功德を修し、心をいたし發願して、わがくにに生ぜんとおもはん、壽終のときにのぞんで、たとひ大衆と圍繞して、そのひとのまへに現ぜずといはゞ、正覺をとらじ。悲華經の大施品にのたまはく、ねがはくばわれ、阿耨多羅三藐三菩提をなりおはらんに、その餘の無量無邊阿僧祇の諸佛世界の所有の衆生、もし阿耨多羅三藐三菩提心をおこし、もろ〳〵の善根を修して、わが界に生ぜんとおもはんもの、臨終のとき、われまさに大衆と圍繞して、そのひとのまへに現ずべし、そのひとわれをみて、すなはちわがまへにして、心に歡喜をえん、われをみるをもてのゆへに、もろ〳〵の障閡をはなれて、すなはち身をすてゝわが界に來生せしめん。已上

この願成就の文は、すなはち三輩の文これなり、觀經の定散九品の文これなり。

また大經にのたまはく、無量壽佛のその道場樹は、たかさ四百萬里なり。そのもと周圍、五十由旬なり、枝葉よもにしきて二十萬里なり、一切の衆寶、自然に合成せり、月光摩

至心發願の願―十九願
邪定聚の機―非本願の雜善を修して淨土に生ぜんとする者
雙樹林下往生―要門自力の往生
至心廻向の願―第二十願
不定聚の機―進みては弘願の機ともなり退きては要門の機ともなるべき不定の者
難思往生―眞門の往生

顯淨土方便化身土文類六 本

愚禿釋の親鸞の集

至心發願の願。邪定聚の機、雙樹林下往生、無量壽佛觀經のこゝろなり。

至心廻向の願。不定聚の機、難思往生、阿彌陀經のこゝろなり。

つしんで化身土をあらはさば、佛といふは、無量壽佛觀經の説のごとし、眞身觀の佛これなり。土といふは觀經の淨土これなり、また菩薩處胎經等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また大無量壽經の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。しかるに濁世の群萠、穢惡の含識、いまし九十五種の邪道をいでて、半滿權實の法門にいるといへども、眞なるものは、はなはだもてかたく、實なるものは、はなはだもてまれなり。僞なるものは、はなはだもておほく、虚なるものは、はなはだもてしげし。ここをもて釋迦牟尼佛、福德藏を顯說して、群生海を誘引し、阿彌陀如來、もと誓願をおこして、あまねく諸有海を化したまふ。すでにして悲願います、修諸功德の願となづ

往生といふは、大經には皆受自然、虛無之身、無極之體とのたまへり。已上。論には如來淨華衆正覺華化生といへり、また同一念佛無別道故といへり。已上。また難思議往生といふ、これなり。

假の佛土といふは、しもにありてしるべし。すでにもて眞假、みなこれ大悲の願海に酬報せり、かるがゆへにしんぬ、報佛土なりといふことを。

まことに假の佛土の業因千差なれば、土また千差なるべし、これを方便化身化土となづく。眞假をしらざるによりて、如來廣大の恩德を迷失す。これによりて、いま眞佛眞土をあらはす、これすなはち眞宗の正意なり。

經家論家の正說、淨土宗師の解義、あふいで敬信すべし、ことに奉持すべしと、しるべしとなり。

眞如三昧—法界平等を觀ずる三昧也この三昧は無量の三昧を生ずるを以て三昧根本と稱す

ることをうるとのたまへり。起信論にいはく、もしとくといへども、能説のありてとくべきもなく、また能念の念ずべきもなしとしるを、なづけて隨順とす。もし念をはなるるをなづけて得入とす。得入といふは、眞如三昧なり、いかにいはんや、無念のくらゐは妙覺にあり、けだしもて了心は初生の相なり。しかも初相をしるといふは、いはゆる無念は菩薩十地のしるところにあらず、しかるにいまのひと、なをいまだ十信にかなはず、すなはち馬鳴大士によらざらんや、説より無説にいり、念より無念にいるとのたまへり。略抄。

それ報を按ずれば、如來の願海によりて、果成の土を酬報せり、かるがゆへに、報といふ。しかるに願海について眞あり假あり、こゝをもてまた、佛土について眞あり假あり。選擇本願の正因によりて、眞佛土を成就せり。

眞佛といふは、大經には、無邊光佛、無礙光佛とのたまへり、また諸佛のなかの王なり、光明のなかの極尊なりとのたまへり。已上。論には、歸命盡十方無礙光如來といへり。

眞土といふは、大經には、無量光明土とのたまへり、あるひは諸智土とのたまへり。已上。論には、究竟如虚空、廣大無邊際といふ。

隨緣雜善—界迷の緣に從つて生ずる雜善の善

憬興師のいはく—述文賛の文

經—涅槃經

またいはく、佛にしたがひて逍遙して自然に歸す、自然はすなはちこれ彌陀國なり、無漏無生、かへりてすなはち眞なり。行來進止に、つねに佛にしたがふて、無爲法性身を證得すと。またいはく、彌陀の妙果をば、號して無上涅槃といふ。已上抄出。

憬興師のいはく、無量光佛、算數にあらざるがゆへに、無邊光佛、緣としててらさざることなきがゆへに、無礙光佛、人法として、よくさふることあることなきがゆへに、無對光佛、諸菩薩のおよぶところにあらざるがゆへに、光炎王佛、光明自在にして、さらにうへにすることなきがゆへに、淸淨光佛、無貪の善根よりして現ずるがゆへに、また衆生の貪濁の心をのぞく貪濁の心なきがゆへに淸淨といふ、歡喜光佛、無瞋の善根よりして生ずるがゆへに、よく衆生の瞋恚盛心をのぞくがゆへに、智慧光佛、無癡の善根心よりおこる、また衆生の無明品心をのぞくがゆへに、不斷光佛、佛の常光、つねに照益をなすがゆへに、難思光佛、もろもろの二乘、測度する、ところにあらざるがゆへに、無稱光佛、また餘乘等、とくことたふるところにあらざるがゆへに、超日月光佛、日はつねにてらすことあまねからざるべし、娑婆一耀のひかりなるがゆへに、みなこれ光觸をかうふる身は、身心柔軟の願のいだすところなり。已上要をとる。しかれば如來の眞說、宗師の釋義、あきらかにしんぬ、安養淨刹は、眞の報土なることをあらはす。惑染の衆生、こゝにして、性をみることあたはず、煩惱におほはるゝがゆへに、經にわれ十住の菩薩、少分、佛性をみるとゝくとのたまへり。かるがゆへにしんぬ、安樂佛國にいたれば、すなはちかならず佛性をあらはす、本願力の廻向によるがゆへに。また經には、衆生、未來に淸淨の身を具足し、莊嚴して佛性をみ

曠劫―曠は遠也、多くの劫を重ねたる遠き久しき時間

て、ひとしくいらしむることをいたす。またいはく、我今樂生彌陀より已下は、まさしく夫人、別して所求をえらぶことをあかす。これ彌陀の本國は四十八願なり、願々みな增上の勝因を發す、因によりて勝行をおこす、行によりて勝果を感ず、果によりて勝報を感成す、報によりて極樂を感成す、樂によりて悲化を顯通す、悲化によりて智慧の門を顯開す。しかるに悲心無盡なり、智また無窮なり、悲智雙行して、すなはちひろく甘露をひらく、これによりて法潤、あまねく群生を攝す。諸餘の經典、勸處ひろくおほし、衆聖、心をひとしくして、みなおなじく指讃す。この因緣ありて、如來ひそかに夫人をして別して、えらばしむることをあかす。またいはく、西方寂靜無爲のみやこは、畢竟逍遙して有無をはなれたり。大悲心に薫じて、法界にあそぶ、分身利物、ひとしくして殊なし。いざいなん、魔鄕にはとゞまるべからず。曠劫よりこのかた流轉して、六道こと〴〵くみなへたり、いたるところに餘の樂なし、たゞ愁嘆のこゑをきく。この生平をえてのち、かの涅槃のみやこにいらんと。またいはく、極樂は無爲涅槃界なり。隨緣の雜善、おそらくは生じがたし。かるがゆへに如來要法をえらびて、おしへて彌陀を念ぜしむること、もはらにして、またもはらならしむ。

五乘—人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩

あらざると。佛のたまはく、誑相なき涅槃、この法、變化にあらずと。世尊、佛みづからときたまふがごとき、諸法平等にして、聲聞の作にあらず、辟支佛の作にあらず、諸菩薩摩訶薩の作にあらず、諸佛の作にあらず、有佛無佛、諸法の性つねに空なり、性空なる、すなはちこれ涅槃なり。いかなるが涅槃の一法、化のごとくにあらざると。佛、須菩提につげたまはく、かくのごとし、かくのごとし。諸法は平等にして、聲聞の所作にあらず、乃至性空なれば、すなはちこれ涅槃なり。もし新發意の菩薩、この一切の法、みな畢竟して性空なり、乃至涅槃もまたみな化のごとしときかば、心すなはち驚怖しなん。この新發意の菩薩のために、ことさらに生滅のものは、化のごとし。不生不滅のものは、化のごとくにあらずと分別するをや。いますでにこの聖教をもて、あきらかにしんぬ、彌陀はさだめてこれ報なり。たとひのちに涅槃にいらん、その義さまたげなし。もろもろの有智のひと、しるべし。

問ていはく、かの佛および土、すでに報といはゞ、報法高妙にして、小聖かなひがたし、垢障の凡夫、いかんがいることをえんや。こたへていはく、もし衆生の垢障を論ぜば、實に忻趣しがたし、まさしく佛願に託して、もて强緣となるによりて、五乘をし

く、色すなはちこれ化なり、受想行識すなはちこれ化なり、乃至一切種智すなはちこれ化なり。須菩提、佛にまふしてまふさく、世尊、もし世間の法これ化なりや、出世間の法、またこれ化なりや。いはゆる四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、佛十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、ならびに諸法の果、および賢聖人、いはゆる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛、世尊、この法またこれ化なりやいなや。佛、須菩提につげたまはく、一切の法はみなこれ化なり、この法のなかにおいて、聲聞法の變化あり、辟支佛法の變化あり、菩薩法の變化あり、諸佛法の變化あり、煩惱法の變化あり、業因縁法の變化あり、この因縁をもてのゆへに、須菩提、一切の法、みなこれ、化なりとのたまへり。須菩提、佛にまふして、まふさく、世尊、このもろ〳〵の煩惱斷は、いはゆる、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道は、もろ〳〵の煩惱の習を斷ず、みなこれ變化なりやいなや。佛、須菩提につげたまはく、もし法の生滅の相あるは、みなこれ變化なりとのたまへり。須菩提まふさく、世尊なんらの法か變化にあらざると。佛のたまはく、もし法の無生、無滅なる、これ變化にあらずと。須菩提まふさく、なんらかこれ不生不滅にして、變化に

三大僧祇—菩薩が佛果を得るに經給ふ修行の年時

八相—佛陀及び菩薩がこの世界に出現し衆生に隨順して一生の間示し給ふ八種の相状を云ふ

三乘—聲聞、縁覺、菩薩

じて報となる。おほよそ報といふは、因行むなしからず、さだめて來果をまねく、果をもて因に應ず、かるがゆへになづけて報とす。また三大僧祇の所修の萬行、必定して菩提をうべし、いますでに道成せり、すなはちこれ應身なり。これすなはち過現の諸佛、三身を辨立す、これをのぞきて已外は、さらに別の體ましまさず。たとひ無窮の八相、名號塵沙なりとも、體に剋して論ぜば、すべて化に歸して攝す。いまかの彌陀、現にこれ報なり。

問ていはく、すでに報といふは、報身常住にして、ながく生滅なし、なんがゆへぞ、觀音授記經にとかく、阿彌陀佛、また入涅槃の時ありと、この一義いかんが通釋せんや。

こたへていはく、入不入の義は、たゞこれ諸佛の境界なり。なを三乘淺智のうかゞふところにあらず、あにいはんや、小凡たやすくよくしらんや。しかりといへども、かならずしらんとおもはゞ、あへて佛經をひきて、もて明證とせん。いかんとならば、大品經の涅槃、非化品のなかにときていふがごとし。佛、須菩提につげたまはく、なんぢがこゝろにおいていかん、もし化人ありて化人をなす、この化すこぶる實事ありやいなや。むなしきものなりやいなや。須菩提まふさく、いななり、世尊、佛、須菩提につげたまは

智)、權智(現象の俗諦を視る智)、或は盡智(一切を知り盡したる智)、無生智(この上更に知るべき智なき智)、

光明寺和尚―善導大師のこと

淨土に歸するは、すなはちこれ諸佛のくにに歸命するなり。われ一心をもて、一佛を讃ず、ねがはくば十方無礙人に偏せん。かくのごとき十方無量佛、こと〴〵く、おのおの心をいたして頭面に禮したてまつるなりと。已上抄出。

光明寺の和尚ののたまはく、問ていはく、彌陀淨國は、はたこれ報なりや、これ化なりとやせん。こたへていはく、これ報にして化にあらず。いかんがしることをうる。大乘同性經にとくがごとし、西方の安樂阿彌陀佛は、これ報佛報土なりと。また無量壽經にのたまはく、法藏比丘世饒王佛のみもとにまし〳〵て、菩薩の道を行したまひしとき、四十八願をおこして、一々の願に、もしわれ、佛をえたらんに、十方の衆生、わが名號を稱して、わがくにに生ぜんと願ぜん。もし十念にいたるまで、もし生ぜずば、正覺をとらじと。いますでに成佛したまへり、すなはちこれ酬因の身なり。また觀經のなかに、上輩三人、臨命終時に、みな阿彌陀佛および化佛、ともにこのひとを來迎すと。しかるに報身、化をかねて、ともにきたりて、手をさづく、かるがゆへになづけて與とす。この文證をもてのゆへに、しんぬ、これ報なりと。

しかるに報應二身は、眼目の異名なり、さきには報を翻じて應となる、のちには應を翻

六道―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

二智―實智（眞如實相を觀る

佛したまふ、ひかり赫然として、諸佛の嘆じたまふところなり、かるがゆへに頂禮したてまつる。光明照曜して、日月にすぎたり、かるがゆへに佛を超日月光と號す。釋迦佛、嘆じたまふこと、なをつきず、かるがゆへに、われ無等等を稽首したてまつる。乃至。

本師龍樹摩訶薩、形像を誕ず、はじめて頽綱をことはる、邪扇を關閉し、正轍をひらく、これ閻浮提の一切のまなこなり。尊語を伏承し、歡喜地にして、阿彌陀に歸して、安樂に生ぜしむ。われ無始より三界にめぐりて、虛妄輪のために迴轉せらる、一念一時につくるところの業足、六道につながれ、三塗にとゞまる。やゝねがはくば慈光護念して、われをして菩提心を失せざらしめたまへ。われ佛慧功德のこゑを讃ず、ねがはくば十方のもろ〳〵の有緣にきかしめて、安樂に往生することをえしめんとおもはんもの、あまねくみなこゝろのごとくして、障礙なからしめん。あらゆる功德、もしは大小、一切に迴施して、ともに往生せしめん。不可思議光に南無し、一心に歸命し稽首し、禮したてまつる。十方三世の無量慧、おなじく一如に乘じて、正覺と號す。二智圓滿し道平等なり、攝化すること緣にしたがふ、まことにそこばくならん。われ阿彌陀の

難思議―如來のこと、その智德深廣にして吾等の思議すべからざる所なるが故にかく名く
畢竟依―如來のこと、如來は究竟の悟を得給ふ故に、吾等が依賴すべきは畢竟ずるに唯だ如來のみなればなり

淨光明、對あることなし、かるがゆへに佛をまた無對光と號す。このひかりにまうあふものは、業繫のぞこる、このゆへに畢竟依を稽首したてまつる。佛光照耀して最第一なり、佛をまた光炎王と號す。三塗の黑闇、光啓をかうふる、このゆへに大應供を頂禮したてまつる。道光明朗にして、色超絕したまへり、かるがゆへに佛をまた淸淨光と號す。ひとたび光照をかうふるに、罪垢のぞこり、みな解脫をえしむ、かるがゆへに頂禮したてまつる。慈光はるかにかふらしめ、安樂を施す、かるがゆへに佛をまた歡喜光と號す。ひかりのいたるところのところに、法喜をえしむ、大安慰を稽首頂禮したてまつる。佛光よく無明の闇を破す、かるがゆへに佛をまた智慧光と號す。一切諸佛三乘衆、こと〴〵くともに嘆譽す、かるがゆへに稽首したてまつる。光明一切のとき、あまねくてらす、かるがゆへに佛をまた不斷光と號す。聞光力のゆへに、心不斷にてみな往生をえしむ、かるがゆへに頂禮したてまつる。そのひかり、佛をのぞきては、よくはかることなけん、かるがゆへに佛をまた難思光と號す。十方諸佛、往生を嘆し、その功德を稱ぜしむ、かるがゆへに稽首したてまつる。神光は相をはなれたること、なづくべからず、かるがゆへに佛をまた無稱光と號す。ひかりによりて成

稽首—首を地につけて禮拜すること

本願力をみそなはすに、まうあふて、むなしくすぐるものなし、よく功德大寶海を滿足せしむるがゆへに、とのたまへり。不虛作住持功德成就といふは、けだしこれ、阿彌陀如來の本願力なり。乃至。いふところの不虛作住持は、もと法藏菩薩の四十八願と、今日の阿彌陀如來の自在神力とによりてなり。願もて力を成ず、力もて願につく、願徒然ならず、力虛設ならず、力願あひかなふて、畢竟してたがはず、かるがゆへに成就といふ。抄出。

讚阿彌陀佛偈にいはく、曇鸞和尚の造、南無阿彌陀佛、釋して無量壽傍經となづく、ほめたてまつりてまた安養といふ。成佛よりこのかた、十劫をへたまへり、壽命まさにはかりあることなけん、法身の光輪、法界に徧して、世の盲冥をてらす。かるがゆへに頂禮したてまつる。智慧の光明、はかるべからず、かるがゆへに佛をまた無量光と號す。有量の諸相、光曉をかうふる、このゆへに眞實明を稽首したてまつる。解脫の光輪限齊なし、かるがゆへに佛をまた無邊光と號す。光觸をかうふるもの、有無をはなる、このゆへに平等覺を稽首したてまつる。ひかりくものごとくにして、無礙なること、虛空のごとし、かるがゆへに佛をまた無礙光と號す。一切の有礙、光澤をかうふる、このゆへに難思議を頂禮したてまつる。清

犀牛、これにふるれば、死するもの、みなよみがへるがごとし、かくのがとく生ずべからずして生ぜしむ、このゆへに奇とす。しかれば五不思議のなかに、佛法もとも不可思議なり。佛よく聲聞をして、また無上道心を生ぜしめたまふ、まことに不可思議のいたりなり。またいはく、不可思議力といふは、すべてかの佛國土の十七種莊嚴功德力、不可得思議なることをさす。諸經にときてのたまはく、五種の不可思議あり。一には衆生多少不可思議、二には業力不可思議、三には龍力不可思議、四には禪定力不可思議、五には佛法力不可思議なり。このなかに佛土不可思議に二種のちからあり。一には業力、いはく、法藏菩薩の出世の善根と、大願業力の所成なり。二には正覺の阿彌陀法王の、よく住持力をして攝したまふところなり。またいはく、自利々他を示現すといふは、略してかの阿彌陀佛の國土の十七種の、莊嚴功德成就をときつ、如來の自身利益大功德力成就と、利益他功德成就とを示現したまへるがゆへにとのたまへり。略といふは、かの淨土の功德無量にして、たゞ十七種のみにあらざることをあらはす。それ須彌を芥子にいれ、毛孔に大海をおさむ、あに山海の神ならんや、毛芥のちからならんや、能神の人の神ならくのみと。またいはく、なにものか莊嚴不虛作住持功德成就、偈に佛の

し、不淨の心なし。畢竟して、みな淸淨平等、無爲法身をえしむ。安樂國土、淸淨の性、成就したまへるをもてのゆへなり。正道の大慈悲は、出世の善根より生ずといふは、平等の大道なり。平等の道をなづけて正道とするゆへは、平等はこれ諸法の體相なり。諸法平等なるをもてのゆへに、發心ひとし。發心ひとしきがゆへに、道ひとし、道ひとしきがゆへに、大慈悲ひとし、大慈悲はこれ佛道の正因なるがゆへに、正道大慈悲といへり。慈悲に三緣あり、一には衆生緣、これ小悲なり、二には法緣、これ中悲なり、三には無緣、これ大悲なり、大悲はすなはちこれ出世の善なり。安樂淨土は、この大悲より生ぜるがゆへなればなり。かるがゆへに、この大悲をいひて、淨土の根とす、かるがゆへに、出世善根生といふなり。またいはく、問ていはく、法藏菩薩の本願力、および龍樹菩薩の所讃をたづぬるに、みなかのくにに聲聞は、衆多なるをもて、奇とするににたり、これなんの義かある。こたへていはく、聲聞は實際をもて證とす、はかるにさらによく佛道の根芽を生ずべからず。しかるを佛、本願の不可思議の神力をもて、攝してかしこに生ぜしむるに、かならずまさにまた神力をもて、それをして無上道心を生ぜしむべし。たとへば鴆鳥、水にいれば、魚蜂、ことごとく死す、

三界―欲界、色界、無色界これなり、衆生の輪廻する世界

註論―淨土論註のこと、曇鸞大師の作にて天親の淨土論を註釋せし者

波羅密―生死の此岸を去りて涅槃の彼岸に到るの義

これいかんが不思議なるや、凡夫人煩惱成就せるありて、またかの淨土に生ずることをうるに、三界の繫業、畢竟してひかず、すなはちこれ煩惱を斷ぜずして、涅槃分をう、いづくんぞ思議すべきや。またいはく、正道の大慈悲は、出世の善根より生ず。この二句は莊嚴性功德成就となづく。乃至。性はこれ本の義なり。いふこゝろは、これ淨土は、法性に隨順して、法本事をそむかず。華嚴經の寶王如來の性起の義におなじ。またいふこゝろは、積習して性をなす、法藏菩薩をさす、もろ〳〵の波羅密をあつめて、積習して成ぜるところなり。また性といふは、これ聖種性なり。はじめ法藏菩薩、世自在王佛のみもとにして、無生忍をさとる。そのときのくらゐを聖種性となづく。この性のなかにして、四十八の大願をおこして、この土を修起したまへり、すなはち安樂淨土といふ、これかの因の所得なり、果のなかに因をとく、かるがゆへに、なづけて性とす。また性といふは、これ必然の義なり。不改の義なり、海の性一味にして、衆流いるもの、かならず一味となりて、海のあぢはひ、かれにしたがひてあらたまらざるがごとしと。また人身の性、不淨なるがゆへに、種々の妙好、色香、美味、身にいりぬれば、みな不淨となるがごとし。安樂淨土は、もろ〳〵の往生のひと、不淨のいろな

淨土論—題して無量壽經優婆提舍願生偈と云ふ、天親菩薩の作也

來所有の身業をみたてまつらんは、まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを眼見となづく。もし如來所有の口業を觀ぜん、まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく。もし色貌をみること、一切衆生のともにひとしきものなけん、まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを眼見となづく。もし音聲微妙最勝なるをきかん、衆生所有の音聲にはおなじからじ。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく。もし如來所有の神通をみたてまつらんに、衆生のためとやせん、利養のためとやせん。もし衆生のためにして、利養のためにせず。まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを眼見となづく。もし如來を觀ずるに、他心智をもて、衆生をみそなはすとき、利養のためにとき、衆生のためにとかん、もし衆生のためにして、利養のためにせざらん、まさにしるべし、これすなはち如來とす、これを聞見となづく。略出。

淨土論にいはく、世尊、われ一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願ず。かの世界の相をみそなはすに、三界の道に勝過せり、究竟して虛空のごとし、廣大にして邊際なしとのたまへり。已上。

註論にいはく、荘嚴淸淨功德成就は、偈に觀彼世界相、勝過三界道故とのたまへり。

と、わが説かくのごとし。なんぢが説またしかなり、これを隨自他意説となづく。善男子、如來あるときは、一法のためのゆへに無量の法をとくと。抄出。またいはく、一切覺者をなづけて佛性とす。十住の菩薩はなづけて、一切覺とすることをえざるがゆへに、このゆへにみるといへども明了ならず。善男子、見に二種あり、ひとつには眼見、ふたつには聞見なり。諸佛世尊は、まなこに佛性をみそなはす。たなごころのうちにおいて、阿摩勒菓をみるがごとし。十住の菩薩、佛性を聞見すれども、ことさらに了々ならず、十住の菩薩たゞよくみづから、さだめて阿耨多羅三藐三菩提をうることをしりて、一切衆生こと〴〵く佛性ありとしることあたはず。善男子、また眼見あり、諸佛如來なり。十住の菩薩は、佛性を眼見し、また聞見することあり、一切衆生乃至九地までに佛性を聞見す。菩薩もし、一切衆生こと〴〵く佛性ありときけども、心に信を生ぜざれば、聞見となづけずと。乃至。師子吼菩薩摩訶薩まふさく、世尊、一切衆生は、如來の心相をしることをうることあたはず、まさにいかんが觀じてしることをうべきや。善男子、一切衆生は、實に如來の心相をしることあたはず。もし觀察して、しることをえんとおもはゞ、ふたつの因縁あり、ひとつには眼見、ふたつには聞見なり。もし如

隨自意―他人の意思を考慮せず、自己の思ひ通りを打ち出すこと
隨他意―他意と應同すること

さとらざれば、となへていはく、如來さだめて、佛身はこれ、有爲の法なりとゝかんと。法身はすなはちこれ常樂我淨なり。ながく一切生老、病死、非白、非黑、非長、非短、非此、非彼、非學、非無學をはなれたまへれば、もしは佛の出世および不出世に、つねに動ぜずして、變易あることなけん。善男子、わがもろ〱の弟子、この說をききおはりて、わがこゝろをさとらざれば、となへていはく、如來さだめて、佛身はこれ無爲の法なりとゝきたまへり。またいはく、わが所說の十二部經のごとし、あるひは隨自意說、あるひは隨他意說、あるひは隨自他意說なり。乃至。善男子、わが所說のごとき、十住の菩薩すこしき佛性をみる、これを隨他意說となづく。なにをもてのゆへに、少見となづくるやと、十住の菩薩は、首楞嚴等の三昧、三千の法門をえたり、このゆへに聲聞みづからしりて、まさに阿耨多羅三藐三菩提をうべくとも、一切衆生さだめて阿耨多羅三藐三菩提をえんことをみず、このゆへにわれ、十住の菩薩、少分佛性をみるとゝく。善男子、われつねに、一切衆生悉有佛性と宣說する、これを隨自意說となづく。一切衆生、不斷不滅にして、乃至阿耨多羅三藐三菩提をうる、これを隨他意說とゝく。一切衆生は、こと〱く佛性あれども、煩惱おほへるがゆへに、みることをうることあたはず

四念處—身は不淨、受は苦、心は無常、法は無我と觀ずる法
四食—不淨食(凡夫)、淸淨食(阿羅漢)、淨不淨食(上界)、能顯依止住食(佛)
四識住處—吾人の識は色、住、想、行の中に住著する故に名く
三修—常修(法身常住と觀ず)、樂修(涅槃の樂を觀ず)、我修(奇我の自由を觀ず)
世諦—俗諦
第一義諦—眞諦

に無量の名をとくことあり、いはゆる陰のごとし。またなづけて陰とす、また顚倒となづく、またなづけて諦とす、またなづけて四念處とす、また四食となづく、また四識住處となづく、またなづけて有とす、またなづけて道とす、またなづけて時とす、またなづけて衆生とす、またなづけて世とす、また第一義となづく、また三修となづく、いはく身戒心なり、また因果となづく、また煩惱となづく、また解脫となづく、また十二因緣となづく、また聲聞辟支佛となづく。佛をまた地獄、餓鬼、畜生、人天となづく、また過去、現在、未來となづく、これを一義に無量の名をとくとなづく。善男子、如來世尊、衆生のためのゆへに、廣のなかに略をとく、略のなかに廣をとく　第一義諦をときて世諦とす、世諦の法をときて第一義諦とすと。略出。またのたまはく、迦葉またまふさく、世尊、第一義諦をまたなづけて道とす、また菩提となづく、また涅槃となづく。乃至。またのたまはく、善男子、われもて經のなかに、如來の身をとくに、おほよそ二種あり。ひとつには生身、ふたつには法身なり。生身といふは、すなはちこれ方便應化の身なり、かくのごときの身は、これ生老、病死、長短、黑白、是此、是彼、是學、無學といふことをうべし。わがもろ〳〵の弟子、この說をききおはりて、わがこゝろを

靜となづく、また無相となづく、また無二となづく、また一行となづく、また淸涼となづく、また無闇となづく、また無礙となづく、また無諍となづく、また無濁となづく、また廣大となづく、また甘露となづく、また吉祥となづく。これを一名に無量の名をつくるとなづく。いかんが一義に無量の名をとくや。なをし帝釋のごとし。乃至。いかんが無量の義において、無量の名をとくやと。佛如來のみなのごとし、如來の義異名異とす。また阿羅呵となづく、義異名異なり。また三藐三佛陀となづく、義異名異なり。また船師となづく、また導師となづく、また正覺となづく、また明行足となづく、また大師子王となづく、また沙門となづく、また婆羅門となづく、また寂靜となづく、また施主となづく、また到彼岸となづく、また大醫王となづく、また大象王となづく、また大龍王となづく、また施眼となづく、また大力士となづく、また大無畏となづく、また寶聚となづく、また商主となづく、また得解脫となづく、また大丈夫となづく、また天人師となづく、また大分陀利となづく、また獨無等侶となづく、また大福田となづく、また大智海となづく、また無相となづく、また具足八智となづく。かくのごとき一切義異名異なり。善男子、これを無量義のなかに、無量の名をとくとなづく。また一義

犯四重禁―殺生、偸盜、邪婬、妄語を犯せしこと
作五逆罪―殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血

善星が出家をゆるす。善男子、もしわれ、善星比丘が出家をゆるし、戒をうけしめずば、すなはちわれを稱して、如來具足十力とすることをえざらんと。乃至。善男子、如來よく衆生のかくのごときの上中下根をしろしめす、このゆへに佛は具知根力と稱す。迦葉菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊、如來はこの知根力を具足したまへり。このゆへによく、一切衆生上中下根利鈍の差別をしろしめして、ひとにしたがひ、こゝろにしたがひ、ときにしたがふがゆへに、如來知諸根力となづけたてまつる。乃至。あるひはときて犯四重禁、作五逆罪、一闡提等、みな佛性ありといふことありと。乃至。如來世尊、國土のためのゆへに、時節のためのゆへに、他語のためのゆへに、ひとのためのゆへに、衆根のためのゆへに、一法のなかにおいて二種の説をなす。一名の法において無量の名をとく、一義のなかにおいて無量の名をとく、無量の義において無量の名をとく。いかんが一名に無量の名をとくや。なをし涅槃のごとし。また涅槃となづく、また無生となづく、また無出となづく、また無作となづく、また無爲となづく、また歸依となづく、また窟宅となづく、また解脱となづく、また光明となづく、また燈明となづく、また彼岸となづく、また無畏となづく、また無退となづく、また安處となづく、また寂

善星—佛陀の弟子なりしが、その敎を信ぜず、邪見心を起して終に身を亡ぼしたる人

初禪乃至四禪—色界の四天のこと

斷じて、斷じおはりてまた生ぜざらん。また一闡提のともがら、地獄に墮して壽命一劫なりととくべからずと。善男子、このゆへに如來、一切の法は定相あることなしととときたまへり。

迦葉菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊、如來は知諸根力を具足して、さだめて善星まさに善根を斷ずべしとしろしめさん、なんの因緣をもて、その出家をゆるしたまふと。佛のまたはく、善男子、われ往昔のそのかみにおいて、出家のとき、わが弟難陀、從弟阿難、提婆達多、子羅睺羅、かくのごときらのともがら、みなこと〳〵くわれにしたがひて出家修道す。われもし善星が出家をゆるさずば、そのひとつぎにまさに王位をつぐことをうべし、そのちから自在にして、まさに佛法を壞すべし、この因緣をもて、われすなはちその出家修道をゆるす。善男子、善星比丘もし出家せずば、また善根を斷ぜん、無量世において、すべて利益なけん。いま出家しおはりて、善根を斷ずといへども、よく戒を受持して、耆舊長宿有德のひとを供養恭敬せん、初禪乃至四禪を修習せん、これを善因となづく、かくのごときの善因、よく善法を生ず、善法すでに生ぜば、よく道を修習せん、すでに道を修習せば、まさに阿耨多羅三藐三菩提をうべし、このゆへにわれ、

業—煩惱が身、口、意の上に行爲として發動すること
訶梨勒—印度に產する藥樹の名

の經のなかにおいてときたまふ、衆生の佛性は非内非外にして、なを虛空のごとしと。非内非外にして、それ虛空のごとくして有なり、内外は虛空なれども、なづけて一とし常とせず、また一切處有といふことをえず。虛空はまた内にあらず外にあらずといへども、しかももろ〳〵の衆生、こと〴〵くみなこれにあり。衆生の佛性も、また〳〵かくのごとし。なんぢがいふところの一闡提のともがらのごとし。もし身業、口業、意業、取業、求業、後業、解業、かくのごときらの業あれども、こと〴〵くこれ邪業なり。なにをもてのゆへに、因果をもとめざるがゆへに。善男子、訶梨勒の果、根、莖、枝、葉、華、實、こと〴〵くにがきがごとし、一闡提の業も、また〳〵かくのごとし。已上。

またのたまはく、善男子、如來は知諸根力を具足したまへり、このゆへによく衆生の上中下根をさとり、分別してよくこのひとをしろしめして、下を轉じて中となす。よくこのひとをしろしめして、中を轉じて上となす、よくこのひとをしろしめして、上を轉じて中となす、よくこのひとをしろしめして、中を轉じて下とす。このゆへにまさにしるべし、衆生の根性に決定あることなし。定なきをもてのゆへに、あるひは善根を斷ず、斷じおはりて、かへりて生ず。もしもろ〳〵の衆生の根性、定ならば、つひにさきに

一闡提—本來得脱の因を缺き到底成佛する能はざるもの、無性有情のこと

これを菩薩となづく。已上。またのたまはく、迦葉菩薩いはく、世尊、佛性は常なり、なを虚空のごとし、なんがゆへぞ、如來、ときて未來とのたまふやと。如來もし一闡提のともがら、善法なしとのたまはゞ、一闡提のともがら、それ同學、同師、父母、親族、妻子において、あにまさに愛念の心を生ぜざるべきや、もしそれ生ぜばこれ善にあらずやと。佛のたまはく、善哉、善哉、善男子、こゝろよくこの問を發せり、佛性はなを虚空のごとし、過去にあらず未來にあらず現在にあらず、一切衆生に三種の身あり、いはゆる過去、未來、現在なり。衆生未來に莊嚴清淨の身を具足して佛性をみることをえん、このゆへにわれ佛性未來といへりと。善男子、あるひは衆生のために、あるときは因をときて果とす、あるときは果をときて因とす。このゆへに經のなかに、命をときて食とす、色をみるを觸となづく、未來の身淨なるがゆへに佛性ととく。世尊佛の所說の義のごとし、かくのごときのもの、なんがゆへぞときて、一切衆生悉有佛性とのたまへると。善男子、衆生の佛性は、現在に無なりといへども、無といふべからず。虚空のごとし、性は無なりといへども、現在に無といふことをえず。一切衆生また無常なりといへども、しかもこれ佛性は常住にして變なし。このゆへにわれ、こ

有漏—漏は漏泄の義、煩惱のこと
無漏—煩惱を增上せしめざる者
阿僧祇—無數の意

母といふ、實に父母にあらずして、父母といふがごとし、涅槃もまたしかなり。世俗にしたがふがゆへに、ときて諸佛有にして、大涅槃なりとのたまへり。ふたつには業淸淨のゆへに。一切凡夫の業は、不淸淨のゆへに涅槃なし。諸佛如來は、業淸淨のゆへに、かるがゆへに大淨となづく、大淨をもてゆへに、大涅槃となづく。みつには身淸淨のゆへに。身もし無常なるを、すなはち不淨となづく。如來の身は常なるがゆへに、大淨となづく、大淨をもてのゆへに、大涅槃となづく。よつには心淸淨のゆへに。心もし有漏なるを、なづけて不淨といふ。佛心は無漏なるがゆへに、大淨となづく。大淨をもてのゆへに、大涅槃となづく。善男子、これを善男子善女人となづくと。抄出。

またのたまはく、善男子、諸佛如來は煩惱おこらず、これを涅槃となづく。所有の智慧法において無礙なり、これを如來とす。如來はこれ、凡夫、聲聞、緣覺、菩薩にあらず、これを佛性となづく。如來は身心、智慧、無量、無邊、阿僧祇の土に遍滿したまふ、障礙するところなし、これを虛空となづく。如來は常住にして、變易あることなければ、なづけて實相といふ。この義をもてのゆへに、如來は實に畢竟涅槃にあらず、

となづく、大樂をもてのゆへに、大涅槃となづく。ふたつには大寂靜のゆへに、なづけて大樂とす。涅槃の性これ大寂靜なり、なにをもてのゆへに、一切憒閙の法を遠離せるゆへに、大寂をもてのゆへに、大涅槃となづく。みつには一切智のゆへに、なづけて大樂とす、一切智にあらざるをば大樂となづけず、諸佛如來は一切智のゆへに、なづけて大樂とす、大樂をもてのゆへに大涅槃となづく。よつには身不壞のゆへに、なづけて大樂とす、身もし壞すべきは、すなはち樂となづけず。如來の身は、金剛にして壞なし、煩惱の身。無常の身にあらず、かるがゆへに大樂となづく、大樂をもてのゆへに、大涅槃となづく。已上。

またのたまはく、不可稱量、不可思議なるがゆへに、なづけて大般涅槃とすることをう。純淨をもてのゆへに、大涅槃となづく。いかんが純淨なる、淨に四種あり、なんらをかよつとする。ひとつには二十五有なづけて不淨とす、よくながく斷ずるがゆへに、なづけて淨とすることをう、淨すなはち涅槃なり。かくのごときの涅槃、また有にしてこれ涅槃となづくることをう、實にこれ有にあらず、諸佛如來、世俗にしたがふがゆへに、涅槃、有なりとときたまへり。たとへば世人、父にあらざるを父といひ、母にあらざるを

一切智—内外一切の法相及び言教に通達したる智慧

二十五有—衆生の迷界を二十五種に分ちたるもの四洲、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、五那含天、四禪天、四空處天これなり

變易ー形相の變化すること

り。乃至。衆生の心のごときは、これ色にあらず、長にあらず、短にあらず、麤にあらず、細にあらず、縛にあらず、解にあらず、見にあらずといへども、法としてまたこれ有なりと。抄出。

またのたまはく、善男子、大樂あるがゆへに、大涅槃となづく。涅槃は無樂なり、四樂をもてのゆへに大涅槃となづく。なんらをか、よつとする。ひとつには、諸樂を斷ずるがゆへに、樂を斷ぜざるは、すなはちなづけて苦とす。もし苦あらば大樂となづけず、樂を斷ずるをもてのゆへに、すなはち苦あることなけん。無苦無樂をいまし大樂となづく、涅槃の性は無苦無樂なり、このゆへに涅槃をなづけて大樂とす、この義をもてのゆへに、大涅槃となづく。

またつぎに善男子、樂に二種あり、ひとつには凡夫、ふたつには諸佛なり。凡夫の樂は無常敗壞なり、このゆへに無樂なり。諸佛は常樂なり、變易あることなきがゆへに、大樂となづく。

またつぎに善男子、三種の受あり、ひとつには苦受、ふたつには樂受、みつには不苦不樂受なり。不苦不樂、これまた苦とす、涅槃も不苦不樂におなじといへども、しかも大樂

起、無間自、因緣、譬喩、本事、本生、方廣、未曾有、論議の十二種あるを云ふ

道の性相―道の體性を性と云ひ、相狀を相と云ふ

色像―形體

羅より方等經をいだす、方等經より般若波羅密をいだす、般若波羅密より大涅槃をいだす、なをし醍醐のごとし。醍醐といふは、佛性にたとふ、佛性はすなはちこれ如來なり。善男子、かくのごときの義のゆへに、ときて如來所有の功德、無量無邊不可稱計とのたまへり。抄出。

またのたまはく、善男子、道に二種あり。ひとつには常、ふたつには無常なり。菩薩の相にまた二種あり、ひとつには常、ふたつには無常なり。涅槃もまたしかなり、外道の道をなづけて無常とす。內道の道をばこれをなづけて常とす、聲聞緣覺所有の菩提を、なづけて無常とす、菩薩諸佛の所有の菩提、これをなづけて常とす。外の解脫はなづけて無常とす、內の解脫はこれをなづけて常とすと。善男子、道と菩提および涅槃と、ことごとくなづけて常とす。一切衆生は、つねに無量の煩惱のために、おほはれて慧眼なきがゆへに、みることをうることあたはずして、もろ〳〵の衆生、戒定慧を修するをみんとおもふがために、修行をもてのゆへに、道と菩提および涅槃とをみる、これを菩薩得道菩提涅槃となづく。道の性相、實に不生滅なり、この義をもてのゆへに投持すべからず。乃至。道は色像なしといへどもみつべし、稱量してしんぬべし。しかるに實に用あ

無爲—本來常住して外他の何物よりも造作さるることなき法を云ふ

十二部經—佛陀說法の體裁に長行、重頌、授記、孤

異なるあり。名一義異といふは、佛と、常法と、常比丘僧とは常なり。涅槃虚空みなまたこれ常なり、これを名一義異となづく。名義俱異といふは、佛を爲覺となづく、法を不覺となづく、僧を和合となづく、涅槃を解脱となづく、虚空を非善となづく、また無礙となづく、これを名義俱異とす。善男子、三歸依といふは、また／＼かくのごとしと。略出。またのたまはく、光明は不羸劣になづく、不羸劣といふは、なづけて、如來といふ。また光明は、なづけて智慧とすと。已上。

またのたまはく、善男子、一切有爲はみなこれ無常なり、虚空は無爲なり、このゆへに常とす。佛性は無爲なり、このゆへに常とす。虚空はすなはちこれ佛性、佛性はすなはちこれ如來、如來はすなはちこれ無爲、無爲はすなはちこれ常、常はすなはちこれ法、法はすなはちこれ僧、僧はすなはち無爲、無爲はすなはちこれ常なり。乃至。善男子、たとへは牛より乳をいだす、乳より酪をいだす、酪より生蘇をいだす、生蘇より熟蘇をいだす、熟蘇より醍醐をいだす、醍醐最上なり、もし服することあるものは、衆病みなのぞこる、所有のもろ／＼のくすりは、こと／＼くそのなかにいるがごとし。善男子、佛もまたかくのごとし、佛より十二部經をいだす、十二部經より修多羅をいだす、修多

阿耨多羅三藐三菩提—佛の覺智

有爲の法—衆緣の合或は緣に依つて生滅する法を云ふ

眞解脫—佛陀の涅槃は眞に煩惱の繫縛を解き迷界の業苦を脫する故に名く

三歸依—佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依するを云ふ

涅槃經にのたまはく、また解脫は、なづけて虛無といふ。虛無はすなはちこれ解脫、解脫はすなはちこれ如來なり、如來はすなはちこれ虛無なり、非作の所作なり。乃至。眞解脫は不生不滅なり、このゆへに解脫すなはちこれ如來なり、如來またしかなり。不生、不滅、不老、不死、不破、不壞にして、有爲の法にあらず、この義をもてのゆへに、なづけて如來入大涅槃といふ。乃至。

また解脫は無上上となづく。乃至。無上上はすなはち眞解脫なり。眞解脫はすなはちこれ如來なり。乃至。もし阿耨多羅三藐三菩提を成ずることをえをはりて、無愛無疑なり。無愛無疑は、すなはち眞解脫なり、眞解脫はすなはちこれ如來なり。乃至。如來はすなはちこれ涅槃なり、涅槃はすなはちこれ無盡なり、無盡はすなはちこれ佛性なり、佛性はすなはちこれ決定なり、決定はすなはちこれ阿耨多羅三藐三菩提なりと。

迦葉菩薩、佛にまふしてまふさく、世尊、もし涅槃と佛性と決定と如來と、これ一義名ならば、いかんぞときて三歸依ありとのたまへるや。佛、迦葉につげたまはく、善男子、一切衆生、生死に怖畏するがゆへに、三歸をもとむ、三歸をもてのゆゑに。すなはち佛性と決定と涅槃とをしるなり。善男子、法の名一義異なるあり。法の名義倶

泥梨—地獄のこと

法忍—煩惱を斷じて無漏の眞理を知る智慧を得る以前に起る忍可決定の心

明をみざることなし、みたてまつるもの慈心歡喜せざるものなけん。世間諸有の婬泆、瞋怒、愚癡のもの、阿彌陀佛の光明をみたてまつりて、善をなさゞるはなし。もろ〳〵の泥梨、猗狩、辟茘、考掠、勤苦のところにありて、阿彌陀佛の光明をみたてまつれば、いたりてみな休止して、また治することをえざれども、死してのち憂苦を解脱することをえざるものはなし。阿彌陀佛の光明と、みなとは、八方、上下、無窮、無極、無央數の諸佛國にきかしめたまふ。諸天人民、聞知せざることなし、聞知せんもの度脱せざるはなし。佛のたまはく、ひとりわれのみ、阿彌陀佛の光明を稱譽せず、八方、上下、無央數の佛、辟支佛、菩薩、阿羅漢、稱譽するところ、みなかくのごとし。佛のたまはく、それ人民、善男子、善女人ありて、阿彌陀佛のみなをききて、光明を稱譽して、朝暮につねにその光好を稱譽して至心斷絕せざれば、心の所願にありて、阿彌陀佛國に往生すと。已上。

不空羂索神變神言經にのたまはく、なんぢ當生のところは、これ阿彌陀佛淸淨報土なり、蓮華より化生して、つねに諸佛をみたてまつる、もろ〳〵の法忍を證せん、壽命無量百千劫數ならん、直に阿耨多羅三藐三菩提にいたる。また退轉せず、われつねに祐護すと。已上。

ろもろの八方、上下、無央數の佛の頂中の光明、炎照するところ、みなかくのごとし。阿彌陀佛の頂中の光明の炎照するところ、千萬佛國なり。諸佛の光明のてらすところに、近遠あるゆへは、いかんとなれば、もとそれ前世の宿命に、道をもとめて菩薩たりしに、所願をてらすに、功德おの〳〵おのづから大小あり。それしかうしてのち、作佛するときにいたりて、おの〳〵みづからこれをえたり。このゆへに光明うたゝ同等ならざらしむ、諸佛の威神同等なるならくのみ。自在のこゝろの所欲、作爲してあらかじめはからず。阿彌陀佛の光明のてらすところ最大なり、諸佛の光明、みなおよぶことあたはざるところなり。佛、阿彌陀佛の光明の極善なることを稱譽したまふ。阿彌陀佛の光明は、極善にして善のなかの明好なり、それこゝろよきことならびなし、絕殊無極なり。阿彌陀佛の光明は、淸潔にして瑕穢なく缺減なし。阿彌陀佛の光明は、殊好にして、日月の明よりも、すぐれたること百千億萬倍なり、諸佛の光明のなかの極明なり、光明のなかの極好なり、光明のなかの極雄傑なり、光明のなかの快善なり、諸佛のなかの王なり、光明のなかの極尊なり、光明のなかの最明無極なり。もろ〳〵の無數天下の幽冥のところを炎照するに、みなつねに大明なり。諸有の人民、蜎飛、蠕動の類、阿彌陀佛の光

無量壽如來會―大無量壽經の異譯（唐、菩提流志の譯）

し、おもひをもはらにし、心をひとつにして、その智力をつくして、百千萬劫において、ことぐ〱ともに推算して、その壽命長遠のかずをはからんに、窮盡してその限極をしることあたはじと。抄出。

無量壽如來會にのたまはく、阿難、この義をもてのゆへに、無量壽佛にまた異名まします。いはく、無量光、無礙光、無著光、無礙光、光照王、端嚴光、愛光、喜光、可觀光、不可思議光、無等不可稱量光、映蔽日光、映蔽月光、掩奪日月光なり。かの光明、清淨廣大にして、あまねく衆生をして、身心悅樂せしむ。また一切餘の佛刹中の天、龍、夜叉、阿修羅等、みな歡悅をえしむと。已上。

無量清淨平等覺經にのたまはく、帛延譯、速疾にこえて、すなはち安樂國の世界にいたるべし、無量光明土にいたりて、無數の佛に供養すと。已上。

佛說諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經にのたまはく、支謙譯、佛のたまはく、阿彌陀佛の光明、最尊第一にしてならびなし、諸佛の光明みなおよばざるところなり。八方、上下、無央數の諸佛のなかに、佛の頂中の光明、七丈をてらすあり、佛の頂中の光明、一里をてらすあり、乃至、佛の頂中の光明、二百萬佛國をてらすあり。佛のたまはく、も

三垢―貪、瞋、癡の三毒の煩惱

三塗―火塗(地獄)、血塗(畜生)、刀塗(餓鬼)

智慧光佛、不斷光佛、難思光佛。無稱光佛、超日月光佛と號す。それ衆生ありて、このひかりにまうあふものは、三垢消滅し身意柔輭なり、歡喜踊躍して善心こゝに生ず。もし三塗勤苦のところにありても、この光明をみれば、みな休息をえて、また苦惱なし、壽終之後に、みな解脱をかうふる。無量壽佛は光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土にきこえざることなし。たゞわれのみ、いまその光明を稱するにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺、もろ〱の菩薩衆、こと〲くともに嘆譽すること、またまたかくのごとし。もし衆生ありて、もし光明の威神功德をきゝて、日夜に稱說して、至心不斷なれば、こゝろの所願にしたがひて、そのくにに生ずることをえて、もろ〱の菩薩聲聞大衆のために、ともに嘆譽し、その功德を稱せられん。それしかうしてのち、佛道をうるときにいたりて、あまねく十方諸佛菩薩のために、その光明をほめられんこと、またいまのごとくならん。佛のたまはく、われ無量壽佛の光明威神、巍巍殊妙なるをとくこと、晝夜一劫すとも、なをいまだつくすことあたはじと。佛、阿難にかたりたまはく、無量壽佛は、壽命長久にして、勝計すべからず、なんぢむしろしれりや。たとひ十方世界の無量の衆生、みな人身をえて、こと〲く聲聞緣覺を成就せしめて、すべてともに集會

顯淨土眞佛土文類五

愚禿釋の親鸞の集

光明無量の願。　壽命無量の願。

つしんで、眞佛土を按ずれば、佛はすなはちこれ不可思議光如來なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち大悲の誓願に酬報す、かるがゆへに眞の報佛土といふ。すでにして願います、すなはち光明壽命の願これなり。

大經にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、光明よく限量ありて、しも百千億那由他の諸佛の國を照さゞるにいたらば正覺をとらじと。また願にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、壽命よく限量ありて、しも百千億那由他劫にいたらば、正覺をとらじと。願成就の文にのたまはく、佛、阿難につげたまはく、無量壽佛の威神光明、最尊第一にして、諸佛の光明のおよぶことあたはざるところなり。乃至。このゆへに、無量壽佛をば、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、淸淨光佛、歡喜光佛、

光明無量の願―彌陀の四十八願中第十二願のこと

壽命無量の願―同じく十三願のこと

願―とは十三の因願のこと

願成就―十三の成就願のこと

音菩薩が普ねく衆生の難を救ひまた三十三身を現じて種々の說法をしたまふことをとくが法華經の普門品なり

となり。遊戯にふたつの義あり、一には自在の義、菩薩、衆生を度すること、たとへば師子の鹿をうつに、所爲はゞからざるがごときんば、遊戯するがごとし。二には度無所度の義なり、菩薩、衆生を觀ずるに、畢竟してところなし、無量の衆生を度すといへども、實に一生として、滅度をうるものなし、衆生を度すとしめすこと遊戯するがごとし。本願力といふは、大菩薩、法身のなかにおいて、つねに三昧にまし〳〵て、種々の身、種種の神通、種々の說法を現ずることをしめすこと、みな本願力よりおこるをもてなり。たとへば阿修羅の琴の、鼓するものなしといへども、音曲自然なるがごとし。これを敎化地の第五の功德相となづくとのたまへり。已上抄出。

しかれば大聖の眞言、まことにしんぬ。大涅槃を證することは、願力の廻向によりてなり。還相の利益は、利他の正意をあらはすなり。こゝをもて論主は、廣大無礙の一心を宣布して、あまねく雜善堪忍の群萠を開化す。宗師は、大悲往還の廻向を顯示して、ねんごろに、他利利他の深義を弘宣したまへり。あふいで奉事すべし、ことに頂戴すべしと

し、名義に隨順して、如來のみなを稱ぜしめ、如來の光明智相によりて、修行せるをもてのゆへに、大會衆のかずにいることをえしむ、これを入第二門となづくとのたまへり。如來の名義によりて讚嘆する、これ第二の功德の相なりと。入第三門といふは、一心に專念し作願して、かしこに生じて、奢摩他寂靜三昧の行を修するをもてのゆへに、蓮華藏世界にいることをえしむ、これを入第三門となづく。寂靜止を修せんためのゆへに、一心にかのくにに生ぜんと願ずる、これ第三の功德相なりと。入第四門といふは、かの妙莊嚴を專念し觀察して、毗婆舍那を修するをもてのゆへに、かのところにいたることをえて、種々の法味の樂を受用せしむ、これを入第四門となづくとのたまへり。種種の法味の樂といふは、毗婆舍那のなかに、觀佛國土淸淨味、攝受衆生大乘味、畢竟住持不虛作味、類事起行願取佛土味あり、かくのごときらの無量の莊嚴佛道の味あるがゆへに、種々とのたまへり、これ第四の功德の相なりと。出第五門といふは、大慈悲をもて、一切苦惱の衆生を觀察して、應化身をしめして、生死の薗、煩惱のはやしのなかに廻入して、神通に遊戲し、敎化地にいたる、本願力の廻向をもてのゆへに、これを出第五門となづくとのたまへり。示應化身といふは、法華經の普門示現の類のごとき

蓮華藏世界—極樂淨土のこと

毗婆舍那—譯して觀といふ細密なる分別心をいふ

普門示現—觀世

利行滿足といふは、また五種の門ありて、やうやくに五種の功德を成就したまへりとしるべし。なにものか五門、一には近門、二には大會衆門、三には宅門、四には屋門、五には薗林遊戲地門なりとのたまへり。この五種は入出の次第の相を示現せしむ。入相のなかに、はじめに淨土にいたるは、これ近相なり。いはく大乘正定聚にいるは、阿耨多羅三藐三菩提にちかづくなり。淨土にいりおはるは、すなはち如來の大會衆のかずにいるなり、衆のかずにいりおはりぬれば、まさに修行安心の宅にいたるなるべし、宅にいりをはれば、まさに修行所居の屋寓にいたるなるべし、修行成就しおはりぬれば、まさに教化地にいたるべし、教化地はすなはちこれ菩薩の自娛樂の地なり、このゆへに出門を薗林遊戲地門と稱すと。

この五種の門は、はじめの四種の門は、入の功德を成就したまへり。第五門は出の功德を、成就したまへりとのたまへり。この入出の功德は、なにものか、これや。釋すらく、入第一門といふは、阿彌陀佛を禮拜して、かのくにに生ぜしめんがためにするをもてのゆへに、安樂世界に生ずることをえしむ、これを第一門となづく。佛を禮して佛國に生ぜんと願ずるは、これははじめの功德の相なりと。入第二門といふは、阿彌陀佛を讃嘆

これり。これは遠離我心と、遠離無安衆生心と、遠離自供養心と。この三種の心、淸淨に增進して、略して妙樂勝眞心とす、妙の言はそれ好なり、この樂は佛を緣じて生ずるをもてのゆへに、勝の言は、三界のうちの樂に勝出せり、眞の言は、虛僞ならず、顚倒せざるなり。

願事成就といふは、かくのごときの菩薩は、智慧心、方便心、無障心、勝眞心をして、よく淸淨佛國土に生ぜしめたまへり、しるべしとのたまへり、應智といふは、いはく、この四種の淸淨の功德、よくかの淸淨佛國土に生ずることをえしむ、これ他緣をして生ずるにはあらずとしるべしとなり。これを菩薩摩訶薩、五種の法門に隨順して、所作こゝろにしたがひて、自在に成就したまへりとなづく。さきの所說のごとき身業、口業、意業、智業、方便智業、法門に隨順せるがゆへにとのたまへり。隨意自在といふは、いふこゝろは、この五種の功德力、よく淸淨佛土に生ぜしめて出沒自在なり。身業といふは禮拜なり、口業といふは讚嘆なり、意業といふは作願なり、智業といふは觀察なり、方便智業といふは廻向なり。この五種の業和合せり、すなはちこれ往生淨土の法門に隨順して、自在の業成就したまへりとのたまへり。

五黑—五の重罪即ち五逆のことなり
四顛倒—正理を顛倒したる四種の見解なり、非常を常と、非樂を樂と、非我を我と、非淨を淨とするが如し

このゆへに智慧と慈悲と方便と般若を攝取す。般若は方便を攝取す。しるべしといふは、いはく、智慧と方便はこれ菩薩の父母なり、もし智慧と方便とによらずば、菩薩の法則成就せざることをしるべし。なにをもてのゆへに、もし智慧なくして、衆生のためにするときんは、すなはち顛倒に墮せん、もし方便なくして法性を觀ずるときんは、すなはち實際を證せん、このゆへに、しるべしと。

さきに遠離我心貪著自身、遠離無安衆生心、遠離供養恭敬自身心をときつ。この三種の法は、障菩提心を遠離するなりと、しるべしとのたまへり。諸法におの〱障礙の相あり、風はよく靜をさふ、土はよく水をさふ、濕はよく火をさふ、五黑十惡は人天をさふ、四顛倒は聲聞の果をさふるがごとし。このなかの三種は、菩提をさふる心を遠離せずと。しるべしといふは、もし無障をえんとおもはゞ、まさにこの三種の障礙を遠離すべきなり。

さきに無染淸淨心、安淸淨心、樂淸淨心をときつ。この三種の心は、略して一處にして、妙樂勝眞心を成就したまへり、しるべしとのたまへり。樂に三種あり、一には外樂、いはく五識所生の樂なり。二には內樂、いはく初禪二禪三禪の意識所生の樂なり。三には法樂、いはく智慧所生の樂なり。この智慧所生の樂は、佛の功德を愛するよりお

般若―梵語譯して智慧とす

もし作心して、一切衆生をぬいて生死の苦をはなれしめずば、すなはち菩提に違しなん。このゆへに一切衆生の苦をぬくは、これ菩提門に順ずるなりと。三には樂清淨心、一切衆生をして、大菩提をえしむるをもてのゆへに、衆生を攝取して、かの國土に生ぜしむるをもてのゆへにとのたまへり。菩薩はこれ、畢竟常樂のところなり、もし一切衆生をして、畢竟常樂をえしめずば、すなはち菩提に違しなん、この畢竟常樂は、なにによりてかうる、大乘門によるなり。大乘門といふは、いはく、かの安樂佛國土これなり。このゆへにまた衆生を攝取して、かの國土に生ぜしむるをもてのゆへにとのたまへり。これを三種の隨順菩提門の法、滿足せりとなづく、しるべしと。名義攝對といふは、さきに智慧慈悲方便の三種の門、般若を攝取す、般若方便を攝取すとときつ。しるべしとのたまへり。般若といふは、如に達する慧の名なり。方便といふは、權に通ずる智の稱なり。如に達すれば、すなはち心行寂滅なり、權に通ずれば、すなはちつぶさに衆機にはぶく智なり、つぶさに應じて無知なり、寂滅の慧また無知にして、つぶさにはぶく、しかればすなはち智慧と方便と、あひ緣して動じ、あひ緣して靜なり。動、靜を失せざることは、智慧の功なり。靜、動を廢せざることは、方便のちからなり。

ふ。智によるがゆへに自樂をもとめず、慧によるがゆへに我心自身に貪著するを遠離せり。二には慈悲門によれり、一切衆生の苦をぬいて、無安衆生心を、遠離せるがゆへにとのたまへり。苦をぬくを慈といふ、樂をあたふるを悲といふ、慈によるがゆへに一切衆生の苦をぬく、悲によるがゆへに無安衆生心を遠離せり。三には方便門によれり、一切衆生を憐愍したまふ心なり、自身を供養恭敬する心を遠離せるがゆへにとのたまへり。正直を方といふ、外己を便といふ、正直によるがゆへに。一切衆生を憐愍する心を生ず、外己によるがゆへに、自心を供養し恭敬する心を遠離せり。これを三種の菩提門相違の法を遠離すとなづく。

順菩提門といふは、菩薩はかくのごとく、三種の菩提門相違の法を遠離して、三種の隨順菩提門の法、滿足することをえたまへるがゆへに、なんらか三種、一には無染清淨心、自身のために諸樂をもとめざるをもてのゆへにとのたまへり。菩提はこれ無染清淨のところなり、もし身のために樂をもとめば、すなはち菩提に違しなん、このゆへに無染清淨心は、これ菩提門に順ずるなり。二には安清淨心、一切衆生の、苦をぬくをもてのゆへにと、のたまへり。衆菩はこれ、一切衆生を安穩する清淨のところなり、

切衆生の苦をぬかんとおぼすがゆへにとのたまへり。住持樂といふは、いはく、かの安樂淨土は、阿彌陀如來の本願力のために住持せられて、受樂ひまなきなり。おほよそ廻向の名義を釋せば、いはく、おのれが所集の一切の功德をもて、一切衆生に施與して、ともに佛道にむかへしめたまふなり。巧方便といふは、いはく菩薩、願ずらく、おのれが智慧の火をもて、一切衆生の煩惱の草木をやかんと、もし一衆生として成佛せざることあらば、われ佛にならじと。しかるに衆生、いまだことぐく成佛せざるに、菩薩すでにみづから成佛せんは、たとへば火して、一切の草木をつんで、やきてつくさしめんとおもふに、草木いまだつきざるに、火㮇すでにつきんがごとし。その身をのちにして、身をさきにするをもてのゆへに、方便となづく。このなかに方便といふは、いはく、作願して一切衆生を攝取して、ともにおなじくかの安樂佛國に生ぜしむ。かの佛國は、すなはちこれ畢竟成佛の道路、無上の方便なり。障菩提門といふは、菩薩かくのごとくよく廻向成就したまへるをしれば、すなはちよく三種の菩提門相違の法を遠離す、なんらか三種。一には智慧門によりて自樂をもとめず、我心自身に貪著するを遠離せるがゆへにとのたまへり。知進守退を智といふ、空無我をしるを慧とい

五種の修行―禮拜、讃嘆、作願、觀察、廻向の五なり

三輩生―淨土に往生せんと願ふもの中に於て其の修行の差別により上中下の三輩に分つ

ごとき巧方便廻向を成就したまへりとのたまへりと。かくのごときといふは、前後の廣略みな實相なるがごときなり。實相をしるをもてのゆへに、すなはち三界衆生の虚妄の相をしる。衆生の虚妄をしれば、すなはち眞實の慈悲を生ず。眞實の法身をしれば、すなはち眞實の歸依をおこす。慈悲と歸依と巧方便とは、しもにあり。なにものか菩薩の巧方便廻向なる、菩薩の巧方便廻向といふは、いはく禮拜等の五種の修行をとく、所集の一切の功德善根は、自身住持の樂をもとめず、一切衆生の苦をぬかんとおぼすがゆへに、作願して一切衆生を攝取して、ともにおなじくかの安樂佛國に生ぜしむ、これを菩薩の巧方便廻向成就となづくとのたまへり。王舍城所説の無量壽經を按ずるに、三輩生のなかに、行に優劣ありといへども、みな無上菩提の心を發せざるはなけん。この無上菩提心は、すなはちこれ願作佛心なり。願作佛心はすなはちこれ度衆生心なり。度衆生心はすなはちこれ衆生を攝取して、有佛の國土に生ぜしむる心なり。このゆへにかの安樂淨土に生ぜんと願ずるものは、かならず無上菩提心を發するなり。もしひと無上菩提心を發せずして、たゞかの國土の受樂無間なるをききて、樂のためのゆへに生ぜんと願ずるは、またまさに往生をえざるべし。このゆへに自身住持の樂をもとめず、一

奢摩他毗婆舍那—奢摩他は止と譯す毗婆舍那は現と譯す

問ていはく、衆生清淨といへるは、すなはちこれ佛と菩薩となり。かのもろ〳〵の人天、この清淨のかずにいることをえんやいなや。こたへていはく、清淨となづくることをうるは、實の清淨にあらず。たとへば出家の聖人は、煩惱の賊をころすをもてのゆへに、なづけて比丘とす。凡夫の出家のものを、また比丘となづくるがごとし。また灌頂王子初生のとき、三十二相を具して、すなはち七寶のために屬せらる、いまだ轉輪王の事をなすことあたはずといへども、また轉輪王となづくるがごとし。それかならず轉輪王たるべきをもてのゆへに、かのもろ〳〵の人天も、また〳〵かくのごとし。みな大乘正定の聚にいりて、畢竟してまさに清淨法身をうべし、まさにうべきをもてのゆへに、清淨となづくることをうるなりと。

善巧攝化といふは、かくのごときの菩薩は、奢摩他、毗婆舍那、廣略修行成就して、柔輭心なりとのたまへり。柔輭心といふは、いはく廣略の止觀相順し、修行して、不二の心を成ず、たとへば水をもてかげをとるに、淸と靜とあひたすけて成就するがごとし。實のごとく廣略の諸法をしるとのたまへり。如實知といふは、實相のごとくしてしるなり、廣のなかの二十九句、略のなかの一句、實相にあらざることなし。かくの

別報―總報の上にあらはれたる別々の果報をいふ
共報―果報の總相をいふ

し。かみの轉入句のなかに、一法に通じて清淨にいる。清淨に通じて法身にいる、いままさに清淨をわかちて二種をいだすがゆへなり、かるがゆへに、しるべしといへり。なんらか二種、一には器世間清淨、二には衆生世間清淨なり。器世間清淨といふは、さきにとくがごときの十七種の莊嚴佛土功德成就、これを器世間清淨となづく、衆生世間清淨といふは、さきにとくがごときの八種の莊嚴佛功德成就と、四種の莊嚴菩薩功德成就と、これを衆生世間清淨となづく、かくのごときの一法句に、二種の清淨の義を攝すとしるべしとのたまへり。それ衆生は別報の體とす、國土は共報の用とす。體用ひとつならず、このゆへにしるべし。しかるに諸法は心をして無餘の境界を成ず、衆生および器、また異にして一ならざることをえず、すなはち義をして、わかつに異ならず、おなじく清淨なり。器は用なり、いはくかの淨土は、これかの清淨の衆生の受用するところなるがゆへに、なづけて器とす。淨食に不淨の器をもちふれば、器不淨なるをもてのゆへに、食また不淨なり、不淨の食に淨器をもちふれば、食不淨なるがゆへに、器また不淨なるがごとし。かならずふたつともにいさぎよくして、いまし淨と稱することをえしむ。こゝをもてひとつの清淨の名、かならず二種を攝す。

たはず。
一法句はいはく清淨句なり。清淨句はいはく眞實の智慧、無爲法身なるがゆへにとのたまへり。この三句は展轉して相入す。なんの義によりてか、これをなづけて法とする、清淨をもてのゆへに。なんの義によりてか、なづけて清淨とする、眞實の智慧、無爲法身をもてのゆへなり。眞實の智慧は、實相の智慧なり。實相は、無相なるがゆへに、眞智無智なり。無爲法身は法性身より、法性寂滅なるがゆへに、法身は無相なり、無相のゆへに、よく相ならざることなし。このゆへに相好莊嚴すなはち法身なり。無知のゆへによくしらざることなし、このゆへに一切種智すなはち眞實の智慧なり、眞實をもてして智慧になづくることは、智慧は作にあらず、非作にあらざることをあかす。無爲をもてして法身をたつることは、法身は色にあらず、非色にあらざることをあかす、非にあらざれば、あに非のよく是なるにあらざらんや、けだし非なきをこれを是といふ、おのづから是にして、また是にあらざることをまつことなきなり、是にあらず非にあらず、百非のたとへざるところなり、このゆへに清淨句といへり。
清淨句といふは、いはく眞實の智慧、無爲法身なり、この清淨に二種あり、しるべ

觀行—觀心修行

せんとのたまへるがゆへにと。かみの三句は、あまねくいたるといふといへども、みなこれ有佛の國土なり。もしこの句なくば、すなはちこれ法身、ところとして法ならざることあらん、上善、ところとして善ならざることあらん。觀行の體相はおはりぬ。

已下はこれ解義のなかの第四重なり、なづけて淨入願心とす。淨入願心は、またさきに觀察莊嚴佛土功德成就と、莊嚴佛功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とをときつ。この三種の成就は、願心の莊嚴したまへるなりとしるべしといへり。應知といふは、この三種の莊嚴成就は、もと四十八願等の淸淨願心の莊嚴せるところなるによりて、因淨なるがゆへに果淨なり、因なくして、他の因のあるにはあらずとしるべしとなり。略して入一法句をとくがゆへにとのたまへり。かみの國土の莊嚴十七句と、如來の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを廣とす、入一法句は略とす。なんがゆへぞ廣略相入を示現するとならば、諸佛菩薩に二種の法身まします、一には法性法身、二には方便法身なり。法性法身によりて方便法身を生ず、方便法身によりて法性法身をいだす。この二法身は異にしてわかつべからず、一にして同ずべからず。このゆへに廣略相入して、かぬるに法の名をもてす、菩薩もし廣略相入をしらざれば、すなはち自利々他するにあ

玄籍─籍は聲なり幽玄なる說法のこと
冥權─佛が暗々のうちに方便をめぐらすこと

て、一切衆生の苦を滅除するがゆへに。偈に無垢莊嚴のひかり、一念および一時に、あまねく諸佛の會をてらして、もろ〳〵の群生を利益するゆへにとのたまへり。かみに不動にしていたるといへり、あるひはいたるに前後あるべし、このゆへにまた一念一時無前無後とのたまへり。

三には、かれ一切の世界において、餘なく、もろ〳〵の佛會をてらす、大衆餘なく廣大無量にして、諸佛如來の功德を供養恭敬讃嘆す。偈に天の樂華衣妙香等をふりて、諸佛の功德を供養し、ほむるに分別の心あること、なきがゆへにとのたまへりと。無餘といふは、あまねく一切世界、一切諸佛大會にいたりて、一世界一佛會として、いたらざることあることなきことをあかすなり。肇公のいはく、法身はかたちなくしてかたちをことにす、ならびに至韻に應ず。ことばなくして玄籍いよ〳〵しき、冥權はかりごとなくして、動じて事と會すること、けだしこのこゝろなり。

四には、かれ十方一切の世界に、三寶ましまさぬところにおいて、佛法僧寶功德大海を住持し莊嚴して、あまねくしめして如實修行をさとらしむ。偈になんらの世界にか、佛法功德寶ましまさざらん。われねがはくば、みな往生して佛法をしめして、佛のごとく

修行して、つねに佛事をなす。偈に安樂國は清淨にして、つねに無垢輪を轉ず、化佛菩薩は、日の須彌に住持するがごときのゆへにとのたまへり。もろ〳〵の衆生の淤泥華をひらくがゆへにとのたまへり。八地已上の菩薩は、つねに三昧にありて、三昧力をもて身、本處を動ぜずして、よくあまねく十方にいたりて、諸佛を供養し、衆生を敎化す。無垢輪は佛地の功德なり、佛地の功德は、習氣煩惱の垢ましまさず、佛、もろ〳〵の菩薩のために、つねにこの法輪を轉ず。もろ〳〵の大菩薩、またよくこの法輪をもて、一切を開導して、暫時も休息なけれん、かるがゆへに常轉といふ。法身は日のごとくして、應化身のひかり、もろ〳〵の世界に徧するなり。日といふは、いまだもて不動をあかすにたらざれば、また如須彌住持といふなり。淤泥華といふは、經にのたまはく、高原の陸地には、蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥に、いまし蓮華を生ず。これは凡夫煩惱の泥のなかにありて、菩薩のために開導せられて、よく佛の正覺のはなを生ずるにたとふ。まことにわれ三寶を紹隆して、つねにたえざらしむと。

二には、かの應化身、一切のとき、前ならず後ならず、一心一念に大光明をはなちて、ことごとくよくあまねく十方世界にいたりて、衆生を敎化す、種々に方便し、修行所作し

如實修行—教の如く修行して違はざること

しるべし。このゆへにつぎに佛、口業を莊嚴したまへるを觀ず、すでに名聞をしんぬ、よろしく得名のゆへをしるべし。このゆへにつぎに佛の心業を莊嚴したまへるを觀ず、すでに三業具足したまへるをしんぬ。人天の大師となりて、化をうくるにたえたるひとは、これたれぞとしるべし。このゆへにつぎに大衆の功德を觀ず、すでに大衆無量の功德いますことをしんぬ、よろしく上首はたれぞとしるべし。このゆへにつぎに上首を觀ず、上首はこれ佛なり。すでに上首おそらくは長劫におなじきことをしんぬ、このゆへにつぎに主を觀ず。すでにこの主をしんぬ、主いかなる增上かましますと、このゆへにつぎに莊嚴不虛作住持を觀ず、八句の次第成ぜるなり。

菩薩を觀ぜば、いかんが菩薩の莊嚴功德成就を觀察する。菩薩の莊嚴功德成就を觀察せば、かの菩薩を觀ずるに、四種の正修行功德成就したまへることありとしるべし、眞如はこれ諸法の正體なり、體如にして行ずれば、すなはちこれ不行なり。不行にして行ずるを、如實修行となづく。體はたゞ一如にして、義をしてわかちて四とす、このゆへに四行、一をもてまさしくこれをかぬ。なにものをか四とする。

一には、一佛土において、身、動搖せずして十方に徧す、種々に應化して、實のごとく

の名

無生—涅槃のこと

もし菩薩かならず一地より一地にいたりて、超越の理なしといはゞ、いまだあえてつまびらかならず。たとへば樹ありて、なづけて好堅といふ、この樹、地より生じて百歳ならん。いましつぶさに一日に長高なること百丈なるがごとし、日々にかくのごとし、百歳のたけをはかるに、あに脩松に類せんや、まつの生長するをみるに、日に寸をすぎず。かの好堅をきゝて、なんぞよく卽日をうたがはざらん。ひとありて釋迦如來、羅漢を一聽に證し、無生を終朝に制すとのたまへるをききて、これ接誘のみことにして、稱實の說にあらずとおもへり、この論事をききて、またまさに信せざるべし。それ非常のことばは、常人のみゝにいらず、これをしからずとおもへり、またそれよろしかるべきなり。略して八句をときて、如來の自利、利他の功德莊嚴、次第に成就したまへるを示現したまへりと、しるべし。これはいかんが次第なるとならば、さきの十七句は、これ莊嚴國土の功德成就なり。すでに國土の相をしんぬ、國土の主をしるべし。このゆへにつぎに佛、莊嚴功德を觀ず、かの佛、もし莊嚴をなして、いづれのところにしてか坐すると。このゆへにまづ座を觀ずべし、すでに座をしんぬ。すでによろしく座主をしるべし、このゆへにつぎに佛、身業を莊嚴したまへるを觀ず、すでに身業をしんぬ、いかなる聲名かましますと

に上地の菩薩とひとしといふや。こたへていはく、菩薩七地のなかにして、大寂滅をうれば、かみに諸佛のもとむべきをみず、しもに衆生の度すべきをみず、佛道をすてて實際を證せんと欲す。そのときに、もし十方諸佛の神力加勸することをえずば、すなはち滅度して二乘と異なけん。菩薩もし安樂に往生して、阿彌陀佛をみたてまつるに、すなはちこの難なけん。このゆへにすべからく畢竟平等といふべし。またつぎに、無量壽經のなかの、阿彌陀如來の本願にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、他方佛土の諸菩薩衆、わがくにに來生して、究竟してかならず一生補處にいたらん、その本願自在の所化、衆生のためのゆへに、弘誓のよろひをきて、德本を積累し、一切を度脱し、諸佛のくににあそび、菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の德を修習せん、もししからずば、正覺をとらじと。この經を按じて、かのくにの菩薩を推するに、あるひは一地より一地にいたらざるべし、十地の階次といふは、これ釋迦如來、閻浮提にして、ひとつの應化道ならくのみと。他方の淨土はなんぞかならずしも、かくのごとくならん、五種の不思議のなかに、佛法もとも不可思議なり。

諸地—菩薩の十地の位
普賢の德—普賢菩薩は佛の慈悲を司るより弘く大慈悲心を以て衆生を濟度することを普賢の德といふ
閻浮提—須彌山の南方にある洲

以還—以下といふに同じ

婆藪槃頭菩薩—梵語、譯して世親又は天親とす

以還のもろ〳〵の菩薩なり、この菩薩またよく身を現ずること、もしは百もしは千、もしは萬もしは億、もしは百千萬億、無佛の國土にして、佛事を施作す。かならず心をなして三昧にいりて、いましよく作心せざるにあらず。作心をもてのゆへに、なづけて未證淨心とす。この菩薩、安樂淨土に生じて、すなはち阿彌陀佛をみんと願ず。阿彌陀佛をみるとき、上地の諸菩薩と、畢竟して身ひとしく、法ひとしと。龍樹菩薩、婆藪槃頭菩薩のともがら、かしこに生ぜんと願ずるものは、まさにこのためなるべしならくのみ。

問ていはく、十地經を按ずるに、菩薩の進趣階級、やうやく無量の功勳あり。おほくの劫數をふ、しかうしてのち、いましこれをう、いかんぞ阿彌陀佛をみたてまつるとき、畢竟して上地のもろ〳〵の菩薩と、身ひとしく、法ひとしきや。こたへていはく、畢竟はいまだ、すなはちひとしといふにはあらず、畢竟して、このひとしきことを失せざるがゆへに、等といふならくのみと。

問ていはく、もしすなはちひとしからずば、またなんぞ菩薩といふことをえん、たゞ初地にのぼれば、もてやうやく増進して、自然にまさに佛とひとしかるべし、なんぞかり

奢摩他—梵語止と譯す寂靜をいふ
毗婆舍那—梵語觀と譯す明細に分別するをいふ
報生三昧—果報得の定なり三昧は梵語、譯して定といふ

論の註にいはく、還相はかの土に生じおはりて、奢摩他、毗婆舍那、方便力成就することをえて、生死の稠林に廻入して一切衆生を教化して、ともに佛道に、むかはしむるなり。もしは往もしは還、みな衆生をぬきて、生死海をわたさんがためなり。このゆへに廻向を首として、大悲心を成就することを、えたまへるがゆへにとのたまへり。またいはく、すなはち、かの佛をみたてまつれば、未證淨心の菩薩、畢竟して平等法身を得證す、淨心の菩薩と、上地のもろ〳〵の菩薩と、畢竟しておなじく寂滅平等をうるがゆへにと、のたまへり。平等法身は八地已上、法性生身の菩薩なり。寂滅平等の法なり。この寂滅平等の法をうるをもてのゆへに、なづけて平等法身とす。平等法身の菩薩の所得なるをもてのゆへに、なづけて寂滅平等の法とするなり。この菩薩は報生三昧をう、三昧神力をもて、よく一處一念一時に、十方世界に徧して、種々に一切諸佛、および諸佛大會衆海を供養す、よく無量世界に佛法僧ましまさぬところにして、種々に示現し、種々に一切衆生を教化し度脱して、つねに佛事をなす、はじめに往來のおもひ、供養のおもひ、度脱のおもひなし、このゆへにこの身をなづけて平等法身とす、この法をなづけて寂滅平等の法とす。未證淨心の菩薩は、初地已上七地

一生補處の願—阿彌陀經四十八願中の第二十二の願

あるひは神通を現じて、しかも法をとき、あるひは相好を現じて、無餘にいる。變現の莊嚴こゝろにしたがひていづ、群生みるもの、つみみなのぞこる。また讃じていはく、いざいなん、魔鄕にはとゞまるべからず、曠劫よりこのかた、六道に流轉して、ことごとくみなへたり、いたるところに餘の樂なし、たゞ愁歎のこゑをきく、この生平をおへてのち、かの涅槃の城にいらん。已上。

それ眞宗の教行證を按ずれば、如來大悲、廻向の利益なり。かるがゆへに、もしは因、もしは果、一事として、阿彌陀如來の淸淨願心の、廻向成就したまへるところにあらざることあることなし、因淨なるがゆへに果また淨なり、しるべし。

二には還相廻向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補處の願よりいでたり。また一生補處の願となづく、また還相廻向の願となづくべきなり。註論にあらはれたり、かるがゆへに願文をいださず、註論をひらくべし。

淨土論にいはく、出第五門は、大慈悲をもて、一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身をしめす。生死の園煩惱のはやしのなかに廻入して、神通に遊戲して教化地にいたる。本願力の廻向をもてのゆへに、これを出第五門となづく。已上。

平等力―佛のこと、よく諸法平等の理をさとり一切衆生を平等に攝化する大悲力を有したまふ故に名く

弘願―弘く一切衆生を救濟せんとの彌陀の本願

增上緣―すぐれたる強き緣といふこと

西方寂靜無爲のみやこ―極樂淨土のこと

へり、すべからくこのこゝろをしるべしとなり。このゆへに曇鸞法師の正意、西に歸するがゆへに、大經にそえて奉讃していはく、安樂の聲聞菩薩衆、人天の智慧こと〴〵く洞達せり、身相莊嚴、殊異なし、たゞし他方に順ずるがゆへに名をつらぬ、顏容端正にして比すべきなし、精微妙軀にして人天にあらず、虚無の身無極の體なり、このゆへに平等力を頂禮したてまつる。已上。

光明寺の疏にいはく、弘願といふは、大經の說のごときは、一切善惡の凡夫、生ずることをうるは、みな阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣とせずといふことなしとなり。また佛の密意弘深なれば、教門をしてさとりがたし、三賢十聖も、はかりてうかゞふところにあらず、いはんや、われ信外の輕毛なり、あへて旨趣をしらんや。あふいでおもんみれば、釋迦はこの方にして發遣し、彌陀はすなはちかのくににして來迎す、かしこによばひ、こゝにつかはす、あにゆかざるべけんや。たゞねんごろに法につかへて、畢命を期としてこの穢身をすてゝ、すなはちかの法性の常樂を證すべし。またいはく、西方寂靜無爲のみやこには、畢竟逍遙にして、有無をはなれたり、大悲心に薫じて、法界にあそぶ、分身して、ものを利すること、ひとしくして、ことなることなし、

胎卵濕化—有情出生の四種

三三の品—九品なり衆生を其の根機により上々より下々まで九品に分つ

いかんぞ不思議なるや。おほよそ、この雜生の世界には、もしは、胎もしは卵、もしは濕、もしは化、眷屬そこばくなり。苦樂萬品なり、雜業をもてのゆへに、かの安樂國土は、これ阿彌陀如來正覺淨華の化生するところにあらざることなし、同一に念佛して、別のみちなきがゆへに、とをく通ずるに、それ四海のうち、みな兄弟とするなり。眷屬無量なり、いづくんぞ思議すべきや。またいはく、往生をねがふもの、もとはすなはち三三の品なれども、いまは一二の殊なし。また淄澠の一味なるがごとし。いづくんぞ思議すべきや。

また論にいはく、莊嚴淸淨功德成就といふは、偈に觀彼世界相、勝過三界道といへるがゆへに。これいかんが不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの淨土に生ずることをうれば、三界の繫業、畢竟してひかず、すなはちこれ煩惱を斷ぜずして涅槃分をう。いづくんぞ思議すべきや。已上要を抄す。

安樂集にいはく、しかるに、二佛の神力また齊等なるべし。たゞし釋迦如來、おのれが能をのべずして、ことさらに、かの長をあらはしたまふこと、一切衆生をして、ひとしく歸せざることなからしめんとおほしてなり。このゆへに釋迦、處々に嘆歸せしめたま

淨土論にいはく、莊嚴妙聲功德成就といふは、偈に梵聲悟深遠、微妙聞十方といへるがゆへに　これいかんぞ不思議なるや。經にのたまはく、もしひと、たゞかの國土の淸淨安樂なるをきゝて、尅念して生ぜんと願ぜんものと、また往生をうるものとは、すなはち正定聚にいる、これはこれ國土の名字佛事をなす、いづくんぞ思議すべきや。莊嚴主功德成就といふは、偈に正覺阿彌陀、法王善住持といへるがゆへに。これいかんが不思議なるや。正覺の阿彌陀不可思議にまします、かの安樂淨土は、正覺阿彌陀の善力のために住持せられたり、いかんが思議することをうべきや。住は不異不滅になづく、持は不散不失になづく。不朽藥をもて、種子にぬりて、水におくにみだれず、火におくにこがれず、因緣をえて、すなはち生ずるがごとし。なにをもてのゆへに。不朽藥のちからなるがゆへなり。もしひと、ひとたび安樂淨土に生ずれば、のちのときに、こゝろに、三界にむまれて、衆生を敎化せんと願じて、淨土のいのちをすてゝ、願にしたがひて、生をえて、三界雜生の火のなかにむまるといへども、無上菩提の種子畢竟してくちず、なにをもてのゆへに、正覺阿彌陀の善住持をふるをもてのゆへに。莊嚴眷屬功德成就といふは、偈に如來淨華衆、正覺華化生といへるがゆへに。これ

報應化―報身とは因位の願行に酬ひ顯はれたる佛身なり應身とは衆生の機緣に應じて出現せる佛身をいひ化身とは機に應じ形を變じて現はれたる佛身なり
無量壽如來會―無量壽經の異譯なり

を必至滅度の願文。大經にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、くにのうちの人天、定聚に住し、かならず滅度にいたらずば、正覺をとらじ。已上。
無量壽如來會にのたまはく、もしわれ成佛せんに、くにのうちの有情、もし決定して、等正覺をなり、大涅槃を證せずば、菩提をとらじ。已上。
願成就の文。經にのたまはく、それ衆生ありて、かのくにに生ずるものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆへはいかん、かの佛國のうちには、もろ〳〵の邪聚、および不定聚なければなり。またのたまはく、かの佛國土は、清淨安穩にして、微妙快樂なり、無爲泥洹の道にちかし。それもろ〳〵の、聲聞、菩薩、天人、智慧高明にして、神通あきらかに達せり、こと〴〵くおなじく一類にして、かたち、ことなるかたちなし、たゞし、餘方に因順するがゆへに、人天の名あり、顏貌端正にして、世にこえて希有なり、容色微妙にして、天にあらず、人にあらず、みな自然虛無の身、無極の體をうけたるなり。またのたまはく、かのくにの衆生、もし當にむまれんもの、みなこと〴〵く、無上菩提を究竟し、涅槃のところにいたらしめん。なにをもてのゆへに、もし邪定聚、および不定聚は、かの因を建立せることを了知することあたはざるがゆへなり。已上要を抄す。

顯淨土眞實證文類四

愚禿釋の親鸞の集

必至滅度の願—阿彌陀佛四十八願中の第十一即ち必ず滅度に至らしめんとの願なり滅度とは涅槃の譯語

如—眞如のこと時處により全く變異なきを如といふ

必至滅度の願。　難思議往生。

つしんで眞實證をあらはさば、すなはちこれ利他圓滿の妙位、無上涅槃の極果なり。すなはちこれ必至滅度の願よりいでたり。また證大涅槃の願となづくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萠、往相廻向の心行をうれば、すなはちのときに、大乘正定聚のかずにいるなり。正定聚に住するがゆへに、かならず滅度にいたる。かならず滅度にいたるは、すなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無爲法身なり。無爲法身はすなはちこれ實相なり。實相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ眞如なり。眞如はすなはちこれ一如なり。しかれば彌陀如來は、如より來生して、報應化、種々の身を示現したまふ。

邪婬妄語綺語兩舌惡口貪欲瞋恚愚癡の十をいふ

三寶物－佛法僧の三寶に屬する物

かの經にいはく、一には不善の心をおこして、獨學を殺害する、これ殺生なり。二には羅漢尼を婬する、これを邪行といふなり。三には所施の三寶物を侵損する、これ不與取なり。四には倒見して和合僧衆を破する、これ虛誑語なり。略出。

淄洲—慧沼法師をいふ居所により名く

有學—無漏の戒定慧及擇滅の理を學修するもののこと

無學—阿羅漢の位をいふ三界の煩惱を斷じて更に學ぶべきことなきをいふ

十不善業—十惡に同じ殺生偸盜

五逆といふは、もし淄洲によるに、五逆にふたつあり。一には三乘の五逆。いはく一にはことさらにおもふて父を殺す、二にはことさらにおもふて母を殺す、三にはことさらにおもふて羅漢を殺す、四には倒見して和合僧を破す、五には惡心をもて佛身より血をいだす。恩田にそむき、福田に違するをもてのゆへに、これをなづけて逆とす。この逆を執するものは、身やぶれ命をへて、必定して無間地獄に墮して、一大劫のうちに無間の苦をうけん、無間の業となづく。また倶舍論のなかに、五無間の同類の業あり。かの頌にいはく、母無學尼をけがす、殺母罪の同類住定の菩薩、殺父罪の同類およびび有學無學を殺す、殺羅漢の同類僧の和合緣をうばふ、破僧罪の同類卒都婆を破壞する、出佛身血の同類二には大乘の五逆。薩遮尼乾子經にとくがごとし。一には塔を破壞し、經藏を焚燒する、および三寶の財物を盜用する。二には三乘の法をそしりて、聖教にあらずといひて、障破留難し、隱蔽覆藏する。三には一切出家のひと、もしは戒、無戒、破戒のものを打罵し、呵責して、過をとき、禁閉し還俗せしめ、驅使債調し斷命せしむる。四には父を殺し、母を害し、佛身より血をいだし、和合僧を破し、阿羅漢を殺す。五には謗して因果なく、長夜につねに十不善業を行ずるなり。已上。

罪はいまだつくらず、またとゞめて、もし謗法をおこさば、すなはち生ずることをえじとのたまふ、これは未造業について解するなり。もしつくらば、かへりて攝して生ずることをえしめん。かしこに生ずることをうといふとも、華合して多劫をへん。これらの罪人、はなのうちにあるとき、三種のさはりあり。一には佛およびもろ〳〵の聖衆をみることをえじ、二には正法を聽聞することをえじ、三には歴事供養をえじ。これをのぞきて已外は、さらにもろ〳〵の苦なけん。經にいはく、なを比丘の三禪の樂にいるがごときなり、しるべし。華のなかにありて、多劫ひらけずといふとも、阿鼻地獄のなかにして、長時永劫にもろ〳〵の苦痛をうけんに、すぐれざるべけんや。この義、抑止門につきて解しをはんぬ。已上。またいはく、ながく譏嫌を絕て、ひとしくして憂惱なし、人天善惡みなゆくことをう、かしこにいたりてことなることなし、齊同不退なり。なんのこゝろありてか、しかるとならば、いまし彌陀の因地にして、世饒王佛のみもとにして、位をすて家をいでて、すなはち悲智の心をおこして、ひろく四十八願をひろめたまひしによりてなり。佛願力をもて、五逆と十惡と、罪滅し生ずることをえしむ、謗法闡提、廻心すればみなゆく。抄出。

阿鼻―無間地獄のこと

をしらず、伊虫あに朱陽の節をしらんやと、いふがごとし。しるものこれをいふならくのみ。十念業成といふは、これまた神に通ずるもの、これをいふならくのみ。たゞ念をつみ相續して他事を緣ぜざれば、すなはちやみぬ、またなんぞかりに念の頭數をしることをもちゐんや、もしかならずしることをもちゐば、また方便あり、かならず口授をもちゐよ、これを筆點に題することをえざれと。已上。

光明寺の和尚ののたまはく、問ていはく、四十八願のなかのごときは、たゞ五逆と誹謗正法とをのぞきて、往生をえしめず、いまこの觀經の下品下生のなかには、誹謗をえらんで、五逆を攝せるは、なんのこゝろかあるや。答ていはく、この義あふいで抑止門のなかにつきて解す。四十八願のなかのごとき、謗法五逆をのぞくは、しかるにこの二業、そのさはり極重なり。衆生もしつくれば、たゞちに阿鼻にいりて歷劫周章していづべきによしなし。たゞし如來、それこのふたつの過をつくらんをおそれて、方便してとゞめて往生をえずとのたまへり、またこれ攝せざるにはあらざるなり。また下品下生のなかに、五逆をとりて謗法をのぞくことは、それ五逆はすでにつくれり、すてゝ流轉せしむべからず、かへりて大悲をおこして、攝取して往生せしむ。しかるに謗法の

摩訶薩―梵語大有情と譯す菩薩の行を修して一切衆生を濟度すること

首楞嚴三昧―梵語、健行定と譯す菩薩この定を得れば諸煩惱諸魔を破することを得

三毒―貪瞋癡の三つの稱

三有―欲界色界無色界のこと有とは因果空しからずして存在するの意なり

ごとし。菩薩、摩訶薩もまた〳〵かくのごとし、首楞嚴三昧に住して、その名をきくもの、三毒の箭自然に拔出す。あにかの箭ふかく毒はげし、皷の音聲をきくとも、箭をぬき毒をさることあたはじといふことをうべけんや、これを在縁となづく。いかんが決定にある、かの罪をつくる人は、有後心、有間心に依止して生ず。この十念は、無後心、無間心に依止して生ず、これを決定となづく。三の義を挍量するに、十念は重なり、おもきものまづひきて、よく三有をいづ、兩經一義ならくのみ。

問ていはく、いくばくの時をか、なづけて一念とするや。こたへていはく、百一の生滅を一刹那となづく、六十刹那をなづけて一念とす。このなかに念といふは、この時節をとらざるなり、たゞ阿彌陀佛を憶念して、もしは摠相もしは別相、所觀の縁にしたがひて、心に他想なくして、十念相續するを、なづけて十念とすといふなり、たゞ名號を稱することも、また〳〵かくのごとし。

問ていはく、心もし他縁せば、これを攝してかへらしめて、念の多少をしるべし。たゞし多少をしらば、またひまなきにあらず、もし心をこらし想をとゞめば、またなにによりてか、念の多少を記することをうべきや。答ていはく、經に十念といふは、業事成辦をあかすならくのみ、かならずしもすべからく頭數をしるべからざるなり。蟪蛄春秋

有漏―漏は煩惱の異名

の行をつくれる有漏の法は、三界に繫屬せり。たゞ十念をもて、阿彌陀佛を念じて、すなはち三界をいでば、繫業の義またいかんがせんとするや。こたへていはく、なんぢ五逆十惡の繫業等を重とし、下々品の人の十念を輕として、つみのためにひかれて、まづ墮して、三界に繫在すべしといはゞ、いままさに義をもて、輕重の義を挍量すべし。心にあり、緣にあり、決定にあり、時節の久近、多少に、あるにはあらざるなり。いかんぞ心にある、かの罪をつくる人は、みづから虛妄顚倒の見に依止して生ず。この十念は、善知識の方便安慰して、實相の法をきかしむるによりて生ず。一は實一は虛なり、あにあひたくらぶることをえんや。たとへば千歲の闇室に、ひかり、もししばらくいたれば、すなはち明朗なるがごとし、闇あに室にあること千歲にして、しかもさらじといふことをえんや、これを在心となづく。いかんが緣にある、かの罪をつくる人は、みづから妄想の心に依止し、煩惱虛妄の果報の衆生に依止して生ず。この十念は、無上の信心に依止し、阿彌陀如來の方便、莊嚴、眞實、淸淨、無量功德の名號によりて生ず。たとへば人ありて、毒の箭をかうふりて、あたるところ筋をきり、骨をやぶるに、滅除藥の鼓をきけば、すなはち箭ぬけ毒のぞこるがごとし。首楞嚴經にいはく、たとへばくすりあり、なづけて滅除といふ。もし鬪戰のときに、もて鼓にぬるに、鼓のこゑをきくもの、箭ぬけ毒のぞこるが

出世間―煩惱の存するこの世間を離脫するの道

不退―詳しくは不退轉の位なり正しく佛になると定まり退轉することなきをいふ

三塗―地獄餓鬼畜生の三惡道のこと

り、もしは他にしたがひて、その心をうけて決定するを、みな誹謗正法となづく。
問ていはく、かくのごときらの計は、たゞこれおのれが事なり、衆生においてなんの苦惱あればか、五逆の重罪にこえんや。こたへていはく、もし諸佛菩薩、世間、出世間の善道をときて、衆生を敎化するひとましまさずば、あに仁義禮智信あることをしらんや。かくのごとき世間の一切善法みな斷じ、出世間の一切賢聖みな滅しなん。汝たゞ五逆罪の重たることをしりて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることをしらず。このゆへに謗正法のひとは、そのつみ最重なり。
問ていはく、業道經にいはく、業道ははかりのごとし、おもきものまづひく。觀無量壽經にいふがごとし。ひとありて五逆十惡をつくり、もろ〳〵の不善を具せらん、惡道に墮して、多劫を逕歷して、無量の苦をうくべし、命終のときにのぞんで、善知識のをしへて、南無無量壽佛を稱せしむるにあはん。かくのごとく心をいたして、こゑをしてたえざらしめて、十念を具足すれば、すなはち安樂淨土に往生することをえて、すなはち大乘正定の聚にいりて、畢竟して不退ならん、三塗のもろ〳〵の苦とながくへだつ。まづひくの義、理においていかんぞ、また曠劫よりこのかた、つぶさにもろ〳〵

問ていはく、たとひ一人に五逆罪を具して、しかも正法を誹謗せざれば、經に生ずることをうとゆるす。また一人ありて、たゞ正法を誹謗して、しかも五逆のもろ〳〵のつみなきもの、往生を願ぜば、生ずることをえてんや、いなや。こたへていはく、たゞ正法を誹謗せしめて、さらに餘のつみなしといふとも、かならず生ずることをえじ。なにをもてかこれをいふとならば、經にいはく、五逆の罪人、阿鼻大地獄のなかに墮して、つぶさに一劫の重罪をうく。誹謗正法のひとは、阿鼻大地獄のなかに墮して、この劫もしつくれば、また轉じて他方の阿鼻大地獄のなかにいたる、かくのごとく展轉して、百千の阿鼻大地獄をふ、佛、いづることをうる時節を記したまはず、正法を誹謗するつみ、極重なるをもてのゆへなり。また正法はすなはちこれ佛法なり、この愚癡のひと、すでに誹謗を生ず、いづくんぞ佛土を願上する理あらんや。たとひたゞかの安樂に生ぜんことを貪して生を願ぜんは、また水にあらざるこほり、けふりなき火を、もとめんがごとし、あにうることはりあらんや。

問ていはく、なんらの相か、これ誹謗正法なるや。こたへていはく、もし、無佛、無佛法、無菩薩、無菩薩法といはん、かくのごときらの見をもて、もしは心にみづからさと

難化の三機―化益し難き三種の惡機なり、謗大乘,五逆罪,一闡提とをいふ
難治の三病―上の三機を重病にたとへていふ
大經―大無量壽經なり同上卷四十八願中の第十八願文中にあり

覺して涅槃にいらずと。已上出抄。こゝをもていま大聖の眞說によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙藥の、一切の病を療するがごとし、濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべし、本願醍醐の妙藥を執持すべきなり、しるべし。

それ諸大乘によるに、難化の機をとけり。いま大經には、唯除五逆、誹謗正法といひ、あるひは唯除造無間惡業、誹謗正法、及諸聖人といへり。觀經には、五逆の往生をあかして、謗法をとかず、涅槃經には難治の機と病とをとけり。これらの眞教、いかんが思量せんや。こたへていはく、論の註にいはく、問ていはく、無量壽經にのたまはく、往生を願ぜんもの、みな往生をえしむ、たゞし五逆と誹謗正法とをのぞく。觀無量壽經に、五逆十惡、もろ〳〵の不善を具せるもの、また往生をう、といへり。この二經いかんが會せんや。こたへていはく、一經には、二種の重罪を具するをもてなり。一には五逆、二には誹謗正法なり。この二種のつみをもてのゆへに、このゆへに往生をえず。一經にはたゞ十惡五逆等のつみをつくるといふて、正法を誹謗すといはず、正法を謗ぜざるをもてのゆへに、このゆへに生ずることをえしむ。

を斷じて聖者の流類に入りし人をいふ

涅槃―梵語、滅度又は寂滅と譯す

さらによく除滅したまふひとなけんと。善見王のいはく、如來は淸淨にして穢濁ましますことなし、われら罪人いかんしてか、みたてまつることをえん、善男子、われこの事をしらんと。阿難につげたまはく、三月をすぎをはりて、われまさに涅槃すべきがゆへに。善見ききをはりて、すなはちわがところにきたれり。われ、ために法をときて、重罪をしてうすきことをえしめ、無根の信をえしむ。善男子、わがもろ〳〵の弟子、この說をききをはりて、わがこゝろをさとらざるがゆへに、この言をなさく、如來、さだめて畢竟涅槃とときたまへり。善男子、菩薩に二種あり、一には實義、二には假名なり、假名の菩薩われ三月ありて、まさに涅槃にいるべしと、ききてみな退心を生じて、しかもこの言をなさく、もしそれ如來無常にして住したまはずば、われらいかゞせん、この事のためのゆへに、無量世のうちに大苦惱をうけき、如來世尊は、無量の功德を成就し具足したまへる、なをかくのごときの死魔を壞することあたはず、いはんやわれらがともがら、まさによく壞すべけんやと。善男子、このゆへにわれかくのごときの菩薩のために、しかもこの言をなさく、如來は常住にして變易あることなし、わがもろ〳〵の弟子この說をききをはりて、わがこゝろをさとらざれば、さだめていはく、如來はつひに畢

須陀洹—梵語、預流又は入流と譯す三界の見惑

て、これを城のほかにとぢて、四種の兵をもて、しかもこれを守衛せしむ、毗提夫人、この事をききをはりて、すなはち王のところにいたる、ときに王を守て、人をしてさへぎりていることをゆるさず、そのときに夫人、瞋恚の心を生じて、すなはちこれを呵罵す。ときにもろ〳〵の守人、すなはち太子につぐらく、大王の夫人、父の王をみんとおもふをばいぶかし、ゆるしてんや、いなやと。善見、ききをはりて、また瞋嫌を生じて、すなはち母のところにゆきて、すゝんで母の髮をひきて、刀をぬきてきらんとす。そのときに耆婆まふしていはく、大王、國をたもちてよりこのかた、罪きはめておもしといへども、女人におよばず、いはんや所生の母をやと。善見太子、この語をききをはりて、耆婆のためのゆへに、すなはち放捨して、さへぎりて大王の衣服、臥具、飮食、湯藥をたつ。七日をすぎをはりて、王のいのちすなはちをはりぬと。善見太子、父の喪をみをはりて、まさに悔心を生ず。雨行大臣、また種々の惡邪の法をもて、しかもためにこれをとく、大王、一切の業行すべてつみあることなし、なんがゆへぞ、いましかも悔心を生ずるやと。耆婆またいはく、大王まさにしるべし、かくのごときの業は罪業二重なり、一には父の王を殺す、二には須陀洹を殺せり、かくのごときの、つみは、佛をのぞきて、

毘提夫人—韋提夫人に同じ、頻婆娑羅王の妃なり

沙門—梵語、勤息と譯す、諸善法を勤修し諸惡法を止息するの意なり、出家して佛道を修する人を云こと

外人、汝をのりてもて非理とす、われこの事をきくに、あにうれへざることをえんや。善見太子またこの言をなさく、國のひといかんぞ我を罵辱すると。提婆達のいはく、國のひと、汝をのりて未生怨とすと。善見またいはく。なんがゆへぞ我をなづけて未生怨とする、たれかこの名をなすと。提婆達のいはく、汝いまだむまれざりしとき、一切相師みなこの言をなさく、この兒むまれをはりて、まさにその父を殺すべし、このゆへに外人みなことごとく汝を號して未生怨とす、一切内のひと汝が心をまもるがゆへに、いひて善見とす、毘提夫人この語をききをはりて、すでに汝をうむとして、身を高樓のうへよりこれを地にすてゝ、汝がひとつの指をやぶれり、この因緣をもて、ひとまた汝を號して婆羅怨枝とす、われこれをききをはりて、心に愁憤を生じて、しかもまた汝にむかひて、これをとくことあたはず、提婆達多かくのごときらの種々の惡事をもて、をしへて父を殺せしむ、もし汝が父死せば、われまたよく瞿曇沙門を殺せんと。

善見太子ひとりの大臣にとはく、なづけて雨行といふ。大王なんがゆへぞ、我に字をたてんとするに、未生怨とつくると。大臣すなはちためにその本末をとく、提婆達の所說のごとくして異なけん。善見ききをはりて、すなはち大臣とともに、その父の王をとり

瞿曇—梵語、地最勝と譯す釋尊の稱

多、すなはちわがところにきたりて、かくのごときの言をなさく、やゝねがはくば如來、この大衆をもてわれに付屬せよ、われまさに種々に法をときて教化して、それをして調伏せしむべしと。われ癡人にいはく、舍利弗等大智を聽聞して、世に信伏するところなり、われなを大衆をもて付屬せず、いはんや汝癡人、つばきをくらふものをやと。ときに提婆達多またわがところにおいて、ます〱惡心を生じて、かくのごときの言をなさく、瞿曇、なんぢいままた大衆を調伏すといへども、勢またひさしからじ、まさにみるに磨滅すべしと。この語をなしをはるに、大地即時に、六反震動す。提婆達多、すなはちの時に地にたふれて、その身の邊より大暴風をいだして、もろ〱の塵土をふきて、しかもこれを汙坌す、提婆達多、惡相をみをはりて、またこの言をなさく、もしわれこの身、現世にかならず阿鼻地獄にいらば、わが惡まさにかくのごときの大惡をむくふべし。ときに提婆達多、すなはちたちて善見太子のところに往至す。善見みをはりて、すなはち聖人にとはく、なんがゆへぞ顏容憔悴して憂の色あるやと。提婆達多いはく、われつねにかくのごとし、汝しらずやと。善見こたへていはく、そのこゝろを領說せん、なんの因緣あてかしかると。提婆達多のいはく、われいま汝がために、きはめて親愛をなす、

悪人提婆達多、また過去の業因緣によるがゆへに、またわがところにおいて、不善の心を生じて、われを害せんとす。すなはち五通を修して、ひさしからずして善見太子とともに、親厚たることを獲得せり。太子のためのゆへに、種々の神通の事を現作す、門にあらざるよりいで、門よりしていりて、門よりしていで、門にあらざるよりしている。あるときは象馬牛羊男子の身を示現す。善見太子、みをはりてすなはち愛心喜心敬信の心を生す、これを本とするがゆへに、きびしく種々の供養の具をときて、しかもこれを供養す。またまふしてまふさく、大師聖人われいま曼陀羅華をみんとおもふと。ときに提婆達多、すなはち法として三十三天にいたりて、かの天人にしたがひて、しかもこれを求索するに、その福つくるがゆへに、すべてあたふるものなけん、すでに華をえず、この思惟をなさく、曼陀羅樹は我々所なし、もしみづからとらんに、まさになんのつみかあるべき、すなはちすゝんでとらんとするに、すなはち神通をうしなへり。かへりて己身をみれば王舍城にあり、心に慚愧を生ずるに、またみることあたはず。善見太子またこの念をなさく、われいままさに如來のみもとに往至して、大衆を求索すべし、佛もしゆるさば、われまさに意にしたがひてをしへて、すなはち舍利弗等に詔勅すべしと。そのときに提婆達

曼陀羅華―梵語、無妙華と譯す光澤にして芳香あり

羅閲祇—梵語、王舍と譯す、摩伽陀國の都城なり

くることなからん、ねがはくばもろ〳〵の衆生、ひとしくこと〴〵く菩提心をおこさしめん。心をかけてつねに十方一切佛を思念せん。またねがはくばもろ〳〵の衆生、ながくもろ〳〵の煩惱を破し、了々に佛性をみること、なを妙德のごとくして等しからん。そのとき世尊、阿闍世王をほめたまはく、よきかなよきかな、もしひとありて、よく菩提心をおこさん、まさにしるべし、このひとはすなはち諸佛大衆を莊嚴すとす。大王、汝むかしすでに毗婆尸佛において、はじめて阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき、これよりこのかた、わが出世にいたるまで、その中間において、いまだかつてまた地獄に墮して苦をうけず、大王、まさにしるべし、菩提の心、いまだかくのごときの無量の果報あり。大王、けふより已往に、つねにまさに菩提の心を勤修すべし、なにをもてのゆへに、この因緣にしたがひて、まさに無量の惡を消滅することをうべきがゆへなりと。そのとき阿闍世王、および摩伽陀國の人民、こぞりて座よりしてたちて佛をめぐること三帀して、辭退してみやにかへりにきと。已上抄出。

またいはく、善男子、羅閱祇の王頻婆沙羅、その王の太子なづけて善見といふ。業因緣のゆへに、惡逆の心を生じて、その父を害せんとするに、しかもたよりをえず、そのときに

第一諦―眞如のこと諦は實理なり動かすべからざる道理卽ち眞理のこと

三業―心、口、意の起す所の業

よく衆生を療す。もしもろ〳〵の衆生ありて、この語をきくことをうるものは、もしは信および不信、さざめてこの佛說をしらん。諸佛つねに、輭語をもて衆のためのゆへに麤をときたまふ。麤語および輭語、みな第一義に歸せん、このゆへにわれいま世尊に歸依したてまつる。如來のみことは一味なること、なほ大海の水のごとし、これを第一諦となづく。かるがゆへに無々義のみことにして、如來いまときたまふところの種々無量の法、男女。大小、ききておなじく第一義をえしめん、無因また無果なり、無生また無滅なり、これを大涅槃となづく、きくもの諸結を破す。如來、一切のために、つねに慈父母となりたまへり。まさにしるべし、もろ〳〵の衆生は、みなこれ如來の子なり。世尊、大慈悲は衆のために苦行を修したまふ。人の鬼魅にくるはされて、狂亂して所爲おほきがごとし。われいま佛をみたてまつることをえたり。うるところの三業の善、ねがはくばこの功德をもて、無上道に廻向せん。われいま、供養するところの佛法、および衆僧、ねがはくばこの功德をもて、三寶つねに世にましまさん。われいままさにうべきところの種々のもろ〳〵の功德、ねがはくばこれをもて衆生の四種の魔を破壞せん。われ惡知識にあひて三世のつみを造作せり、いま佛前にして、くゆ、ねがはくば、のちにさらにつ

とをしれり。世尊もしわれあきらかによく衆生の、もろ〳〵の惡心を破壞せば、われつねに阿鼻地獄にありて、無量劫のうちに、もろ〳〵の衆生のために、苦惱をうけしむとも、もて苦とせず。

そのときに摩伽陀國の無量の人民、こと〴〵く阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき、かくのごときらの無量の人民、大心を發するをもてのゆへに、阿闍世王所有の重罪、すなはち微薄なることをえしむ。王および夫人、後宮采女、こと〴〵くみなおなじく、阿耨多羅三藐三菩提心をおこしき。

そのときに阿闍世王、耆婆にかたりていはく、耆婆、われいまだ死せずして、すでに、天身をえたり、短命をすてゝ、しかも長命をえ、無常の身をすてゝ、しかも常身をえたり。もろ〳〵の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむ。乃至。

諸佛の弟子、このことばをときをはりて、すなはち種々の寶幢をもて。乃至。また偈頌をもて、しかも讃嘆してまふさく、

實語はなはだ微妙なり、善巧句義において、甚深祕密の藏なり、衆のためのゆへに、所有廣博の言を顯示す。衆のためのゆへに、略してとかく、かくのごときの語を具足して、

伊蘭—印度の木の名、臭氣強き毒樹なり

をもてのゆへに。有々見のものは果報をうるがゆへに、無有見のものは、すなはち果報なし、常見のひとは、すなはち非有とす、無常見のものは、すなはち非無とす。常々見のものは、無とすることをえず、なにをもてのゆへに、常々見のものは、惡業の果あるがゆへに、このゆへに常々見のものは、無とすることをえず、この義をもてのゆへに。非有非無にして、しかもまたこれ有なりといへども、大王、それ衆生は出入の息になづく、出入の息をたつ、かるがゆへになづけて殺とす、諸佛、俗にしたがへてまたときて殺とす。乃至。世尊、われ世間をみるに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭より栴檀樹を生ずるものをみず。われいまはじめて伊蘭子より栴檀樹を生ずるをみる。伊蘭子はわが身これなり、栴檀樹はすなはちこれわが心無根の信なり。無根はわれはじめて如來を恭敬せんことをしらず、法僧を信ぜず、これを無根となづく。世尊、われもし如來世尊に、まうあはずば、まさに無量阿僧祇劫において、大地獄にありて無量の苦をうくべし。われいま佛をみたてまつる、この佛をみたてまつりてうるところの功德をもて、衆生の煩惱惡心を破壞せしむ。

佛ののたまはく、大王よきかなく、われいま汝かならずよく衆生の惡心を破壞するこ

ごとし。愚癡のひとは、これをおもふて實とす、智者は了達して、それ眞にあらずとしれり。殺もまたかくのごとし、凡夫は實とおもへり、諸佛世尊は、それ眞にあらずとしろしめせり。大王、殺法殺業、殺因殺果および解脱、われみなこれをさとれり、すなはちつみあることなけん、王、殺をしるといへども、いかんぞ罪あらんや。大王、たとへば人主ありて、酒をつかさどれりとしれども、もしそれのまざれば、すなはちまた爲はざるがごとし、また火としるといへども、燒燃せず。王もまたかくのごとし、また殺をしるといへども、いかんぞつみあらんや。大王、もろ〳〵の衆生ありき、日のいづるときにおいて、種種のつみをつくる、月のいづるときにおいて、また劫盗を行ぜん、日月いでざるに、すなはち罪をつくらず、日月によりて、それつみをつくらしむといへども、この日月、實につみをえず。殺もまたかくのごとし。乃至。大王、たとへば涅槃は、有にあらず無にあらずして、しかもまたこれ有なるがごとし。殺もまたかくのごとし、非有非無にして、しかもまたこれ有なりといへども、慙愧のひとは、すなはち非有とす、無慚愧のものは、すなはち非無とす、果報をうくるもの、これをなづけて有とす、空見のひとは、すなはち非有とす、有見のひとは、すなはち非無有とす。有見のものは、またなづけて有とす、なに

乾闥婆城—梵語龍神が空中に現ずる城郭、今云ふ蜃氣樓なり

かくのごとし。凡夫は實とおもへり、諸佛世尊は、それ眞にあらずとしろしめせり。大王、たとへば山谷の響の聲のごとし、愚癡のひとは、これを實のこゑとおもへり、有智のひとは、それ眞にあらずとしれり。殺もまたかくのごとし、凡夫は實とおもへり、諸佛世尊は、その眞にあらずとしろしめせり。大王、ひと怨ありて、いつはりきたりて親附するがごとし、愚癡のひとは、おもふて眞實とす、智者は了達して、すなはちそれむなしくいつはれりとしらん。殺もまたかくのごとし。凡夫は實とおもふ、諸佛世尊はそれ眞にあらずとしろしめせり。大王、ひと鏡をとりてみづから面像をみるがごとし、愚癡のひとはおもふて眞の面とす、智者は了達して、それ眞にあらずとしれり。殺もまたかくのごとし、凡夫は實とおもふ、諸佛世尊は、それ眞にあらずとしろしめせり。大王、熱のときの炎のごとし、愚癡のひとは、これはこれ水とおもはん、智者は了達して、それ水にあらずとしらん。殺もまたかくのごとし、凡夫は實とおもはん、諸佛世尊は、それ眞にあらずとしろしめせり。大王、乾闥婆城のごとし、愚癡のひとは、おもふて眞實とす、智者は了達して、それ眞にあらずとしれり。殺もまたかくのごとし、凡夫は實とおもへり、諸佛世尊は、それ眞にあらずと了知したまへり。大王、ひとのゆめのうちに、五欲の樂をうくるが

んぢが父先王もし罪あることなくば、いかんぞ報あらん。頻婆沙羅現世のなかにおいて、また善果および惡果をえたり。このゆへに先王、また〳〵不定なり、不定なるをもてのゆへに、殺もまた不定なり、殺不定ならば、いかんしてか、さだめて地獄にいらんといはん。

大王、衆生の狂惑に、おほよそ四種あり、一には貪狂、二には藥狂、三には咒狂、四には本業緣狂なり。大王、わが弟子のなかに、この四狂あり、おほく惡をつくるといへども、われつひに、このひと戒を犯ぜりと記せず、このひとの所作、三惡にいたらず、もしかへりて心をえば、また犯といはず。王もと國を貪して、これ父の王を逆害す、貪狂の心をもてためになせり、いかんぞつみをえん。大王、ひとの躭醉して、その母を逆害せん、すでに醒悟しをはりて、心に悔恨を生ぜんがごとし。まさにしるべし、この業また報をえじ。王いま貪醉せり、本心の作せるにあらず、もし本心にあらずば、いかんぞつみをえんや。

大王、たとへば幻師の四衢道のほとりにして、種々の男女、象馬、瓔珞、衣服を幻作するがごとし、愚癡のひとはおもふて眞實とす、有智のひとは眞にあらずとしれり、殺もまた

くば、われら諸佛またつみましますべし、もし諸佛世尊、つみをえたまふことなくば、汝ひとりいかんぞしかも罪をえんや。大王頻婆沙羅、むかし悪心ありて、毗富羅山にして遊行して、鹿を射獵して、曠野に周偏しき、こと〴〵くうるところなし、たゞひとりの仙の五通具足せるをみる、みをはりて、すなはち瞋恚悪心を生じき、われいま遊獵す、このゆへにまさしく坐することをえず、このひと、かりて、つひにさらしむ。すなはち左右に勅して、しかもこれを殺せしむ、そのひと、終にのぞんで、瞋を生ず、悪心ありて神通を退失して、しかも誓言をなさく、われ實に辜なし、なんぢ心口をもて、よこさまに戮害をくはふ、われ來世において、またまさにかくのごとく、かへりて心口をもて、しかも汝を害すべしと。ときに王、ききをはりて、すなはち悔心を生じて、死屍を供養しき、先王かくのごとく、なをかろくうくることをえて、地獄におちず。いはんやしからずして、しかもまさに地獄に果報をうくべけんや。先王みづからつくりて、かへりてみづからこれをうく、いかんぞ王をしてしかも殺罪をえしめん。王のいふところのごとし、父の王つみなくば、大王いかんぞ失なきに罪ありといはゞ、すなはち罪報あらん。悪業なくば、すなはち罪報なけん。な

五通―五つの神通、天眼通、天耳通、宿命通、他心通、神足通の五なり

れ汝とおなじく、一象にのらんとおもふ、たとひわれまさに阿鼻地獄にいるべくとも、ねがはくば汝、投持してわれをしておとさしめざれ、なにをもてのゆへに。われむかしかつてきゝき、得道の人は地獄にいらずと。乃至。いかんぞときて、さだめて地獄にいらんと言と。

佛、大王に告たまはく、一切衆生の所作の罪業に、おほよそ二種あり、一には輕、二には重なり。もし心と口とにつくるは、すなはちなづけて輕とす。身と口と心につくるは、すなはちなづけて重とす。大王、心におもひ口にときて、身になさゞればうるところの報、輕なり。大王、むかし口に殺せよと勅せず、足をけづれといへりき。大王もし侍臣に勅せましかば、たちどころに王の首をきらまし、坐のときにすなはちきるとも、なを罪をえじ。いはんや王勅せず、いかんぞつみをえん。王もしつみをえば、諸佛世尊もまたつみをえたまふべし。なにをもてのゆへに。汝が父先王頻婆沙羅、つねに諸佛においてもろ〱の善根をうへたりき、このゆへに今日王位に居することをえたり。諸佛もしその供養をうけざらましかば、すなはち王たらざらまし、もし王たらざらましかば、汝すなはち國のために、害を生ずることをえざらまし、もし汝、父を殺してまさにつみあるべ

阿鼻獄—梵語無間地獄と譯す
生身—いきながら

月愛三昧もまた〱かくのごとし。よく衆生をして善心開敷せしむ、このゆへになづけて月愛三昧とす。大王、たとへば月のひかり、よく一切みちをゆく人の心に、歡喜を生ぜしむるがごとし、月愛三昧もまた〱かくことし、よく涅槃道を修習せんもの〻心に、歡喜を生ぜしむ、このゆへにまた月愛三昧となづく。乃至。諸善のなかの王なり、甘露味とす、一切衆生の愛樂するところなり、このゆへにまた月愛三昧となつく。乃至。

そのときに佛、もろ〱の大衆につげてのたまはく、一切衆生、阿耨多羅三藐三菩提にちかづく因縁のためには、善友をさきとするにはしかず、なにをもてのゆへに、阿闍世王、もし耆婆のことばに隨順せずば、來月七日に、必定して命終して、阿鼻獄に墮せん、このゆへに日にちかづきたり、善友にしくことなし。阿闍世王また前路において舍婆提にきく、毗瑠璃王、ふねに乘じて海邊にいりて、災して死す、瞿伽離比丘、生身に地にいりて阿鼻獄にいたれり。須那刹多は種々の惡をつくりしかども、佛所にいたりて衆罪消滅しぬと。

このことばをききをはりて、耆婆にかたりていはまく、われいまかくのごときのふたつのことばをきくといへども、なをいまだあきらかならず、さだめて汝きたれり。耆婆、わ

のためにするにあひ似たり。さきに世に良醫の、身心を療治するものなしといふがゆへに、このひかりをはなちて、まづ王身を治す、しかうしてのちに心におよぶ。王のいはまく、耆婆、如來世尊またみたてまつらんとおもふをや。耆婆こたへてまふさく、たとへば一人にしかも七子あらん、この七子のなかに、やまひにあへば父母の心平等ならざるにあらざれども、しかも病子において、心すなはちひとへにおもきがごとし。大王、如來もまたしかなり。もろ〳〵の衆生において、平等ならざるにあらざれども、しかも罪者において、心すなはちひとへにおもし。放逸のものにおいて、佛すなはち慈悲を生ず、不放逸のものには、心すなはち放捨す。なんらをかなづけて不放逸のものとする。いはく、六住の菩薩なり。大王、諸佛世尊、もろ〳〵の衆生において、種姓、老少、中年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使をみそなはさず、たゞ衆生の善心あるものをみそなはす、もし善心あれば、すなはち慈念したまふ。大王まさにしるべし、かくのごときの瑞相は、すなはちこれ如來、月愛三昧にいりて、はなつところの光明なりと。王、すなはち問ていはく、なんらをかなづけて月愛三昧とすると。耆婆こたへていはく、たとへば月のひかり、よく一切の優鉢羅華をして、開敷し鮮明ならしむるがごとし。

八法—利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の稱

摩訶薩—梵語、大有情と譯す菩薩の行をなして一切衆生を濟度する人

天中天—諸天中の最勝天といふ意

るものなり。乃至。また爲はなづけて佛性とす、阿闍はなづけて不生とす、世は怨になづく、佛性を生ぜざるをもてのゆへに、すなはち煩惱のあだ生ず、煩惱のあだ生ずるがゆへに、佛性をみざるなり。煩惱を生ぜざるをもてのゆへに、すなはち佛性をみる、佛性をみるをもてのゆへに、すなはち大般涅槃に安住することをう、これを不生となづく。このゆへになづけて阿闍世とす。善男子、阿闍は不生になづく、不生は涅槃となづく、世は世法になづく、爲は不汙になづく、世の八法をもて、けがされざるところなるがゆへに、無量無邊阿僧祇劫に涅槃にいらず、このゆへにわれ阿闍世王のために、無量億劫に涅槃にいらずとのたまへり。善男子、如來の密語不可思議なり、佛法衆僧また不可思議なり、菩薩摩訶薩また不可思議なり、大般涅槃經また不可思議なり。

そのときに世尊、大悲導師、阿闍世王のために、月愛三昧にいれり。三昧にいりをはりて、大光明をはなつ。そのひかり清涼にして、ゆきて王の身をてらしたまふに、身のかさすなはちいへぬ。乃至。王のいはまく、耆婆、かれは天中天なり、なんの因緣をもて、この光明を放たまふぞや。耆婆答ていはく、大王、いまこの瑞相は、および王

富闌那、末伽梨拘舍離子等—釋尊當時六派の外道の名稱

有爲—爲を有するの意なり、因緣によりて生じたるを云ふ

無爲—本來常住にして何ものも造作せらるゝことなきを云ふ

地す。身のかさ增劇して、臭穢なること、さきよりもまされり。もて冷藥をしてぬり、瘡を治療すといへども、かさあつかはし、毒熱たゞ增して損ずることをし。已上抄出。一大臣日月稱となづく、一富闌那となづく、二藏德、二末伽梨拘舍離子となづく、三一の臣あり、なづけて實德といふ、三那闍耶毗羅胝子となづく、四一の臣あり悉知義となづく、四阿耆多翅金欽婆羅となづく、五大臣なづけて吉德といふ、五婆蘇仙、六加羅鳩駄迦旋延、六尼乾陀若犍子となづく。

またいはく、善男子、わがいふところのごとし、阿闍世王のために、涅槃にいらず、かくのごときの密義、なんぢいまだ解することあたはず。なにをもてのゆへに、われ爲といふは一切凡夫、阿闍世王はあまねくおよび一切五逆をつくるものなり、また爲はすなはちこれ一切有爲の衆生なり、われつひに無爲の衆生のためにして、世に住せず、なにをもてのゆへに、それ無爲は衆生にあらざるなり、阿闍世はすなはちこれ煩惱等を具足せるものなり。また爲はすなはちこれ佛性をみざる衆生なり、もし佛性をみんものには、われつひにためにひさしく世に住せず、なにをもてのゆへに、佛性をみるものは衆生にあらざるなり。阿闍世はすなはちこれ一切いまだ、阿耨多羅三藐三菩提心を發せざ

六師—釋尊當時六派の外道

多羅三藐三菩提をえたり。乃至これ佛世尊なり、金剛智ましまして、よく衆生の一切惡罪を破せしむ、もしあたはずといはゞ、このことはりあることなけんと。乃至。大王、如來に弟提婆達多といふひとあり。衆僧を破壞し、佛身より血をいだし、蓮華比丘尼を害す、三逆罪をつくれり。如來、ために種々の法要をときたまふに、その重罪をして、すなはち微薄なることをえしめたまふ。このゆへに如來を大良醫とす、六師にはあらざるなり。乃至。大王、一逆をつくれば、すなはちちつぶさに、かくのごときの一罪をうく、もし二逆罪をつくらば、すなはち二倍ならん。五逆つぶさならば、罪もまた五倍ならん。大王、いまさだめてしんぬ。王の惡業、かならずまぬかるゝことをえじ。やゝねがはくば大王、すみやかに佛のみもとにまうづべし、佛世尊をのぞきて、餘はよくすくふことなけん。われいま汝をあはれむがゆへに、あひすゝめてみちびくなりと。そのときに大王、この語をききをはりて、心に怖懼をいだけり、身をあげて戰慄す、五體梓動して芭蕉樹のごとし。あふいでこたへていはく、天これたれとかせん、色像を現ぜずして、たゞこゑのみあることは、大王、われはこれ汝が父頻婆娑羅なり、なんぢいままさに耆婆の所說にしたがふべし、邪見六臣のことばにしたがふことなかれと。ときに、ききをはりて悶絕躃

淨飯王―釋尊の父

巧、瞻病の治することあたはざるところなり。なにをもてのゆへに、わが父法王、法のごとくにをおさむ、實につみなし、よこさまに逆害を加す、魚のくがに處するがごとし。乃至。われむかし智者のときていひしをきゝき、身口意業もし淸淨ならずば、まさにしるべし、このひとかならず地獄に墮せんと。われまたかくのごとし、いかんぞまさに安穩にねふることをうべきや。いまわれまた無上の大醫なし、法藥を演說せんに、わが病苦をのぞきてんやと。耆婆こたへていはく、よきかな〳〵、王つみをなすといへども、心に重悔を生じて、しかも慙愧をいだけり。大王、諸佛世尊、つねにこの言をときたまはく、ふたつの白法あり、よく衆生をたすく、一には慙、二には愧なり。慙はみづからつみをつくらず、愧は他ををしへてなさしめず。慙はうちにみづから羞恥す、愧は發露してひとにむかふ。慙は人にはづ、愧は天にはづ、これを慙愧となづく。無慙愧はなづけて人とせず、なづけて畜生とす。慙愧あるがゆへに、すなはちよく父母師長を恭敬す、慙愧あるがゆへに、父母兄弟姉妹あることをとく。よきかな大王、つぶさに慙愧あり。乃至。王ののたまふところのごとし、よく治するものなけん。大王まさにしるへし、迦毘羅城に、淨飯王の子、姓は瞿曇氏、悉達多となづく、師なくして覺悟せり、自然にして阿耨

ならば諸法無常なり、無常をもてのゆへに、念々に壞滅す。念々に滅するかゆへに、殺者死者みな念々に滅す、もし念々に滅せば、たれかまさにつみあるべき。大王、火、木をやくに、火すちはちつみなきがごとし。斧、樹をきるに、斧またつみなきがごとし。鎌、くさをかるに、鎌實につみなきがごとし。かたな、人をころすに、かたな實に人にあらず、かたなすでにつみなきがごとし、ひといかんぞつみあらんや。毒、ひとをころすに、毒實に人にあらず、毒藥つみひとにあらざるがごとし、いかんぞつみあらんや。一切萬物みなまたかくのごとし、實に殺害なけん、いかんぞつみあらん。やゝねがはくば大王、愁苦を生ずることなかれ、なにをもてのゆへに、もしつねに愁苦せば、うれへつひに增長せん、ひと、ねふりをこのめば、ねふりすなはちしげく、おはきがごとし、婬を貪し、酒をたしなむも、また〳〵かくのごとし。いま大師あり、迦羅鳩馱迦旃延となづく。乃至。またひとりの臣あり、無所畏となづく。乃至。いま大師あり、尼乾陀若犍子となづく。乃至。そのときに大醫あり、なづけて耆婆といふ。王のところに往至してまふしてまふさく、大王、いづくんぞねふることをえんや、いなやと。王、偈をもてこたへていはく、乃至　耆婆、われいまやまひおもし、正法の王において惡逆害をおこす。一切良醫、妙藥、呪術、善

をこのめば、ねふりすなはちしげくおほきがごとし、婬を貪し、酒をたしなむも、また〳〵かくのごとし。乃至。

阿耆多翅舍欽婆羅。乃至。また大臣あり、なづけて吉徳といふ。乃至。地獄といふは、なんの義ありとかせん、臣まさにこれをとくべし。地は地になづく、獄は破になづく、地獄を破せん、罪報あることなけん、これを地獄となづく。また地は人になづく、獄は天になづく、その父を害するをもてのゆへに、人天にいたらん、この義をもてのゆへに、婆蘇仙人となへていはく、羊を殺して人天の樂をう、これを地獄となづく。また地は命になづく、獄は長になづく、かの壽命の長を殺するをもてのゆへに、地獄となづく。大王、このゆへにまさにしるべし、實に地獄なけん。大王、麥をうへて麥をえ、稲をうへて稲をうるがことし。地獄を殺しては、かへりて地獄をえん、人を殺害しては、かへりて人をうべし。大王、いままさに臣の所說をきくに、實に殺害なかるべし。もし有我ならば、實にまた害なし、もし無我ならば、また害するところなけん。なにをもてのゆへに、もし有我ならば、つねに變易なし、常住をもてのゆへに、殺害すべからず、不破不壞、不繫不縛、不瞋不喜は、なほし虛空のごとし、いかんぞまさに殺害のつみあるべき。もし無我

たみなきことをえんや。乃至。先王つみなきに、よこさまに逆害を興ず、われまたむかし智者のときていひしをきゝき、もしひと父を害することあれば、まさに無量阿僧祇劫において、大苦惱をうくべしと。われいまひさしからずして、かならず地獄に堕せん、また良醫のわがつみを救療することなけん。大臣すなはちいはく、やゝねがはくば大王、愁苦を放捨せよ。王きかずや、むかし王ありき、なづけて羅摩といひき、その父を害しをはりて、王位をつぐことをえたりき、跋提大王、毗樓眞王、那睺沙王、迦帝迦王、毗舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、かくのごときらの王、みなその父を害して、王位をつぐことをえたりき。しかるにひとりとして、王の地獄にいるものなし。いま現在に毗瑠璃王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王、かくのごときらの王、みなその父を害せりき、こと〴〵くひとりとして、王の愁惱を生ずるものなし。地獄餓鬼天中といふといへども、たれかみるものあるや。大王たゞしふたつの有あり、一には人道、二には畜生なり、このふたつありといへども、因縁生にあらず、因縁死にあらず、もし因緣にあらずば、なにものか善惡あらん。やゝねがはくば大王、愁怖をいだくことなかれ、なにをもてのゆへに、もしつねに愁苦すれば、うれへつひに增長す、ひと、ねふり

僧祇物—僧祇は僧伽に同じ僧家の所有に屬するもの

いはく、われいま身心あにいたまざることをえんや。わが父先王、慈愛仁惻して、ことにみて矜念せり、實につみなし、ゆきて相師にとふ、相師こたへてまふさく、この兒生れをはりて、さだめてまさに父を害すべしと、この語をきくと雖も、なをみて瞻養す。むかし智者の、かくのごときの言をなすことをきゝき、もしひと母に通じ、および比丘尼をけがし、僧祇物をぬすみ、無上菩提心をおこせるひとを殺し、およびその父を殺せん。かくのごときのひと必定して、まさに阿鼻地獄に墮すべしと。われいま身心あにいたまざることをえんや。大臣またいはく、やゝねがはくば大王、たま愁苦することなかれ。乃至。一切衆生みな餘業あり、業緣をもてのゆへに、しば〳〵生死をうく。もし先生に餘業あらしめば、王いまこれを殺せん、つひになんのつみかあらん。やゝねがはくば大王、こころをゆたかにして、うれふることなかれ。なにをもてのゆへに、もしつねに愁苦すれば、うれへつひに增長す、ひと、ねふりをこのめば、ねふりすなはちしげくおほきがごとし。婬を貪し、酒をたしなむも、また〳〵かくのごとし。乃至。刪闍耶毗羅胝子、またひとりの臣あり、悉知義となづく。すなはち王のところにいたりて、かくのごときの言をなさく。乃至。王すなはちこたへていはく、われいま身心あにい

迦羅々虫―梵語歌羅邏と譯す、母胎に受けたる父の精液を云ふ、受胎後初七日の間を云ふ

末伽梨拘舍梨子―梵語、外道の一師なり、衆生の苦樂は因ありて生ずにあらずして自然に存すと說く

父を害せり、すなはち王、國土これ逆なりといふといへども、實につみあることなけん。迦羅々虫の、かならず母のはらをやぶりて、しかうしてのちに、いまし生ずるがごとし。生の法かくのごとし、母の身をやぶるといへども、實にまたつみなし。螺腹の懐妊等、まだまたかくのごとし。治國の法、法としてかくのごとくなるべし。父兄を殺すといへども、實につみあることなし。出家の法は、乃至蚊蟻殺する、またつみあり。乃至。王ののたまふところのごとし、世に良醫の身心を治するものなけん。いま大師あり、末伽梨拘舍梨子となづく、一切知見して、衆生を憐愍すること、なをし赤子のごとし。すでに煩惱をはなれて、よく衆生の三毒の利箭をぬく。乃至。この師いま王舍大城にいます、やゝねがはくば大王、そのところに往至して、王もしみば衆罪消除せんと。ときに王こたへていはく、あきらかによく、かくのごとき、わがつみを滅除せば、われまさに歸依すべしと。

またひとりの臣あり、なづけて實德といふ。また王のところにいたりて、すなはち偈をときていはく、大王なんがゆへぞ身に瓔珞をぬぎ、かうべのかみ蓬亂せる。乃至かくのごときなるや。乃至、これ心いたむとやせん、身いたむとやせんと、王すなはちこたへて

阿鼻獄―梵語無間地獄と譯す、地獄に墮ちたる者は苦を受くる事間なし

となければ、白業の報なし。黒白業なければ、黒白業の報なし。上業および下業あることなし。この師いま王舍城のうちにいます、やゝねがはくは大王、屈駕してかしこにゆけ、この師をして身心を療治せしむべしと。ときに王こたへていはまく、あきらかによく、かくのごとき、わが罪を滅除せば、われまさに歸依すべし。

またひとりの臣あり、なづけて藏德といふ。また王のところにゆきて、しかもこの言をなさく、大王なんがゆへぞ、面貌憔悴して、脣口乾燥し、音聲微細なるや。乃至。なんのくるしむところありてか、身いたむとやせん、心いたむとやせん。王すなはちこたへていはく、われいま身心いかんぞいたまざらん。われ癡盲にして慧目あることなし、もろもろの惡友にちかづきて、ためによく提婆達多惡人のことばにしたがひて、正法の王に、よこさまに逆害を加す。われむかし智人の偈說せしをきゝき、もし父母、佛および弟子において、不善の心を生じ惡業をおこさん、かくのごときの果報阿鼻獄にありと。この事をもてのゆへに、われをして心怖して、大苦惱を生ぜしむ。また良醫のありて、しかも救療せらるゝことなけんと。大臣またいはく、やゝねがはくば大王、しばらく愁怖することなかれ。法に二種あり、一には出家、二には王法なり。王法といふは、いはくその

性」の稱

阿僧祇ー梵語、無數と譯す、非常なる大數を示す

してまふさく、大王なんがゆへぞ愁悴して、顔容よろこばざる、身いたむとやせん、心いたむとやせんと。王、臣にこたへていはまく、われいま身心あにいたまざることをえんや。わが父つみなきに、よこさまに逆害を加す。われ智者にしたがひて、かつてこの義をきき、世に五人あり、地獄をまぬかれずと、いはく五逆罪なり。われいますでに無量無邊阿僧祇のつみあり、いかんぞ身心をして、いたまざることをえん。また良醫のわが身心を治せんものなけんと。臣、大王にまふさく、おほきに愁苦することなかれと。すなはち偈をときていはく、もしつねに愁苦せば、うれへつひに増長せん。ひとねふりをこのめば、ねふりすなはちしげくおほきがごとし、婬を貪し酒をたしなむも、また／＼かくのごとし。王のたまふところのごとき、世に五人あり、地獄をまぬかれずとは、たれかゆきて、これをみてきたりて王にかたるや。地獄といふは、たゞちにこれ世間におほく智者とかく、王ののたまふところのごとし。世に良醫の身心を治するものなけん。いま大醫あり、富蘭那となづく。一切知見して自在をえて、さだめて畢竟して清淨梵行を修習して、つねに無量無邊の衆生のために、無上涅槃の道を演說す。もろ／＼の弟子のために、かくのごときの法をとけり。黑業あることなければ、黑業の報なし。白業あるこ

四大―一切物を構成する四種の成分、地大（堅性）、水大（濕性）、火大（煖性）、風大（動性）

また〱かくのごとし。佛菩薩にしたがひて聞治をえをはりて、すなはちよく阿耨多羅三藐三菩提心を發せん。もし聲聞緣覺菩薩ありて、あるひは法をとき、あるひは法をとかざるあらん。それをして阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむることあたはず。已上。またいはく、そのときに王舍大城に阿闍世王あり。その性、弊惡にして、よく殺戮を行ず。口の四惡、貪、恚、愚癡を具して、その心熾盛なり。乃至。しかるに眷屬のために、現世の五欲の樂に貪著するがゆへに、父の王のつみなきに、よこさまに逆害を加す。父を害するによりて、おのれが心に悔熱を生ず。乃至。心、悔熱するがゆへに、徧體にかさを生ず。そのかさ、臭穢にして附近すべからず。すなはちみづから念言すらく、われいまこの身に、すでに華報をうけたり、地獄の果報、まさにちかづきてとをからずとす。そのときにその母韋提希后、種々のくすりをもて、しかもためにこれをぬる。そのかさつゐに增すれども、降損あることなし。王、すなはち母にまふさく、かくのごときのかさは、心よりして生ぜり、四大よりおこれるにあらず。もし衆生よく治することありといはゞ、このことはりあることなけんと。

ときに大臣あり、日月稱となづく。王のところに往至して、一面にありてたちてまふ

迦葉—釋尊十大弟子の一
闡提—梵語、斷善根と譯す、到底成佛するを得ざる底機

はく、方便の假門ひとしくしてことなることなし。またいはく、門々不同なるを漸教となづく、萬劫苦行して無生を證す。已上。

僞といふは、すなはち六十二見、九十五種の邪道これなり。涅槃經にいはく、世尊つねにときたまはく、一切のほかは九十五種をまなびて、みな惡道におもむく。已上。光明師ののたまはく、九十五種みな世をけがす、たゞ佛の一道のみひとり清閑なり。已上。

まことにしんぬ。かなしきかな愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず、眞證の證にちかづくことをたのしまず、はづべし、いたむべし。

それ佛、難治の機をとくとして、涅槃經にいはく、迦葉、世に三人あり、そのやまひ治しがたし。一には謗大乘、二には五逆罪、三には一闡提なり。かくのごときの三病、世のなかに極重なり、こと〴〵く聲聞緣覺菩薩のよく治するところにあらず。善男子、たとへば、やまひあれば、かならず死するに治なからんに、もし瞻病隨意の醫藥あらんがごとし。もし瞻病隨意の醫藥なからん、かくのごときのやまひ、さだめて治すべからず。まさにしるべしこのひと、かならず死せんこと、うたがはず、善男子、この三種のひと、

龍華三會－彌勒菩薩兜率天の一生を終りて龍華樹の下に於て成佛し、初會、第二會、第三會の說法をなすを云ふ
便同－即ち彌勒菩薩に同じ
韋提－印度頻婆沙羅王の妃なり、淨土和讃觀經讃に詳しく出づ

まことにしんぬ、彌勒大士は、等覺の金剛心をきはむるがゆへに、龍華三會のあかつき、まさに無上覺位をきはむべし、念佛の衆生は、横超の金剛心をきはむるがゆへに、臨終一念のゆふべ、大般涅槃を超證す、かるがゆへに便同といふなり。しかのみならず金剛心をうるものは、すなはち韋提とひとしく、すなはち喜悟信の忍を獲得すべし、これすなはち往相廻向の眞心徹到するがゆへに、不可思議の本誓によるがゆへなり。

禪宗の智覺、念佛の行者をほめていはく、まれなるかな佛力難思なれば、古今もいまだあらず。律宗の元照師のいはく、嗚呼、敎觀にあきらかなること、たれか智者にしかんや、をはりにのぞんで、觀經を擧し、淨土を讃じて、ながくゆき法界に達せること、たれか杜順にしかんや、四衆をすゝめ佛陀を念じて、勝相を感じて西にゆきき、禪にまじはり性をみること、たれか高玉智覺にしかんや、みな社をむすび、佛を念じて、ともに上品にのぼりき。業儒才ある、たれか劉雷、柳子厚、白樂天にしかんや。しかるにみな筆をとりまことを書して、かの土に生ぜんと願じき。已上。

假といふは、すなはちこれ聖道の諸機、淨土の定散の機なり。かるがゆへに光明師のいはく、佛教多門にして八萬四なり、まさしく衆生の機の不同なるがためなり。またい

阿耨多羅三藐三菩提、梵語無上正徧智と譯す佛のさとり

長時に法をきゝ、歷事供養せん。因まどかに果滿す、道場の座、あにはるかならんや。已上。
王日休がいはく、われ無量壽經をきくに、衆生、この佛名をきゝて、信心歡喜せんこと、乃至一念せんもの、かのくにに生ぜんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退轉に住すと。不退轉は、梵語にはこれを阿惟越致といふ。法華經にはいはく、彌勒菩薩の所得の報地なり。一念往生すなはち彌勒におなじ。佛語むなしからず、この經はまことに往生の經術脫苦の神方なり、みな信受すべし。已上。
大經にのたまはく、佛、彌勒につけたまはく、この世界より、六十七億の不退の菩薩ありて、かのくにに往生せん、一々の菩薩は、すでにむかし無數の諸佛を供養せりき、ついで彌勒のごとし。またいはく、佛、彌勒につけたまはく、この佛土のなかに、七十二億の菩薩あり、かれは無量億那由他百千の佛のみもとにして、もろ〱の善根をうへて、不退轉を成ぜるなり、まさにかのくにに生ずべし。抄出。
律宗の用欽師のいはく、いたれること、華嚴の極唱法華の妙談にしかんや、かつはいまだ普授あることをみず。衆生一生に、みな阿耨多羅三藐三菩提の記をうることは、まことにいふところの不可思議功德の利なり。已上。

若念佛者よりしも生諸佛家―若念佛者、當知此人、是人中芬陀利華、觀世音菩薩、大勢至菩薩、爲其勝友、當坐道場、生諸佛家

この益をねがはしめんとおもふ。勇猛專精にして、心にみんとおもふとき、まさに忍をさとるべし。これおほくこれ十信のなかの忍なり、解行已上の忍にはあらざるなり。またいはく、若念佛者より、しも生諸佛家にいたるこのかたは、まさしく念佛三昧の功能超絶して、まことに雜善をして、比類とすることをうるにあらざることをあらはす。すなはちその五あり。一には彌陀佛名を專念することをあかす。二には能念のひとを指讃することをあかす。三にはもしよく相續して念佛するひと、このひとははなはだ希有なりとす、さらにものとして、もてこれにたくらぶべきことなきことをあかす、かるがゆへに、分陀利をひきてたとへとす。分陀利といふは、人中の好華となづく、また希有華となづく、また人中の上々華となづく、また人中の妙好華となづく。この華あひつたへて蔡華となづくるこれなり。もし念佛のひとは、すなはちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上々人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。四には彌陀のみなを專念するひとは、すなはち觀音勢至つねにしたがひて、影護したまふこと、また親友知識のごとくなることをあかす。五には今生に、すでにこの益をかうふれり、いのちをすてて、すなはち諸佛のいへにいることをあかす、すなはち淨土これなり、かしこにいたりて

相好—彌陀の御すがた

十地—菩薩、中道の聖智を持ちて動ぜず、又よく衆生を化益する位

增上緣—すぐれたる強緣

無生の忍—不生不滅の眞如法性を認知決定する位

のちからなり、もし本師知識のすゝめにあらずば、彌陀の淨土いかんしてかいらん。またいはく、佛世はなはだまうあひがたし、ひと信慧あることかたし。たまく〜希有の法をきくこと、これまたもともかたしとす。みづから信じ、ひとをゝしへて信ぜしむること、かたきがなかにうたゝまたかたし、大悲ひろくあまねく化する、まことに佛恩を報ずるになる。またいはく、彌陀の身色は金山のごとし、相好の光明は、十方をてらす、たゞ念佛のもののみありて光攝をかうふる。まさにしるべし、本願もともこはしとす。十方の如來したをのべて證したまふ、もはら名號を稱して西方にいたる、かの華臺にいたりて妙法をきく、十地の願行自然にあらはる。またいはく、たゞ阿彌陀佛を專念する衆生のみありて、かの佛心のひかり、つねにこのひとをてらして、攝護してすてたまはず。すべて餘の雜業の行者をば照攝することをば論ぜず。これまたこれ現生護念增上緣なり。已上。またいはく、心歡喜得忍といふは、これ阿彌陀佛國の淸淨の光明、たちまちにまなこのまへに現ぜん、なんぞ踊躍にたへん、この喜によるがゆへに、すなはち無生の忍をうることをあかす、また喜忍となづく、また悟忍となづく、また信忍となづく。これすなはちはるかに談ず、いまだ得處をあらはさず、夫人をしてひとしく心に

有輪ー生死の相續するをいふ

はなれず。乃至。

大經にのたまはく、おほよそ淨土に往生せんとおもはゞ、かならず發菩提心をもちゐるをみなもととす、いかんとなれば、菩提はすなはちこれ無上佛道の名なり、もし發心作佛せんとおもはゞ、この心、廣大にして法界に周徧せん、この心、長遠にして未來際をつくす、この心あまねくつぶさに二乘のさはりをはなる、もしよくひとたび發心すれば、無始生死の有輪をかたふく。乃至。

大悲經にいはく、いかんぞなづけて大悲とする、もしもはら念佛相續してたえざれば、その命終にしたがひて、さだめて安樂に生ぜん、もしよく展轉して、あひすゝめて念佛を行ぜしむるは、これらをことごとく大悲を行ずるひとゝなづく。已上要を抄す。

光明師のいはく、たゞうらむらくは衆生の、うたがふまじきをうたがふことを、淨土對面してあひたがはず、彌陀の攝と不攝とを論ずることなかれ、こゝろ、專心にして廻すると廻せざるとにあり。乃至。あるひはいはく、今より佛果にいたるまで、長劫に佛をほめて慈恩を報ぜん、彌陀の弘誓のちからをかうふらずば、いづれのときいづれの劫にか娑婆をいでん。乃至。いかんが今日寶國にいたることを期せん、まことにこれ娑婆本師

般若ー梵語譯して智慧と云ふ

つねによく心をいたし、もはら念佛するひとは、もしは山林にもあれ、もしは聚落にもあれ、もしは晝もしは夜、もしは坐もしは臥、諸佛世尊、つねにこのひとをみそなはすこと、目のまへに現ずるがごとし。つねにこのひとのために、しかも受施をなさん。乃至。大智度論によるに、三番の解釋あり。第一には、佛はこれ無上法王なり、菩薩は法臣とす、たうとくするところ、おもんずるところ、たゞ佛世尊なり、このゆへにまさにつねに念佛すべきなり。第二には、もろ〳〵の菩薩ありて、みづからいはく、われ曠劫よりこのかた、世尊、われらが法身智身、大慈悲身を長養したまふことを、かうふることをえたりき、禪定智慧無量の行願、佛によりて成ずることをえたり。報恩のためのゆへに、つねに佛にちかづかんことを願ず、また大臣の、王の恩寵をかうふりて、つねにその王をおもふがごとし。第三には、もろ〳〵の菩薩ありて、またこの言をなさく、われ因地にして、惡知識にあふて、般若を誹謗して、惡道に墮しき、無量劫をへて、餘行を修すといへども、いまだいづることあたはず、のちに一時において善知識のほとりによりしに、われををしへて念佛三昧を行ぜしむ。そのときにすなはちよく、しかしながらもろ〳〵のさはりをして、まさに解脫することをえしめたり、この大益あるがゆへに願じて佛を

分陀利華｜梵語白蓮華と譯す

またいはく、法をきゝてよくわすれず、みてうやまひ、えておほきによろこばゞ、すなはちわがよき親友なり。またいはく、それ至心ありて、安樂國に生ぜんと願ずるものは、智慧あきらかに達し、功德殊勝なることをうべし。また廣大勝解者とのたまへり。またかくのごときらの類、大威德のものは、よく廣大異門に生ずとのたまへり。またいはく、もし念佛するものは、まさにしるべし、このひとは、これ人中の分陀利華なり。已上。

安樂集にいはく、諸部の大乘によりて、說聽の方軌をあかさば、大集經にいはく、說法のひとにおいては、醫王のおもひをなせ、拔苦のおもひをなせ。所說の法をば甘露のおもひをなせ、醍醐のおもひをなせ。それ聽法のひとは、增長勝解のおもひをなせ、愈病のおもひをなせ。もしよくかくのごとくならば、說者聽者、みな佛法を紹隆するにたへたり、つねに佛前に生ぜん。乃至。

涅槃經によるに、佛のたまはく、もしひと、たゞよく至心をもて、つねに念佛三昧を修すれば、十方の諸佛つねにこのひとをみそなはすこと、現にまへにましますがごとし。このゆへに涅槃經にいはく、佛、迦葉菩薩につげたまはく、もし善男子善女人ありて、

無生法忍―不生不滅の眞如法性を忍可決定すること
深總持―諸の善法を持し惡法を捨離すること

形にあるは、すこしきくるしきににたれども、前念に命終して、後念にすなはちかのくにに生じて、長時永劫に、つねに無爲の法樂をうく、乃至成佛までに生死をへず、あにたのしみにあらずや、しるべし。已上。

眞の佛弟子といふは、眞の言は、僞に對し假に對するなり。弟子といふは、釋迦諸佛の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によりて、かならず大涅槃を超證すべきがゆへに、眞の佛弟子といふ。

大本にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、十方無量不可思議の諸佛、世界の衆生の類、わが光明をかうふりて、その身にふるゝもの、身心柔輭にして、人天に超過せん、もししからずば正覺をとらじ。たとひわれ佛をえたらんに、十方無量不可思議の諸佛、世界の衆生の類、わが名字をきゝて、菩薩の無生法忍、もろ〳〵の深總持をえずといはゞ、正覺をとらじ。已上。

無量壽如來會にいはく、もしわれ成佛せんに、周徧十方無量無邊、不可思議無等界の有情のともがら、佛の威光をかうふりて、照觸せらるゝもの、身心安樂にして、人天に超過せん、もししからずば菩提をとらじ。已上。

三有―欲界、色界、無色界のこと、有とは因果空しからず存在するの義

四暴流―四種煩惱なり、善品を漂流せしむる故に名づく

輪廻―生死の相續するをいふ

に三有の生死を斷絶す、かるがゆへに斷といふなり。四流はすなはち四暴流なり、また生老病死なり。

大本にのたまはく、會ずまさに佛道をなりて、ひろく生死のながれを度すべし。またのたまはく、會ずまさに世尊となりて、まさに一切の生老死を度せんとすべし。已上。

涅槃經にいはく、また涅槃は、なづけて洲渚とす。なにをもてのゆへに、四大の暴河にたゞよふことあたはざるがゆへに。なんらを四とする、一には欲暴、二には有暴、三には見暴、四には無明暴なり。このゆへに涅槃をなづけて洲渚とす。已上。

光明寺の和尚のいはく、もろ〱の行者にまふさく、凡夫の生死、貪していとはずばあるべからず、彌陀の淨土、かろしめてねがはずばあるべからず。いとへばすなはち娑婆ながくへだつ、ねがへばすなはち淨土につねに居す。へだつればすなはち六道の因亡じ、輪廻の果をのづから滅す、因果すでに亡して、すなはちかたちと名と、頓にたえぬるをや。またいはく、あふぎねがはくば一切往生人等、よくみづからをのれが能を思量せよ。今身にかのくにに生ぜんとねがはんものは、行住坐臥に、かならずすべからく心をはげまし、をのれを剋して、晝夜に廢することなかるべし。畢命を期として、かみ一

二乘三乘迂廻の教なり。横超といふは、すなはち願成就一實圓滿の眞教眞宗これなり。また横出あり、すなはち三輩九品定散の教、化土懈慢迂廻の善なり。大願淸淨の報土には品位階次をいはず、一念須臾の頃に、速にとく無上正眞道を超證す、故に横超といふ。

大本にのたまはく、無上殊勝の願を超發す。またのたまはく、われ超世の願をたつ、かならず無上道にいたらん、名聲十方にこえて、究竟してきこゆるところなくば、ちかふ正覺をならじ。またのたまはく、かならず超絶してすつることをえて、安養國に往生せよ。横に五惡趣をきり、惡趣自然にとぢん、道にのぼるに窮極なし、ゆきやすくしてしかもひとなし、その國逆違せず、自然のひくところなり。已上。

大阿彌陀經支謙三藏の譯なりにのたまはく、超絶してすつることをうべし、阿彌陀佛國に往生すれば、横に五惡道をきりて、自然に閉塞す、道にのぼることきはまりなし、ゆきやすくしてひとあることとなし、そのくに逆違せず、自然のひくところなり。已上。

斷といふは、往相の一心を發起するがゆへに、生としてまさにうくべき生なし、趣としてまたいたるべき趣なし、すでに六趣四生、因亡し果滅す。かるがゆへに、すなはち頓

二乘三乘—二乘は聲聞緣を覺いふ、三乘は之れに菩薩を加ふ

止觀—摩訶止觀の略、書名なり

れ佛道の正因なり。

かるがゆへに論の註にいはく、かの安樂淨土にむまれんと願ずるものは、かならず無上菩提心を發するなり。またいはく、是心作佛といふは、いふこゝろは、心よく佛になるなり。是心是佛といふは、心のほかに佛ましまさずとなり。たとへば火、木よりいでて、火、木をはなるゝことをえず、木をはなれざるをもてのゆへに。すなはちよく木をやく木、火のためにやかれて、木すなはち火となるがごとし。光明のいはく、この心作佛す、この心これ佛なり、心のほかに異佛ましまさず。已上。

かるがゆへにしんぬ、一心これを如實修行相應となづく。すなはちこれ正教なり、これ正義なり、これ正行なり、これ正解なり、これ正業なり、これ正智なり。三心すなはち一心なり、一心すなはち金剛眞心の義こたへをはんぬ、しるべし。

止觀の一にいはく、菩提といふは天竺のことば、こゝには道と稱す。質多といふは、天竺のこゑなり、この方には心といふ、心といふはすなはち慮知なり。已上。

横超斷四流といふは、横超は、横といふは、竪超竪出に對す、超といふは、迂に對し廻に對することばなり。竪超といふは、大乘眞實の教なり。竪出といふは、大乘權方便の教、

八難―佛及び正法を見聞し得ざる難をいふ、曰く、在地獄の難、在畜生の難、在餓鬼の難、在長壽天の難、在北鬱単越州の難、盲聾瘖瘂の難、世智辯聡の難、生佛前佛後の難

益、三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讃の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報德の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なり。宗師の專念といへるは、すなはちこれ一行なり。專心といへるは、すなはちこれ一心なり。しかれば願成就の一念は、すなはちこれ專心なり、專心はすなはちこれ深心なり、深心はすなはちこれ深信なり、深信はすなはちこれ堅固深信なり、堅固深信はすなはちこれ決定心なり、決定心はすなはちこれ無上々心なり、無上々心はすなはちこれ眞心なり、眞心はすなはちこれ相續心なり、相續心はすなはちこれ淳心なり、淳心はすなはちこれ憶念なり、憶念はすなはちこれ眞實の一心なり、眞實の一心はすなはちこれ大慶喜心なり、大慶喜心はすなはちこれ眞實信心なり、眞實信心はすなはちこれ金剛心なり、金剛心はすなはちこれ願作佛心なり、願作佛心はすなはちこれ度衆生心なり、度衆生心はすなはちこれ衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり、この心すなはちこれ大菩提心なり、この心すなはちこれ大慈悲心なり。この心すなはちこれ無量光明慧によりて生ずるがゆへに、願海平等なるがゆへに、發心ひとし、發心ひとしきがゆへに、道ひとし、道ひとしきがゆへに、大慈悲ひとし、大慈悲はこ

清淨報土—極樂淨土

五趣—地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間

みなをきゝて往生せんとおもはん。またのたまはく、佛の聖德の名をきく。已上。

涅槃經にいはく、いかなるをか、なづけて聞不具足とする。如來の所說は十二部經なり、たゞ六部を信じて、いまだ六部を信ぜず、このゆへになづけて聞不具足とす。またこの六部の經を受持すといへども、六部の經を讀誦にあたはずして、他のために解說するは、利益するところなし、このゆへになづけて、聞不具足とす。またこの六部の經をうけをはりて、論義のためのゆへに、勝他のためのゆへに、利養のためのゆへに、諸有のためのゆへに、持讀誦說せん、このゆへになづけて、聞不具足とす。已上。

光明寺の和尙は、一心專念といひ、また專心專念といへり。已上。

しかるに經に聞といふは、衆生、佛願の生起本末をきゝて、疑心あることなし、これを聞といふなり。信心といふは、すなはち本願力廻向の信心なり。歡喜といふは、身心の悅豫のかほばせをあらはす貌なり、乃至といふは、多少を攝することばなり。一念といふは、信心二心なきがゆへに一念といふ、これを一心となづく、一心はすなはち淸淨報土の眞因なり。金剛の眞心を獲得するものは、橫に五趣八難の道をこえて、かならず現生に十種の益をう、なにものをか十とする。一には冥衆護持の益、二には至德具足の

竟依、大應供、大安慰、無等々、不可思議光と號したてまつる。已上。
樂邦文類の後序にいはく、淨土を修するもの、つねにおほけれども、その門をえてしかもたゞちにいたるもの、いくばくもなし。淨土を論ずるもの、つねにおほけれども、その要をえて、しかもたゞちにをしふるもの、あるひはすくなし。かつていまだきかず。自障自蔽をもて說をなすことあるもの、うるによりてもてこれをいふ、それ自障は愛にしくなし、自蔽は疑にしくなし、たゞし疑愛の二心、つゐに障礙なからしむるは、すなはち淨土の一門なり、いまだはじめて間隔せず、彌陀の洪願つねにをのづから攝持したまふ、必然の理なり。已上。(信巻本終)

それ眞實信樂を按ずるに、信樂に一念あり。一念といふは、これ信樂開發の時尅の極促をあらはし、廣大難思の慶心をあらはす。

こゝをもて大經にのたまはく、あらゆる衆生、その名號をきゝて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、至心に廻向したまへり。かのくにに生ぜんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退轉に住せん。またのたまはく、他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號をきゝて、よく一念の淨信をおこして、歡喜愛樂せん。またのたまはく、その佛の本願力、

大本―大無量壽經のこと

易往而無人―淨土へは往き易くして然も人なきをいふ

二惑―見惑即ち迷理の惑と思惑即ち迷事の惑

宰刹―屠戮者と譯す

眞實明平等覺等―淨土和讃に詳しく出づ

衆生のために、この法門をとくを、ふたつの難とするなり。さきの二難をうけて、すなはち諸佛所讚のむなしからざるこゝろをあらはす、衆生きゝて、しかも信受せしめよとなり。已上。

律宗の用欽のいはく、法の難をとくなかに、まことにもてこの法、凡を轉じて聖となすこと、なをしたなごころをかへすがごとくなるをや、おほきにこれやすかるべきがゆへに、おほよそあさき衆生は、おほく疑惑を生ぜん、すなはち大本に、易往而無人といへり。かるがゆへにしんぬ、難信なりと。

聞持記にいはく、愚智をえらばずといふは、性に利鈍あり。豪賤をえらばずといふは、報に強弱あり。久近を論ぜずといふは、功に淺深あり。善惡をえらばずといふは、行に好醜あり。決誓猛信をとれば、臨終惡相なれどもといふは、すなはち觀經の下品中生に、地獄の衆火一時にともにいたると等いへり。具縛の凡愚といふは、二惑またくあるがゆへに、屠沽の下類、刹那に成佛の法を超越す、一切世間甚難信といふべきなりといふは、屠はいはく宰刹、沽はすなはち醞賣、かくのごときの惡人、たゞ十念によりて、すなはち超往をう、あに難信にあらずや。阿彌陀如來は眞實明、平等覺、難思議、畢

よりて上中下の三輩を分つ

十念—十聲念佛すること

心なり。願作佛心は、すなはちこれ度衆生心なり。度衆生心は、すなはちこれ衆生を攝取して、有佛の國土を生ぜしむる心なり。このゆへにかの安樂淨土に生ぜんと願するものは、かならず無上菩提心を發するなり。もしひと、無上菩提心を發せずして、たゞかの國土の受樂ひまなきをきゝて、樂のためのゆへに生ぜんと願ぜん、またまさに往生をえざるべきなり。このゆへにいふこゝろは、自身住持の樂をもとめず、一切衆生の苦をぬかんとおもふがゆへに。住持の樂といふは、いはく、かの安樂淨土は、阿彌陀如來の本願力のために住持せられて、受樂ひまなきなり。おほよそ廻向の名義を釋せば、いはくおのれが所集の一切の功德をもて、一切衆生に施與したまひて、ともに佛道にむかへしめたまふなり。抄出。

元照律師のいはく、他のなすことあたはざるがゆへに甚難なり。世こぞりていまだみたてまつらざるがゆへに、希有なりといへり。またいはく、念佛の法門は、愚智豪賤をえらばず、久近善惡を論ぜず、たゞ決誓猛信をとれば、臨終惡相なれども、十念に往生す。これすなはち具縛の凡愚、屠沽の下類、刹那に成佛の法を超越す、世間甚難信といふべきなり。またいはく、この惡世にして修行成佛するを難とするなり、もろ〳〵の

阿伽陀藥―梵語無病藥と譯す、藥名なり

竪―自力の法、時間的に斷惑證理する法なり

横―他力の法、斷惑證理の道理に願ぜざる法につきいふ

三輩生―淨土に往生せんとするものにつき、其の修行の優劣に

常にあらず、臨終にあらず、多念にあらず、一念にあらず、たゞこれ不可思議、不可稱、不可說の信樂なり。たとへば阿伽陀藥の、よく一切の毒を滅するがごとし。如來誓願のくすりは、よく智愚の毒を滅するなり。

しかるに菩提心について、二種あり、一には竪、二には横なり。また竪について、また二種あり。一には竪超、二には竪出なり。竪超竪出は權實顯密大小の敎にあかす、歷劫迂廻の菩提心、自力の金剛心、菩薩の大心なり。また横について、また二種あり。一には横超、二には横出なり。横出といふは正雜定散、他力のなかの自力の菩提心なり。横超といふは、これすなはち願力廻向の信樂、これを願作佛心といふ、願作佛心すなはちこれ横の大菩提心なり、これを横超の金剛心となづくるなり。横竪の菩提心、そのことばひとつにして、そのこゝろことなりといへども、入眞を正要とす、眞心を根本とす、邪雜をあやまりとす、疑情を失とするなり。忻求淨刹の道俗、ふかく信不具足の金言を了知し、ながく聞不具足の邪心をはなるべきなり。

論の註にいはく、王舍城所說の無量壽經を按ずるに、三輩生のなかに、行に優劣ありといへども、みな無上菩提の心を發せざるはなし。この無上菩提心は、すなはちこれ願作佛

慈尊—大慈悲の尊、如來のこと
無漏の體—佛身をいふ無漏は煩惱のなきなり漏は漏泄の義にして煩惱の異名

たいはく、眞心徹到して、苦の娑婆をいとひ、樂の無爲をねがひて、ながく常樂に歸すべし。たゞし無爲のさかひ、輕爾として、すなはちかなふべからず、苦惱の娑婆、輙然としてはなるゝことをうるによしなし。金剛のこゝろざしをおこすにあらずよりは、ながく生死の元をたゝんや。もしまのあたり慈尊にしたがひたてまつらずば、なんぞよくこのながきなげきをまぬかれん。またいはく、金剛といふは、すなはちこれ無漏の體なり。已上。

まことにしんぬ、至心、信樂、欲生、そのことばことなりといへども、そのこゝろこれひとつなり。なにをもてのゆへに、三心すでに疑蓋まじはることなし。かるがゆへに眞實の一心、これを金剛の眞心となづく。金剛の眞心、これを眞實の信心となづく。眞實の信心はかならず名號を具す、名號はかならずしも願力の信心を具せざるなり。このゆへに論主、はじめに我一心とのたまへり。また如彼名義、欲如實修行相應故とのたまへり。

おほよそ、大信心海を按ずれば、貴賤緇素をえらばず、男女老少をいはず、造罪の多少をとはず、修行の久近を論ぜず、行にあらず、善にあらず、頓にあらず、漸にあらず、定にあらず、散にあらず、正觀にあらず、邪觀にあらず、有念にあらず、無念にあらず、尋

四流―詳しくは四暴流のこと、四種の煩惱なり、欲暴流、有暴流、見暴流、無明暴流なり

金剛のごとくなるによりて、一切の異見異學、別解別行人等のために、動亂破壞せられず、たゞこれ決定して、一心にとりて正直にすゝんで、かのひとのことばをきくことをえざれ、すなはち進退の心ありて、怯弱を生じ廻顧すれば、道におちて、すなはち往生の大益を失するなり。已上。

まことにしんぬ。二河の譬喩のなかに、白道四五寸といふは、白道は、白の言は黑に對するなり。白はすなはちこれ選擇攝取の白業、往相廻向の淨業なり。黑はすなはちこれ無明煩惱の黑業、二乘人天の雜善なり。道の言は、路に對せるなり、道はすなはちこれ本願一實の直道、大般涅槃無上の大道なり。路はすなはちこれ二乘三乘萬善諸行の小路なり。四五寸といふは、衆生の四大五陰にたとふるなり。能生清淨願心といふは、金剛の眞心を獲得するなり。本願力の廻向の大信心海なるがゆへに、破壞すべからず、これを金剛のごとしとたとふるなり。

觀經義に、道俗時衆等、おの〳〵無上の心をおこせども、生死はなはだいとひがたく、佛法またねがひがたし。ともに金剛のこゝろざしをおこして、横に四流を超斷せよ。まさしく金剛の心をうけて、一念に相應してのち、果、涅槃をえんひとゝいへり。要を抄す。

奢摩他―梵語止と譯す、一切の亂想止りて靜なるをいふ
毘婆舍那―梵語、見と譯す、明細に識別すること

施したまひて、作願してともにかの阿彌陀如來の、安樂淨土に往生せしめたまふなり。還相といふは、かの土に生じをはりて、奢摩他毘婆舍那、方便力成就することをえて、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、ともに佛道にむかへしめたまふなり。もしは往もしは還、みな衆生をぬきて、生死海を渡せんがためにしたまへり、このゆへに廻向爲首得成就大悲心故とのたまへり。已上。またいはく、淨入願心といふは、論にいはく、またさきに觀察莊嚴佛土功德成就と、莊嚴佛功德成就と、莊嚴菩薩功德成就とをときつ。この三種の成就は、願心莊嚴したまへるなり、しるべし。しるべしといふは、この三種の莊嚴成就は、もと四十八願等の清淨願心の莊嚴したまふところなるによりてなり。因淨なるがゆへに果淨なり、因なくして他の因のあるにはあらざるなり。已上。また論にいはく、出第五門といふは、大慈悲をもて、一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身をしめして、生死のその煩惱のはやしのなかに廻入して、神通に遊戲し、教化地にいたる。本願力の廻向をもてのゆへに、これを出第五門となづくとのたまへり。已上。光明寺の和尚ののたまはく、また廻向發願してむまるゝものは、かならず決定眞實心のうちに、廻向したまへる願をもちゐて、得生の想をなせ。この心ふかく信ぜること、

三業―身と口と意との業

五無間―五逆罪のこと、無間地獄に墮つる因なり

らず、かるがゆへに不廻向となづくるなり。しかるに微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死海に漂沒して、眞實の廻向心なし、淸淨の廻向心なし。このゆへに如來、一切苦惱の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、廻向心を首として、大悲心を成就することをえたまへるがゆへに、利他眞實の欲生心をもて、諸有海に廻施したまへり。欲生すなはちこれ廻向心なり、これすなはち大悲心なるがゆへに、疑蓋まじはることなし。

こゝをもて本願の欲生心成就の文。經にのたまはく、至心に廻向したまへり。かのくにに生ぜんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退轉に住す。たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞく。已上。またのたまはく、所有の善根廻向したまへるを、歡喜愛樂して、無量壽國に生ぜんと願ずれば、願にしたがひてみな生じて、不退轉乃至無上正等菩提をう。五無間誹謗正法、および謗聖者をのぞく。已上。

淨土論にいはく、いかんが廻向せる、一切苦惱の衆生をすてずして、心につねに作願すらく、廻向を首として。大悲心を成就することをえたまへるがゆへに、廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相といふは、おのれが功德をもて、一切衆生に廻

る行なり
摩訶衍—大乘と譯す、佛果の大涅槃を得る法
有爲—因緣によりて生じたる諸現象
如實修行相應—信ずる所及び修行することが法の實義にかなふをいふ

すれば、すなはちよく念佛の心動ぜず。もしよく念佛の心動ぜざれば、すなはちつねに無量佛を覩見す。もしつねに無量佛を覩見すれば、すなはち如來の體常住をみる。もし如來の體常住をみれば、すなはちよく法ながく不滅なることをしる。もしよく法ながく不滅なることをしれば、辨才無障礙をうることをう。もし辨才無障礙をうれば、すなはちよく無邊の法を開演す。もしよく無邊の法を開演すれば、すなはちよく慈愍して衆生を度す。もしよく慈愍して衆生を度すれば、すなはち堅固の大悲心をう。もし堅固の大悲心をうれば、すなはちよく甚深の法を愛樂す。もしよく甚深の法を愛樂すれば、すなはちよく有爲のとがを捨離す。もしよく有爲のとがを捨離すれば、すなはち憍慢および放逸をはなる。もし憍慢および放逸をはなるれば、すなはちよく一切衆を兼利す。もしよく一切衆を兼利すれば、すなはち生死に處して疲厭なけん。略抄。

論の註にいはく、如實修行相應となづく。このゆへに、論主はじめに我一心とのたまへり。已上。またいはく、經のはじめに如是と稱す、信をあらはして能入とす。已上。

つぎに欲生といふは、すなはちこれ如來諸有の群生を招喚したまふ勅命なり。すなはち眞實の信樂をもて、欲生の體とするなり。まことにこれ大小、凡聖、定散、自力の迴向にあ

波羅密―梵語、度又は到彼岸と譯す、娑婆のこの岸を渡りて涅槃の彼岸に到るの義菩薩の修す

奉すれば、すなはち信心退轉せざることをう。もし信心退轉せざることをうれば、かのひとの信力よくうごくことなし。もし信力よくうごくことなきことをうれば、すなはち諸根淨明利なることをう。もし諸根淨明利なることをうれば、すなはち善知識に親近することをう。すなはち善知識に親近することをうれば、すなはちよく廣大の善を修集す。もしよく廣大の善を修集すれば、かのひと大因力を成就す。もしひと大因力を成就すれば、すなはち殊勝決定の解をう。もし殊勝決定の解をうれば、すなはち諸佛のために護念せらる。もし諸佛のために護念せらるれば、すなはちよく菩提心を發起す。もしよく菩提心を發起すれば、すなはちよく佛の功德を勤修せしむ。もしよく佛の功德を勤修すれば、すなはちよくむまれて如來のいへにあり。もしむまれて如來のいへにあることをうれば、すなはち善をして巧方便を修行す。もし善をして巧方便を修行すれば、すなはち信樂の心淸淨なることをう。もし信樂の心淸淨なることをうれば、すなはち增上の最勝心をう。もし增上の最勝心をうれば、すなはちつねに波羅密を修習す。もしつねに波羅密を修習すれば、すなはちよく摩訶衍を具足す。もしよく摩訶衍を具足すれば、すなはちよく法のごとく佛を供養せん。もしよく法のごとく佛を供養

うたがひをたゝしむ、その心の所樂にしたがひて、あまねくみな滿足せしむ。またいはく、信は道のもとゝす、功德の母なり。一切のもろ〳〵の善法を長養す、疑網を斷除して、愛流をいでて、涅槃無上の道を開始せしむ。信は垢濁なし、心清淨にして憍慢を滅除す、恭敬の本なり、また法藏第一のたからとす。清淨の手として衆行をうく、信はよく惠施して心におしむことなし。信はよく歡喜して佛法にいる、信はよく智功德を增長す、信はよくかならず如來地にいたる、信は諸根をして淨明利ならしむ、信力堅固にして、よく壞することなし、信はよくながく煩惱の本を滅す、信はよくもはら佛の功德にむかへしむ、信は境界において所著なし、諸難を遠離して無難をえしむ、信はよく衆魔のみちを超出し、無上解脱道を示現せん、信は功德のためにたねをやぶらず、信はよく菩提樹を生長す、信はよく最勝智を增益す、信はよく一切佛を示現せん。このゆへに行によりて次第をとく、信樂最勝にして、はなはだうることかたし。乃至。もしつねに諸佛を信奉すれば、すなはちよく大供養を興集す。もしよく大供養を興集すれば、かのひと佛の不思議を信ず。もしつねに尊法に信奉すれば、すなはち佛法をきくに厭足なし、もし佛力をきくに厭足なければ、かのひと法の不思議を信ず。もしつねに清淨僧に信

なり、波羅密は度と譯す、菩薩の修する行の一つなり、財施法施無畏施を行ふことをいふ

乃至ーこのうちに持戒忍辱精進禪定の四波羅密をふくむ、こゝは六度中の第一と第六を上げ他の四を乃至にふくます

般若波羅密ー智慧波羅密なり、一切諸法を照了して通達無礙なるをいふ

一子地ー一切衆生の平等に我一子の如く憐む心をおこす地位

生は、つひにさだめてまさに大信心をうべきがゆへに、このゆへに、ときて一切衆生悉有佛性といふなり。大信心はすなはちこれ佛性なり、佛性はすなはちこれ如來なり。佛性は一子地となづく、なにをもてのゆへに、一子地の因緣をもてのゆへに。菩薩はすなはち一切衆生において、平等心をえたり、一切衆生はつひにさだめて、まさに一子地をうべきがゆへに、このゆへに、ときて一切衆生悉有佛性といふなり。一子地はすなはちこれ佛性なり、佛性はすなはちこれ如來なり。已上。またいはく、あるひは阿耨多羅三藐三菩提をとくに、信心を因とす、これ菩提の因、また無量なりといへども、もし信心をとけば、すなはちすでに攝盡しぬ。已上。またいはく、信にまた二種あり、一には聞より生ず、二には思より生ず。このひとの信心、聞よりしてしかも生じて、思より生ぜず、このゆへになづけて信不具足とす。また二種あり、一には道ありと信ず、二には得者を信ず。このひとの信心、たゞ道ありと信じて、すべて得道のひとありと信ぜず、これをなづけて信不具足とす。已上抄出。

華嚴經にいはく、この法をききて、信心を歡喜して、うたがひなきものは、すみやかに無上道をならん、もろ〳〵の如來とひとしと。またいはく、如來よくながく一切衆生の

阿耨多羅三藐三菩提—梵語、無上正偏知と譯す、佛の覺智をいふ

檀波羅密—梵語施波羅密のこと

如來、苦惱の群生海を悲憐して、無礙廣大の淨信をもて、諸有海に廻施したまへり、これを利他眞實の信心となづく。

本願信心の願成就の文。經にのたまはく、あらゆる衆生、その名號をききて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。已上。またいはく、他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號をききて、よく一念の淨信をおこして、歡喜せん。已上。

涅槃經にいはく、善男子、大慈大悲をなづけて佛性とす、なにをもてのゆへに、大慈大悲は、つねに菩薩にしたがふこと、かげのかたちにしたがふがごとし。一切衆生つひにさだめて、まさに大慈大悲をうべし、このゆへに、ときて一切衆生悉有佛性といふなり。大慈大悲は、なづけて佛性とす。佛性はなづけて如來とす。大喜大捨をなづけて佛性とす、なにをもてのゆへに、菩薩摩訶薩は、もし二十五有にあたはず、すなはち阿耨多羅三藐三菩提をうることあたはず、もろ〳〵の衆生、つひにまさにうべきをもてのゆへなり。このゆへにときて一切衆生悉有佛性といへるなり。大喜大捨は、すなはちこの佛性なり。佛性はすなはちこれ如來なり。佛性は大信心となづく、なにをもてのゆへに、信心をもてのゆへに、菩薩摩訶薩は、すなはちよく檀波羅密、乃至般若波羅密を具足せり、一切衆

法爾―古も今も常に斷くある事
無量光明土―極樂淨土
諸有海―二十五有の迷の世界

これ世間なり。明闇といふは、明はすなはちこれ出世なり、闇はすなはちこれ世間なり。また明はすなはち智明なり。闇はすなはち無明なり。涅槃經にいはく、闇はすなはち世間なり、明はすなはち出世なり、闇はすなはち無明なり、明はすなはち智明なり。已上。

つぎに信樂といふは、すなはちこれ如來の滿足大悲、圓融無礙の信心海なり。このゆへに疑蓋間雜あることなし、かるがゆへに信樂となづく。すなはち利他廻向の至心をもて、信樂の體とするなり。しかるに無始よりこのかた、一切群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、淸淨の信樂なし、法爾として、眞實の信樂なし、こゝをもて、無上の功德、値遇しがたく、最勝の淨信、獲得しがたし。一切凡小、一切時中に、貪愛の心、つねによく善心をけがし、瞋憎の心、つねによく法財をやく、急作急修して頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雜毒雜修の善となづく、また虛假諂僞の行となづく、眞實の業となづけざるなり。この虛假雜毒の善をもて、無量光明土に生ぜんと欲する、これかならず不可なり。なにをもてのゆへに、まさしく如來、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、疑蓋まじはることなきによりてなり。この心はすなはち如來の大悲心なるがゆへに、かならず報土の正定の因となる。

實諦―眞諦に同じ、諦は理にして動かす可らざる道理、即ち眞理のこと

出世―有漏の世間を解脫すること

ふは、これかならず不可なり。なにをもてのゆへに、まさしくかの阿彌陀佛、因中に菩薩の行を行じたまひしとき、乃至一念一刹那も、三業の所修、みなこれ眞實心のなかになしたまへるによりてなり。おほよそほどこしたまふところ、趣求をなす、またみな眞實なり、また眞實に二種あり、一には自利眞實、二には利他眞實なり。乃至。不善の三業をば、かならず眞實心のうちに、すてたまへるをもちゐよ。またもし善の三業をおこさば、かならず眞實心のうちに、なしたまへるをもちゐて、內外明闇をえらばず、みな眞實をもちゐるがゆへに、至誠心となづく。要を鈔す。しかれば大聖の眞言、宗師の釋義、まことにしんぬ、この心すなはちこれ不可思議、不可稱、不可說、一乘大智願海、迴向利益他の眞實心なり、これを至心となづく。すでに眞實といへり。眞實といふは、涅槃經にいはく、實諦といふは、一道淸淨にして、二あることなきなり。眞實といふは、虛空すなはちこれ如來なり。如來はすなはちこれ眞實なり。眞實はすなはち虛空なり。虛空はすなはちこれ眞實なり。眞實はすなはちこれ佛性なり、佛性はすなはちこれ眞實なり。已上。

釋に不簡內外明闇といへり。內外といふは、內はすなはちこれ出世なり。外はすなはち

三寶—佛法僧

沙門—梵語勤息と譯す、諸の善法を修し惡法を止息するものの意

無有等々—等しく等しき數あることなし、即ち數量のこの上なく大なる事

那由他—梵語萬億又は千億といふ、非常の大數なり

白法—黑法に對する語、善法。

きにして承問す、勇猛精進にして志願ものうきことなし、もはら淸白の法をもとめて、もて群生を惠利しき。三寶を恭敬し、師長に奉事しき。大莊嚴をもて衆生を具足して、もろ／＼の衆生をして、功德成就せしめたまへり。已上。

無量壽如來會にいはく、佛、阿難につげたまはく、かの法處比丘、世間自在王如來、および諸天人、魔、梵、沙門、婆羅門等のまへにして、ひろくかくのごときの大弘誓をおこしき、みなすでに成就したまへり。世間に希有にして、この願をおこしをはりて、實のごとく安住す、種々の功德具足して、威德廣大淸淨佛土を莊嚴せり。かくのごときの菩薩の行を修習せるとき、無量無數、不可思議、無有等々、億那由他、百千劫をふるうちに、はじめていまだかつて、貪瞋および癡欲害恚の想をおこさず、色聲香味觸の想をおこさず、諸の衆生において、つねに愛敬をねがふこと、なをし親屬のごとし。乃至。その性、調順にして暴惡あることなし、もろ／＼の有情において、つねに慈忍の心をいだきて、詐諂せず、また懈怠なし、善言策進して、もろ／＼の白法をもとめしむ。あまねく群生のために、勇猛にして退することなく、世間を利益する大願圓滿したまへり。略出。

光明寺の和尚ののたまはく、この雜毒の行を迴して、かの佛の淨土に求生せんとおも

三昧―梵語にして定といふ

このゆへに論主、はじめに一心といへる歟、しるべし。

また問、字訓のごとき論主のこゝろ、三をもて一とせる義、その理しかるべしといへども、愚惡の衆生のために、阿彌陀如來すでに三心の願をおこしたまへり、いかん思念せんや。答、佛意はかりがたし。しかりといへども、ひそかにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして淸淨の心なし、虛假諂僞にして眞實の心なし。こゝをもて如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も、淸淨ならざることなし、眞心ならざることなし。如來、淸淨の眞心をもて、圓融無礙、不可思議、不可稱、不可說の至德を成就したまへり。如來の至心をもて、諸有の一切煩惱、惡業邪智の群生海に廻施したまへり、すなはちこれ利他の眞心をあらはす、かるがゆへに疑蓋まじはることなし。この至心は、すなはちこれ至德の尊號を、その體とせるなり。こゝをもて大經にのたまはく、欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想、瞋想、害想を生ぜず、色聲香味の法に著せず、忍力成就して衆苦をはからず、少欲知足にして染恚癡なし、三昧常寂にして智慧無礙なり、虛僞諂曲の心あることなし。和顏愛語にして、こゝろをさ

を合して一とせる歟。わたくしに、三心の字訓をうかゞふに、三すなはち一なるべし。そのこゝろいかんとならば、至心といふは、至といふは、すなはちこれ眞なり、實なり、誠なり。心といふは、すなはちこれ種なり、實なり。信樂といふは、信といふは、すなはちこれ眞なり、實なり、誠なり、滿なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なり。樂といふは、すなはちこれ欲なり、願なり、愛なり、悅なり、歡なり、喜なり、賀なり、慶なり。欲生といふは、欲といふは、すなはちこれ願なり、樂なり、覺なり、知なり。生といふは、すなはちこれ成なり、作なり、爲なり、興なり。あきらかにしりぬ、至心はすなはちこれ眞實誠種の心なるがゆへに、疑蓋まじはることなきなり。信樂はすなはちこれ眞實誠滿の心なり、極成用重の心なり、審驗宣忠の心なり、欲願愛悅の心なり、歡喜賀慶の心なるがゆへに、疑蓋まじはることなきなり。欲生はすなはちこれ願樂覺知の心なり、成作爲興の心なり、大悲廻向の心なるがゆへに、疑蓋まじはることなきなり。いま三心の字訓を按ずるに、眞實の心にして虛假まじはることなし、正直の心にして邪僞まじはることなし、まことにしんぬ、疑蓋間雜なきがゆへに、これを信樂となづく。信樂すなはちこれ一心なり、一心すなはちこれ眞實信心なり。

摩訶薩―梵語大有情と譯す、菩薩の行をなし、一切衆生を濟度する人々をいふ
住水寶珠―又は如意寶珠ともいふ、此の珠をもつて水中に入れば如何なる所にても沈溺することなしといふ、故にこの名あり
瓔珞―頸胸等にかくる珠玉のかざり

ば、一切の怨敵そのたよりを、えざるがごとし。菩薩摩訶薩も、また〳〵かくのごとし、菩提心不可壞の法藥をうれば、一切の煩惱、諸魔、怨敵、壞することあたはざるところなり。たとへば、ひとありて、住水寶珠をえて、その身に瓔珞とすれば、ふかき水中にいりて、しかも沒溺せざるがごとし。菩提心の住水寶珠をうれば、生死海にいりて、しかも沈沒せず。たとへば金剛は百千劫にをいて、水中に處して、しかも爛壞し、また異變なきがごとし。菩提の心もまた〳〵かくのごとし、無量劫において、生死のなかのもろ〳〵の煩惱業に處するに、斷滅することあたはず、また損減なし。已上。またいはく、われまた、かの攝取のなかにあれども、煩惱まなこをさへて、みたてまつることあたはずといへども、大悲ものうきことなくして、つねにわが身をてらしたまふ。已上。しかれば、もしは行もしは信、一事として、阿彌陀如來の清淨願心の、廻向成就したまふところにあらざることなし、因なくして他の因あるにはあらざるなり、しるべし。

問、如來の本願、すでに至心信樂欲生のちかひをおこしたまへり、なにをもてのゆへにか、論主一心といふや。答、愚鈍の衆生、解了やすからしめんがために、彌陀如來、三心をおこしたまふといへども、涅槃の眞因は、たゞ信心をもてす、このゆへに論主三

往生要集—源信和尚の撰

の、智識等にまふさく、おほきにすべからく、慚愧すべし、釋迦如來は、まことにこれ、慈悲の父母なり、種々の方便をもて、われらが無上の信心を、發起せしめたまへり。已上。

貞元の新定釋教の目錄、卷第十一にいはく、集諸經禮懺儀上下大唐西崇福寺の沙門智昇の撰なり。貞元十五年十月二十三日に、勅になずらへて勘編していると云々。懺儀の上卷は、智昇諸經によりて、懺儀をつくるなかに、觀經によりて善導の禮懺の日中の時の禮をひけり。下卷は比丘善導の集記と云々。かの懺儀によりて、要文を鈔していはく、二には深心、すなはちこれ眞實の信心なり、自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して、火宅をいでずと信知し、いま彌陀の本弘誓願は、名號を稱すること、しも十聲一聲等にいたるにおよぶまで、さだめて往生をうと信知して、一念にいたるにおよぶまで、疑心あることなし、かるがゆへに深心となづく。乃至。それかの彌陀佛の名號をきくことをうることありて、歡喜して一念をいだせば、みなまさにかしこに生ずることをうべし。抄出。

往生要集にいはく、入法界品にいはく、たとへば、ひとありて、不可壞のくすりをうれ

て、たがひにあひ惑亂し、およびみづからつみをつくりて、退失すとゝくにたとふ。西のきしのうへに、ひとありてよばふといふは、すなはち彌陀の願意にたとふ。須臾に西のきしにいたりて、善友あひみてよろこぶといふは、すなはち衆生ひさしく生死にしづんで、曠劫より輪廻し迷倒して、みづからまどふて解脱するによしなし、あふいで、釋迦發遣して、おしへて西方にむかへたまふことをかうぶり、また彌陀の悲心招喚したまふによりて、いま二尊のこゝろに信順して、水火の二河をかへりみず、念々にわするゝことなく、かの願力の道に乘じて、いのちをすてゝのち、かのくにに生ずることをえて、佛とあひみて慶喜することなんぞきはまらん、といふにたとふるなり。また一切の行者、行住坐臥に、三業の所修、晝夜時節をとふことなく、つねにこの解をなし、つねにこの想をなす、かるがゆへに廻向發願心となづく。

また廻向といふは、かのくにに生じおはりて、かへりて、大悲をおこして、生死に廻入して、衆生を敎化するを、また廻向となづくるなり。三心すでに具すれば、行として成ぜざることなし、願行すでに成じて、もし生ぜずば、このことはりあることなし。またこの三心、また定善の義を通攝す、しるべし。已上。またいはく、うやまひて一切往生

六根—眼、耳、鼻、舌、身意、の六
六識—色、聲、香、味、觸、法の六
六塵—六境のこと、六識の認識の對境なり、六境は心神を汚し眞性を穢ますものなるが故に塵といふ
五陰—色、受、想、行、識、の五なり、陰とは善法をかくす故に名づく
四大—一切の色法を構成する四つの成分なり、地(堅性)、水(濕性)、火(暖性)、風(動性)の四

はち極樂寶國にたとふ。群賊惡獸いつはりしたしむといふは、すなはち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大にたとふ。ひとなき空迥のさはといふは、すなはちつねに惡友にしたがひて、眞の善知識にあはざるにたとふ。水火の二河といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしとたとふ、中間の白道四五寸といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく淸淨願往生の心を生ぜしむるにたとふ。いまし貪瞋こはきによるがゆへに、すなはち水火のごとしとたとふ、善心微なるがゆへに、白道のごとしとたとふ、また水波つねに道をうるほすといふは、すなはち愛心つねにおこりて、よく善心を染汚するにたとふ。また火焰つねに道をやくといふは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財をやくにたとふ、ひと道のうへをゆきて、たゞちに西にむかふといふは、すなはちもろ〳〵の行業を廻して、たゞちに西方にむかふにたとふ。ひんがしのきしに、ひとのこゑのすゝめつかはすをきゝて、道をたづねてたゞちに西にすゝむといふは、すなはち釋迦すでに滅したまふて、のちのひとみたてまつらず、なを敎法ありて、たづぬべきにたとふ、すなはちこれをこゑのごとしとたとふるなり。あるひはゆくこと一分二分するに、群賊等よばひかへすといふは、すなはち別解別行惡見のひとら、みだりに見解をも

たづねて、さきにむかひてしかもゆかん、すでにこの道あり、かならず度すべしと、この念をなすとき、ひんがしのきしに、たちまちひとのすゝむるこゑをきく。きみ、たゞ決定して、この道をたづねてゆけ、かならず死の難なけん、もし住せば、かならず死せんと。また西のきしのうへに、ひとありて、よばふていはく。なんぢ、一心正念にして、たゞちにきたれ、われよくなんぢをまもらん、すべて水火の難に堕せんことをおそれざれと。このひとすでに、こゝにつかはし、かしこによばふをきゝて、すなはちみづからまさしく身心にあたりて決定して、道をたづねてたゞちにすゝんで、疑怯退心を生ぜず。あるひはゆくこと、一分二分するに、ひんがしのきしの群賊等よばふていはく、きみ、かへりきたれ、このみち嶮悪なり、すぐることをえじ、かならず死せんことうたがはず、われらすべて、悪心ありてあひむかふことなしと。このひと、よばふこゑをきくといへども、またかへりみず、一心にたゞちにすゝんで、道を念じてしかもゆけば、須臾にすなはち西のきしにいたりて、ながくもろ〳〵の難をはなれ、善友あひみて、慶樂することやむことなからんがごとし。これはこれたとへなり。つぎにたとへを合せば、ひんがしのきしといふは、すなはちこの娑婆の火宅にたとふ。西のきしといふは、すな

ひとつの白道あり、ひろさ四五寸ばかりなるべし、このみちひんがしのきしより西のきしにいたるに、またながさ百歩。そのみづの波浪、まじはりすぎて、道をうるほす、その火焔、またきたりて道をやく、水火あひまじはりて、つねにして休息することなけん。このひと、すでに空曠のはるかなるところに、いたるに、さらに人物なし。おほく群賊惡獸ありて、このひとの單獨なるをみて、きほひきたりて、このひとをころさんとす。死をおそれて、たゞちにはしりて西にむかふに、忽然として、この大河をみて、すなはちみづから念言すらく、この河、南北に邊畔をみず、中間にひとつの白道をみる、きはめてこれ狹少なり。ふたつのきし、あひさることちかしといへども、なにによりてかゆくべき、今日さだめて死せんことうたがはず、まさしくいたりかへらんとすれば、群賊惡獸、漸々にきたりせむ、まさしく南北にさりはしらんとすれば、惡獸毒蟲きほひきたりて、われにむかふ、まさしく西にむかひて、道をたづねてしかもゆかんとすれば、またおそらくばこの水火の二河に墮せんことを。ときにあたりて惶怖すること、またいふべからず。すなはちみづから思念すらく、われいまかへるともまた死せん、住すともまた死せん、ゆくともまた死せん、一種として死をまぬかれざれば、われやすくこの道を

り。したがひて一門にいるは、すなはち一解脱智慧の門にいるなり。これがために、縁にしたがひて行をおこして、おの〳〵解脱をもとめよ。なんぢなにをもてか、いまし有縁の要行にあらざるをもてわれを障惑する。しかるにわが所愛は、すなはちこれが有縁の行なり、すなはちなんぢが所求にあらず。なんぢが所愛はすなはち、これなんぢが有縁の行なり、またわが所求にあらず。このゆへにおの〳〵所樂にしたがひて、しかもその行を修すれば、かならずとく解脱をうるなり。行者まさにしるべし、もし解を學せんとおもはゞ、凡より聖にいたり、乃至佛果まで、一切さはりなし、みな學することをえよ。もし行を學せんとおもはゞ、かならず有縁の法によれ、すこしき功勞をもちゐるに、おほく益をうればなり。

譬喩―二河白道の譬

また一切往生人等にまふさく、いまさらに行者のために、ひとつの譬喩をときて、信心を守護して、もて外邪異見の難をふせがん。なにものかこれや。たとへばひとありて西にむかひてゆかんとするに、百千の里ならん。忽然として、中路にふたつのかはあり、一にはこれ火のかは、みなみにあり、二にはこれ水のかは、きたにあり。二河おの〳〵ひろさ百歩、おの〳〵ふかくしてそこなし、南北にほとりなし。まさしく水火の中間に、

四重—殺生偸盜邪婬妄語の四

闡提—梵語斷善根と譯す

三界惡道—欲界色界、無色界の三界、及び地獄、餓鬼畜生の三惡道

無漏無生—涅槃の異名漏は煩惱のこと

ず。たゞこれ決定して、一心にとりて、正直にすゝんで、かのひとの語をきくことをえざれ。すなはち進退の心ありて、怯弱を生じて廻顧すれば、道におちて、すなはち往生の大益を失するなり。問ていはく、もし解行不同の邪雜のひとらありて、きたりてあひ惑亂して、あるひは種々の疑難をときて、往生をえじといひ、あるひはいはん、なんたち衆生、曠劫よりこのかた、および今生の身口意業に、一切凡聖の身のうへにおいて、つぶさに十惡五逆、四重謗法闡提、破戒破見等のつみをつくりて、いまだ除盡することあたはず、しかるにこれらのつみは、三界惡道に繋屬す、いかんぞ一生修福の念佛をもて、すなはちかの無漏無生のくにゝいりて、ながく不退のくらゐを證悟することをえんや。こたへていはく、諸佛の教行、かず塵沙にこえたり、さとりをうくる機緣、情にしたがひてひとつにあらず。たとへば世間のひと、まなこにみつべく信ずべきがごときは、明のよく闇を破し、空のよく有をふくみ、地のよく載養し、水のよく生潤し、火のよく成壞するがごとし。かくのごとき等の事、こと〴〵く待對の法となづく。すなはち目にみつべし、千差萬別なり。いかにいはんや、佛法不思議のちから、あに種々の益なからんや。したがひて一門をいづるは、すなはち一煩惱の門をいづるな

行住坐臥ー常にと云ふに同じ

て、すなはちともに同心同時に、おの〱舌相をいだして、あまねく三千世界におほふて、誠實の言をときたまはく、なんたち衆生、みなこの釋迦の所說、所讃、所證を信ずべし、一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近をとはず、たゞよくかみ百年をつくし、しも一日七日にいたるまで、一心にもはら彌陀の名號を念じて、さだめて往生をうること、かならずうたがひなきなり。このゆへに一佛の所說をば、すなはち一切の佛、おなじくその事を證誠したまふ。これを人について、信を立すとなづくるなり。乃至。またこの正のなかについて、また二種あり。一には一心にもはら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近をとはず、念々にすてざるをば、これを正定の業となづく、かの佛の願に順ずるがゆへに、もし禮誦等によるをば、すなはちなづけて助業とす。この正助二行をのぞきて、已外の自餘の諸善をば、こと〲く雜行となづく。乃至。すべて疎雜の行となづくるなり。かるがゆへに深心となづく。

三には廻向發願心。乃至。また廻向發願して生ずるものは、かならず決定して、眞實心のうちに廻向したまへる願をもちゐて、得生の想をなせ。この心深信せること、金剛のごとくなるによりて、一切の異見、異學、別解、別行人等のために、動亂破壞せられ

莊嚴—佛身佛土の麗はしきかざり

すなはちこれ了教なり、菩薩等の說をば、こと〴〵く不了教となづくるなり、しるべし。このゆへにいまのとき、あふひで一切有緣の往生人等をすゝむ。たゞふかく佛語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の不相應の教を信用して、もて疑礙をなし、まどひをいだきて、みづからまどひて、往生の大益を廢失すべからず。乃至。釋迦、一切の凡夫をおしへすゝめて、この一身をつくして專念專修して、いのちをすてゝのち、さだめてかのくにゝむまるといふは、すなはち十方諸佛、こと〴〵くみなおなじくほめ、おなじくすゝめ、おなじく證したまふ。なにをもてのゆへに、同體の大悲なるがゆへに。一佛の所化は、すなはちこれ一切佛の化なり、一切佛の化は、すなはちこれ一佛の所化なり。すなはち彌陀經のなかにとかく、釋迦、極樂の種々の莊嚴を讃嘆したまふ。また一切の凡夫をすゝめて、一日七日一心に、もはら彌陀の名號を念ぜしめて、さだめて往生をえしめたまふ。つぎしもの文にのたまはく、十方におの〳〵恒河沙等の諸佛ましまして、おなじく、釋迦よく五濁、惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信のさかりなるときにおいて、彌陀の名號を指讃して、衆生を勸勵して、稱念すればかならず往生をうとほめたまふ。すなはちその證なり。また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所說を、信ぜざらんことをおそれ

凡聖—凡夫と聖者

を信じて、身命をかへりみず、決定して行によりて、佛のすてしめたまふものをば、すなはちすて、佛の行ぜしめたまふものをば、すなはち行じ、佛のさらしめたまふところをば、すなはちされ、これを佛教に隨順し、佛意に隨順すとなづく、これを佛願に隨順すとなづく、これを眞の佛弟子となづく。また一切の行者、たゞよくこの經によりて、ふかく行を信ずるは、かならず衆生をあやまたざるなり。なにをもてのゆへに、佛はこれ滿足大悲の人なるがゆへに、實語したまふがゆへに。佛をのぞきて已還は智行いまだ滿ぜず、その學地にありて、正習の二障ありて、いまだのぞこらざるによりて、果願いまだまどかならず、これらの凡聖は、たとひ諸佛の教意を測量すれども、いまだ決了することあたはず、平章することありといへども、かならずすべからく佛證をこふて、定とすべきなり。もし佛意にかなへば、すなはち印可して、如是如是とのたまふ。もし佛意にかなはざるをば、すなはちなんたちが所說、この義不如是とのたまふ。印せざるは、すなはち無記、無利、無益の語におなじ、佛の印可したふまは、すなはち佛の正教に隨順す。もし佛の所有言說は、すなはちこれ正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。もしは多もしは少、すべて菩薩、人天等をとはず、その是非をさだめんや。もし佛の所說は、

自身—善導大師自らを云ふ

へに、まさしくかの阿彌陀佛、因中に菩薩の行を行じたまひしとき、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ眞實のうちに、なしたまひしによりてなり。おほよそ、ほどこしたまふところ、趣求をなす、またみな眞實なり。また眞實に二種あり、一には自利眞實、二には利他眞實なり。乃至。不善の三業をば、かならず眞實心のうちに、すてたまへるをもちゐよ、またもし善の三業をおこさば、かならず眞實心のうちに、なしたまひしをもちゐて、內外明闇をえらばず、みな眞實をもちゐるがゆへに至誠心となづく。

二には深心。深心といふは、すなはちこれ深信の心なり。また二種あり、一には決定して、ふかく自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに沒し、つねに流轉して、出離の緣あることなしと信ず。二には決定して、ふかくかの阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して、うたがひなく、おもんぱかりなければ、かの願力に乘じて、さだめて往生をうと信ず。また決定して、ふかく釋迦佛、この觀經の三福九品定散二善をときて、かの佛の依正二報を證讃して、ひとをして忻慕せしむと信ず。また決定してふかく彌陀經のなかに、十方恒沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決定して生ずることをうと信ずるなり。また深信するもの、あふぎねがはくば、一切の行者等、一心にたゞ佛語

三業―身、口、意なり

るなり。抄出。

またいはく、何等爲三より、しも必生彼國にいたる已來は、まさしく三心を辨定して、もて正因とすることをあかす。すなはちその二あり。一には世尊、機にしたがひて益をあらはすこと、意密にしてしりがたし、佛みづから問て、みづから徴したまふにあらずば、解をうるによしなきことをあかす。二には如來かへりて、みづからさきの三心のかずをこたへたまふことをあかす。經にのたまはく、

一には至誠心。至といふは眞なり、誠といふは實なり。一切衆生の身口意業の所修の解行、かならず眞實心のうちに、なしたまひしを、もちゐんことをあかさんとおもふ。ほかに賢善精進の相を現ずることをえざれ、うちに虚假をいだければなり。貪瞋邪僞、奸詐百端にして、惡性やめがたく、事、蛇蝎におなじ。三業をおこすといへども、なづけて雜毒の善とす、また虚假の行となづく。眞實の業となづけざるなり。もしかくのごとき安心起行をなすは、たとひ身心を苦勵して、日夜十二時に、急にもとめ急になして、頭燃をはらふがごとくするもの、すべて雜毒の善となづく。この雜毒の行を廻して、かの佛の淨土に生ぜんことをもとめんと欲するは、これかならず不可なり。なにをもてのゆ

轉してあひ成ず、信心あつからざるをもてのゆへに決定なし。決定なきがゆへに、念相續せず。また念相續せざるがゆへに、決定の信をえず。決定の信をえざるがゆへに、心あつからざるべし。これと相違せるを、如實修行相應となづく、このゆへに論主、はじめに我一心とのたまへり。已上。

讃阿彌陀佛の偈にいはく、曇鸞和尚の造なり、あらゆるもの、阿彌陀の德號をきゝて、信心歡喜して、きくところをよろこばんこと、いまし一念におよぶまでせん、至心のひと廻向したまへり。生ぜんと願ずれば、みなゆくことをえしむ、たゞ五逆と謗正法とをばのぞく。かるがゆへに、われ頂禮して往生を願ず。已上。

光明寺の觀經義にのたまはく、如意といふは、二種あり。一には衆生のこゝろのごとし、かの心念にしたがひて、みなこれを度すべし。二には彌陀のこゝろのごとし、五眼まどかにてらし、六通自在にして、機の度すべきものをみそなはして、一念のうちに、前なく後なく身心ひとしくおもむき、三輪開悟して、おの〳〵益することおなじからざるなり。已上。またいはく、この五濁五苦等は、六道に通じて、うけていまだなきものはあらず、つねにこれに逼惱す。もしこの苦をうけざるものは、すなはち凡數の攝にあらざ

進すべし。かくのごときの妙法すでに聽聞せば、つねに諸佛をして、しかもよろこびを生ぜしめたてまつるなり。抄出。

論の註にいはく、かの如來のみなを稱し、かの如來の光明智相のごとく、かの名義のごとく、實のごとく、修行し相應せんとおもふがゆへに。稱彼如來名といふは、いはく無礙光如來のみなを稱するなり。如彼如來光明智相といふは、佛の光明は、これ智慧の相なり。この光明、十方世界をてらすに障礙あることなし、よく十方衆生の無明の黑闇をのぞく、日月珠光の、たゞ室穴のうちの闇を破するがごときにはあらざるなり。如彼名義欲如實修行相應といふは、かの無礙光如來の名號、よく衆生の一切の無明を破す、よく衆生の一切の志願をみてたまふ。しかるに稱名憶念することあれども、しかも無明なを存して、しかも所願をみてざるは、いかんとなれば、實のごとく修行せざると、名義と相應せざるによるがゆへなり。いかんが不如實修行と、名義と相應せざるとする。いはく如來はこれ實相の身なり、これものゝための身なりとしらず。また三種の不相應あり、一には信心あつからず、存せるがごとし、亡せるがごときのゆへに。二には信心一ならず、決定なきがゆへに。三には信心相續せず、餘念へだつるがゆへに。この三句展

五無間—詳しくは五無間業、五逆罪に同じ

二乘—聲聞緣覺

滅度—涅槃に入ること、生死の大患永く滅し煩惱の潮流を超度する故に名づく

國に生ぜんと願ぜば、願にしたがひて、みなむまれ、不退轉乃至無上正等菩提をえん。五無間正法を誹謗し、および聖者をそしらんをばのぞく。已上。またのたまはく、法をききてよくわすれず、みてうやまひ、えておほきによろこばゝ、すなはちわがよき親友なり。このゆへに、まさにこゝろをおこすべし。已上。またのたまはく、かくのごときらの類は、大威德のひとなり、よく廣大佛法の異門に生ぜん。已上。またのたまはく、如來の功德は、佛のみ、みづからしろしめせり、たゞ世尊まし〳〵て、よく開示したまふ。天龍夜叉およばざるところなり、二乘をのづから名言をたつ。もしもろ〳〵の有情、まさに作佛して、行普賢にこえ、彼岸にのぼりて一佛の功德を敷演せんとき、多劫の不思議をこえむ、この中間において、身は滅度すとも、佛の勝慧はよくはかることなけん。このゆへに信聞、およびもろ〳〵の善友の攝受を具足して、かくのごときの深妙の法をきくことをえば、まさにもろ〳〵の聖尊に重愛せらるゝことをうべし。如來の勝智は、虚空に偏し、所說の義言は、たゞ佛のみさとりたまへり。このゆへに、ひろく諸智士をききて、わが敎如實の言を信ずべし。人趣の身うることははなはだかたし、如來の出世にまふあふこと、またかたし。信慧おほきときまさにいましえん。このゆへに修せんものの精

誹謗正法―佛法をそしる者

餘佛の刹―阿彌陀佛のほかの佛の淨土

不退轉―正しく成佛すべきに定り退轉することなき位

僞ならず。こゝをもて極惡深重の衆生、大慶喜心をえ、もろ〳〵の聖尊の重愛をうるなり。

至心信樂の本願の文。大經にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、心をいたし信樂して、わがくにゝむまれんとおもふて、乃至十念せん、もしむまれずば正覺をとらじ。たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞくと。已上。

無量壽如來會にのたまはく、もしわれ無上覺を證得せんとき、餘佛の刹のなかのもろもろの有情類、わが名をきゝおはらんに、所有の善根、心々廻向せしむ。わがくにゝ生ぜんと願じて、乃至十念せん、もし生ぜずば、菩提をとらじ。たゞし無間惡業をつくり、正法およびもろ〳〵の聖人を誹謗せんをばのぞく。已上。

本願成就の文。經にいはく、あらゆる衆生、その名號をきゝて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、至心に廻向したまへり。かのくにゝ生ぜんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退轉に住す。たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞく。已上。

無量壽如來會にのたまはく、他方の佛國の所有の有情、無量壽如來の名號をきゝて、よく一念の淨信をおこして、歡喜せしめ、所有の善根廻向したまへるを愛樂して、無量壽

往相の廻向―往相とは娑婆世界より淨土に往生することこれは佛智により我等に廻施したまふが故に廻向といふ

易往無人―淨土へは往き易くして然も往く人少なきをいふ自力の迷信に陷り易きが故なり

顯淨土眞實信文類三本

愚禿釋の親鸞の集

至心信樂の願。　正定聚の機。

つしんで往相の廻向を按ずるに、大信あり、大信心は、すなはちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり。

この心すなはちこれ念佛往生の願よりいでたり。この大願を選擇本願となづく、また本願三心の願となづく、また至心信樂の願となづく、また往相信心の願となづくべきなり。

しかるに常沒の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じがたきにはあらず、眞實の信樂まことにうることかたし。なにをもてのゆへに、いまし如來の加威力によるがゆへに、ひろく大悲廣惠のちからによるがゆへに、たま〳〵淨信をえば、この心顚倒せず、この心虛

自性唯心—諸法即ち眞如、萬法唯一心の見解をいふ、この見解を以て阿彌陀佛及び西方淨土を觀ずれば彌陀も眞如我れも眞如、生佛不二なりとし巳心の外に彌陀なく唯心の外に淨土なしと思ふに至る

顯淨土眞實信文類序

それ、おもんみれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。

しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心にしづんで、淨土の眞證を貶す。定散の自心にまどふて、金剛の眞信にくらし。

こゝに愚禿釋の鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閲す。ひろく三經の光澤をかうふりて、ことに一心の華文をひらく、しばらく疑問をいたして、つひに明證をいたす、まことに佛恩の深重なるを念じて、人倫の哢言をはぢず。

淨邦をねがふ徒衆、穢域をいとふ庶類、取捨をくはふといふとも、毀謗を生ずることなかれ。

弘經の大士宗師等、　無邊の極濁惡を拯濟したまふ。
道俗時衆ともに同心に、　たゞこの高僧の説を信ずべし。
六十行すでにおはんぬ、　一百二十句。

像末法滅―像法時と末法時と法滅時

金剛心―堅固なる他力の信心

三忍―忍は認可決定の義、ものを確と認め決することと之れに三あり、信忍と喜忍と悟忍なり

專雜の執心―專の執持心と雜の執持心となり念佛の一行を心に執持するを專の執心といひ雜行を執持するを雜の執心といふ

三不三信のをしへ慇懃にして、　像末法滅おなじく悲引す。
一生惡を造れども弘誓に値ぬれば、　安養界に至りて妙果を證せしむと。
善導ひとり佛の正意を明かにせり。　定散と逆惡とを矜哀して、
光明名號因縁をあらはす。　本願の大智海に開入すれば、
行者まさしく金剛心をうけしむ。　慶喜の一念相應してのち、
韋提とひとしく三忍をえ、　すなはち法性の常樂を證せしむと。
源信ひろく一代の教を開きて、　ひとへに安養に歸して一切をすゝむ、
專雜の執心淺深を判じて、　報化二土まさしく辨立せり。
極重惡人はたゞ佛を稱すべし。　われまたかの攝取のなかにあれども、
煩惱眼を障てみたてまつらずと雖も、　大悲倦事無して常に我を照し給へりと。
本師源空は佛教をあきらかにして、　善惡の凡夫人を憐愍せしむ。
眞宗の教證を片州に興す、　選擇本願惡世にひろむ。
生死輪轉の家にかへり來ることは、　決するに疑情をもて所止とす。
速かに寂靜無爲の樂にいることは、　必ず信心をもて能入とすといへり。

横超ー横ざまに五惡趣八難を飛びこへること

大會衆ー彌陀の淨土に集まる聖者

梁の天子ー武帝

天親菩薩論をつくりてとかく、無礙光如來に歸命したてまつる、
修多羅によりて眞實をあらはして、横超の大誓願を光闡す。
ひろく本願力の廻向によりて、群生を度せんがために一心をあらはす、
功德大寶海に歸入すれば、必ず大會衆のかずにいることをう、
蓮華藏世界にいたることをうれば、すなはち眞如法性の身を證せん。
煩惱の林にあそんで神通を現じ、生死の園に入て應化をしめすといへり。
本師曇鸞は梁の天子、つねに鸞の處に向て菩薩と禮し奉る。
三藏流支淨教をさづけしかば仙經を焚燒して樂邦に歸したまひき。
天親菩薩の論註解して、報土の因果誓願をあらはす。
往還の廻向は他力による。正定の因はたゞ信心なり。
惑染の凡夫信心發すれば、生死すなはち涅槃なりと證知せしむ。
必ず無量光明土にいたれば、諸有の衆生みなあまねく化すといへり。
道綽、聖道の證し難きことを決して、たゞ淨土に通入すべきことをあかす。
萬善の自力勤修を貶す、圓滿の德號專稱をすゝむ。

分陀利華―梵語白蓮華と譯す

大聖興世―釋尊出世のこと

如來の本誓―阿彌陀の本願

有無の見―有の見とは諸事物の絶えず變化するを知らずして常住と執する偏見、無の見とは諸事物の存在を否定し凡て空無に歸すとする偏見

たとへば日光の雲霧に蔽るれども、雲霧のした明にして闇なきが如し。
信をえてみて敬ひ大に慶喜すれば、すなはちよこさまに五惡趣を超截す。
一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、
佛、廣大勝解のひとゝのたまへり、このひとを分陀利華となづく。
彌陀佛の本願念佛は、邪見憍慢惡衆生、
信樂受持すること甚だもてかたし、難のなかの難これにすぎたるはなし。
印度西天の論家、中夏日域の高僧、
大聖興世の正意をあらはし、如來の本誓機に應ずることをあかす。
釋迦如來楞伽山にして、衆の爲に告命したまはく、
南天竺に龍樹大士世にいでて、悉くよく有無の見を摧破せん、
大乘無上の法を宣説し、歡喜地を證して安樂に生ぜんと。
難行の陸路くるしきことを顯示して、易行の水道たのしきことを信樂せしむ。
彌陀佛の本願を憶念すれば、自然にすなはちのとき必定にいる。
たゞよくつねに如來の號を稱して、大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。

塵刹—刹は梵語國土と譯す

必至滅度の願—阿彌陀佛四十八願中の第十一願即ち必ず滅度に至らしめんとの願なり

諸佛淨土の因、　國土人天の善惡を觀見して、
無上殊勝の願を建立し、　希有の大弘誓を超發せり。
五劫これを思惟して攝受す、　重ねて誓らくは名聲十方に聞んと。
あまねく無量、無邊光、　無礙、無對光、炎王、
淸淨、歡喜、智慧光、　不斷、難思、無稱光、
超日月光を放ちて塵刹を照す、　一切の群生光照をかうふる。
本願の名號は正定の業なり、　至心信樂の願を因とす。
等覺をなり大涅槃を證することは、　必至滅度の願成就したまへばなり。
如來世に興出したまふゆへは、　たゞ彌陀の本願海をとかんとなり。
五濁惡時の群生海、　如來如實の言を信ずべし。
よく一念喜愛の心を發すれば、　煩惱を斷ぜずして涅槃をう。
凡聖逆謗ひとしく廻入すれば、　衆水、海にいりて一味なるがごとし。
攝取の心光つねに照護したまふ、　すでによく無明の闇を破すと雖も、
貪愛瞋憎の雲霧、　つねに眞實信心の天におほへり。

壽教をさす

方便藏—眞實の福智藏に達する方便の教なり、こゝは觀無量壽經阿彌陀經をさす

報佛報土—阿彌陀佛因位の願行に報ひ顯はれたる佛身佛土のこと

頂戴すべきなり。

おほよそ、誓願について眞實の行信あり、また方便の行信あり。その眞實の行願は、諸佛稱名の願なり、その眞實の信願は、至心信樂の願なり、これすなはち選擇本願の行信なり。その機はすなはち一切善惡大小凡愚なり。往生はすなはち難思議往生なり。佛土はすなはち報佛報土なり。これすなはち誓願不可思議一實眞如海なり。大無量壽經の宗致、他力眞宗の正意なり。こゝをもて智恩報德のために、宗師の釋をひらきたるに、のたまはく、それ菩薩は佛に歸す、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜おのれにあらず、出沒かならずゆへあるがごとし、恩をしり德を報ず、理よろしくまづ啓すべし。また所願かろからず、もし如來威神を加したまはずば、まさになにをもてか達せんとする神力を乞加す。このゆへに、あふいでつぐ。已上。

しかれば大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を閲して、佛恩の深遠なるをしりて、正信念佛偈をつくりていはく、

無量壽如來に歸命し、　不可思議光に南無したてまつる。

法藏菩薩の因位のとき、　世自在王佛のみもとにありて、

有爲—爲作造作を有するの意なり因緣によりて生じたる諸現象をいふ

三有—有は因果の儼然存在する意なり、欲界色界無色界には善惡の因果儼然として存在するが故に三有といふ

二十五有—迷ひの世界の總稱

福智藏—福智二[illegible]を包藏する[illegible]

一切功德のおちはひを圓滿せるがゆへに。なをし正道のごとし、もろ〳〵の群生をして智城にいらしむるがゆへに。なをし磁石のごとし、本願の因をすふがゆへに。閻浮檀金のごとし、一切有爲の善を映奪するがゆへに。なをし伏藏のごとし、よく一切のもろ〳〵の佛法を攝するがゆへに。なをし大地のごとし、三世十方一切如來出生するがゆへに。日輪のひかりのごとし、一切凡愚の癡闇を破して、信樂を出生するがゆへに。なをし君王のごとし、一切上乘人に勝出せるがゆへに。なをし嚴父のごとし、一切のもろ〳〵の凡聖を訓導するがゆへに。なをし悲母のごとし、一切凡聖の報土、眞實の因を長生するがゆへに。なをし乳母のごとし、一切善惡の往生人を養育し守護したまふがゆへに。なをし大地のごとし、よく一切の往生をたもつがゆへに。なをし大水のごとし、よく一切煩惱の垢をすゝぐがゆへに。なをし大火のごとし、よく一切諸見のたきゞをやくがゆへに。なをし大風のごとし、あまねく世間に行ぜしめて、所礙なきがゆへに。よく三有繫縛の城をいだして、よく二十五有の門をとづ。よく眞實報土をえしめ、よく邪正の道路を辨ず、愚癡海をつくして、よく願海に流入せしむ。一切智船に乘ぜしめて、もろ〳〵の群生海にうかぶ。福智藏を圓滿し、方便藏を開顯せしむ。まことに奉持すへし、ことに

促對、豪賤對、明闇對あり、この義かくのごとし。しかるに一乘海の機を按ずるに、金剛信心絶對不二の機なり、しるべし。

うやまふて一切往生人等にまふさく、弘誓一乘海は、無礙無邊、最勝深妙、不可說不可稱、不可思議の至德を成就したまへり。なにをもてのゆへに、誓願不可思議なるがゆへに。悲願は、たとへば大虛空のごとし、もろ〳〵の妙功德廣無邊なるがゆへに。なをし大車のごとし、あまねくよくもろ〳〵の凡聖を運載するがゆへに。なをし妙蓮華のごとし、一切世間の法に染せられざるがゆへに。善見藥王のごとし、よく一切煩惱のやまひを破するがゆへに。なをし利劍のごとし、よく一切憍慢の鎧を斷ずるがゆへに。勇將幢のごとし、よく一切のもろ〳〵の魔軍を伏するがゆへに。なをし利鋸のごとし、よく一切無明の樹をきるがゆへに。なをし利斧のごとし、よく一切諸苦のえだをきるがゆへに。善知識のごとし、一切生死の縛をとくがゆへに。なをし導師のごとし、よく凡夫出要の道をしらしむるがゆへに。なをし涌泉のごとし、智慧水をいだして窮盡することなきがゆへに。なをし蓮華のごとし、一切のもろ〳〵の罪垢に染せられざるがゆへに。なをし疾風のごとし、よく一切のもろ〳〵の障霧を散ずるがゆへに。なをし好蜜のごとし、

因行果德對—諸善は證りに至る因行であり、念佛は阿彌陀佛が因行を積みて成就したる果上の德なり

機堪不機堪對—念佛は末世の吾人の根機に相應するが諸善に我我の根機に堪へ得ざる故

奢促對—奢は賒に通ず遲きこと促は速なり念佛の人は證りを開くこと速く諸行の人は遲し

善見藥王—善見は藥名なり、最も優れたる藥なる故に王と云ふ

出要の道—迷ひの世界を出離するの要道

光明寺―善導大師のこと、其の所住により名く
頓教―幾多の修行を經ずして一足飛に佛果に至る教
漸教―數多の劫を經幾多の行を修し漸次佛果に到る教
還丹―神仙の作る藥名
念佛諸善―念佛と其他の善根とを對比す
直辨因明―念佛は尊によりて直接往生の業と辨明せられ諸善は只因みに明されたるもの
名號定散對―念佛は阿彌陀如來より廻施せられたる行、諸善は自力定散の行

なり。已上。

光明寺ののたまはく、われ菩薩藏頓教一乘海による。またいはく、瓔珞經のなかには、漸教をとけり、萬劫に功を修して不退を證す。觀經彌陀經等の說は、すなはちこれ頓教菩提藏なり。已上。樂邦文類にいはく、宗釋禪師のいはく、還丹の一粒は、くろがねを變じてこがねとなす。眞理の一言は、惡業を轉じて善業となす。已上。

しかるに教について、念佛諸善比挍對論するに、難易對、頓漸對、橫竪對、超涉對、順逆對、大小對、多少對、勝劣對、親疎對、近遠對、深淺對、强弱對、重輕對、廣狹對、純雜對、徑迂對、捷遲對、通別對、不退退對、直辨因明對、名號定散對、理盡非理盡對、勸無勸對、無間間對、斷不斷對、相續不續對、無上有上對、上々下々對、思不思議對、因行果德對、自說他說對、廻不廻向對、護不護對、證不證對、讃不讃對、付屬不付屬對、了不了教對、機堪不堪對、選不選對、眞假對、佛滅不滅對、法滅利不利對、自力他力對、有願無願對、攝不攝對、入定聚不入對、報化對あり、この義かくのごとし。しかるに本願一乘海を按ずるに、圓融滿足極速無礙絕對不二の教なり。また機について、對論するに、信疑對、善惡對、正邪對、是非對、實虛對、眞僞對、淨穢對、利鈍對、奢

大本―大無量壽經

不虚作住持功德―佛の不虚作力を以て確と吾人を持ちたまふ功德

法藏菩薩―阿彌陀佛の因位修行中の名

一切種智―一切の事物を知る智

天の虚假邪僞の善業、雜毒雜心の屍骸をやどさんや。かるがゆへに大本にのたまはく、聲聞あるひは菩薩、よく聖心をきはむることなし、たとへば、むまれてよりめしゐたるものゝ、ゆきてひとを開導せんとおもはんがごとし。如來智慧海、深廣にして涯底なし、二乘のはかるところにあらず、たゞ佛のみ、ひとりあきらかにさとりたまへり。已上。

淨土論にいはく、なにものか莊嚴不虚作住持功德成就、偈に、佛の本願力をみそなはすに、まうあふて、むなしくすぐるものなし、よくすみやかに功德の大寶海を滿足せしむとのたまへるがゆへに。不虚作住持功德成就は、けだしこれ阿彌陀如來の本願力なり、いままさに略して虚空の相にして、住持にあたはざるをしめして、もてかの不虚作住持の義をあらはす。乃至。いふところの不虚作住持は、もと法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とによる、願もて力を成ず。力もて願につく。願徒然ならず、力虚設ならず、力願あひかなふて、畢竟してたがはず、かるがゆへに成就といふ。またいはく、海は、いふこゝろは、佛の一切種智深廣にして涯もなし、二乘雜善の中下の屍骸をやどさず、これを海のごとしとたとふ。このゆへに天人不動の衆、清淨の智海より生ずといへり。不動は、いふこゝろは、かの天人、大乘根を成就して傾動すべからざる

畢竟―大乘一乘に至極の教なる故に云ふ
莊嚴畢竟―大乘の教により修する六波羅密の因行はよく果をかざるが故に莊嚴といふ
究竟畢竟―大乘の證果たる涅槃のさとりのこと
法王―阿彌陀佛のことと
一切無礙人―一切諸佛のこと
力無畏―佛の證果の一作用、力自在にして世に怖畏すべきもののなきをいふ
願海―彌陀の本願を海にたとふ
二乘、聲聞、緣覺

莊嚴畢竟は六波羅密なり、究竟畢竟は一切衆生うるところの一乘なり、一乘はなづけて佛性とす。この義をもてのゆへに、われ一切衆生ことごとく佛性ありととくなり。一切衆生ことごとく一乘あり、無明おほへるをもてのゆへに、みることあたはず。已上。またいはく、いかんが一とする、一切衆生ことごとく一乘なるがゆへに。いかんが非一なる、三乘をとくがゆへに。いかんが非一非々一なる、無數の法なるがゆへなり。已上。
華嚴經にいはく、文殊の法は、つねにしかなり、法王はたゞ一法なり、一切無礙人、一道より生死をいでたまへり。一切諸佛の身、たゞこれ一法身なり、一心一智慧なり、力無畏もまたしかなり。已上。しかれば、これらの覺悟は、みなもて安養淨刹の大利、佛願難思の至德なり。
海といふは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雜修雜善の川水を轉じ、逆謗闡提、恒沙無明の海水を轉じて、本願大悲、智慧眞實、恒沙萬德の大寶海水となる、これを海のごとしとたとふるなり。まことにしんぬ經にときて、煩惱のこほりとけて功德のみづとなるとのたまへるがごとし。已上。願海は、二乘雜善の中下の屍骸をやどさず、いかにいはんや、人

一乘—一佛乘のこと一切衆生をして悉く佛とならしむる敎法

究竟法身—無上の佛果

第一義乘—此の上なきよき敎

誓願一佛乘—阿彌陀佛の本願力にてあらゆる衆生を悉く成佛せしむる敎

實諦—眞如實相を明瞭に說きたる敎

一實—唯一眞實の道即ち一佛乘のこと

三—二乘なり、衆生を導びくために一乘を分ちて聲聞緣覺菩薩の三とす

便にあらざることとなし。自心をさとらしめんとなり。已上。

一乘海といふは、一乘は大乘なり、大乘は佛乘なり。一乘をうるは、阿耨多羅三藐三菩提をうるなり。阿耨菩提は、すなはちこれ涅槃界なり、涅槃界は、すなはちこれ究竟法身なり、究竟法身をうるは、すなはち一乘を究竟するなり。如來にことなることましまさず、異の法身ましまさず、如來はすなはち法身なり。一乘を究竟するは、すなはちこれ無邊不斷なり。大乘は二乘三乘あることなし、二乘三乘は一乘にいらしめんとなり。一乘はすなはち第一義乘なり、たゞこれ誓願一佛乘なり。

涅槃經にいはく、善男子、實諦はなづけて大乘といふ、大乘にあらざるは實諦となづけず。善男子、實諦はこれ佛の所說なり、魔の所說にあらず。もしこれ魔說は佛說にあらず、實諦となづけず。善男子、實諦は一道淸淨にして二あることなし。已上。またのたまはく、いかんが菩薩一實に信順する、菩薩は一切衆生をして、みな一道に歸せしむと了知するなり、一道はいはく大乘なり。諸佛菩薩衆生のためのゆへに、これをわかちて三とす。このゆへに菩薩不逆に信順ず。已上。またいはく、善男子、畢竟に二種あり、一には莊嚴畢竟、二には究竟畢竟なり。一には世間畢竟、二には出世畢竟なり。

諸地―菩薩十地の修行のこと

三途―地獄、餓鬼、畜生の三道

に超出し、諸地の行現前し、普賢の德を修習せん、もししからずば、正覺をとらじと。佛の願力によるがゆへに、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の德を修習せん。常倫に超出し、諸地の行現前するをもてのゆへに、このゆへにすみやかなることをうる三の證なり。これをもて他力を推するに增上緣とす、しからざることをえんや。まさにまた例をひきて、自力他力の相をしめすべし。ひと三塗をおそるゝがゆへに、禁戒を受持す。禁戒を受持するがゆへに、よく禪定を修す。禪定を修するをもてのゆへに、神通を修習す。神通をもてのゆへに、よく四天下にあそぶがごとし、かくのごときらをなづけて自力とす。また劣夫の驢にまたがりて、のぼらざれども、轉輪王のみゆきにしたがへば、すなはち虛空に乘じて、四天下にあそぶに、障礙するところなきがごとし。かくのごときらを、なづけて他力とす。おろかなるかな、のちの學者、他力の乘ずべきをきゝて、まさに信心を生ずべし、みづから扁分することなかれ。已上。

元照律師のいはく、あるひはこの方にして、惑を破し眞を證するは、すなはち自力をはこぶがゆへに大小の諸經に談ず。あるひは他方にゆきて、法をきゝ道をさとるは、すべからく他力をたのむべきがゆへに、往生淨土をとく。彼此ことなりといへども、方

四十八願—阿彌陀佛衆生濟度のために起したまへる四十八の本願

三願—四十八願中の第十八、第十三、第二十二願の三つ

定聚—正しく佛になると定まつた輩

廻伏の難—生死の界に流轉すること

一生補處—一生を過ぐれば佛處を補ふ位

自在所化—極樂へ生れ來りたる菩薩衆が自在に衆生を化益すること

常倫—尋常の輩

し佛力にあらずば、四十八願すなはちこれいたづらにまうけたまへらん。いまひとしく三願をとりて、もて義のこゝろを證せん。願じてのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、十方の衆生、心をいたし信樂して、わがくにゝ生ぜんとおもふて、乃至十念せん、もし生ぜずば、正覺をとらじ、たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞくと。佛願力によるがゆへに、十念念佛して、すなはち往生をう。往生をうるがゆへに、すなはち三界輪轉の事をまぬかる。輪轉なきがゆへに、このゆへにすみやかなることをうる一の證なり。願じてのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、くにのうちの人天定聚に住し、かならず滅度にいたらずば、正覺をとらじと。佛願力によるがゆへに、正定聚に住せん、正定聚に住するがゆへに、かならず滅度にいたる、もろ〱の廻伏の難なし。このゆへにすみやかなることをうる二の證なり。願じてのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、他方佛土のもろ〱の菩薩衆、わがくにに來生して、究竟してかならず一生補處にいたらしめん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆへに、弘誓のよろひをきて、德本を積累し、一切を度脱して、諸佛のくにゝあそび、菩薩の行を修して、十方諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをばのぞく。常倫

法相―事物の實相
法性―眞如のこと諸法の體性なり
無知―吾人の有する如き不完全の智慧をはなれたる絶對の眞智
無礙人―無礙道を證つた人、即ち佛なり
無礙―礙る所なく融通自在なるをいふ
生死即涅槃―氷即水といふ如く、煩惱即菩提と等ること
入不二法門―生死涅槃等別々ならざることをいふ
他利―他が利せらるゝ事

め性をつくすこと、さらにすぎたるひとなし。なにをもてかこれをいふとならば、正をもてのゆへに、正は聖智なり。法相のごとくして、しかもしろがゆへに、稱して正智とす。法性は相なきゆへに、聖智無知なり。徧に二種あり、一には聖心、あまねく一切の法をしろしめす。二には法身、あまねく法界にみてり、もしは身もしは心、徧せざることなきなり。道は無礙道なり。經にいはく、十方無礙人、一道より生死をいでたまへり。一道は一無礙道なり。無礙はいはく、生死すなはちこれ涅槃なりとしろなり、かくのごとき等の入不二の法門無礙の相なり。問ていはく、なんの因縁ありてか、速得成就阿耨多羅三藐三菩提といへるや。こたへていはく、論に、五門の行を修して、もて自利利他成就したまへるがゆへにといへり。しかるにまことにこの本をもとむれば、阿彌陀如來を增上緣とするなり。他利と利他と談ずるに左右あり。もしをのづから佛をしていはゞ、よろしく利他といふべし。をのづから衆生をしていはゞ、よろしく他利といふべし。いままさに佛力を談ぜんとす、このゆへに利他をもてこれをいふ。まさにしるべしこのこゝろなり。おほよそ、これかの淨土に生ずると、およびかの菩薩人天の所起の諸行は、みな阿彌陀如來の本願力によるがゆへに。なにをもてかこれをいふとならば、も

天と戰って居る鬼神
教化地—衆生を利し教化することと前記五念門中の第五門なり
四種の門—五念門中の前四、禮拜、讚嘆、作願、觀察の四なり
阿耨多羅三藐三菩提—無上正徧知と譯す、佛のさとりの智慧のこと

るものなしといへども、しかも音曲自然なるがごとし。これを敎化地の第五の功德相となづく。已上。菩薩は四種の門にいりて、自利の行成就したまへり、しるべし。成就はいはく、自利滿足せるなり。應知といふは、いはく自利によるがゆへに、すなはちよく利他す。これ自利にあたはずして、しかもよく利他するにはあらずとしるべきなり。菩薩は第五門にいでて、廻向利益他の行成就したまへり、しるべし。成就はいはく、廻向の因をもて敎化地の果を證す、もしは因、もしは果、一事として、利他にあたはざることあることなきなり。應知といふは、いはく、利他によるがゆへに、すなはちよく自利す。これ利他にあたはずして、しかもよく自利するにはあらずとしるべきなり。菩薩はかくのごとく五門の行を修して、自利利他して、すみやかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することをえたまへり。かるがゆへに、佛のえたまふところの法をなづけて、阿耨多羅三藐三菩提とす、この菩提をえたまふをもてのゆへに、なづけて佛とす。いま速得阿耨多羅三藐三菩提といへるは、これはやく佛になることをえたまへるなり。阿をば無になづく、耨多羅をば上になづく、三藐をは正になづく、三をば徧になづく、菩提をば道になづく。かねてこれを譯して、なづけて無上正徧道とす。無上はいふこゝろは、この道、理をきは

一聲すなはちこれ一念なり、一念すなはちこれ一行なり、一行すなはちこれ正行なり、正行すなはちこれ正業なり、正業すなはちこれ正念なり、正念すなはちこれ念佛なり、すなはちこれ南無阿彌陀佛なり。しかれば大悲の願船に乘じて、光明の廣海にうかみぬれば、至德のかぜしづかに、衆禍のなみ轉ず、すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土にいたりて、大般涅槃を證す、普賢の德にしたがふなり、しるべし。安樂集にいはく、十念相續は、これ聖者のひとつのかづの名ならくのみ。すなはちよく念をつみ、おもひをこらして、他事を緣せざれば、業道成辨せしめて、すなはちやみぬ、またいたはしく頭數を記せざれ。またいはく、もし久行のひとの念は、おほくこれによるべし。もし始行のひとの念は、かずを記する、またよし、これまた聖教によるなり。已上。これすなはち眞實の行をあらはす明證なり。まことにしんぬ、選擇攝取の本願、超世希有の勝行、圓融眞妙の正法、至極無礙の大行なり、しるべし。

他力といふは、如來の本願力なり。論にいはく、本願力といふは、大菩薩、法身のなかにおいて、つねに三昧にありて、しかも種々の身、種々の神通、種々の說法を現じたまふことをしめす、みな本願力よりおこるをもてなり。たとへば阿修羅の琴の、鼓す

至德の風―南無阿彌陀佛の名號の風
大般涅槃―梵語滅度と譯す佛のさとり
普賢の德―普賢菩薩は佛の右脇にありて慈悲を司る故、凡て慈悲を以て衆生を濟度することを普賢の德といふ
業道成辨―業を成し終つたこと
久行の人―信を得たる人
大菩薩―こゝは特に阿彌陀佛の修行中の假名法藏菩薩のこと
阿修羅―非天と譯す[illegible]三十二

大本―大無量壽經
下至一念―上一生の間の稱名より下一聲の念佛に至る
一聲一念―一聲の稱名(行)の裏には信の一念ありと云ふこと
三界―欲界、色界、無色界、
火宅―三界を譬ふ
一乘眞實―他力念佛の法門
八萬四千の假門―聖道自力八萬四千の方便門
付屬―法を授け

大本にのたまはく、佛、彌勒にかたりたまはく、それかの佛の名號をきくことをえて、歡喜踊躍して、乃至一念せんことあらん、まさにしるべし、このひとは大利をうとす。すなはちこれ無上の功德を具足するなり。已上。光明寺の和尚は、下至一念といへり、また一聲一念といへり、また專心專念といへり。已上。智昇師の集、諸經禮懺儀の下卷にいはく、深心はすなはちこれ眞實の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して火宅をいでずと信知す。いま彌陀の本弘誓願は、名號を稱すること、下至十聲等におよぶまで、さだめて往生をうと信知して、一念にいたるにおよぶまで、疑心あることなし、かるがゆへに深心となづく。已上。

經には乃至といひ、釋には下至といへり。乃下そのことばことなりといへども、そのこころこれひとつなり。また乃至は、一多包容のことばなり。大利といふは、小利に對せることばなり。無上といふは、有上に對せることばなり。まことにしんぬ、大利無上は一乘眞實の利益なり、小利有上は、すなはちこれ八萬四千の假門なり。釋に專心といへるは、すなはち一心なり、二心なきことをあらはすなり。專念といへるは、すなはち一行なり、二行なきことをあらはすなり。いま彌勒付屬の一念は、すなはちこれ一聲なり。

とす正業は廻向を用ゐずとも自然に往生の業となる故なり
選擇大寶海―阿彌陀佛が擇びに擇び給ひし大願の名號のこと
論の註―曇鸞大師の淨土論註
宗師―こゝは善導大師
行の一念―一聲の念佛のこと本願名號の謂れが心にきくひらかれるや否や一念一聲稱名によりて大行の利益を具ふこれ易行の至極なり

ところにあらざることとなし、同一に念佛して、別の道なきがゆへに。已上。しかれば眞實の行信をうれば、心に歡喜おほきがゆへに、これを歡喜地となづく。これを初果にたとふることは、初果の聖者、なほ睡眠し懶惰なれども、二十九有にいたらず。いかにいはんや十方群生海、この行信に歸命すれば、攝取してすてたまはず、かるがゆへに阿彌陀佛となづけたてまつる。これを他力といふ。こゝをもて龍樹大士は、卽時入必定といへり。曇鸞大師は、入正定之數といへり。あふいでこれをたのむべし、もはらこれを行ずべきなり。まことにしんぬ、德號の慈父ましまさずば、能生の因かけなん、光明の悲母ましまさずば、所生の緣そむきなん。能所の因緣和合すべしといへども、信心の業識にあらずば、光明土にいたることなし。眞實信の業識、これすなはち內因とす、光明名の父母、これすなはち外緣とす。內外の因緣和合して、報土の眞身を得證す。かるがゆへに宗師、光明名號をもて十方を攝化したまふ、たゞし信心をして、求念せしむとのたまへり。また念佛成佛これ眞宗といへり。また眞宗あひがたしといへるを、しるべし。おほよそ、往相廻向の行信について、行にすなはち一念あり、また信に一念あり。行の一念といふは、いはく稱名の徧數について、選擇易行の至極を顯開す。かるがゆへに、

す忉利天にある香木
瞻匐華、波師迦華—印度香木の名
雪山—ヒマラヤ山のこと
月利沙—印度の木の名
源空—法然聖人
正雜二行—彌陀の淨土へ往生する正しき行を正行と云ふ、雜行は疎雜の行即ち淨土往生の正しき行にあらざるもの
正助二行—正行に五あり讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆供養之れなり其稱名は正定業にして他の四は助業なり
不廻向の行—正行を不廻向の行

といへども、およぶことあたはざるところなり。已上。またいはく、一斤の石汁、よく千斤のあかゞねを變じてこがねとなす。雪山にくさあり、なづけて忍辱とす、うし、もし食すれば、すなはち醍醐をう、月利沙、昴星をみれば、すなはち菓實をいだすがごとし。已上。

選擇本願念佛集 源空の集 にいはく、南無阿彌陀佛 往生の業には念佛を本とす。 またいはく、それすみやかに、生死をはなれんとおもはゞ、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門をさしおきて、えらんで淨土門にいれ。淨土門にいらんとおもはゞ、正雜二行のなかに、しばらくもろもろの雜行をなげすてゝ、えらんで正行に歸すべし。正行を修せんとおもはゞ、正助二業のなかに、なほ助業をかたはらにして、えらんで正定業をもはらにすべし。正定の業といふは、すなはちこれ佛名を稱するなり。みなを稱すれば、かならず生ずることをう、佛の本願によるがゆへに。已上。

あきらかにしりぬ。これ凡聖自力の行にあらず、かるがゆへに、不廻向の行となづくるなり。大小聖人重輕惡人、みなおなじくひとしく、選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし。こゝをもて論の註にいはく、かの安樂國土は、阿彌陀如來の正覺淨華の化生する

世出世間の功德—世間普通の德并に世間以上の尊き功德
信和尚—源信和尚なり
無上功德田—佛德を田の衆生を利することと大なるに譬ふ無上功德田は阿彌陀佛をさす
極大慈悲母、無上兩足尊、極難値遇者、希有大法王、圓融萬德尊—皆阿彌陀佛のこと
一百倶胝界—倶胝は大數の名一百倶胝は大千世界に同じ
波利質多樹—梵語、[illegible]

地觀經の六種の功德によるべし、一には無上大功德田、二には無上大恩德、三には無足二足及以多足衆生のなかの尊なり、四にはきはめて値遇しがたきこと、優曇華のごとし。五にひとり三千大千界にいでたまふ。六に世出世間の功德圓滿せり。義つぶさにかくのごときらの六種の功德によりて、つねによく一切衆生を利益したまふ。已上。

この六種の功德によりて信和尚のいはく、一には念ずべし、ひとたび南無佛と稱すれば、みなすでに佛道になる。かるがゆへに、われ無上功德田を歸命し禮したてまつる。二には念ずべし、慈眼をもて衆生をみそなはすこと、平等にして一子のごとし。かるがゆへに、われ極大慈悲母を歸命し禮したてまつる。三には念ずべし、十方の諸大士、彌陀尊を恭敬したてまつる。かるがゆへに、われ無上兩足尊を歸命し禮したてまつる。四には念ずべし、ひとたび佛名をきくことをうること、優曇華よりもすぎたり。かるがゆへに、われ極難値遇者を禮したてまつる。五には念ずべし、一百倶胝界には、二尊ならびいでたまはず。かるがゆへに、われ希有大法王を歸命し禮したてまつる。六には念ずべし、佛法衆德海は三世おなじく一體なり。かるがゆへに、われ圓融萬德尊を歸命し禮したてまつる。已上。

またいはく、波利質多樹のはな、一日ころもに薫ずるに、瞻蔔華、波師迦華、千歳薫す

二報莊嚴―依報莊嚴と正報莊嚴佛身佛土の體はしきかざり
持名の行法―彌陀の名號を信じ稱へること
往生要集―源信和尚の作
三輩の業―衆生の機類を上中下の三に分ち各々其の行業に淺深ありといふ

のなかに、またすべからく彌陀をおさむべきなり。已上。三論の祖師嘉祥のいはく、問、念佛三昧、なにによりてか、よくかくのごときの、おほくのつみを滅することをうるや。解していはく、佛に無量の功德います、佛の無量の功德を念ずるがゆへに、無量のつみを滅することをえしむ。已上。法相の祖師法位のいはく、諸佛はみな德を名にほどこす、名を稱するは、すなはち德を稱するなり。德よくつみを滅し福を生ず、名もまたかくのごとし。もし佛名を信ずれば、よく善を生じ、惡を滅すること、決定してうたがひなし、稱名往生これなんのまどひかあらんや。已上。禪宗の飛錫のいはく、念佛三昧は善の最上なり。萬行の元首なるがゆへに、三昧王といふ。已上。往生要集にいはく、雙卷經の三輩の業、淺深ありといへども、しかも通じて、みな一向專念無量壽佛といへり。三に四十八願のなかに、念佛門において、別してひとつの願をおこしてのたまはく、乃至十念せん、もし生ぜずば正覺をとらじ。四に觀經には、極重の惡人、他の方便なし、たゞ彌陀を稱して、極樂に生ずることをう。已上。またいはく、心

修する行をいふ
勤勞―心を勞せしむる義、即ち煩惱のこと
開元の藏錄―開元釋敎錄のこと
圓頓一乘―圓滿にしてかたよらず時を經ずして速に成佛する一乘の敎
一佛の嘉號―阿彌陀佛の名號
微塵劫―非常に長き時
無相の大願―一切萬有の實相は無相なりと悟つたときに起し給ふ大願のこと、無相たるが其の儘無量相なり、凡夫の思慮を絕した大願

標す、自餘はつくさず、くはしく釋文にあり。開元の藏錄を按ずるに、この經におほよそ兩譯あり、さきの本は、すでに亡しぬ、いまの本はすなはち畺良耶舍の譯なり。僧傳にいはく、畺良耶舍、こゝには時稱といふ。宋の元嘉のはじめに京邑にはじめたり、文帝のときなり。慈雲讚じていはく、了義のなかの了義、圓頓のなかの圓頓なり。已上。

大智となへていはく、圓頓一乘、純一にして雜なし。已上。

律宗の戒度のいはく、佛名はすなはちこれ劫をつみて熏修し、その萬德をとる、すべて四字にあらはる。このゆへにこれを稱するに、益をうること、あさきにあらず。已上。

律宗の用欽のいはく、いまもしわが心口をもて、一佛の嘉號を稱念すれば、すなはち因より果にいたるまで、無量の功德具足せざることなし。已上。またいはく、一切諸佛、微塵劫をへて、實相を了悟して、一切をえざるがゆへに、無相の大願をおこして、修するに妙行に住することなし、證するに菩提をうることなし、住するに國土を莊嚴するにあらず、現ずるに神通の神通なきがゆへに、舌相を大千に偏して、無說の說をしめす。かるがゆへに、この經を勸信せしむ、あに心におもひ、くちにはかるべけんや。わたくしにいはく、諸佛の不思議の功德、須臾に彌陀の二報莊嚴におさむ、持名の行法は、かの諸佛

り、幷べて悲智六度といふ
三身—法身、報身、應身の三、佛の證りの體なり
四字—阿彌陀佛の四字
名—名號

淨業—淨土へ參る業因

四衆—比丘、比丘尼、優婆塞（淸信士）、優婆夷（淸信女）を佛法の四衆といふ
戒體—戒の體性なり、受戒者の心中に發得する無作のこと
波羅密—梵語度と譯す生死の此の岸を渡りて涅槃の彼の岸に至るの義なり、布施持戒等菩薩の

したまふ。こゝをもて、みゝにきゝ、くちに誦するに、無邊の聖德、識心に攬入す。ながく佛種となりて、頓に億劫の重罪をのぞき、無上菩提を獲證す。まことにしんぬ、少善根にあらず、これ多善根なり。已上。またいはく、正念のなかに凡人の臨終は、識神主なし、善惡の業種、發現せざることなし。あるひは邪見をおこし、あるひは繫戀を生じ、あるひは猖狂惡相を發せん、もはらみな顚倒の因となづくるに、さきに佛を誦して、つみ滅し、さはりのぞこり、淨業うちに薫じ、慈光ほかに攝して、苦をまぬかれ樂をうること、一刹那のあひだなり、しもの文に生をすゝむ、その利これにあり。已上。慈雲法師のいはく、たゞ安養の淨業、捷眞なり、修すべし。もし四衆ありて、またすみやかに無明を破し、ながく五逆十惡重輕等のつみを滅せんとおもはゞ、まさにこの法を修すべし。大小の戒體、とをくまた淸淨なることをえしむ。念佛三昧をえしめ、菩薩の諸波羅密を成就せんとおもはゞ、まさにこの法を學すべし。臨終にもろ〳〵の怖畏をはなれしめ、身心安快にして衆聖現前し、授手接引せらるゝことをえ、はじめて塵勞をはなれて、すなはち不退にいたり、長劫をへず。すなはち無生をえんとおもはゞ、まさにこの法等を學すべし、古賢の法語に、よくしたがふことなからんや。已上五門、綱要を略

の時には虎の形をなし、丑の時には牛の形をなして出る故時魅といふ
魔種—魔の障礙を崇るべき種
聖の解—自ら聖者になつたと思ふこと
極唱—至極の教
果號—本願成就の名號、即ち南無阿彌陀佛
塵點劫—非常に長き時期
悲智六度—布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を六度といふ、其中前五は悲なり、第六は智な

のときにいたるまで、障礙なからしむることあたはざらんや。もし護持をなさずば、すなはち慈悲力なんぞましまさん。もし魔障をのぞくことあたはずば、智慧力、三昧力、威神力、摧邪力、降魔力、またなんぞましまさんや。もし鑒察することあたはずして、魔障をなすことをかうふらば、天眼遠見力、天耳遙聞力、他心徹鑒力、またなんぞましまさんや。經にいはく、阿彌陀佛の相好光明あまねく十方世界をてらす、念佛の衆生をば攝取してすてたまはず、もし念佛して臨終に魔生をかうふるといはゞ、光明偏照攝取衆生力、またなんぞましまさんや。いはんや念佛のひとの臨終の感相、衆經よりいでたり。みなこれ佛のみことなり。なんぞ貶して魔境とすることをえんや、いまために邪疑を決破す、まさに正信を生ずべし。已上かの文。またいはく、一乘の極唱、終歸をことごとく樂邦にさす、萬行の圓修、最勝をひとり果號にゆづる。まことにもて因より願をたつ、こゝろざしをとり行をきはめ、塵點劫をへて、濟衆の仁をいだけり、芥子の地も捨身のところにあらざることなし。悲智六度攝化して、もてのこすことなし。内外の兩財もとむるにしたがひて、かならず應ず。機と緣と熟し、行滿じ功なり、一時にまどかに三身を證す、萬德すべて四字にあらはる。已上。またいはく、いはんやわが彌陀は、名をもてものを攝

首楞嚴—經名
三昧—心を一境に留むることなり定と譯す
陰魔—衆魔とも云ふ、此の肉體を組立てをるものがらが凡て佛道修行の妨となる
摩訶衍論—摩訶衍は大乘と譯す、即ち大乘起信論のこと馬鳴菩薩の作
止觀論—天台大師の作
時魅—定を修するとき男女又は鳥獸等の形をなして障礙をなすもの、例へば寅

ず、すなはちしんぬ、この法に魔なきことあきらけし。山陰の慶文法師の正信法門に、これを辨ずること、はなはだつまびらかなり。いまためにつぶさに、かの問をひきていはく、あるひはひとありていはく、臨終に佛菩薩のひかりをはなち、臺を持したまへるをみたてまつり、天樂異香來迎往生す、ならびにこれ魔事なりと、この說いかんぞや。こたへていはく、首楞嚴によりて三昧を修習することあり、あるひは陰魔を發動す。摩訶衍論によりて三昧を修習することあり、あるひは外魔を發動す。（いはく天魔なり。）止觀論によりて三昧を修習することあり、あるひは時魅を發動す。これらならびにこれ禪定を修するひと、その自力に約してまづ魔種あり、さだめて擊發をかうふるがゆへに、この事を現ず。もしよくあきらかにして、おの〳〵對治をもちゐれば、すなはちよく除遣せしむ。もし聖の解をなせば、みな魔障をかうふるなり。（かみにこの方の入道をあかす、すなはち魔事を發す。）いま所修の念佛三昧に約するに、いまし佛力をたのむ。帝王にちかづけば、あへておかすものなきがごとし。けだし阿彌陀佛、大慈悲力、大誓願力、大智慧力、大三昧力、大威神力、大摧邪力、大降魔力、天眼遠見力、天耳遙聞力、他心徹鑒力、光明偏照攝取衆生力ましますによりてなり。かくのごときらの不可思議功德のちからまします、あに念佛のひとを護持して、臨終

来生―未來の生涯
淨樂―張掄の號なり
佛名―阿彌陀佛の名號
眞應の身―眞身と應身なり、眞身は分れて法身と報身となる、法報應の三神は即正覺の體なり
一佛の名號―阿彌陀佛の名號、即ち南無阿彌陀佛なり

もちがたし、呼吸のあひだにすなはちこれ來生なり。ひとたび人身をうしなひぬれば、萬劫にも復せず、このときさとらずば、佛もし衆生をいかゞしたまはん。ねがはくばふかく無常を念じて、いたづらに後悔をのこすことなかれ、淨樂の居士張掄の緣をすゝむ。已上。台教の祖師山陰（慶文法師）のいはく、まことに佛名は、眞應の身よりして、建立せるがゆへに、慈悲海よりして建立せるがゆへに、誓願海よりして建立せるがゆへに、智慧海よりして建立せるがゆへに、法門海よりして建立せるがゆへに、もしたゞもはら一佛の名號を稱するは、すなはちこれつぶさに諸佛の名號を稱するなり。功德無量なれば、よく罪障を滅す、よく淨土に生ず、なんぞかならずうたがひを生ぜんや。已上。

律宗の祖師元照のいはく、いはんやわが佛、大慈淨土を開示して、慇懃にあまねく、諸大乘を勸囑したまへり。めにみ、みゝにきゝて、ことに疑謗を生じて、みづからあまく沈溺して、超昇をねがはず、如來ときて憐憫すべきものゝためにしたまへり。まことにこの法の、ひとり常途にことなることをしらざるによりてなり。賢愚をえらばず、緇素をえらばず、修行の久近を論ぜず、造罪の重輕をとはず、たゞ決定の信心をして、すなはちこれ往生の因種ならしむ。已上。またいはく、いま淨土の諸經に、ならびに魔をいは

十惡—殺生。偸盗、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡の十
久塵—久しく無明煩惱の塵におほはること
法性の身—眞如の理體

根のふかきとをえらばず。たゞ廻心して、おほく念佛せしむれば、よく瓦礫をして、變じてこがねとなさしむ。ことばを現前の大衆等によす、同緣去らんひと。はやくあひたづねん。とふ、いづれのところをあひたづねてかゆかんと。こたへていはく、彌陀淨土のうちに。とふ、なにゝよりてか、かしこに生ずることをえん。こたへていはく、念佛をのづから功を成ず。とふ、今生に罪障おほし、いかんぞ淨土にあへてあひいらんや。こたへていはく、みなを稱すればつみ消滅す、たとへば明燈の闇中にいるがごとし。とふ、凡夫生ずることをうやいなや。いかんぞ一念に闇中あきらかならんや。こたへていはく、うたがひをのぞきて、おほく念佛すれば、彌陀決定して、をのづから親近したまふ。要を抄す。

新無量壽觀經による。法照。十惡五逆いたれる愚人、永劫に沈淪して久塵にあり、一念彌陀のみなを稱得して、かしこにいたれば、かへりて法性の身に同ず。已上。

憬興師のいはく、如來の廣說に二あり。はじめには、ひろく如來淨土の因果、すなはち所行所成をときたまへるなり。のちには、ひろく衆生往生の因果、すなはち所攝所益をあらはしたまへるなり。またいはく、悲華經の諸菩薩本授記品にいはく、そのときに寶藏如來、轉輪王をほめていはく、よきかな／＼、乃至、大王なんぢ西方をみるに、百

門に對して他力教をいふ
本師金口—佛の金色の御口

てむかふ。略抄。

證したまふ。この界に一人、佛のみなを念ずれば、西方にすなはちひとつのはちすありて生ず、たゞし一生つねにして不退なれば、ひとつのはな、このあひだにかへりいたり

般舟三昧經による。慈愍和尚。今日道場の諸衆等、恒沙曠劫より總じて經かへれり、この人身をはかるに値遇しがたし、たとへば優曇華のはじめてひらくるがごとし。まさしくまれに淨土の敎をきくにまうあへり、まさしく念佛の法門のひらくるにまうあへり、まさしく彌陀の弘誓のよばひたまふにまうあへり、まさしく大衆の信心の廻するにまうあへり、まさしく今日經によりて讃するにまうあへり、まさしくちぎりを上華臺にむすぶにまうあへり、まさしく道場に魔事なきにまうあへり、まさしく無病にして、すべてよくかへるにまうあへり、まさしく七日の功成就するにまうあへり、四十八願かならずあひたづさふ。あまねく道場の同行のひとをすゝむ、ゆめ〳〵廻心していざいなん。とふ家鄕はいづれのところにかある、極樂のいけのうち七寶のうてなり。かの佛、因中に弘誓をたてたまへり。みなをきゝてそれを念ぜば、すべてむかへきたらしめん。貧窮と富貴とをえらばず、下智と高才とをえらばず、多聞と淨戒をたもてるとをえらばず、破戒と罪

六神通ー天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通

淨土門ー自力修行の敎たる聖道

生みな度脱す、みなを稱すれば、すなはちつみ消除することをう。凡夫もし西方にいたることをうれば、曠劫塵沙のつみ消亡す、六神通を具し自在をう。ながく老病をのぞき、無常をはなる。

佛本行經による。法照。なにものをかこれをなづけて正法とする。もし道理によらば、これ眞宗なり、好惡いまのとき、すべからく決擇すべし、一々に子細朦朧することなかれ。正法よく世間に超出す、持戒坐禪を正法となづく。念佛成佛はこれ眞宗なり、佛言をとらざるをば外道となづく。因果を撥無する見を空とす。正法よく世間を超出す、禪律いかんぞこれ正法ならん。念佛三昧はこれ眞宗なり。性をみ心をさとるは、すなはちこれ佛なり。いかんが道理相應せざらん。略抄。

阿彌陀經による、西方は、道にすゝむこと、娑婆にすぐれたり。五欲および邪魔なきによりてなり。成佛にもろ〳〵の善業を、いたはしくせず、華臺に端坐して、彌陀を念ず、五濁の修行はおほく退轉す、念佛して西方にゆくにはしかず。かしこにいたれば、自然に正覺をなる、苦界にかへりきたりて津梁とならん。萬行のなかに急要とす、迅速なること淨土門にすぎたるはなし、たゞ本師金口の說のみにあらず、十方諸佛ともにつたへ

實相—眞如のこと虛妄ならず改異せざる故に名く
眞の無生—無生無滅の證なり、涅槃のこと
細綿—柔かなる御手
法身—無色無形の佛の
九品—上上品上中品以下下々品に至る蓮花の開く有様
稱讚淨土經—阿彌陀經の異譯なり

がふ、つゐに實相に歸せしめんとなり。眞の無生をえんもの、たれかよくこれをあたへんや。しかるに念佛三昧は、これ眞無上深妙の門なり。彌陀法王、四十八願の名號をもて、こゝに佛願力をことゝして、衆生を度したまふ。乃至。如來つねに三昧海のなかにして、細綿をあげたまへるをや。父の王にいひてのたまはく、王いま坐禪して、たゞまさに念佛すべし、あに離念に同じて無念をもとめんや、生をはなれて無生をもとめんや、相好をはなれて法身をもとめんや、文をはなれて解脱をもとめんや。乃至。それおほきなるかな至理の眞法、一如にして、ものを化しひとを利す。弘誓各別なるがゆへに、わが釋迦、濁世に應生し、阿彌陀、淨土に出現したまふ。まさに穢淨兩殊なりといへども、利益齊一なり。もし修しやすく證しやすきは、まことにたゞ淨土の教門なり。しかるにかの西方、殊妙にしてその國土に比しがたし、かざるに百寶をもてし、はちす九品にひらく、もてひとをおさむること、それ佛の名號なり。乃至。

稱讚淨土經による。釋の法照。如來の尊號は、はなはだ分明なり、十方世界にあまねく流行せしむ。たゞみなを稱するのみありて、みなゆくことをう。觀世音勢至をのづからきたりむかへたまふ。彌陀の本願、ことに超殊せり、慈悲方便して、凡夫をひく、一切衆

證生增上緣—釋尊及び諸佛が衆生の往生を證し其が緣となりて我々が救はれること
果—生死の苦果
業—煩惱より生ずる罪業
因—生死の苦の因となる、煩惱
眞如の門—他力念佛のこと、之れによりて衆生淨土に往生し眞如法性の智をさとる
釋—經論に對し人師の作りし文書を云ふ、こゝは龍樹の作十住毘婆娑論中の第五卷易行品をさす
根—衆生の根機

ことごとく往生をえしめんと欲す、これまたこれ證生增上緣なり。已上。またいはく、門々不同にして八萬四なり、無明と果と業因とを滅せんがためなり。利劍はすなはちこれ彌陀の號なり、一聲稱念するに、つみみなのぞこる、微塵の故業、智にしたがひて滅す、おしへざるに眞如の門に轉入す。娑婆長劫の難をまぬかるゝことをうることは、ことに知識釋迦の恩をかうふれり。種々の思量巧方便をもて、えらびて彌陀弘誓の門をえしめたまへり。已上要を抄す。

しかれば南無の言は歸命なり、歸の言は至なり。また歸說なり。說の字は悅の音。また歸說なり。說の字は、稅の音、悅稅ふたつの音、告なり述なり、ひとのこゝろをのぶるなり。命の言は、業なり、招引なり、使なり、敎なり、道なり、信なり、計なり、召なり。こゝをもて、歸命は本願招喚の勅命なり。發願廻向といふは、如來すでに發願して、衆生の行を廻施したまふの心なり。卽是其行といふは、すなはち選擇本願これなり。必得往生といふは、不退のくらゐにいたることをうることをあらはす。經には卽得といへり、釋には必定といへり。卽の言は、願力をきくによりて、報土の眞因決定する時尅の極促を光闡するなり。必の言は、審なり、然なり、分極なり、金剛心成就のかほばせなり。淨土五會念佛略法事儀讃にいはく、それ如來、敎をまうけたまふに、廣略、根にした

ことならば必ず極樂へ往生するに相違なきことを諸佛が衆生のために證する經なる故に名く

增上緣—衆生極樂へ往生するについて勝れたる強緣

攝生增上緣—如來の本願がこの衆生を攝め救ひ給ふ強き緣となることを云ふ

起行—禮拜稱名讚念等をいふ

彌陀佛を稱念せんこと、もしは七日一日、下至一聲、乃至十聲一念等におよぶまで、かならず往生をうと、この事を證誠せるがゆへに、護念經となづく。つぎしもの文にいはく、もし佛を稱して往生するものは、つねに六方恒河沙等の、諸佛のために護念せらる。かるがゆへに護念經となづく。いますでにこの增上の誓願あり、たのむべし。もろもろの佛子等、なんぞこゝろをはげましてゆかざらんや 智昇法師の集諸經禮懺儀の下巻は善導和尚の禮懺なり、これによる。 またいはく、弘願といふは、大經の說のごとし、一切善惡の凡夫、生ずることをうるは、みな阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣とせざるはなし。またいはく、南無といふは、すなはちこれ歸命なり、またこれ發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふは、すなはちこれその行なり。この義をもてのゆへに、かならず往生をう。またいはく、攝生增上緣といふは、無量壽經の四十八願のなかにとくがごとし、佛ののたまはく、もしわれ成佛せんに、十方の衆生、わがくにゝ生ぜんと願じて、わが名字を稱すること、しも十聲にいたるまで、わが願力に乘じて、もし生ぜずといはゞ、正覺をとらじと。これすなはちこれ往生を願ずる行人、いのちおはらんとするとき、願力攝して往生をえしむ、かるがゆへに攝生增上緣となづく。またいはく、善惡の凡夫、廻心し起行して、

て智慧を表す即ち智慧の光を以て一切衆生を照し救ふ菩薩なり
至心—至誠心
正覺—證りなり、
舍利弗—釋尊十大弟子の一人
護念經—阿彌陀經を護念經といふ所以は、信ま

は夜をとはず、つねに行者をはなれたまはず。いますでにこの勝益あり、たのむべし。ねがはくばもろ〳〵の行者、おの〳〵至心をもちゐてゆくことをもとめよ。また無量壽經にいふがごとし。もしわれ成佛せんに、十方の衆生わが名號を稱せん、しも十聲にいたるまで、もし生ぜずば正覺をとらじ。かの佛、いま現にましまして成佛したまへり。まさにしるべし、本誓重願むなしからず衆生稱念すれば、かならず往生をう。また彌陀經にいふがごとし。もし衆生ありて、阿彌陀佛をとくをきゝて、すなはち名號を執持すべし、もしは一日もしは二日、乃至七日、一心に佛を稱してみだれざれ、いのちおはらんとするとき、阿彌陀佛もろ〳〵の聖衆と現じて、そのまへにましまさん。このひとおはらんとき、心顛倒せずして、すなはちかのくにゝ往生することをえん。佛、舍利弗につげたまはく、われ、この利をみるがゆへに、この言をとく、もし衆生ありて、この說をきかんものは、まさに願をおこし、かのくにゝ生ぜんと願ずべし。つぎしもにときていはく、東方の如恒河沙等の諸佛、おの〳〵本國にして、その舌相をいだして、あまねく三千大千世界におほふて、誠實の言をときたまはく、なんぢら衆生、みなこの一切諸佛の護念したまふところの經を信ずべし。いかんが護念經となづくる。もし衆生ありて、阿

萬年―末法萬年のこと、釋尊滅後五百年の間を正法といひ、次ぎの千年を像法といひ、其後一萬年の間を末法といふ

三寶―佛と法と僧の三

この經―大無量壽經

六道―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

善知識―正法をときて佛道に入らしめたまふ方をいふ、今は釋尊をさす

化佛―衆生濟度のために種々に形を變じて顯はるゝ佛身をいふ

觀音―詳しくは觀世音なり、阿彌陀佛の左の脇士にして佛の慈悲を表す

勢至―阿彌陀佛の右の脇士にし

みなまさにかしこに生ずることをうべし。萬年に三寶滅せんに、この經住すること百年せん、そのときき〻て一念せん。みなまさにかしこに生ずることをうべし。要を抄す。またいはく、現にこれ生死の凡夫、罪障深重にして、六道に輪廻せり、くるしみいふべからず。いま善知識にあひて、彌陀本願の名號をきくことをえたり、一心に稱念して、往生を求願す。ねがはくば佛の慈悲、本弘誓願をすてたまはざれば、弟子を攝受したまはん。已上。またいはく、問ていはく、阿彌陀佛を稱念し、禮觀して、現世にいかなる功德利益かあるや。こたへていはく、もし阿彌陀佛を稱すること一聲するに、すなはちよく八十億劫の生死の重罪を除滅す、禮念已下もまたかくのごとし。十往生經にいはく、もし衆生ありて、阿彌陀佛を念じて往生を願ずれば、かの佛、すなはち二十五の菩薩をつかはして、行者を擁護して、もしは行もしは住、もしは坐もしは臥、もしは晝もしは夜、一切の時一切の處に、惡鬼惡神をして、そのたよりをえしめざるなり。また觀經にいふがごとし。もし阿彌陀佛を稱禮念して、かのくに〻往生せんと願ずれば、かの佛すなはち無數の化佛、無數の化觀音勢至菩薩をつかはして、行者を護念したまふ。またさきの二十五の菩薩等と、百重千重、行者を圍遶して、行住坐臥、一切時處、もしは晝もし

誓願—普く衆生を救けんとの彌陀の四十八願
上一形、下十聲—命長ければ一生の間若し短かければ十聲以下一聲でも
十即十生百即百生—十人は十人ながら百人は百人ながら皆
大千—大千世界

稱せんに、また生ずることをうべし、なんがゆへぞ、ひとへに西方を嘆じて、專禮念等をすゝむる、なんの義かあるや。こたへていはく、諸佛の所證は、平等にしてこれひとつなれども、もし願行をもて、きたしおさむるに、因緣なきにあらず。しかるに彌陀世尊、もと深重の誓願をおこして、光明名號をもて、十方を攝化したまふ。たゞし信心をして、求念せしむれば、かみ一形をつくし、しも十聲一聲等にいたるまで、佛願力をもて往生をえやすし。このゆへに釋迦および諸佛、すゝめて西方にむかふるを、別異とすならくのみ、またこれ餘佛を稱念して、さはりをのぞき、つみを滅することあたはざるにはあらざるなり、しるべし。もしよくかみのごとく、念々相續して畢命を期とするものは、十即十生、百即百生なり。なにをもてのゆへに、外の雜緣なし、正念をうるがゆへに、佛の本願と相應することをうるがゆへに、敎に違せざるがゆへに、佛語を隨順するがゆへに。已上。またいはく、たゞ念佛の衆生をみそなはして、攝取してすてざるがゆへに、阿彌陀となづく。已上。またいはく、彌陀の智願海は、深廣にして涯底なし。御名をきゝて往生せんとおもへば、みなことごとく、かのくにゝいたる。たとひ大千にみてらん火をも、たゞちにすぎて佛名をきけ。御名をきゝて歡喜し讃ずれば、

光明寺の和尚―善導大師のこと
文殊般若―經の名なり
一行三昧―專ら念佛の一行を修する意
相貌―阿彌陀佛の相貌
境―妄識の對象
名字―南無阿彌陀佛
大聖―釋尊のこと
三身―法身、報身、應身

相貌を觀せず、もはら名字を稱すれば、すなはち念のなかにおいて、かの阿彌陀佛、および一切の佛等をみることをうと。問ていはく、なんがゆへぞ、觀をなさしめずして、たゞちにもはら名字を稱せしむるは、なんのこゝろかあるや。こたへていはく、いまし衆生さはりおもくして、境細心麁なり、識あがり神とびて、觀成就しがたきによりてなり。こゝをもて大聖悲憐して、たゞちにすゝめて、もはら名字を稱せしむ。まさしく稱名やすきによるがゆへに、相續してすなはち生ず。問ていはく、すでにもはら一佛を稱せしむるに、なんがゆへぞ境現ずること、すなはちおほき、これあに邪正あひまじはり、一多雜現するにあらずや。こたへていはく、佛と佛と、ひとしく證して、かたち二別なし。たとひ一を念じて多をみるとも、なんの大道理にかそむかんや。また觀經にいふがごとし、すゝめて坐觀、禮念等を行ぜしむ。みなすべからく、おもてを西方にむかふれば、最勝なるべし。樹のさきよりかたふけるが、たふるゝにかならずまがれるにしたがふがごとし。かるがゆへに、かならずことのさはりありて、西方にむかふにおよばずば、たゞ西にむかふおもひをなすにまたえたり。問ていはく、一切の諸佛、三身おなじく證し、悲智、果圓にして、また無二なるべし。方にしたがひて禮念し、一佛を課

大利―淨土往生の大利益

目連―釋迦の十大弟子の一人なり、神通第一と稱せらる

無量壽佛國―阿彌陀佛の極樂淨土

九十五種の邪道―釋尊在世の當時九十五種の邪道あり

易行道―自力修行の難行道に對し他力の信心を得て淨土へ往生するを易行道と名く

て、歡喜讃仰し、心に歸依すれば、しも一念にいたるまで、大利をう。すなはち功德の寶を具足すとす。たとひ大千世界にみてらん火をも、またたゞちにすぎて佛のみなをきくべし。阿彌陀をきかば、また退せざれ、このゆへに、心をいたして稽首し、禮したてまつる。またいはく、また目連所問經のごとし。佛、目連につげたまはく、たとへば、萬川長流に草木ありて、まへはうしろをかへりみず、うしろはまへをかへりみず、すべて大海に會するがごとし。世間もまたしかなり。豪貴富樂自在なることありといへども、こと〴〵く生老病死をまぬかるゝことをえず。たゞ佛經を信ぜざるによりて、後世にひとゝなりて、さらにはなはだ困劇して、千佛の國土に生ずることをうることあたはず、このゆへに、われとかく、無量壽佛國はゆきやすく、とりやすくして、しかもひと、修行して往生することあたはず、かへりて九十五種の邪道につかふ。われこのひとをときて、まなこなきひとゝなづけ、みゝなきひとゝなづくと。經教すでにしかなり。なんぞ難をすてゝ易行道によらざらんや。已上

光明寺の和尙ののたまはくまた文殊般若にいふがごとし、一行三昧をあかさんとおもふ、たゞすゝめて、ひとり空閑に處して、もろ〳〵の亂意をすてゝ、心を一佛にかけて、

なぐる—まぜること

翳身藥—身體を隠す靈藥

餘行—ほかの人々

摩訶衍—大乘の意、前記の大智度論を一に大乘論と云ふ

德號—至德の尊號即ち一切の功德をそなへたる南無阿彌陀佛の名號

かんに、もし師子の乳一滴をもてこれをなぐるに、たゞちにすぎてはゞかりなし。一切の諸乳こと〴〵くみな破壞して、變じて清水となるがごとし。もしひと、たゞよく菩提心のなかに、念佛三昧を行ずれば、一切の惡魔諸障たゞちにすぐるにはゞかりなし。またかの經にいはく、たとへばひとありて、翳身藥をもて、處々に遊行するに、一切の餘行、このひとをみざるが如し。もしよく菩提心のなかに、念佛三昧を行ずれば、一切の惡神一切の諸障、このひとをみず。もろ〳〵の處々にしたがひて、よく遮障することなきなり。なんがゆへぞとならば、よくこの念佛三昧を念ずるは、すなはちこれ一切三昧のなかの王なるがゆへなり。またいはく、摩訶衍のなかにときていふがごとし。諸餘の三昧は、三昧ならざるにはあらず、なにをもてのゆへに、あるひは三昧あり、たゞよく貪をのぞきて、瞋癡をのぞくことあたはず。あるひは三昧あり、たゞよく瞋をのぞきて、癡貪をのぞくことあたはず。あるひは三昧あり、たゞよく癡をのぞきて、瞋をのぞくことあたはず。あるひは三昧あり、たゞよく現在のさはりをのぞきて、過去未來の一切の諸障をのぞくことあたはず。もしよくつねに念佛三昧を修すれば、現在、過去、未來の一切の諸障をとふことなくみなのぞく。已上。またいはく、大經の讃にいはく、もし阿彌陀の德號をきゝ

數の名十六哩に當る
一科―一本
牛頭栴檀―赤檀ともいふ香樹なり

三毒―貪欲、瞋恚、愚癡
三障―惑、業、苦
業道成辨―行成就して證りの果を得ることの決定したるを云ふ

華嚴經―釋尊三十歳にして成道し其の二七日目に自己の證りのありのまゝを說きたる經

心を生ぜんがごとし。佛、父の王につげたまはく、一切衆生、生死のなかにありて、念佛の心も、またくかくのごとし、たゞよく念をかけてやまざれば、さだめて佛前に生ず。ひとたび往生をうれば、すなはちよく一切の諸惡を改變して、大慈悲を成ずること、かの香樹の、伊蘭林をあらたむるがごとし。いふところの伊蘭林といふは、衆生の身のうちの三毒、三障、無邊の重罪にたとふ。栴檀といふは、衆生の念佛の心にたとふ。わづかに樹とならんとすといふは、いはく一切衆生、たゞよく念をつみてたえざれば、業道成辨するなり。問ていはく、一衆生の念佛の功をはかりて、また一切をしるべし、なにゝよりてか一念の功力、よく一切の諸障を斷ずること、ひとつの香樹の、四十由旬の伊蘭林をあらためて、こと〴〵く香美ならしむるがごとくならんや。こたへてのたまはく、諸部の大乘によりて、念佛三昧の功能、不可思議なるをあらはさん。いかんとならば、華嚴經にいふがごとし。たとへば、ひとありて師子のすぢをもて、もて琴の絃とせんに、音聲ひとたび奏するに、一切の餘の絃、こと〴〵くみな斷壞するがごとし。もしひと菩提心のなかに、念佛三昧を行ずれば、一切の煩惱、一切の諸障、こと〴〵くみな斷滅す。またひとありて、牛羊驢馬一切の諸乳をしぼしとりて、一器のなかにお

し。乃至。いかんが廻向する、一切苦惱の衆生をすてずして、心につねに作願すらく、廻向を首として、大悲心を成就することをえたまへるがゆへに。廻向に二種の相あり、一には往相、二には還相なり。往相といふは、おのれが功德をもて、一切衆生に廻施して、作願してともに阿彌陀如來の、安樂淨土に往生せしめたまへるなり。已上抄出。

安樂集にいはく、觀佛三昧經にいはく、父の王をすゝめて、念佛三昧を行ぜしめたまふ。父の王、佛にまふさく、佛地の果德、眞如實相第一義空、なにゝよりてか弟子をして、これを行ぜしめざると。佛、父の王につげたまはく、諸佛の果德、無量深妙の境界、神通解脱まします、これ凡夫所行の境界にあらざるがゆへに、父の王をすゝめて念佛三昧を行ぜしめたてまつると。父の王、佛にまふさく、念佛の功、そのかたちいかんぞと。佛、父の王につげたまはく、伊蘭林の方四十由旬ならん、一科の牛頭栴檀あり。根芽ありといへども、なをいまだつちをいでざるに、その伊蘭林やゝくさくしてかうばしきことなし、もしその華菓を噉ずることあらば、狂を發してしかも死せん。のちのときに栴檀の根芽、漸々に生長して、わづかに樹にならんとす、香氣昌盛にして、つゐによく、このはやしを改變して、あまねくみな香美ならしむ。衆生みるもの、みな希有の

往相—衆生が極樂へ往生すること
還相—極樂へ往生を遂げたる聖者が再び此世界に衆生濟度のために出ること
安樂集—道綽禪師の作
父王—釋尊の父淨飯大王のこと
三昧—他へ心を散さず一心に稱名念佛すること
第一義空—涅槃のこと涅槃は凡情の有を離れたるが故に亦空と名く
伊蘭—梵語、非常に臭き樹其實を食すれば狂して死す
由旬—印度の里

三藏―經、律、論
有漏―漏生にて煩惱の意
法性―諸法の體性の意、即ち眞如
二諦―眞諦、俗諦
畢竟淨―涅槃は畢竟の淸淨なるもの故に名く

我依修多羅、眞實功德相、說願偈摠持、與佛敎相應とのたまへり。乃至。いづれのところにかよる、なんのゆへにかよる、いかんがよる。いづれのところにかよるとならば、修多羅によるなり。なんのゆへにかよるとならば、如來すなはち眞實功德の相なるをもてのゆへに。いかんがよるとならば、五念門を修して相應せるがゆへに。乃至。修多羅は十二部經のなかの、直說のものを修多羅となづく、いはく、四阿含、三藏等のほかの大乘の諸經を、また修多羅となづく。このなかに依修多羅といふは、これ三藏のほかの大乘修多羅なり、阿含等の經にはあらざるなり。眞實功德相といふは、二種の功德あり、一には有漏の心より生じて法性に順ぜず、いはゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顚倒す、みなこれ虛僞なり、このゆへに不實の功德となづく。二には菩薩の智慧淸淨の業よりおこりて、佛事を莊嚴す、法性によりて淸淨の相にいれり。この法、顚倒せず虛僞ならず、眞實の功德となづく。いかんが顚倒せざる、法性により二諦に順ずるがゆへに。いかんが虛僞ならざる、衆生を攝して畢竟淨にいるゝがゆへなり。說願偈摠持、與佛敎相應といふは、持は不散不失になづく、摠は少をもて多を攝するになづく、乃至、願は欲樂往生になづく。乃至。與佛敎相應といふは、たとへば函蓋相稱するがごと

諸法—諸の事物

因緣生—事物は皆實有のものでなく皆因と緣とが結び合ひて假に生ずること

假名人—衆生のこと五蘊假に結合せるを人と名づくれて別に實體なき故なり

三念門—禮拜門、作願門、讚嘆門

に、しんぬ、この句は、これ讃嘆門なりと。願生安樂國といふは、この一句はこれ作願門なり、天親菩薩歸命のこゝろなり。乃至。問ていはく、大乘經論のなかに、處々に、衆生畢竟無生にして、虛空のごとしととけり。いかんぞ天親菩薩願生とのたまふや。こたへていはく、衆生無生にして虛空のごとし。とくに二種あり。一には凡夫の實の、衆生とおもふところのごとく、凡夫の所見の實の生死のごとし、この所見の事畢竟してあらゆることなけん、龜毛のごとし、虛空のごとし。二には、いはく諸法は因緣生のゆへに、すなはちこれ不生にして、あらゆることなきこと、虛空のごとし。天親菩薩願生するところは、これ因緣の義なり。因緣の義なるがゆへに、かりに生となづく。凡夫の實の衆生、實の生死ありとおもふがごときにはあらざるなり。問ていはく、なんの義によりて往生とくぞや。こたへていはく、このあひだの假名人のなかにおいて、五念門を修せしむ、前念と後念と因となる。穢土の假名人、淨土の假名人、決定して一をえず、決定して異をえず、前心後心またかくのごとし、なにをもてのゆへに、もし一ならば、すなはち因果なけん、もし異ならば、すなはち相續にあらず、この義一異を觀ずる門なり。論のなかに委曲なり、第一行の三念門を釋しおはんぬ。乃至。

歸命—佛の教命に從ふこと

長行—偈頌に對して散文のこと

心々相續して、他想間雜することなし。乃至。歸命盡十方無礙光如來は、歸命はすなはちこれ禮拜門なり。盡十方無礙光如來は、すなはちこれ讃嘆門なり。なにをもてかしらん、歸命はこれ禮拜なりとは。龍樹菩薩、阿彌陀如來の讃をつくれるなかに、あるひは稽首禮といひ、あるひは我歸命といひ、あるひは歸命禮といへり。この論の長行のなかに、また五念門を修すといへり。五念門のなかに、禮拜はこれひとつなり。天親菩薩、すでに往生を願ず、あに禮せざるべけんや、かるがゆへにしんぬ、歸命はすなはちこれ禮拜なりと。しかるに禮拜は、たゞこれ恭敬にして、かならずしも歸命ならず、歸命はこれ禮拜なり。もしこれをもて推するに、歸命は重とす。偈は己心をのぶ、よろしく歸命といふべし。論に偈義を解するに、ひろく禮拜を談ず。彼此あひ成ず、義においで、いよ／＼あらはれたり。なにをもてかしらん、盡十方無礙光如來は、これ讃嘆門なりとは。しもの長行のなかにいはく、いかんが讃嘆する。いはく、かの如來のみなを稱するなり。かの如來の光明智相のごとく、かの名義のごとく、實のごとく、修行し相應せんとおもふがゆへに。乃至。天親いま盡十方無礙光如來とのたまへり。すなはちこれ、かの如來のみなによりて、かの如來の光明智相のごとく讃嘆するがゆへ

を云ふ、煩惱の交つて居る善
梵行—淸淨の行
正定、聚—まさしく佛になると定められたる輩
無量壽經優婆提舍—上記の淨土論の本題名なり
上衍—衍は乘と譯す、上乘にて大乘のことなり
婆藪般頭菩薩—譯して天親菩薩と稱す
神力—不可思議なる尊き佛力

薩の法をみだる。二には聲聞は自利にして、大慈悲をさふ。三には、無顧の惡人、他の勝德を破す。四には顚倒の善果、よく梵行を壞す。五にはたゞこれ自力にして、他力のたもつなし。かくのごときらの事、目にふるゝにみな是なり。たとへば陸路の歩行は、すなはちくるしきがごとし。易行道といふは、いはく、たゞ信佛の因緣をもて、淨土に生ぜんと願す、佛願力に乘じて、すなはちかの淸淨の土に、往生することをえしむ。佛力住持して、すなはち大乘正定の聚にいれたまふ。正定はすなはちこれ阿毘跋致なり。たとへば、水路の乘船は、すなはちたのしきがごとし。この無量壽經優婆提舍は、けだし上衍の極致、不退の風航なるものなり。無量壽は、これ安樂淨土の如來の別號なり。釋迦牟尼佛、王舍城および舍衞國にましまして、大衆のなかにして、無量壽佛の莊嚴功德をときたまふ。すなはち佛の名號をもて經の體とす。のちの聖者婆藪般頭菩薩、如來大悲の敎を服膺して、經にそへて、願生の偈をつくれり。已上。またいはく、また所願かろからず、もし如來、威神をくはえたまはずば、まさになにをもてか達せん、神力を乞加す、このゆへにあふいてつけたまへり。我一心といふは、天親菩薩の自督のことはりなり。いふこゝろは、無礙光如來を念じて、安樂に生ぜんと願ず、

自在人―一切の事物に自在なる佛、即ち阿彌陀佛
淸淨人―阿彌陀佛
淨土論―天親菩薩の作
修多羅―梵語經の意
願偈―願生偈なり、偈は梵語譯して頌と云ふ
摠持―種々の條理を總べ收むる意
四種の門―五念門の中の禮拜、讚嘆、作願、觀察の四門、
第五門―五念門の中の第五廻向門のこと
論註―淨土論註、曇鸞の作
外道―婆羅門等の外敎
相善―有漏の善

ふねに乘じて、よく難度海を度す、みづから度し、またかれを度せん、われ自在人を禮したてまつる。諸佛無量劫に、その功德を讚揚せんになをつくすことあたはじ、淸淨人を歸命したてまつる。われいままたかくのごとし、無量の德を稱讚す。この福の因緣をもて、ねがはくば佛、つねにわれを念じたまへ。抄出。

淨土論にいはく、われ、修多羅眞實功德相によりて、願偈摠持をときて、佛教と相應せり。佛の本願力をみそなはすに、まうあふてむなしくすぐるものなし、よくすみやかに功德の大寶海を滿足せしむ。またいはく、菩薩は四種の門にいりて、自利の行成就したまへり、しるべし。菩薩は第五門にいでて、廻向利益他の行成就したまへり、しるべし。菩薩は、かくのごとく五門の行を修して、自利利他して、すみやかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することをうるがゆへに。抄出。

論の註にいはく、つしんで龍樹菩薩の十住毘婆娑を案ずるに、いはく、菩薩、阿毘跋致をもとむるに、二種の道あり、一には難行道、二には易行道なり。難行道といふは、いはく五濁の世、無佛のときにおいて、阿毘跋致をもとむるを難とす。この難にいまし多途あり。ほゞ五三をいひて、もて義のこゝろをしめさん。一には外道の相善は、菩

世自在王佛―世間一切法に自在にして世間を利益するに自在なる佛

無量光明慧―阿彌陀佛のこと

八道―正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道

いはく、阿彌陀等の佛、および諸大菩薩、みなを稱し一心に念ずれば、また不退轉をうることかくのごとし。阿彌陀等の諸佛、また恭敬禮拜し、その名號を稱すべし。いままさに、つぶさに無量壽佛をとくべし。世自在王佛（乃至、その餘の佛あり。）この諸佛世尊、現在十方の清淨の世界に、みなみなを稱し、阿彌陀佛の本願を憶念したまふことかくのごとし。もしひと、われを念じ、名を稱して、みづから歸すれば、すなはち必定にいりて、阿耨多羅三藐三菩提をう、このゆへにつねに憶念すべし。偈をもて稱讃す。無量光明慧、身は眞金のやまのごとし。われいま身口意をして、合掌し、稽首し禮したてまつる。乃至。ひとよく、この佛の無量力功徳を念ずれば、すなはちのときに必定にいる、このゆへにわれつねに念じたてまつる。乃至。もしひと、佛にならんと願じて、心に阿彌陀を念ずれば、ときに應じて、ために身を現じたまふ。このゆへにわれかの佛の本願力を歸命す。十方のもろもろの菩薩も、きたりて供養し法をきく、このゆへにわれ稽首したてまつる。乃至。もしひと、善根をうへて、うたがへばすなはちはなひらけず、信心清淨なれば、はなひらけて、すなはち佛をみたてまつる。十方現在の佛、種々の因緣をもて、かの佛の功徳を嘆じたまふ。われいま歸命し禮したてまつる。乃至。かの八道の

信方便—他力信心の方便なり
易行—自力修行により佛果に到る聖道門に對して他力信心により佛恩報謝の念佛のみにして成佛するを易行と名づく即淨土門
阿惟越致—梵語不退轉の位なり眞宗の敎にては佛を信賴する一念に此の位に入る
西方善世界—阿彌陀佛の極樂世界のこと

衆生を安穩す、慈に三種あり。乃至。またいはく、佛法に無量の門あり、世間の道に、難あり易あり。陸道の步行はすなはちくるしく、水道の乘船はすなはちたのしきがごとし。菩薩の道も、またかくのごとし。あるひは勤行精進のものあり、あるひは信方便の易行をもて、とく阿惟越致にいたるものあり。乃至。もしひと、とく不退轉地にいたらんとおもはゞ、恭敬の心をもて、執持して名號を稱すべし。もし菩薩、この身において、阿惟越致地にいたることをえ、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんとおもはゞ、まさにこの十方諸佛を念ずべし。名號を稱すること、寶月童子所問經の阿惟越致品のなかにとくがごとし。乃至。西方に善世界の佛を、無量明と號す。身光智慧あきらかにして、てらすところ邊際なし。それみなをきくことあるものは、すなはち不退轉をう。乃至。過去無數劫に、佛まします、海德と號す。このもろ〳〵の現在の佛、みなかれにしたがひて願をおこせり。壽命はかりあることなし、光明てらしてきはまりなし、國土はなはだ淸淨なり、みなをきゝて、さだめて佛にならん。乃至。問ていはく、たゞこの十佛の名號をきゝて、執持して心におけば、すなはち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることをう。また餘佛餘菩薩のみなましく〳〵て、阿惟越致にいたることをうとせんや。こたへて

初めて歡喜の念をなす故歡喜地と名づく信決定の人は之に當る
轉輪王—須彌山の四圍にある國々を統領する大王即ち聖道門

といへども、この念をなすことあたはず、われかならずまさに作佛すべし。たとへば轉輪聖子の、轉輪王のいえにむまれて、轉輪王の相を成就して、過去の轉輪王の功德尊貴を念じて、この念をなさん。われいままたこの相あり、またまさにこの豪富尊貴をうべし、心おほきに歡喜せん。もし轉輪王の相なくば、かくのごときのよろこびなからんがごとし。必定の菩薩、もし諸佛および諸佛の大功德威儀尊貴を念ずれば、われこの相あり、かならずまさに作佛すべし、すなはちおほきに歡喜せん。餘はこの事あることなけん。定心はふかく佛法にいりて、心動ずべからず。またいはく、信力增上はいかん、聞見するところありて、必受してうたがひなければ增上となづく、殊勝となづくと。問ていはく、二種の增上あり、一には多、二には勝なり、いまの說なにものぞ。こたへていはく、このなかの二事ともにとかん。菩薩、初地にいれば、もろ〳〵の功德のあぢはひをうるがゆへに、信力轉增す、この信力をもて、諸佛の功德無量深妙なるを籌量してよく信受す、このゆへにこの心、また多なり、また勝なり。ふかく大悲を行ずるひとは、衆生を愍念すること、骨髓に徹入するがゆへに、なづけて深とす。一切衆生のために、佛道をもとむるがゆへに、なづけて大とす。慈心はつねに利事をもとめて、

大人法―菩薩利他の大行を云ふ

薩婆若智―梵語一切智と譯す佛の智慧

必定―必ず成佛するに定まつた位

歡喜―人間より佛果に至るに五十二段あり、十信、十住、十行、十廻向、十地を經べし　歡喜地は十地の初位にして即四十一段目の此位に入りて初めて將來佛果を得るに定まり退轉せず、菩薩

千萬億數の魔の軍衆、壞亂することあたはず、大悲心をえて大人法を成す。乃至。これを念必定の菩薩となづく。希有の行を念ずるは、必定の菩薩第一希有の行を念ずるなり、心に歡喜せしむ。一切凡夫のおよぶことあたはざるところなり、一切聲聞辟支佛の行ずることあたはざるところなり、佛法無閡解脫、および薩婆若智を開示す、また十地のもろもろの所行の法を念ずれば、なづけて心多歡喜とす。このゆへに菩薩、初地にいることをうれば、なづけて歡喜とす。

問ていはく、凡夫人の、いまだ無上道心を發せざるあり、あるひは發心するものあり、いまだ歡喜地をえざらん、このひと、諸佛および諸佛の大法を念ぜんと、必定の菩薩および希有の行を念して、また歡喜をえんと、初地をえん菩薩の歡喜と、このひとと、なんの差別かあるや。こたへていはく、菩薩、初地をえては、その心歡喜おほし、諸佛無量の德、われまたさだめてまさにうべし。初地をえん必定の菩薩は、諸佛を念ずるに、無量の功德います、われまさにかならずかくのごときの事をうべし、なにをもてのゆへに、われすでにこの初地をえ、必定のなかにいれり。餘はこの心あることなけん、このゆへに初地の菩薩、おほく歡喜を生ず、餘はしからず、なにをもてのゆへに、餘は諸佛を念ず

燃燈—過去久遠劫の昔に世に出でたる佛

彌勒—釋尊に次で此世へ出る佛で今は菩薩

四十不共法—佛に特殊なる四十の別德

無生忍—無生法忍に同じ眞心の智慧

の菩薩の所有の餘の苦は、二三の水渧のごとし、百千億劫に、阿耨多羅三藐三菩提をうといへども、無始生死の苦においては、二三の水渧のごとし、滅すべきところの苦は、大海のみづのごとし、このゆへに、この地をなづけて歡喜とす。

問ていはく、初歡喜地の菩薩、この地のなかにありて、多歡喜となづく、もろ〳〵の功德をうることをなすがゆへに歡喜を地とす、法を歡喜すべし、なにをもてかしかも歡喜するや。こたへていはく、つねに諸佛および諸佛の大法を念ずれば、必定して希有の行なり、このゆへに歡喜おほし。かくのごときらの歡喜の因緣のゆへに、菩薩初地のなかにありて心に歡喜おほし。諸佛を念ずといふは、燃燈等の過去の諸佛、阿彌陀等の現在の諸佛、彌勒等の將來の諸佛を念ずるなり。つねにかくのごときの諸佛世尊を念ずれば、現にまへにましますがごとし、三界第一にしてよくすぐれたるひとましまさず、このゆへに歡喜おほし。諸佛の大法を念ぜば、略して諸佛の四十不共法をとかん。一には、自在の飛行こゝろにしたがふ。二には、自在の變化ほとりなし。三には、自在の所聞無閡なり。四には、自在に無量種門をもて、一切衆生の心をしろしめす。乃至。念必定のもろ〳〵の菩薩は、もし菩薩阿耨多羅三藐三菩提の記をえつれば、法位にいり無生忍をうるなり。

須陀洹道―梵語入流果と譯す、

見諦所斷法―見道の位にて斷ぜらるゝ煩惱のこと、見道とは菩薩修行中の階段

乾闥婆―梵語尋香と譯す酒肉を食はずたゞ香のみを食する飛行神なり

辟支―梵語獨覺と譯す飛花落葉等を觀じて無師獨悟する聖者

を行ずるがゆへに、なづけて入とす。この心をもて初地にいるを、歡喜地となづく。問ていはく、初地、なんがゆへぞ、なづけて歡喜とするや。こたへていはく、初果の究竟して、涅槃にいたることをうるがごとし。菩薩、この地をうれば、心つねに歡喜おほし、自然に諸佛如來の種を增長することをう、このゆへに、かくのごときのひとを、賢善者となづくることをう。初果をうるがごとしといふは、ひとの須陀洹道をうるがごとし、よく三惡道の門をとづ。法をみて法にいり、法をえて堅牢の法に住して、傾動すべからず、究竟して涅槃にいたる、見諦所斷の法を斷ずるがゆへに、心おほきに歡喜す。たとひ睡眠懶墮なれども、二十九有にいたらず。一毛をもて百分となして、一分の毛をもて、大海のみづをわかちとらんがごとし、二三滴の苦すでに滅せんがごとし、大海の水は餘のいまだ滅せざるもののごとし、二三滴のごとき心おほきに歡喜せん。菩薩もかくのごとし。初地をえおはるを、如來のいえに生ずとなづく。一切天龍夜叉乾闥婆、乃至、聲聞辟支等、ともに供養し、恭敬するところなり。なにをもてのゆへに、このいえ過咎あることなし、かるがゆへに世間道を轉じて、出世間道にいる。たゞ佛を樂敬すれば、四功德處をえ、六波羅密の果報をう。滋味もろ〳〵の佛種を斷ぜざるがゆへに、心おほきに歡喜す。こ

十住毘婆娑論―龍樹菩薩の著
般舟三昧―梵語現前定と譯す身口意を絶對に正しくする定なり此の定を修すれば佛現前す
無生法忍―智慧を以て眞如の理をさとること
助菩提―龍樹菩薩の作
六波羅密―波羅密は度と譯す布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六を以てこの生死界を渡る故に名づく之は菩薩の修する行なり
般若波羅密―梵語智慧

しかればみなを稱するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願をみてたまふ。稱名はすなはちこれ最勝眞妙の正業なり、正業はすなはちこれ念佛なり、念佛はすなはちこれ南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛はすなはちこれ正念なり、しるべし。十住毘婆娑論にいはく、あるひとのいはく、般舟三昧および大悲を、諸佛のいえとなづく、この二法より、もろ〳〵の如來を生ず。このなかに般舟三昧を父とす、大悲を母とす。またつぎに般舟三昧はこれ父なり、無生法忍はこれ母なり、助菩提のなかにとくがごとし。般舟三昧の父、大悲無生の母、一切もろ〳〵の如來、この二法より生ずと。いえに過咎なければ家淸淨なり。かるがゆへに淸淨といふは、六波羅密四功德處なり、方便般若波羅密は善慧なり、般舟三昧大悲諸忍、この諸法淸淨にして、とがあることなし、かるがゆへに家淸淨となつく。この菩薩、この諸法をもていえとす、かるがゆへに過咎あることなし。世間道を轉じて出世上道に入るものなり。世間道を卽是凡夫所行道となづく、轉じて休息となづく。凡夫道は、究竟して涅槃にいたることあたはず、つねに生死に往來す、これを凡夫道となづく。出世間は、この道によりて三界をいづることをうるがゆへに、出世間道となづく。上は妙なるがゆへに、なづけて上とす。入はまさしく道

阿耨多羅三藐三菩提—梵音なり無上正偏知と譯す佛の最もすぐれたる智慧なり

阿僧祇—梵語無數の意

聖人—佛菩薩のこと

あるにあらざるひとは、この經の名をきくことをえず。たゞ清淨に戒をたもてるもの、いましかへりてこの正法をきく。惡と憍慢と蔽と懈怠とのものは、もてこの法を信ずることかたし。宿世のとき、佛をみたてまつるもの、このみて世尊の教を聽聞せん。ひとのいのち、まれにうべし。佛、世にましませども、はなはだまうあひがたし。信慧ありていたるべからず、もし聞見せば、精進にしてもとめよ。この法をきゝて、しかもわすれず、すなはちみてうやまひ、えておほきによろこばゝ、すなはちわがよき親厚なり。これをもてのゆへに、道意を發せよ。たとひ世界にみてらん火をも、このなかをすぎて、法をきくことをえば、かならずまさに世尊となりて、まさに一切生老死を度せんとすべし。已上。

悲華經の大施品の二卷にのたまはく、曇無讖三藏の譯。ねがはくばわれ、阿耨多羅三藐三菩提を成じおはらんに、無量無邊阿僧祇の餘佛の、世界の所有の衆生、わが名をきかんもの、もろもろの善本を修して、わが界に生ぜんとおもはん、ねがはくばそのいのちをすてゝのち、必定して生ずることをえしめん。たゞし五逆と聖人を誹謗せんと、正法を廢壞せんとをばのぞかん。已上。

刹—梵語刹多羅の略國土の意
無量覺—阿彌陀佛のこと
無量光明土—無量の光明輝く土即ち極樂

もに願じていはく、われらまた作佛せんとき、みな無量清淨佛のごとくならしめん。佛、すなはちこれをしろしめして、もろ〳〵の比丘僧につげたまはく、この阿闍世王太子、および五百の長者子、のち無央數劫をさりて、みなまさに作佛して、無量清淨佛のごとくなるべし。佛ののたまはく、この阿闍世王太子、五百の長者子、菩薩の道をなしてよりこのかた、無央數劫に、みなをの〳〵四百億佛を供養しおはりて、いままたきたりて、われを供養せり。この阿闍世王太子、および五百人等、みな前世に、迦葉佛のとき、わがために弟子となれりき。いまみなまた會して、これとともにあひあへるなり。すなはちもろ〳〵の比丘僧、佛のみことをきゝて、みな心に踊躍して歡喜せざるものなけん。乃至。かくのごときのひと、佛名をきゝて、こゝろよく安穩にして大利をえん。われらがたぐひ、この德をえん、このもろ〳〵の刹によきところをえん。無量覺、その決をさづけん、われ前世に本願あり。一切のひと、法をとくをきかば、みなこと〴〵くわがくにゝ來生せん、わが願ずるところ、みな具足せん。もろ〳〵のくにより來生せんもの、みなこと〴〵くこのくにゝ來到して、一生に不退轉をえん。速疾にこえて、すなはち安樂國の世界にいたるべし。無量光明土にいたりて、無數の佛を供養せん。この功德

佛說諸法云々—無量壽經の異譯

慈心—佛力にすがり慈悲を喜ぶ心

無量淸淨平等覺經—無量壽經の異譯

三惡道—地獄、餓鬼、畜生の三道

佛說諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經にのたまはく、第四に願ずらく、それがし作佛せしめんとき、わが名字をして、みな八方上下無央數の佛國にきこえしめん。みな諸佛をして、おの〳〵比丘僧大衆のなかにして、わが功德國土の善をとかしめん。諸天人民蜎飛蠕動のたぐひ、わが名字をきゝて、慈心せざるはなけん。歡喜踊躍せんもの、みなわがくにゝ來生せしめ、この願をえて、いまし作佛せん。この願をえずば、つゐに作佛せじ。已上。

無量淸淨平等覺經の卷上にのたまはく、われ作佛せんとき、わが名をして八方上下無數の佛國にきかしめん、諸佛おの〳〵弟子衆のなかにして、わが功德國土の善を嘆ぜん。諸天人民蠕動のたぐひ、わが名字をきゝて、みなこと〴〵く踊躍せんもの、わがくにゝ來生せしめん、しからずば、われ作佛せじ。われ作佛せんとき、他方佛國の人民、前世に、惡のためにわが名字をきゝ、および、まさしく道のために、わがくにゝ來生せんとおもはん、いのちおえてみなまた三惡道にかへらざらしめて、すなはちわがくにゝ生ぜんこと、心の所願にあらん、しからずば、われ作佛せじと。阿闍世王太子、および五百の長者子、無量淸淨佛の二十四願をきゝて、みなおほきに歡喜踊躍して、心中にと

ば、ちかふ正覺をとらじ、衆のために寶藏をひらきて、ひろく功德の寶を施せん。つねに大衆のなかにして、說法師子吼せん。要を抄す。

願成就の文。經にのたまはく、十方恒沙の諸佛如來、みなともに無量壽佛の威神功德不可思議なるを讚嘆したまふ。已上。またのたまはく、無量壽佛の威神きはまりなし、十方世界無量無邊不可思議の諸佛如來、かれを稱嘆せざるはなし。已上。またのたまはく、その佛の本願力、みなをきゝて往生せんとおもへば、みなこと〲くかのくににいたりて、おのづから不退轉にいたる。已上。

無量壽如來會にのたまはく、いま如來に對して弘誓をおこせり、まさに無上菩提の因を證すべし。もしもろ〱の上願を滿足せずば、十力無等尊をとらじ。心あるひは常行にたえざらんものに施せん、ひろく貧窮をすくひて、もろ〱の苦をまぬからしめ、世間を利益して安樂ならしめん。乃至。最勝丈夫、修行しおはりて、かの貧窮において伏藏とならん、善法を圓滿して等倫なけん、大衆のなかにして師子吼せん。已上抄出。またのたまはく、阿難、この義利をもてのゆへに、無量無數、不可思議、無有等等、無邊世界の諸佛如來、みなともに無量壽佛の所有の功德を稱讚したまふ。已上。

寶藏―功德の寶を藏めて居る南無阿彌陀佛の事

師子吼―說法を獅子の吼えたて百獸の畏服するに喩ふ

願成就の文―衆生濟度のため本願成就せしことを記する經文

恒沙―印度のがんぢす河の沙無數と云ふことの喩

不退轉―一度得たる功德が再び退轉することなき位

無有等々―無有等はひとしきものなきこと、等々と重ねたるは無有等中の無有等を云ふ非常に數多きこと

無礙光如來—阿彌陀佛

咨嗟—讃嘆

名聲十方—南無阿彌陀佛の御名が東西南北四維上下の十方を超え渡ること。

顯淨土眞實行文類二

愚禿釋の親鸞の集

諸佛稱名の願。淨土眞實の行、選擇本願の行。

つゝしんで、往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり。大行といふは、すなはち無礙光如來のみなを稱するなり。この行はすなはちこれ、もろ〳〵の善法を攝し、もろ〳〵の德本を具せり。極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり、かるがゆへに大行となづく。しかるにこの行は、大悲の願よりいでたり。すなはちこれ諸佛稱揚の願となづけ、また諸佛稱名の願となづく、また諸佛咨嗟の願となづけ、また往相廻向の願となづくべし、また選擇稱名の願となづくべきなり。

諸佛稱名の願。大經にのたまはく、たとひわれ佛をえたらんに、十方世界の無量の諸佛、こと〳〵く咨嗟して、わが名を稱せずといはゞ、正覺をとらじ。已上。またのたまはく、われ佛道をならんにいたりて、名聲十方にこえん。究竟してきこゆるところなく

一乘―實大乘の一切衆生を悉く成佛せしむる法

にいでたり、もし大徳ありて、聰明善心にして佛意をしるによりて、もしわすれずば、佛邊にありて佛につかへたまふ。もしいまとへるところ、あまねくきゝ、あきらかにきけ。已上。

憬興師のいはく、今日世尊、奇特の法に住したまへり。神通輪によりて現じたまふところの相なり、たゞつねにことなるのみにあらず、またひとしきものなきがゆへに。今日世雄、佛の所住に住したまへり。普等三昧に住して、よく衆魔雄健天を制するがゆへに。今日世眼、導師の行に住したまへり。五眼を導師の行となづく、衆生を引導すること、過上なきがゆへに。今日世英、最勝の道に住したまへり。佛、四智に住して、ひとり秀でたまへること、ひとしきことなきがゆへに。今日天尊、如來の徳を行じたまへり。すなはち第一義天なり、佛性不空の義をもてのゆへに。阿難、まさにしるべし、如來正覺は、すなはち奇特の法なり。慧見無礙にして、最勝の道を述するなり。よく過絶することなし。すなはち如來の徳なり。已上。

しかればすなはち、これ眞實の教をあらはす明證なり。まことにこれ如來興世の正說、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極說、速疾圓融の金言、十方稱讃の誠言、時機純熟の眞教なり、しるべし。

の全世界を云ふ
靈瑞華—優曇華
無量壽如來會—大無量壽經異譯書なり
應—詳しくは應供なり、佛はよく人天の供養を受くべき資格ある故に名く
有情—衆生
平等覺經—無量壽經の異譯

たきこと、なをし靈瑞華のときありて、ときにいましいづるがごとし。いまとへるところは、饒益するところおほし、一切の諸天人民を開化す。阿難まさにしるべし、如來の正覺は、その智はかりがたくして、道御したまふところおほし。慧見無礙にして、よく遏絶することなし。已上。

無量壽如來會にのたまはく、阿難、佛にまふしてまふさく、世尊、われ如來の光瑞希有なるをみたてまつるがゆへに、この念をおこせり。天等によるにあらず。佛、阿難につげたまはく、よきかな〳〵、なんぢいまこゝろよくとへり。よく微妙の辨才を觀察して、よく如來にかくのごときの義をとひたてまつる。なんぢ、一切如來應正等覺、および大悲に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとく、大士、世間に出現したまへり。かるがゆへに、この義をとひたてまつる。またもろ〳〵の有情を哀愍し、利樂せんがためのゆへに、如來にかくのごときの義をとひたてまつれり。已上。

平等覺經にのたまはく、佛、阿難につげたまはく、世間に優曇鉢樹あり、たゞ實ありて、はなあることなし、天下に佛まします、いましはなのいづるがごとしならくのみ。世間に佛ましませども、はなはだまうあふことをえがたし、いまわれ佛になりて、天下

はるゝことと
奇特の法―身の表にあらはれた奇瑞の相、
佛の所住―あらゆる佛を念じたまふ定
阿難―釋尊の徒弟にして且其十大弟子の一人
慧義―さときわけがら
三界―欲界、色界、無色界、下は地獄より上は天上に至るまで

こと、あきらかなるかゞみのきよくして、かげ表裏にとほるがごとし。威容顯曜にして、超絶したまへること無量なり。いまだかつて瞻覩せず、殊妙なること、けふのごとくましますをば、やゝしかなり。大聖、わが心に念言すらく、今日世尊、奇特の法に住したまへり、今日世雄、佛の所住に住したまへり、今日世眼、道師の行に住したまへり、今日世英、最勝の道に住したまへり、今日天尊、如來の徳を行じたまへり、去來現の佛、佛と佛とあひ念じたまへり、いまの佛も、諸佛を念じたまふことなきことをえんや。なんがゆへぞ、威神のひかり、ひかりいましゝかると。こゝに世尊、阿難につげてのたまはく、諸天のなんぢをおしへて、きたして佛にとはしむるか、みづから慧見をもて威顔をとへるやと。阿難、佛にまふさく、諸天のきたりて、われをおしふるものあることなし、みづから所見をもて、この義をとひたてまつるならくのみと。

佛ののたまはく、よきかな阿難、とへるところはなはだこゝろよし、ふかき智慧眞妙の辨才をおこして、衆生を愍念せんとして、この慧義をとへり。如來、無蓋の大悲をもて三界を矜哀したまふ。世に出興するゆへは、道教を光闡して、群萠をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおぼしてなり。無量億劫にも、まうあひがたく、みたてまつりが

往相―淨土へ往生するすがた
還相―淨土より再び迷の世界へ衆生濟度に還來する相
道教―釋尊一代の教
諸根悅豫―心の喜びが五官に表

顯淨土眞實教文類一

愚禿釋の親鸞の集

大無量壽經。 眞實の教、淨土眞宗。

つしんで、淨土眞宗を按ずるに、二種の廻向あり、一には往相、二には還相なり。往相の廻向について、眞實の教行信證あり。

それ眞實の教をあらはさば、すなはち大無量壽經これなり。この經の大意は、彌陀、ちかひを超發して、ひろく法藏をひらきて、凡小をあはれんで、えらんで功德の寶を施することをいたす。釋迦、世に出興して、道教を光闡して、群萠をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおぼしてなり。こゝをもて、如來の本願をとくを、經の宗致とす。すなはち佛の名號をもて、經の體とするなり。なにをもてか、出世の大事なりと、しることをうるとならば、

大無量壽經にのたまはく、今日世尊、諸根悅豫し、姿色淸淨にして、光顏巍巍とまします

と
嘉號—阿彌陀佛名號
信樂—信心
凡小—凡夫
大聖—釋迦如來
攝取不捨—彌陀の光明の中に念佛の衆生をおさめとりて捨てざること
西蕃—支那より印度を指して云ふ
東夏—支那

て遲慮することなかれ。こゝに愚禿釋の親鸞、よろこばしきかな、西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釋、あひがたくして、いまあふことをえたり。きゝがたくして、すでにきくことをえたり。眞宗の敎行證を敬信して、ことに如來の恩德のふかきことをしんぬ。こゝをもてきくところをよろこび、うるところを嘆ずるなり。

大無量壽經。眞實の敎、淨土眞宗。

眞實の敎をあらはす一。
眞實の行をあらはす二。
眞實の信をあらはす三。
眞實の證をあらはす四。
眞佛土をあらはす五。
化身土をあらはす六。

難度海—この渡り難き迷の世界
淨邦—阿彌陀佛の極樂淨土
淨業機彰—淨土參りの業、即ち念佛を修する機類のあらはれたること
韋提—頻婆娑羅王の妃
安養—極樂淨土
權化—佛菩薩の化身なり、調達闍世韋提等をさす
群萠—衆生のこと
世雄—佛のこと
逆謗—逆は大罪惡謗は佛法をそしるもの
闡提—梵語斷善根と譯す、到底煩惱より解脱し得ざる我々のこと

顯淨土眞實敎行證文類序

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は、難度海を度する大船、無礙の光明は、無明の闇を破する慧日なり。しかればすなはち淨邦緣熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。淨業機あらはれて、釋迦、韋提をして、安養をえらばしめたまへり。これすなはち權化の仁、ひとしく苦惱の群萠を救濟し、世雄の悲、まさしく逆謗闡提をめぐまんとおぼす。かるがゆへにしんぬ、圓融至德の嘉號は、惡を轉じて德をなす正智、難信金剛の信樂は、うたがひをのぞき德をえしむる眞理なり。しかれば凡小修しやすき眞敎、愚鈍ゆきやすき捷徑なり。大聖一代の敎、この德海にしくなし。穢をすて淨をねがひ、行にまどひ信にまどひ、心くらく識すくなく、惡おもくさはりおほきもの、ことに如來の發遣をあふぎ、かならず最勝の直道に歸して、もはらこの行につかへ、たゞこの信をあがめよ。あゝ弘誓の強緣、多生にもまうあひがたく、眞實の淨信、億劫にもえがたし。たま〳〵行信をえば、とをく宿緣をよろこべ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられば、かへりてまた曠劫を逕歷せん。まことなるかな、攝取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思し

釋迦諸佛はこれ、
眞實慈悲の父母なり、
種々の善巧方便をもて、
我等が無上の眞實信を發起せしめ給ふ。
煩惱を具足せる凡夫人、
佛の願力によりて信を獲得す。
この人はすなはち凡數の攝にあらず。
これ人中の分陀利華なり。
この信は最勝希有人、
この信は妙好上々人なり。
安樂土にいたれば、かならず自然に、
すなはち法性の常樂を證せしむといへり。

入出二門偈頌　七十四行

法性—諸法即ち一切萬物の體、眞如

一乘海―一乘法の廣大なるを海に譬ふ

圓教―圓滿眞實の教

頓教―修行の階級を經ずして速かに悟りを得る教

三信相應すればこれ一心なり。
一心は淳心なれば如實となづく。
もし生ぜずば、このことはりなけん。
かならず安樂國に往生することをうれば、
生死すなはちこれ大涅槃なり。
すなはち易行道なり、他力となづく。
善導和尚、義解していはく、
念佛成佛するこれ眞宗なり。
すなはちこれをなづけて一乘海とす、
すなはちこれをまた菩提藏となづく。
すなはちこれ圓教のなかの圓教なり、
すなはちこれ頓教のなかの頓教なり。
眞宗にまふあひがたし、信をうることかたし。
難のなかの難、これにすぎたるはなし。

道綽和尚、解釋していはく、
月藏經にのたまはく、
我が末法に行をおこし道を修せんに、
一切の衆、いまだ一人も獲得するものあらじと。
こゝにありて、心をおこして行をたつるものは、
すなはちこれ聖道なり、自力となづく。
當今は末法、これ五濁なり、
たゞ淨土のみありて通入すべしと。
いまのときに、惡をおこし衆罪をつくる、
恒常にして暴風駛雨のごとし。
本弘誓願に名を稱せしむるは、
これ穢濁惡の衆生のためなり。
こゝをもて諸佛、淨土をすゝめたまへり。
たとひ一生、惡業をつくれども、

如實修行相應とは、
名義と光明とに隨順するなり。
この信心をもて一心となづく。
煩惱成就の凡夫人、
煩惱を斷ぜずして涅槃をえしむ、
すなはちこれ安樂自然の德なり。
淤泥華とは、經にときてのたまはく、
高原の陸地には蓮を生ぜず、
卑濕の淤泥に蓮華を生ず。
これは凡夫、煩惱泥中にありて、
佛正覺華を生ずるにたとふるなり。
これ如來の本弘誓、
不可思議力をしめす、
すなはちこれ入出二門を他力となづくと。

婆藪槃頭—梵語
世親と譯す

無礙光佛、因地のとき、
この弘誓をおこし、この願をたつ。
菩薩すでに智慧の心を成じ、
方便心、無諂心を成じ、
妙樂勝眞心を成就して、
すみやかに無上道を成就することをう。
自利と利他との功德を成ず、
すなはちこれをなづけて入出門とす。
本師曇鸞和尙、婆藪槃頭菩薩の論、釋したまへり。
願力成就を五念となづく、
佛よりしていはゞ、よろしく利他といふべし、
衆生よりしていはゞ、他利といふべし。
まさにしるべし、今まさに佛力を談ぜんとす、

いかんが迴向す、心に作願したまひき。
苦惱の一切衆をすてずして、
迴向を首として、大悲心を、
成就することをえたまへるが故に、功德を施したまふ。
かの土に生じをはりて、すみやかにとく、
奢摩他と毗婆舍那との、
巧方便力成就すること得をはりて、
生死の園、煩惱の林にいりて、
應化身をしめし神通にあそぶ、
敎化地にいたりて群生を利したまふ。
すなはちこれを出の第五門となづく。
薗林遊戲地門にいるなり。
本願力の迴向をもてのゆへに、
利他の行成就したまへると、しるべし。

毗婆舍那―梵語観と譯す細密に識別することなり

屋門―極樂に往生して莊嚴をながめ恰も屋内にあるが如く種々の法味樂を與へらるゝをいふ

これをなづけて入の第三門とす。
またこれをなづけて宅門にいるとなす。
いかんが觀察す、智慧をもて觀じたまひき。
正念にかしこを觀じて、
實のごとく、毗婆舍那を修行せんとおもふがゆへに、
かのところにいたることをうれば、
すなはち種々無量の法味樂を受用せしむ。
すなはちこれを入の第四門となづく。
またこれをなづけて屋門にいるとなす。
菩薩の修行成就といふは、
四種は入の功德を成就したまへり。
自利の行成就したまふと、しるべし。
第五は出の功德を成就したまふ。
菩薩の出第五門といふは、

近門—正定聚の位に入り、佛果に近づけるが故にいふ

大會衆—淨土の聖衆

奢摩他—梵語、止寂と譯す、心安に外境に動かされざる事

すなはちこれを入の第一門となづく。
またこれをなづけて近門にいるとなす。
いかんが讃嘆す、口業に讃じたまひき、
名義に隨順して佛名を稱ぜしむ。
如來の光明智相によりて、
實のごとく修し相應せんと欲すがゆへなり。
すなはちこれ無礙光如來の、
攝取選擇の本願なるがゆへなり。
これをなづけて入の第二門とす。
すなはち大會衆のかずにいることをうるなり
いかんが作願す、心につねに願じたまひき。
一心專念してかしこに生ぜんと願ずれば、
蓮華藏世界にいることをえて、
實のごとく奢摩他を修せんと欲するなり。

五種の門―五念門の因によりて得る果なり。近門、大會衆門、宅門、屋門、園林遊戯地門の五

正徧知―佛十號の一、正理を究め盡して知らざる所なきが故に名づく

かの如來の本願力を觀ずるに、
凡愚まふあふて空くすぐるものなし。
一心に專念すれば、すみやかに、
眞實功德の大寶海を滿足せしむ。
菩薩は五種の門に入出して、
自利利他の行、成就したまへり。
不可思議兆載劫に、
漸次に五種の門を成就したまへり。
なにらをかなづけて五念門となすと、
禮と讃と作願と觀察と廻となり。
いかんが禮拜す、身業に禮したまひき、
阿彌陀佛正徧知。
もろ〳〵の群生を善巧方便して、
安樂國に生ぜん意をなさしめ給ふゆへなり。

法藏ー阿彌陀佛因位中の御名

根缺ー根不具に同じ

二乘ー聲聞緣覺

三三の品ー衆生の根機上々より下々に至る九品

二種の不思議力あり。
これ安樂の至德をしめすなり。
一には業力、
いはく法藏の大願業力の成就するところ。
二には正覺の阿彌陀法王の、
善力に攝持せられたり。
女人根缺二乘の種は、
安樂淨刹にながく生ぜず。
如來淨華のもろ〱の聖衆は、
法藏正覺の華より化生す。
諸機はもとすなはち三三の品なれども、
いまは一二の殊異なし。
同一に念佛して、別の道なければなり。
なを淄澠の一味なるがごときなり。

入出二門—入とは淨業を修して極樂の功德莊嚴の中に入るをいひ、出とは慈悲心を以て衆生のために出て、教化をなす利他門をいふ

修多羅—梵語、譯して經といふ

かの世界—極樂世界

入出二門偈頌

愚禿親鸞作

世親菩薩は、
大乘修多羅眞實功德によりて、
一心に、
盡十方の不可思議光如來に歸命せしめ給へり。
無礙の光明は大慈悲なり。
この光明はすなはち諸佛の智なり。
かの世界を觀ずれば邊際なし。
究竟せること廣大にして虛空のごとし。
五には佛法不思議なり。
このなかの佛土不思議に、

邊地、懈慢界、雙樹林下往生なり、また難思往生なりと、しるべしと。

建長七歳乙卯八月二十七日これを書す。

愚禿親鸞八十三歳

三信—他力の至心信樂欲生なり
即往生—眞實報土の往生をさす
即とは信の一念に直ちに往生の定まるをいふ
便往生—方便化土の往生をさす
便とは事の遠く成就するを顯はす
諸機—諸の機類の衆生なり

內迂外直、　內違外隨、
內逆外順、　內輕外重、
內淺外深、　內苦外樂、
內毒外樂、　內怯弱外强剛、
內懈怠外勇猛、　內間斷外無間、
內自力外他力。

おほよそ心について、二種の三心あり。
一には自利の三心、　二には利他の三信なり。
また二種の往生あり。
一には即往生、　二には便往生。
ひそかに觀經の三心往生を按ずれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり。大經の三信に歸せんがためなり、諸機を勸誘して、三信に通入せしめんとおもふなり。三信とは、これすなはち金剛の眞心、不可思議の信心海なり。また即往生とは、これすなはち難思議往生、眞の報土なり。便往生とは、すなはちこれ諸機各別の業因果成の土なり、胎宮、

彼此對。

彼とは淨邦なり。　此とは穢國なり。

去來對。

去とは釋迦佛なり。　來とは彌陀なり。

毒藥對。

毒とは善惡雜心なり。　藥とは純一專心なり。

內外對。

內外道外佛敎、　內聖道外淨土、

內疑情外信心、　內惡性外善性、

內邪外正、　內虛外實、

內非外是、　內僞外眞、

內雜外專、　內愚外賢、

內假外眞、　內退外進、

內踈外親、　內遠外近、

盡十方無礙光如來ー阿彌陀佛のこと
不可思議光佛ー阿彌陀佛のこと

諸佛出世の直說をあらはさしめんとおぼしてなり。來の言は、去に對し往に對するなり。また報土に還來せしめんとおぼしてなり。我の言は、盡十方無礙光如來なり、不可思議光佛なり。能の言は、不堪に對するなり、疑心の人なり。護の言は、阿彌陀佛果成の正意をあらはすなり、また攝取不捨をあらはすかほばせなり、すなはちこれ現生護念なり。念道の言は、他力白道を念ぜよとなり。慶樂とは、慶の言は印可の言なり、獲得の言なり。樂の言は、悅喜の言なり、歡喜踊躍なり。

あふひで、釋迦發遣して、おしへて西方にむかはしめ給へることをかうふるといふは、順なり。また彌陀の悲心招喚し給ふによるといふは、信なり。いま二尊のおん意に信順して、水火の二河をかへりみず、念々にわするゝことなく、かの願力の道に乘ぜよとなり。

至誠心について、
難易對、　彼此對、　去來對、
毒藥對、　內外對。

難易對。
難とは　三業修善不眞實の心なり。
易とは　如來願力廻向の心なり。

如來廻向の信樂—如來より廻施したまふ所の信心

能生清淨願往生心といふは、

無上の信心金剛の眞心を發起するなり、これは如來廻向の信樂なり。

あるひはゆくこと一分二分すといふは、

年歲時節にたとふるなり。

惡見人等といふは、

憍慢、懈怠、邪見、疑心の人なり。

また西のきしのうへに、ひとありてよばふていはく、なんぢ一心正念にしてたゞちにきたれ、われよくまもらんといふは、西のきしのうへに、ひとありてよばふていはくとは、阿彌陀如來の誓願なり。汝の言は行者なり、これすなはち必定の菩薩となづく。龍樹大士の十住毘婆娑論にいはく、卽時入必定となり。曇鸞菩薩の論には、入正定聚之數といへり。善導和尙は、希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、好人なり、上々人なり、眞の佛弟子なりといへり。一心の言は、眞實の信心なり。正念の言は、選擇攝取の本願なり、また第一希有の行なり、金剛不壞の心なり。直の言は、廻に對し、迂に對するなり。また直の言は、方便假門をすてゝ、如來大願の他力に歸せんとなり、

六度—布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧
六趣—地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上
四生—胎生、卵生、濕生、化生

惡知識に對するなり。

眞善知識、正善知識、
實善知識、是善知識、
善々知識、善性人なり。
惡知識とは、假善知識、
僞善知識、邪善知識、
虚善知識、非善知識、
惡善知識、惡性人なり。

白道四五寸といふは、

白道とは、白の言は黒に對す、道の言は路に對す。白とはすなはちこれ、六度、萬行、定散なり、これすなはち自力小善の路なり。黒とはすなはちこれ、六趣、四生、二十五有、十二類生の黒惡道なり。

四五寸とは、四の言は四大の毒蛇にたとふるなり、五の言は五陰の惡獸にたとふるなり。

利他々力廻向。

二にはまた廻向といふは、かのくにゝ生じおはりて、かへりて大悲をおこして、生死に廻入して衆生を敎化するを、また廻向となづくるなり。

二河のなかについて、一の譬喩をときて信心を守護し、もて外邪異見の難をふせがんと。この道、東のきしより西のきしにいたるまで、またながさ百歩なり、文。

百歩とは、人壽百歳にたとふるなり。

群賊惡獸とは、

群賊とは、別解、別行、異見、異執、惡見、邪心、定散自力の心なり

惡獸とは、六根、六塵、五陰、四大なり。

つねに惡友にしたがふとは、

惡友とは、善友に對す、雜毒虛假の人なり。

無人空迥の澤といふは、惡友なり。眞の善知識にあはざるなり。眞の言は、假に對し、僞に對す。善知識とは、

六根―眼、耳、鼻、舌、身、意
六塵―色、聲、香、味、觸、法、
五陰―色、受、想、行、識
四大―一切の色法を組立つる四種の成分、地、水、火、風

ず。このゆへにおの〱所樂にしたがふて、その行を修すれば、かならず、とく解脫をうるなり。

四にはもし行をまなばんとおもはゞ、かならず有緣の法によれ、すこしき功勞をもちゐるに、おほく益をう文、文。

一二所求とは、　上の文のごとし。

一二所愛とは、　上の文のごとし。

一二欲學とは、

一には行者まさにしるべし、もし解をまなばんとおもはゞ、凡より聖にいたれり、乃至佛果まで、一切さはりなく、みなまなぶことをえんとなり。

二にはもし行をまなばんとおもはゞ、かならず有緣の法によれとなり。乃至。

一二必とは、　上の文のごとし。

この深信のなかについて、一二廻向といふは。

自利。

一にはつねに此想をなし、つねにこの解をなす、かるがゆへに、廻向發願心となづく。

一には明能破闇、　二には空能含有、
三には地能戴養、　四には水能生潤、
五には火能成壞、　六には二河なり。水の河、火の河。

二門とは、

出愚癡門。

一には隨出一門、　すなはち一煩惱門を出づるなり。

入智慧海。

二には隨入一門、　すなはち一解脫智慧門に入るなり。

四有緣とは、

一にはなんぢなにをもて、いましまさに有緣の要行にあらざるをもて、われを鄣惑すると。

二にはしかるにわが所愛は、すなはちこれわが有緣の行なり、すなはちなんぢが所求にあらずと。

三にはなんぢが所愛は、すなはちこれなんぢが有緣の行なり、またわが所求にあら

この深信について、一譬喩、二異、二別、一問答、二廻向あり。

一譬喩とは、

この心深信すること、なをし金剛のごとしとなり。

一異とは、

一には異見、　二には異學。

二別とは、

一には別解、　二には別行。

一問答について、七惡、六譬、二門、四有緣、二所求、二所愛、二欲學、二必あり。

七惡とは、

一には十惡、　二には五逆、

三には四重、　四には破戒、

五には破見、　六には謗法、

七には闡提なり。

六譬とは、

廻心ー自力心をひるがへして他力の信に入ること

上來一切定散諸善こと〲く雜行となづく、六種の正に對して六種の雜あるべし。雜行の言は、人天菩薩等の解行雜するがゆへに雜といふなり。もとよりこのかた淨土の業因にあらず、これを發願の行となづく、また廻心の行となづく。かるがゆへに淨土の雜行となづく、これを淨土の方便假門となづく、また淨土の要門となづくるなり。おほよそ聖道淨土、正雜、定散、みなこれ廻心の行なりと、しるべし。

三には廻向發願心とは、廻向發願心といふは二種あり。

自利。

一には過去今生自他所作の善根、みな眞實の深信心のうちに廻向して、かのくによ生ぜんと願ずるなり。

二には廻向發願して生ずるものは、かならず決定して眞實心のうちに、廻向せしめたまへる願をもちゐて、得生の想をなすなりと。

廻向發願生者について、信心あり。

信心とは、

得生の想をなす、この心深信すること、なをし金剛のごとしとなり。

無想離念―眞如の理體を觀じあらゆる念想を拂ふ觀法

立相住心―差別の事相を立て其れに向ひ心を注ぎ觀想する事

三歸―歸依佛、歸依法、歸依僧

讀誦大乘―大乘の經典を讀誦すること

日想、水想、地想、寶樹想、
寶池、寶樓、華座、像想、
眞觀、觀音、勢至、普觀、
雜觀。
讀誦、禮拜、讚嘆、供養。

また〳〵正の散行について、四種あり。

上來定散の六種兼行するがゆへに雜修といふ、これを助業となづく、なづけて方便假門とす。また淨土の要門となづくるなり、しるべし。

また〳〵雜の觀佛について、二種あり。また眞假あり。

一には無想離念、二には立相住心なり。

また〳〵雜の散行について、三福あり。

一には孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業なり。

二には受持三歸、具足衆戒、不犯威儀なり。

三には發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者なりと。

また念佛について、また二種あり。

一には彌陀念佛、　二には諸佛念佛、

法身、報身、應身、化身。

また〳〵彌陀念佛について、二種あり。

一には正行定心念佛、　二には正行散心念佛なり。

彌陀定散の念佛、これを淨土の眞門といふ、また一向專修となづくるなり、しるべし。

また〳〵諸佛念佛について、二種あり。

一には雜行定心念佛、　二には雜行散心念佛。

諸佛定散の念佛、これ雜のなかの專行なりと、しるべし。

また〳〵觀佛について、また二種あり。

一には正の觀佛、　二には雜の觀佛なり。

また〳〵正の觀佛について、また二種あり。

一には眞觀、　二には假觀なり。

また〳〵眞假について、十三の觀想あり。

き行業なり、五あり次に出づ
雑行—五種の正行を除きたる其の餘の諸善を廻向して極樂に往生せんとすること

觀佛—佛の相好功德を想ひ觀ること

正行について、五正行、六一心、六專修あり。
五正行とは、
一には一心に專讀誦、　二には一心に專觀察、
三には一心に專禮佛、　四には一心に專稱佛名、
五には一心に專讚嘆供養なり。
またこの正の中について、また二種あり。
一には一心に彌陀の名號を專念する、これを正定の業となづく。
二にはもし禮誦等によるは、すなはちなづけて助業とすと。
六一心とは、　ついでのごとく一心なり。
六專修とは、　ついでのごとく專修なり。
また〳〵正雜二行について、また二行あり。
一には定行、　二には散行なり。
また〳〵正雜について、また二種あり。
一には念佛、　二には觀佛なり。

二には一切佛の所化は、すなはちこれ一佛の化なり。

六惡とは、

一には惡時、　二には惡世界、

三には惡衆生、　四には惡見、

五には惡煩惱、　六には惡邪無信盛時なり。

二同とは、

一には十方佛等同心、二には同時におの〳〵舌相をいだすなり。

三所とは、

一には所說、　二には所讃、

三には所證なり。

一佛の所說は、すなはち一切佛おなじく、その事を證誠したまふなり。これを人につい て信を立つとなづくるなり、しるべしと。

つぎに行について信をたつとは、しかるに行に二種あり。

一には正行、　二には雜行なり。

一には眞實決了の義、　二には實知、
三には實解、　四には實見、
五には實證なり。

二異とは、
一には異見、　二には異解なり。

報化二佛の疑難について、彌陀經をひきて信をすゝむるに、二專、四同、二所化、六惡、
二同、三所あり。

二專とは、
一には專念、　二には專修。五種なり。

四同とは、
一には同讃、　二には同勸、
三には同證、　四には同體。

二所化とは、
一には一佛の所化は、すなはちこれ一切佛の化なり。

地前の菩薩―菩薩の修行段階に十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の五十二段あり、十廻向迄を地前といふ

三異とは、
一には異學、　二には異見、
三には異執。
一問答の中に、四別、四信あり。
四別とは、
一には處別、　二には時別。
三には對機別、　四には利益別なり。
四信とは、
一には往生の信心、凡夫の疑難なり。
二には淸淨の信心、地前の菩薩羅漢辟支佛等の疑難なり。
三には上々の信心、初地已上十地已來の疑難なり。
四には畢竟して一念疑退の心をおこさゞるなり。報佛化佛の疑難なり。
上々の信心について、五實、一異あり。
五實とは、

三無とは、
一には無記、二には無利、
三には無益。三無は六即の文の中にあり。
六正とは、
一には正教、二には正義、
三には正行、四には正解、
五には正業、六には正智なり。
二了とは。
一にはもし佛の所説は、すなはちこれ了教なり。
二には菩薩等の説は、ことごとく不了教となづくるなり、しるべし。
自利信心。
第七の又深信深心について、決定して自心を建立するに、二別、三異、一問答あり。
二別とは、
一には別解、二には別行。

一にはこれを眞の佛弟子となづく。
上の是名とこれと合して三是名なり。

觀經による。

第六にこの經によりて深信するについて、六卽、三印、三無、六正、二了あり。

六卽とは、

一にはもし佛意にかなへば、すなはち印可して如是如是とのたまふ。

二にはもし佛意にかなはざれば、すなはちなんぢらが所說この義不如是とのたまふ。

三には印せざるは、すなはち無記、無利、無益の語におなじと。

四には佛の印可したまふは、すなはち佛の正教に隨順するなり。

五にはもし佛の所有の言說は、すなはちこれ正教なり。

六には佛の所說は、すなはちこれ了教なり。

三印とは、

一には卽印可、　二には不印、

三には佛印可。

印可―認可のこと

三印は上の六卽の文中にあり。

第五には、たゞ佛語を信じ決定して行による。
第六には、この經によりて深信す。
第七には、又深心の深信は、決定して自心を建立せよと。
六決定とは、已上ついでのごとく、しるべし。

利他信心。
第五の唯信佛語について、三遣、三隨順、三是名あり。
三遣とは、
一には佛のすてしめたまふものをすなはちすつ。
二には佛の行ぜしめたまふものをすなはち行ず。
三には佛のさらしめたまふところをばすなはちさるとなり。
三隨順とは、
一にはこれを佛教に隨順すとなづく。　二には佛意に隨順す。
三にはこれを佛願に隨順すとなづく。
三是名とは、

出離―迷を離ること

のちとす、すなはちこれ難行道自力竪出の義なり。眞實心中口業已下より、自他依正二報にいたるまでは、すなはちこれ易行道他力横出の義なり。

二には深心、深心といふはすなはちこれ深信の心なり。また二種あり。一には決定して自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來つねに沒し常に流轉して、出離の緣あることなしと深信す。二には決定してかの阿彌陀佛四十八願をもて、衆生を攝受したまふこと疑なく慮なく、かの願力に乘ずれば、定めて往生をうと深信すと、文。

いまこの深信は、他力至極の金剛心、一乘無上の眞實信海なり。

文の意を按ずるに、深信について、七深信あり、六決定あり。

七深信とは、

第一の深信は、決定して自身を深信する、すなはちこれ自利の信心なり。

第二の深信は、決定して乘彼願力を深信する、すなはちこれ利他の信海なり。

第三には、決定して觀經を深信す。

第四には、決定して彌陀經を深信す。

忻求：淨土をねがふこと

竪出とは難行道の敎なり、厭離をもて本とす。自力の心なるがゆへなり。

二には忻求眞實。

淨土門、　易行道。

橫出、　他力。

橫出とは易行道の敎なり、忻求をもて本とす。なにをもてのゆへに、願力によりて生死を厭捨せしむるがゆへなりと。

また橫出の眞實について、また三種あり。

一には口業に忻求眞實、
口業に厭離眞實なり。

二には身業に忻求眞實、
身業に厭離眞實なり。

三には意業に忻求眞實、
意業に厭離眞實なり。

宗師の釋文を按ずるに、一者眞實心中已下より自他凡聖等の善にいたるまでは、厭離を

察し憶念して、目のまへに現ぜるがごとくすべし。また眞實心のうちの意業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕賤し厭捨すべしとなり、文。
一には至誠心といふは、至とは眞なり、誠とは實なり、すなはち眞實なり。
眞實に二種あり。
一には自利眞實なり。
難行道、　聖道門。
竪超、即身是佛、即身成佛。　自力なり。　竪出。自力のなかの漸教歷劫修行なり。
二には利他眞實なり。
易行道、　淨土門。
横超、如來の誓願他力なり。　横出。他力のなかの自力なり定散諸行なり。
自利眞實について、また二種あり。
一には厭離眞實。
聖道門、　難行道。
竪出、　自力。

厭離―娑婆をいとふこと

依正二報―依報とは極樂國土の荘嚴をいひ、正報とは彌陀觀音勢至等淨土の聖衆をいふ

四事―供養に用ゆる四種のもの房舍衣服飲食散華燒香

利他眞實について、また二種あり。一にはおほよそほどこしたまふところ趣求をなす、またみな眞實なりと。二には不善の三業かならず眞實心のうちに、すてたまひしをもちゐよ。またもし、善の三業をおこさば、かならず眞實心のうちに、なしたまひしをもちゐよ。内外明闇をえらばず、眞實をもちゐるがゆへに、至誠心となづくと、文。

自利眞實といふは、また二種あり。一には眞實心のうちに自他の諸惡、および穢國等を制捨して、行住坐臥に一切菩薩の諸惡を制捨するにおなじく、われもまたかくのごとくせんとおもへとなり。二には眞實心のうちに自他凡聖等の善を勤修すべしと。眞實心のうちに口業に、かの阿彌陀佛および依正二報を讃嘆すべし。また眞實心のうちの口業に、三界六道等の自他の依正二報苦惡の事を毀厭す。また一切衆生三業所爲の善を讃嘆す、もし善業にあらざるものは、つゝしんでこれをとをざかれ。また隨喜せざれとなり。また眞實心のうちの身業に、合掌し禮敬して、四事をもてかの阿彌陀佛および依正二報を供養したてまつれ。また眞實心のうちの身業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨すべし。また眞實心のうちの意業に、かの阿彌陀佛および依正二報を思想し、觀

三業―身口意におこす行業

因中―因位のとき即ち阿彌陀佛が衆生濟度のため殊更に法藏菩薩となり給ひしとき

をあらはすこと意密にしてしりがたし、佛みづからとふてみづから徴したまふにあらずば、解をうるによしなきことをあかす。二には如來かへりてみづからさきの三心のかずをこたへたまふことをあかす。經にのたまはく、一者至誠心、至とは眞なり、誠とは實なり、一切衆生身口意業に修するところの解行、かならず眞實心のうちになしたまへるをもちゐんことをあかさんとおもふ。外に賢善精進の相を現ずることをえざれ、內に虛假をいだければなり。貪瞋邪僞奸詐百端にして惡性やめがたし、事蛇蝎におなじ。三業をおこすといへども、なづけて雜毒の善とす、また虛假の行となづく、眞實の業となづけざるなり。もしかくのごとき安心起行をなすものは、たとひ身心を苦勵して、日夜十二時、急にもとめ急になして、頭燃をはらふがごとくするものを、すべて、雜毒の善となづく。この雜毒の行を廻して、かの佛の淨土に求生せんと欲するものは、これかならず不可なり。なにをもてのゆへに、まさしくかの阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じたまひしとき、乃至一念一刹那も三業の所修、みなこれ眞實心のうちになしたまひしによりてなり。おほよそほどこしたまふところ趣求をなす、またみな眞實なり。また眞實に二種あり、一には自利眞實、二には利他眞實なりと、文。

上品上生―上々品ともいふ、大乘上善の凡夫が佛の來迎を受けて金臺に乘じて淨土に往生すること

愚禿鈔　下

賢者の信をきゝて、愚禿が心をあらはす。
賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。
愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。

唐朝の光明寺の和尚の觀經義にいはく、

まづ上品上生のくらゐのなかについて、乃至、一には佛告阿難より已下、すなはちならべて二意を標す。一には告命をあかす、二にはそのくらゐを辨定することをあかす。これすなはち大乘の上善を修學する凡夫人なり。三には若有衆生より下、卽便往生にいたる已來は、まさしく摠じて有生の類をあぐることをあかす、すなはちその四あり。一には能信の人をあかし、二には往生を求願することをあかし、三には發心の多少をあかし、四には得生の益をあかす。四に何等爲三より下、必生彼國にいたる已來は、まさしく三心を辨定してもて正因とすることをあかす、すなはち二あり。一には世尊機にしたがふて益

みな―御名即ち名號のこと

まちに淨土をきゝて、志願して生をもとむ。一日み名を稱すれば、すなはちかの國に超ふ。諸佛護念して、たゞちに菩提におもむかしむ。おもふべし、萬劫にもまふあひがたし、千生にひとたび誓ひにまふあへり。今日より未來を終盡すとも、在處にして讃揚し、多方にして勸誘せん。所感の身土、所化の機緣、阿彌陀とひとしく、異あることなけん。この心きはまりなし、たゞ佛、證知したまへ。このゆへに下に三たび信をすゝむ。わが語を信ずるもの、いはく敎を信ぜよとなり。もし我を信ぜずとも、十方の諸佛、あに虛妄ならんや。略出。

建長七年乙卯八月二十七日これを書す。

愚禿親鸞八十三歲

泥洹—涅槃に入ること、釋尊入滅をいふ

如來の勝智は虚空にあまねし、所説の義言はたゞ佛の悟なり、このゆへにひろく諸智士をきゝて、わが教如實の言を信ずべしと、文。

無量清淨平等覺經にのたまはく、帛延三藏の譯。

速疾にこえてすなはち、安樂國の世界にいたるべし、無量光明土にいたりて、無數の佛を供養したてまつる、文。

諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經にのたまはく、支謙三藏の譯。

われ般泥洹してのち、經道留止せんこと千歲せん。千歲ののち、經道斷絶せん。われみな慈愛して、ことにこの經法をとゞめて、止住すること百歲せん。百歲のうちにをはらん。いまし休止し斷絶せん、心の所願にありてみな道をうべしと。略出。

元照律師阿彌陀經の義疏にいはく、大智律師なり。

勢至章にいはく、十方の如來、衆生を憐念したまふ、母の子をおもふがごとしと。大論にいはく、たとへば魚母のもし子をおもはざれば、子すなはち壞爛する等のごとし。阿耨多羅、こゝには無上と翻ず、三藐は正等といふ。三菩提は正覺といふ。すなはち佛果の號なり。薄地の凡夫、業惑に纏縛せられて、五道に流轉せること百千萬劫なり。たち

修多羅—梵音經と譯す

摠持—陀羅尼の譯

經道滅盡—末法即ち釋尊入滅後一萬五百年の後に多くの敎法滅盡するをいふ

この經—大無量壽經をさす

波羅密—梵音度と譯す、生死の此岸を渡りて涅槃の彼岸に到るの意、菩薩の修する行なり

槃をえんひとといへり、文。

淨土論にのたまはく、

世尊われ一心に、盡十方無礙光如來に、歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願ず。われ修多羅眞實功德相によりて、願偈摠持をとく、佛教と相應せりと、のたまへり。文。

佛說無量壽經にのたまく、康僧鎧三藏の譯。

わが滅度ののちをもて、また疑惑を生ずることをうることなかれ。當來の世に經道滅盡せんに、われ慈悲をもて哀愍して、ことにこの經をとゞめて、止住すること百歲せん。それ衆生ありて、この經にまふあふもの、意の所願にしたがふて、みな得度すべしと。佛彌勒にかたりたまはく、如來の興世あひがたく、みたてまつりがたし。諸佛の經道えがたく、きゝがたし。菩薩の勝法諸波羅密きくことをうることまたかたし。善知識にあひ法をきゝ。よく行ずること、これまたかたしとす。もしこの經をきゝて信樂受持すること、難のなかの難、この難にすぎたるはなし。このゆへにわが法かくのごとくなして、かくのごとくとき、かくのごとくをしふ、まさに信順して法のごとく修行すべしと、文。

無量壽如來會にのたまはく、菩提流支三藏の譯。

四重—四重罪なり、殺生、偸盗、邪婬、妄語の四なり

闡提—梵音譯して斷善根といふ

五には眞性なり。

また〳〵惡機について、七種あり。

一には十惡、二には四重、

三には破見、四には破戒、

五には五逆、六には謗法、

七には闡提なり。

また〳〵惡性について、五種あり。

一には惡性、二には邪性、

三には虚性、四には非性、

五には僞性なり。

光明寺の和尙のたまはく、

道俗時衆等、おの〳〵無上の心をおこせ。生死はなはだいとひがたく、佛法またねがひがたし。ともに金剛のこゝろざしをおこして、横に四種を超斷せよ。彌陀界に觀入して、歸依し、合掌し、禮したてまつる。まさしく金剛心をうけて、相應一念ののち、果、涅

辟支―梵音獨覺と譯す。飛花落葉等によりて師なくして獨悟する人をいふ

また二種の機について、また二種の性あり。

二機とは、

一には善機　二には惡機なり。

二性とは、

一には善性、二には惡性なり。

また〳〵善機について、二種あり。また傍正あり。

一には定機、二には散機なり。疏に一切衆生の機に二種あり、一には定、二には散といへり、文。

また傍正ありとは、

一には菩薩、大、小、二には緣覺、

三には聲聞辟支等、淨土の傍機なり。

四には天、五には人等なり。淨土の正機なり。

また〳〵善性について、五種あり。

一には善性、二には正性、

三には實性、四には是性、

すなはち彌勒菩薩におなじ。自力金剛心なりと、しるべし。大經には、次如彌勒といへり、文。

二機對。

一乘圓滿の機は、他力なり、

漸教廻心の機は、自力なり。

信疑對、賢愚對、

善惡對、正邪對、

是非對、實虚對、

眞僞對、淨穢對、

好醜對、妙麁對、

利鈍對、奢促對、

希常對、強弱對、

上々下々對、勝劣對、

直入廻心對、明闇對。

已上十八對、二機につくと、しるべし。

り諸善は修むる毎に廻向せざるべからず

因明直辨對―念佛の釋尊により直接に淨土往生の行なることを說かれ諸行は唯因のみに附說す

無間有間對―念佛の行者は憶念に間斷なく諸善は間斷あること

法滅不滅對―諸善の教は末法の後には滅ぶ、念佛の教は益々さかゆる不滅の教なり

前念後念―時の刻一刻の間に於て先の瞬間を善念といひ後の瞬間を後念といふ

有誓無誓對、選不選對、
讃不讃對、證不證對、
護不護對、因明直辨對、
理盡非理盡對、無間有間對、
相續不相續對、退不退對、
斷不斷對、因行果德對、
法滅不滅對、自力他力對、
攝取不攝對、入定聚不入對、
思不思議對、報化二土對。

已上四十二對、教法につくと、しるべし。

眞實信心は内因なり、攝取不捨は外緣なり。
本願を信受するは、前念命終なり。すなはち正定聚のかずにいる、文。
即得往生は、後念即生なり。即時に必定にいる、文。また必定の菩薩となづくるなり、文。
他力金剛心なりと、しるべし。

要門―弘願他力の要道に入るの門戶

超渉對―念佛は一足飛びに生死界をこえる敎、諸善は川を渉る如く手間どる敎

通別對―諸善は普通なる敎、念佛は特に勝れたる彌陀の本願

不迴迴向對―念佛は彌陀の迴向なる故我々より云へど不迴向な

本願一乘海は、頓極、頓速、圓融、圓滿の敎なりと、しるべし。
淨土の要門は、定散二善、方便假門、三福九品の敎なり、しるべしと。

難易對、橫竪對、
頓漸對、超渉對、
眞假對、順逆對、
純雜對、邪正對、
勝劣對、親疎對、
大小對、多少對、
重輕對、通別對、
徑迂對、捷遲對、
廣狹對、近遠對、
了不了敎對、大利小利對、
無上有上對、不迴迴向對、
自說不說對、有願無願對、

疑城胎宮―佛智を疑ふ罪により疑城に胎生すること

懈慢邊地―淨土の邊鄙にして三寶を見聞する能はざるところ諸行往生の人の往く所なり

報土について、三種あり。

一には彌陀、　二には釋迦、

三には十方なり。

彌陀の化土について、二種あり。

一には疑城胎宮、　二には懈慢邊地。

本願一乘は、頓極、頓速、圓融、圓滿の教なれば、絕對不二の教、一實眞如の道なりとしるべし。專がなかの專なり、頓がなかの頓なり、眞のなかの眞なり、圓のなかの圓なり。一乘一實は大誓願海なり。第一希有の行なり。

金剛の眞心は、無礙の信海なりと、しるべし。

疏にいはく、われ菩薩藏頓教一乘海によるといへり。

讃にいはく、瓔珞經のなかには、漸教をとく、萬劫功を修して不退を證す、觀經彌陀經等の說は、すなはちこれ頓教菩提藏なり、文。

圓頓とは、　圓は圓融圓滿になづく、頓は頓極頓速になづく。

二教對。

自力の往生をいふ、自力念佛の因により疑城胎宮に往生するをいふ

一には佛、　二には土なり。
佛について、四種あり。
一には法身、　二には報身、
三には應身、　四には化身なり。
法身について、二種あり。
一には法性法身、　二には方便法身なり。
報身について、三種あり。
一には彌陀、　二には釋迦、
三には十方。
應化について、三種あり。
一には彌陀、　二には釋迦、　三には十方。
土について、四種あり。
一には法身の土、　二には報身の土、
三には應身の土、　四には化身の土なり。

難思議往生―本願他力往生をいふ凡夫が信心一つにて眞實報土に往生し得るは言說思慮の及ぶ所にあらざる故に名く

雙樹林下往生―釋尊雙樹林下にて入滅す、要門自力の人化土に往生する相は釋尊入滅の相に似るが故に名く

難思往生―眞門

讃嘆に二とは、

一には釋迦讃嘆に二あり、　二には諸佛讃嘆に二あり。

難易に二とは、

一には難は疑情なり、　二には易は信心なり。

執持に三あり、已今當。　發願に三あり、已今當。

法事讃に三往生あり。

一には難思議往生は、大經の宗なり。

二には雙樹林下往生は、觀經の宗なり。

三には難思往生は、彌陀經の宗なり。

大經にのたまはく、本願を證成したまふに三身まします。

法身の證成、　經にのたまはく、空中にして讃じてのたまはく、決定してかならず無上正覺をなりたまふべしと、文。

報身の證成、　十方如來なり。

化身の證成、　世饒王佛なり。

佛土について、二種あり。

選擇功徳、　選擇攝取、

選擇讃嘆、　選擇護念。

選擇阿難付屬。

二　韋提夫人。

選擇淨土、　二　選擇淨土機。

小經に、勸信に二、證成に二、護念に二、讃嘆に二、難易に二あり。

勸信に二とは、

一には釋迦の勸信、　釋迦に二あり。

二には諸佛の勸信、　諸佛に二あり。

證成に二とは、

一には功徳證成、　二には往生證成なり。

護念に二とは、

一には執持護念、　釋迦の護念なり。

二には發願護念、　諸佛の護念なり。

部行獨覺—數人一處に集まりて證する獨覺
預流向—預流果に至る因道
顯密—顯敎とは衆生の機に應じて顯に說かれたる敎、密敎とは自受用法性身が自內證の境を說く敎

たゞ阿彌陀如來の選擇本願をのぞきて已外、大小權實顯密の諸敎、みなこれ難行道聖道門なり。また易行道淨土門の敎、これを、淨土廻向發願自力方便の假門といふなり、しるべしと。

大經に、選擇に三種あり。

一 法藏菩薩。
選擇本願、選擇淨土、
選擇攝生、選擇證果。

二 世饒王佛。
選擇本願、選擇淨土、
選擇讃嘆、選擇證成。

三 釋迦如來。
選擇彌勒付屬。

觀經に、選擇に二種あり。

一 釋迦如來。

邊地懈慢—化土のこと

麟喩獨覺—麟角の一本なるが如く唯一人閑靜に閑居して獨覺に修證するもの

二には易行、淨土本願眞實の教、大無量壽經等なり。

二超とは、

一には竪超、即身是佛、即身成佛等の證果なり。

二には横超。選擇本願、眞實報土、即得往生なり。

漸教について、また二教、二出あり。

二教とは、

一には難行道、聖道權教、法相等、歷劫修行の教なり。

二には易行道、淨土要門、無量壽佛觀經の意、定散三福九品の教なり。

二出とは、

一には竪出、聖道歷劫修行の證なり。

二には横出。淨土胎宮邊地懈慢の往生なり。

小乘教について、二教あり。

一には縁覺教、一に麟喩獨覺、二に部行獨覺。

二には聲聞教。初果 預流向、第二果 一來向、第三果 不還向、第四果 阿羅漢向、八聖也。

愚禿―親鸞聖人自らの謙辭、禿ははげ頭又は頭髮の短かきことにして非僧非俗の義

頓教―修行の階級を經ずして速かに證果を得る教法

漸教―頓教の反對

佛心―禪の異名　禪宗は佛陀の心印を傳ふる宗旨なればいふ

愚禿鈔上

賢者の信をきゝて、愚禿が心をあらはす。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。

愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。

聖道淨土の教について、二教あり。

一には大乘教、二には小乘教なり

大乘教について、二教あり。

一には頓教、二には漸教。

頓教について、また二教、二超あり。

二教とは、

一には難行、聖道の實教なり、いはゆる佛心、眞言、法華、華嚴等の教なり。

し給ふこと同じからざるなり。またのたまはく、うやまひて一切往生の知識等にまうさく、おほきにすべからく慚愧すべし。釋迦如來はまことにこれ慈悲の父母なり、種々の方便をもて、われらが無上の信心を發起せしめたまふ。已上。

あきらかにしんぬ。二尊の大悲によりて、一心の佛因をえたり。まさにしるべし、この人は、希有人なり、最勝人なりと。

しかるに流轉の愚夫、輪廻の群生、信心おこることなし、眞心おこることなし。こゝをもて經にのたまはく、もしこの經をきゝて、信樂受持すること、かたきがなかのかたきなり、これにすぎたる難なし、また一切世間極難信法とときたまへり。

まことにしんぬ。大聖世尊、世に出興したまふ大事の因緣、悲願の眞利をあらはして、如來の直說としたまへり。凡夫の卽生をしめすを、大悲の宗致としたまふとなり。これによりて諸佛の敎意をうかゞふに、三世の諸如來出世のまさしき本意、たゞ阿彌陀不可思議の願をとかんとなり。常沒の凡夫人、願力の廻向によりて、眞實の功德をきゝ、無上の信心をうれば、すなはち大慶喜をえ、不退轉地をう、煩惱を斷ぜしめずして、すみやかに大涅槃を證すとなり。矣。

大聖世尊—釋迦如來
悲願—大悲の本願
常沒—常に生死界に沈淪すること

五眼—肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼
六通—六神通をいふ、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通
三輪—如來の身、口、意の三業

し金剛のごとしと。あきらかにしんぬ、一心はこれ信心なり、專念はすなはち正業なり。一心のなかに、至誠廻向の二心を攝在せり。さきの問のなかに答へおはりぬ。

また問、已前二經の三心と、小經の執持と、一異いかんぞ。答、經にのたまはく、名號を執持すべしと。執といふは、心堅牢にしてうつらず、持といふは、不散不失になづく、かるがゆへに不亂といへり。執持はすなはち一心、一心はすなはち信心なり。しかればすなはち執持名號の眞說、一心不亂の誠言、かならずこれに歸すべし、ことにこれをあふぐべし。

論家宗師、淨土眞宗をひらきて、濁世邪僞をみちびかんとなり。三經の大綱、隱顯ありといへども、一心を能入とす。かるがゆへに經のはじめに如是と稱す、論主はじめに一心とのたまへり。すなはちこれ如是の義をあらはすなり。

いま宗師の解をひらきたるに、のたまはく、如意といふは二種あり。一には衆生のこゝろのごとし、かの心念にしたがひて、みな應じてこれを度す。二には彌陀のおんこゝろのごとし、五眼圓に照し、六通自在にして、機の度すべきものをみそなはして、一念のうちに、前なく後なく、身心ひとしくおもむき、三輪をもて開悟せしめて、おの〳〵益

三不―三不信

如實修行相應―其信ずる所が、行ずる所が、法の實義に叶ふをいふ

に、清淨願心とのたまへり。しかれば一心正念といふは、正念は卽ちこれ稱名、稱名すなはちこれ念佛なり。一心はすなはちこれ深心、深心すなはちこれ堅固深信、堅固深信すなはちこれ眞心、眞心すなはちこれ金剛心、金剛心すなはちこれ無上心、無上心すなはちこれ淳一相續心、淳一相續心すなはちこれ大慶喜心なり。大慶喜心をうれば、この心、三不に違す、この心、三信に順ず、この心すなはちこれ大菩提心、大菩提心すなはちこれ眞實信心、眞實信心すなはちこれ願作佛心、願作佛心すなはちこれ度衆生心、度衆生心はすなはちこれ衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり。この心すなはちこれ畢竟平等心、この心すなはちこれ大悲心、この心作佛す、この心これ佛なり。これを如實修行相應となづく、しるべし。三心すなはち一心の義、答へおはりぬ。

また問、大經の三心と、觀經の三心と、一異いかんぞ。答、兩經の三心すなはちこれひとつなり。なにをもてか知ることをうるや。宗師の釋にのたまはく、至誠心のなかにいはく、至といふは眞なり、誠といふは實なりと。人につき、行について、信をたつるなかにいはく、一心に彌陀の名號を專念する、これを正定の業となづく。またいはく、深心すなはちこれ眞實信心なり。廻向發願心のなかにいはく、この心深信せること、なを

て、大悲心を成就することをえたまふにあらざることあることなし。かるがゆへに如來清淨眞實の欲生心をもて、諸有の衆生に廻向したまへり。本願成就の文。經にのたまはく、至心に廻向したまへり。彼の國に生れんと願ずれば、すなはち往生をえて、不退轉に住せんと。要をとる。聖言あきらかにしんぬ。いまこの心はこれ、如來の大悲、諸有の衆生を招喚したまふ敎勅なり。すなはち大悲の欲生心をもて、これを廻向となづく。三心みなこれ大悲廻向心なるがゆへに、清淨眞實にして、疑蓋まじはることなし、かるがゆへに一心なり。

これによりて師釋をひらきたるに、のたまはく、西の岸のうへに、人ありてよばひていはく、なんぢ一心正念にして、たゞちにきたれ。われよくなんぢをまもらん、すべて水火の難におちん事を畏れざれと。またのたまはく、中間の白道といふは、即ち貪瞋煩惱の中に、よく清淨願往生の心を生ずるにたとふるなり。あふひで釋迦の發遣を蒙り、また彌陀の招喚し給ふによりて、水火の二河を顧ず、かの願力の道に乘ずと。略出。こゝにしんぬ。能生清淨願心は、これ凡夫自力の心にあらず、大悲廻向の心なるがゆへ

欲生—極樂淨土に生れんと欲すること凡夫眞實の欲生心を生ずるに如來の廻向による

愚、淸淨の信心なく、眞實の信心なし。このゆへに眞實の功德まうあひがたく、淸淨の信樂、獲得しがたし。これによりて釋のこゝろをうかゞふに、愛心つねにおこりて、よく善心をけがし、瞋嫌の心、よく法財をやく。身心を苦勵して、日夜十二時、急走急作して、頭燃をはらふが如くすれども、すべて雜毒の善となづく、また虛假の行となづく、眞實の業となづけざるなり。この雜毒の善をもて、かの淨土に廻向すること、これかならず不可なり。なにをもてのゆへに、まさしくかの如來、菩薩の行を行じたまひしとき、乃至一念一刹那も、三業の所修、みなこれ眞實心の中になしたまひしによるがゆへに、疑蓋まじはることなし。如來、淸淨眞實信樂をもて、諸有の衆生に廻向したまへり。本願成就の文。經にのたまはく、諸有衆生、その名號をきゝて、信心歡喜せん。抄出。聖言あきらかにしんぬ。いまこの心すなはちこれ、本願圓滿淸淨眞實の信樂なり、これを信心となづく。信心すなはちこれ大悲心なり、かるがゆへに疑蓋あることなし。三つには欲生、すなはち淸淨眞實の信心をもて欲生の體とす。しかるに流轉輪廻の凡夫、曠劫多生の群生、淸淨廻向の心なし、また眞實廻向の心なし。これをもて如來、因中に、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、廻向を首とし

三業―身、口、意の三業なり

三昧―梵語等持と譯す、心を一境に安住せしめて動亂せざること

實の功德をもて、一切に廻施したまへり、すなはち名號をもて至心の體とす。しかるに十方衆生穢惡汚染にして淸淨の心なし、虛假雜毒にして眞實の心なし。こゝをもて、如來、因中に、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、淸淨眞實の心にあらざることあることなし。如來淸淨の眞心をもて、諸有の衆生に廻向したまへり。

經にのたまはく、欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想をおこさず。色聲香味の法に著せず、忍力成就して、衆苦をはからず。少欲知足にして、染恚癡なし。三昧常寂にして、智慧無礙なり。虛僞諂曲の心あることなし。和顏愛語にして、こゝろさきにし承問す。勇猛精進にして、志願うむことなし。もはら淸白の法をもとめて、もて群生を慧利す。三寶を恭敬し、師長に奉事す。大莊嚴をもて衆行を具足し、もろ〳〵の衆生をして功德成就せしめたまふと，抄出。

聖言あきらかにしんぬ。いまこの心は、これ如來の淸淨廣大の至心なり、これを眞實心となづく。至心はすなはちこれ大悲心なり、かるがゆへに疑心あることなし。

二つには信樂、すなはちこれ眞實心をもて信樂の體とす。然るに具縛の群萌、穢濁の凡

問、念佛往生の願すでに三心をおこす、論主、なにをもてのゆへに、一心とのたまふや。
答、愚鈍の衆生、覺知やすからしめんがためのゆへに、論主、三を合して一としたまふ歟。三心といふは、一つには至心、二つには信樂、三つには欲生なり。わたくしに字訓をもて論のこゝろをうかがふに、三を合して一とすべし。そのこゝろ、いかんとなれば、一つには至心。至とは、眞なり、誠なり。心といふは、種なり、實なり。二つには信樂。信といふは、眞なり、實なり、誠なり、滿なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり。樂といふは、欲なり、願なり、慶なり、喜なり、樂なり。三つには欲生。欲といふは、願なり、樂なり、覺なり、知なり。生といふは、成なり、興なり。
しかれば至心はすなはち、これ誠種眞實の心なるがゆへに、疑心あることなし。信樂はすなはちこれ眞實成滿の心なり、極成用重の心なり、欲願審驗の心なり、慶喜樂の心なり、かるがゆへに疑心あることなし。欲生はすなはちこれ願樂の心なり、覺知成興の心なり、かるがゆへに三心みなともに眞實にして疑心なし、疑心なきがゆへに、三心すなはち一心なり、字訓かくのごとし、これを思擇すべし。また三心といふは、
一つには至心。この心すなはちこれ、如來至德圓修滿足眞實の心なり。阿彌陀如來、眞

寂靜無爲—涅槃をいふ

定散と逆惡とを矜哀して、光明名號因緣をしめす。
涅槃門にいりて眞心に値へば、かならず信喜悟の忍をう。
難思議往生をうるひと、すなはち法性の常樂を證すと。
源信廣く一代の敎をひらきて、偏に安養に歸して一切をすゝむ。
諸經論によりて敎行を撰び給ふ。まことにこれ濁世の目足たり。
得失を專雜に決判して、念佛の眞實門に廻入せしむ。
たゞ淺深を執心にさだめて、報化二土まさしく辨立せりと。
源空もろ〳〵の聖典を曉了して、善惡の凡夫人を憐愍せしむ。
眞宗の敎證片州に興す。選擇の本願濁世にほどこす。
生死流轉のいへに還來すること、決するに疑情をもて所止とす。
速かに寂靜無爲の樂にいるは、かならず信心をもて能入とす。
論說師釋ともに同心に、無邊の極濁惡を拯濟す。
道俗時衆みなこと〴〵くともに、たゞこの高僧の說を信ずべし。
六十行一百二十句、偈頌すでに畢ぬ。

大會衆—淨土の廣大なる聖衆
應化—機に應じて化益すること
本誓—本願弘誓
忍—確實なる悟り
圓滿の德號—南無阿彌陀佛
三不三信—三信三不信
像末法滅—像法末法及び敎法滅する時期

功徳の大寶海に歸入すれば、必ず大會衆の數にいることをう。
蓮華藏世界に至ることをうれば、すなはち寂滅平等身を證せしむ。
煩惱の林にあそびて神通を現し、生死の園にいりて應化を示す。
曇鸞大師をば梁の蕭王は、常に鸞の方に向ひて菩薩と禮す。
三藏流支淨敎をさづけしかば、仙經を焚燒して樂邦に歸す
天親菩薩の論、註解して、如來の本願稱名にあらはす。
往還の廻向は本誓による。煩惱成就の凡夫人、
信心開發すれば卽ち忍をう。生死卽ち涅槃なりと證知す。
必ず無量光明土にいたりて、諸有の衆生みなあまねく化す。
道綽、聖道の證し難を決して、唯淨土の通入すべきことを明せり。
萬善は自力なれば懃修を貶す。圓滿の德號は專稱をすゝむ。
三不三信の誨ねんごろにして、像末法滅おなじく悲引す。
一生惡を造れども弘誓に遇へば、安養界にいたりて妙果を證す。
善導獨佛の正意に明にして、深く本願に籍て眞宗を與じたまふ。

迴—迴心の略、心をひるがへす事

有無の見—有の見とは一切衆生こゝに死して彼所に生れ無限に相續すと執する見、無の見とは一切衆生死しては全く虚無に歸すと執する見

歡喜地—菩薩十地の初位眞宗にて信心決定の身の上をさす

修多羅—梵語なり經と譯す

具縛—煩惱に十分縛され居る者即ち凡夫

惑染逆惡ひとしく皆生じ、
謗法闡提迴すればみなゆく。
當來の世に經道滅せんに、
特に此の經を留めて住すること百歳、
いかんがこの大願を疑惑せん、
たゞ釋迦如實のみことを信ぜよ。
印度西天の論家、
中夏日域の高僧、
大聖世雄の正意を開き、
如來の本誓機に應ずることをあかす。
釋迦如來楞伽山にして、
衆のために告命したまはく、
南天竺に、龍樹菩薩世に興出して、
悉くよく有無の見を摧破せん。
大乘無上の法を宣說し、
歡喜地を證して安樂に生ぜんと。
十住毘婆娑論をつくりて、
難行の嶮路ことに悲憐せしむ。
易行の大道ひろく開示す。
恭敬の心をもて執持して、
名號を稱し疾く不退をうべし。
信心清淨なれば則佛をみたてまつる。
天親菩薩論をつくりてとかく、
修多羅によりて眞實をあらはす。
横超の本弘誓を光闡し、
不可思議の願を演暢す。
本願力の迴向によるがゆへに、
具縛を度せんが爲に一心を彰す。

刹―梵語刹多羅の略、國土と譯す

三有―　界、色界、無色界。有は因果空しからず存在する義

一如―一は絶對唯一、如は無差別平等の義

清淨微妙無邊の刹、　廣大莊嚴等具足せり。

種々の功德ことごとく成滿す。　十方諸佛のくにに超逾せり。

あまねく難思無礙光を放ちて、　よく無明大夜の闇を破したまふ。

智光明朗にして慧眼を開く。　名聲十方にきこえざるなし。

如來の功德は唯佛のみ知たまへり。　佛法藏をあつめて凡愚に施す。

彌陀佛の日、あまねく照耀す。　已によく無明の闇を破すと雖も、

貪愛瞋嫌の雲霧、　つねに淸淨信心の天におほへり。

たとへばなを日月星宿の、　煙霞雲霧等におほはるといへども、

其雲霧の下明にして闇なきが如し。　信知するに日月の光益にこえたり。

必ず無上淨信の曉にいたれば、　三有生死の雲はる。

清淨無礙の光耀ほがらかにして、　一如法界の眞身あらはる。

信を發して稱名すれば光攝護し給ふ。　また現生無量の德をえしむ。

無邊難思光、不斷にして、　更に時處諸緣を隔つることなし。

諸佛の護念まことに疑ひなし。　十方おなじく稱讚し悅可す。

べ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられなば、かへりてかならず曠劫多生を逕歴せん。攝取不捨の眞理、超捷易往の教勅、聞思して、遲慮することなかれ。

よろこばしきかな愚禿、あふいておもんみれば、心を弘誓の佛地にたてゝ、こゝろを難思の法海にながす、きくところを嘆じ、うるところをよろこびて、眞言を採集し、師釋を鈔出して、もはら無上尊を念じて、ことに廣大の恩を報ず。

これによりて曇鸞菩薩の註論を披閲するに、のたまはく、それ菩薩は佛に歸す、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜おのれにあらず、出沒かならずゆへあるがごとし、恩をしりて德を報ず、理よろしくまづ啓すべし。要をとる。佛恩の深重なるを信知して、念佛正信偈をつくりていはく、

西方不可思議尊、法藏菩薩因位のうちに、
殊勝の本弘誓を超發して、無上大悲の願を建立したまふ。
思惟攝取するに五劫をへたり。菩提の妙果、上願に酬ひたり。
本誓を滿足するに十劫をへたり。壽命延長にしてよく量ことなし。
慈悲深遠にして虛空の如し。智慧圓滿にして巨海の如し。

調達ー梵語提婆達多の譯
闍世ー阿闍世の略、本文の事淨土和讃觀經意に明かなり

聖言あきらかにしんぬ。大慈大悲の弘誓、廣大難思の利益、いまし煩惱の稠林にいりて、諸有を開導し、普賢の德にしたがふて、群生を悲引す。

しかれば、もしは往、もしは還。一事として、如來淸淨願心の、迴向成就したまふところにあらざることあることなし、しるべし。

こゝをもて淨土の緣熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしめ、濁世機あはれみて、釋迦、韋提をして安養をえらばしめたまへり。つら／＼かれをおもひ、しづかにこれを念ふに、達多闍世ひろく仁慈をほどこし、彌陀釋迦ふかく素懷をあらはせり。これによりて論主、廣大無礙の淨信を宣布し、あまねく雜染堪忍の群生を開化す。宗師、往還大悲の迴向を顯示して、ねんごろに他利利他の深義を弘宣せり。聖權の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、廣大の心行、たゞ逆惡闡提を引せんとおぼしてなり。

いまねがはくば道俗等、大悲の願船には、淸淨の信心を順風とし、無明の闇夜には、功德の寶珠を大炬とす。心くらくさとりすくなきものは、うやまひてこの道をつとめよ、惡おもくさはりおほきものは、ふかくこの信をあがめよ。噫、弘誓の强緣、多生にもまふあひがたく、眞實の淨信、億劫にもえがたし。たま／＼信心をえば、とをく宿緣をよろこ

無爲法身—法樂佛のこと

一生補處—一生を過ぐれば佛處を補ふをいふ

ころなり。已上。

聖言あきらかにしんぬ。煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萠、往相の心行をうれば、すなはち大乘正定の聚に住すれば、かならず滅度にいたる。かならず滅度にいたれば、すなはちこれ常樂、常樂はすなはちこれ大涅槃、大涅槃はすなはちこれ利他教化地の果なり。この身すなはちこれ無爲法身、無爲法身はすなはちこれ畢竟平等身、畢竟平等身はすなはちこれ寂滅、寂滅すなはちこれ實相、實相すなはちこれ法性、法性すなはちこれ眞如、眞如すなはちこれ一如なり。

しかれば、もしは因、もしは果。一事として阿彌陀如來の淸淨願心の、廻向成就したまふところにあらざることあることなし。因淨なるがゆへに果また淨なり、しるべし。

二に還相廻向といふは、すなはち利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補處の願よりいでたり。また一生補處の願となづく、また還相廻向の願となづくべし。

願成就の文。經にのたまはく、かの國の菩薩、みなまさに一生補處を究竟すべし。その本願、衆生のためのゆへに、弘誓の功德をもて、みづから莊嚴し、あまねく一切衆生を度脱せんと欲はんをばのぞかんと。已上。

無生―無生の生の義、淨土の往生は三有虛妄の生にあらずして無生無滅の境に入る生也
邪聚―報土の正因にあらざる雜善を修して淨土に往生せんとするもの
不定聚―邪にあらず正にあらず進みては弘願の行者ともなり、退いては要門の機となるべき不定の徒をいふ

なり。
しかれば、もしは行、もしは信、一事として、阿彌陀如來の清淨願心の、廻向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして、他の因のあるにはあらざるなりと、しるべし。
證といふは、すなはち利他圓滿の妙果なり。すなはちこれ必至滅度の願よりいでたり。また證大涅槃の願となづけ、また往相證果の願となづくべし。すなはちこれ淸淨眞實、至極畢竟無生なり。
無上涅槃の願成就の文。經にのたまはく、それ衆生ありて、かのくにゝ生ずるものは、みなこと〴〵く正定の聚に住す。ゆへはいかんとなれば、かの佛のくにの中には、もろ〳〵の邪聚および不定聚なければなり。またのたまはく、たゞ餘方に因順するがゆへに、天人の名あり。顏貌端正にして、超世希有なり。容色微妙にして、天にあらず人にあらず、みな自然虛無の身、無極の體をうけたり。またのたまはく、かならず超絕してすつることをえて、安養國に往生せよ。橫に五惡趣をきり、惡趣自然にとづ。道にのぼるに窮極なし。ゆきやすくしてしかもひとなし、そのくにに逆違せず、自然のひくと

正業—淨土往生の爲の正しき行業

極果—至極の果のことにて佛果を云ふ

至心—眞實心、至誠心

廣大勝解の人—彌陀の名號を信受したる人、勝解はすぐれたる智解の意

はちこれ憶念、憶念はすなはちこれ正念、正念はすなはちこれ正業なり。また乃至一念といふは、これさらに觀想功德徧數等の一念をいふにはあらず、往生の心行を獲得する時節の延促について、乃至一念といふなり、しるべし。

淨信といふは、すなはち利他深廣の信心なり。すなはちこれ念佛往生の願よりいでたり、また至心信樂の願となづく、また往相信心の願となづくべし。

しかるに薄地の凡夫、底下の群生、淨信えがたく、極果證しがたきなり。なにをもてのゆへに、往相の廻向によらざるがゆへに、疑網に纏縛せらるゝによるがゆへに、いまし如來の加威力によるがゆへに、ひろく大悲廣惠のちからによるがゆへに、淸淨眞實の信心をえん。この心顚倒せず、この心虛僞ならず。まことにしんぬ、無上妙果の成じがたきにはあらず、眞實の淨信、まことにうることかたし。眞實の淨信をうれば、大慶喜心をう。大慶喜心をうといふは、經にのたまはく、それ至心に安樂國に生れんと願ずることあれば、智慧あきらかにし、功德殊勝なることをうべしと。要を。又經にのたまはく、この人はすなはちこれ大威德の人なり、また廣大勝解のひととなりとときけり。已上。

まことにこれ除疑獲德の神方、極速圓融の眞詮、長生不死の妙術、威德廣大の淨信

號をきくことをうることありて、歡喜し踊躍し、乃至一念せん。まさにしるべしこのひとは、大利をうとす、すなはちこれ無上の功德を具足す。已上。

龍樹菩薩十住毘婆娑論にのたまはく、もしひと、とく不退轉地をえんとおもはゞ、恭敬の心をもて、執持して名號を稱すべし。もしひと善根をうへて、うたがへばすなはち華ひらけず。信心淸淨なれば、はなひらけて、すなはち佛をみたてまつる。天親菩薩の淨土論にのたまはく、世尊、われ一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願ず。われ修多羅眞實功德相によりて、願偈揔持をときて、佛教と相應せり。佛の本願力をみそなはすに、まうあふて、むなしくすぐるものなし、よくすみやかに功德大寶海を滿足せしむ。已上。

聖言論說。ことにもてしんぬ。凡夫廻向の行にあらず、これ大悲廻向の行なるがゆへに、不廻向となづく。まことにこれ選擇攝取の本願、無上超世の弘誓、一乘眞妙の正法、萬善圓修の勝行なり。

經にのたまはく。乃至とは、上下をかねて中を略することばなり。一念といふは、すなはちこれ專念、專念はすなはちこれ一聲、一聲はすなはちこれ稱名、稱名はすな

咨嗟—咨は讃、嗟は嘆なり、稱揚に同じ

往相—浄土へ往生すること

還相—浄土より衆生済度のためこの世界へ還來すること

讃の正教なり。如來の本願をとき給ふを經の宗致とす、すなはち佛の名號をもて、經の體とす。

行といふは、すなはち利他圓滿の大行なり。すなはちこれ諸佛咨嗟の願よりいでたり。また諸佛稱名の願となづけ、また往相正業の願となづくべし。

しかるに本願力の廻向に、二種の相あり、一には往相、二には還相。一に往相廻向といふは、往相について、大行あり、また淨信あり。

大行といふは、すなはち無礙光如來のみなを稱したてまつるなり。この行はあまねく一切の行を攝し、極速圓滿す、かるがゆへに大行となづく。このゆへに稱名は、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生をして一切の志願をみてたまふ。稱名はすなはち憶念、憶念はすなはち念佛、念佛はすなはちこれ南無阿彌陀佛なり。

願成就の文。經にのたまはく、十方恒沙の諸佛如來、みなともに無量壽佛の威神功德不可思議にましますことを讃嘆したまふ。あらゆる衆生その名號をきゝて、信心歡喜し乃至一念せん、至心に廻向したまへり。かのくにに生れんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退轉に住せんと。またのたまはく、佛、彌勒にかたりたまはく、それかの佛の名

萬行圓備の嘉號—萬善萬行功德の總體たる南無阿彌陀佛

道敎—一代敎

淨土文類聚鈔

愚禿釋親鸞集

夫、無礙難思の光耀は、苦を滅し樂を證す。萬行圓備の嘉號は、さはりをけしうたがひをのぞく。末代の敎行、もはらこれを修すべし、濁世の目足、かならずこれをつとむべし。しかれば最勝の弘誓を受行して、穢をすて淨をねがへ。如來の敎勅を奉持して、恩を報じ德を謝せよ。こゝに片州の愚禿、印度西蕃の論說に歸し、華漢日域の師釋をあふひで、眞宗の敎行證を敬信す。ことにしんぬ。佛恩窮盡しがたければ、あきらかに淨土文類聚をもちゐるなり。矣

しかるに敎といふは、すなはち大無量壽經なり。この經の大意は、彌陀ちかひを超發して、ひろく法藏をひらきて、凡小をあはれみ、えらびて功德の寶を施すことをいたす。釋迦、世に出興して、道敎を光闡し、群萠をすくひ、めぐむに眞實の利をもてせんとおぼしてなり。まことにこれ如來興世の眞說、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極說、十方稱

右斯聖教―歎異鈔を指す

親鸞改僧儀賜俗名、仍非僧非俗、然間以禿字爲姓、被經奏聞了。彼御申狀于今外記廳に納と云々。流罪以後愚禿親鸞令書給也。

右斯聖教者爲當流大事聖教也、於無宿善機無左右不可許之者也。

釋蓮如　御判

弟子中狼藉子細あるよし、無實風聞によりて罪科に處せらるゝ人數事。

一法然聖人、幷御弟子七人流罪、又御弟子四人死罪におこなはるゝなり。聖人は土佐國番多といふ所へ流罪。罪名藤井元彦男云々、生年七十六歳なり。親鸞は越後國、罪名藤井善信云々、生年三十五歳なり。

淨聞房　備後國、　澄西禪光房　伯耆國、

好覺房　伊豆國、　行空法本房　佐渡國。

幸西成覺房、善惠房、二人同遠流にさだまる。しかるに無動寺之善題大僧正これを申あづかると云々。　遠流の人々已上八人なりと云々。

被行死罪人々

一番　西意善綽房、

二番　性願房、

三番　住蓮房、

四番　安樂房

二位法印尊長之沙汰也。

一室の行者―同じ祖師の教を汲む念佛者

もひとも、そらごとをのみまうしあひさふらふなかに、ひとつのいたはしきことのさふらふなり。そのゆへは念佛まうすについて、信心のおもむきをも、たしかに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論のたゝかひ、かたんがために、またくおほせにてなきことを、おほせとのみまうすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。このむねをよく／＼おもひとき、こゝろえらるべきことにさふらふなり。これさらにわたくしのことばにあらずといへども、經釋のゆくちをもしらず、法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねば、さだめておかしきことにてさふらはめども、故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむきを、百分が一、かたはしばかりをもおもひまいらせて、かきつけさふらふなり。かなしきかなや。さいはひに念佛しながら、直に報土にむまれずして、邊地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なく／＼筆をそめてこれをしるす。なづけて歎異鈔といふべし。外見あるべからず。

後鳥羽院之御宇、法然聖人他力本願念佛宗を興行す。于時興福寺僧侶敵奏之。御

聖人のつねのおほせ―口傳鈔にも之に似たる言あり

業―生死流轉の業因を云ふ

よろづのこと―萬事

なり。聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の、自身は罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみ、つねに流轉して、出離の縁あることなき、身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪悪のふかきほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをば、さたなくして、われもひとも、よしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには、善悪のふたつ總じてもて存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろに、よしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ。如來のあしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさふらひしか。まことにわれ

閉眼―往生のこと

らせたまひたる信心なり、さればたゞひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは源空がまいらんずる淨土へは、よもまいらせたまひさふらはじと、おほせさふらひしかば、當時の一向專修のひと〳〵のなかにも、親鸞の御信心に、ひとつならぬ御こともさふらふらんと、おぼえさふらふ。いづれも〳〵、くりごとにてさふらへども、かきつけさふらふなり。露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひと〳〵、御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まうしきかせまいらせさふらへども、閉眼ののちは、さこそ、しどけなきことどもにて、さふらはんずらめと、なげき存じさふらひて、かくのごとくの義ども、おほせられあひさふらふひと〳〵にも、いひまよはされなんどせらるゝことの、さふらはんとき、故聖人の御こゝろにあひかなひて、御もちゐさふらふ御聖教どもを、よくよく御覽さふらふべし。おほよそ聖教には、眞實權假ともにあひまじはりさふらふなり。權をすてゝ實をとり、假をさしをきて眞をもちゐるこそ、聖人の御本意にてはさふらへ。かまへて〳〵、聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ。大切の證文ども、少々ぬきいでまいらせさふらふて、目やすにして、この書にそへまいらせてさふらふ

も、信心かけなばその詮なし。一紙半錢も佛法のかたにいれずとも、他力にこゝろをなげて、信心ふかくば、それこそ願の本意にさふらはめ。すべて佛法にことをよせて、世間の欲心もあるゆへに、同朋をいひをどさるゝにや。

右條々は、みなもて、信心のことなるより、ことおこりさふらふか。故聖人の御ものがたりに、法然上人の御とき、御弟子そのかずおほかりけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞御同朋の御なかにして、御相論のことさふらひけり。そのゆへは、善信が信心も、上人の御信心も、ひとつなりと、おほせさふらひければ、勢觀房念佛房なんどまうす御同朋達、もてのほかにあらそひたまひて、いかでか上人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞとさふらひければ、上人の御智慧才覺ひろくおはしますに、ひとつならんとまうさばこそ、ひがごとならめ。往生の信心においては、またくことなることなし。たゞひとつなりと御返答ありけれども、なをいかでかその義あらんといふ疑難ありければ、詮ずるところ上人の御まへにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をまうしあげければ、法然上人のおほせには、源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如來よりたまは

親鸞御同朋—法然上人の弟子仲間のこと

源空—法然上人也

檀波羅密—六度の行の一、布施波羅密のこと

文にみえさふらふぞや。學生たづるひとのなかに、いひいださるゝことにてさふらふなるこそ、あさましくさふらへ。經論聖教をば、いかやうにみなされてさふらふやらん。信心かけたる行者は、本願をうたがふによりて、邊地に生じて、うたがひのつみをつぐのひてのち、報土のさとりをひらくとこそうけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに、化土におほくすゝめいれられさふらふを、ついにむなしくなるべしとさふらふなるこそ、如來に虛妄をまうしつけまいらせてさふらふなれ。

一佛法の方に、施入物の多少にしたがひて、大小佛になるべしといふこと。この條不可說なり云々、比興のことなり。まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふ。かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらふも、それは方便法身のかたちなり。法性のさとりをひらひて、長短方圓のかたちにもあらず、青黃赤白黑のいろをもはなれなば、なにをもてか大小をさだむべきや。念佛まうすに、化佛をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ、大念には大佛をみ、小念には小佛をみるといへるか。もしこのことはりなんどに、はしひきかけられさふらふやらん、かつはまた檀波羅密の行ともいひつべし。いかにたからものを佛前にもなげ、師匠にもほどこすと

かけて—闕けて也

となれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひにも住せざらんさきに、いのちつきば攝取不捨の誓願は、むなしくならせおはしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんずれと、おもふほどに願力をうたがひ、他力をたのみまいらするこゝろかけて、邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけても、いよ〱願力をあをぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生はかしこきおもひを具せずして、たゞほれ〴〵と彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ、これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらふよしうけたまはる。あさましくさふらふなり。

一 邊地の往生をとぐるひと、つゐには地獄におつべしといふこと。この條いづれの證

利益さふらふにや。これをこそ今生にさとりをひらく本とはまうしさふらへ。和讃に金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける、とはさふらへば、信心のさだまるときに、ひとたび攝取してすてたまはざれば、六道に輪廻すべからず。しかればながく生死をばへだてさふらふぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらふをや。淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくと、ならひさふらふぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。

一信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にあひて、口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと。この條斷惡修善のこゝちか。一向專修のひとにおいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心は、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ。一切のことにあしたゆふべに廻心して、往生をとげさふらふべくば、ひとのいのちは、いづるいき、いるいきをまたずしてをはるこ

六道―前に出づ

三密の行業―手に印を結び口に眞言を誦し心に本尊を念す

來生―未來世のこと

戒行慧解―智目行足なり

をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそさふらはめ。つみを滅せんとおもはんは、自力のこゝろにして、臨終正念といのるひとの本意なれば、他力の信心なきにてさふらふなり。

一煩惱具足の身をもち、すでにさとりをひらくといふこと。この條もてのほかの、ことにさふらふ。卽身成佛は眞言祕敎の本意、三密行業の證果なり。六根淸淨はまた法華一乘の所說、四安樂行の感德なり。これみな難行上根のつとめ、觀念成就のさとりなり。來生の開覺は、他力淨土の宗旨、信心決定の道なるがゆへなり。これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり。おほよそ今生において、煩惱惡障を斷ぜんこと、きはめてありがたきあひだ、眞言法華を行ずる淨侶、なをもて順次生のさとりをいのる。いかにいはんや、戒行慧解ともになしといへども、彌陀の願船に乘じて、生死の苦海をわたり、報土のきしに、つきぬるものならば、煩惱の黑雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方の無礙の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへ。この身をもてさとりをひらくとさふらふなるひとは、釋尊のごとく種々の應化の身を現じ、三十二相八十隨形好をも具足して、說法

正念―臨終の正念なり

らが信ずるところにおよばず。そのゆへは彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起するとき、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろ〳〵の煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念佛は、みなこと〴〵く如來大悲の恩を報じ、德を謝すとおもふべきなり。念佛まうさんごとに、つみをほろぼさんと信ぜんは、すでにわれとつみをけして、往生せんとはげむにてこそさふらふなれ。もししからば一生のあひだおもひとおもふこと、みな生死のきづなにあらざることなければ、いのちつきんまで、念佛退轉せずして往生すべし。たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、また病惱苦痛をせしめて、正念に住せずしてをはらん、念佛まうすことかたし。そのあひだのつみをば、いかゞして滅すべきや。つみきえざれば往生はかなふべからざるか。攝取不捨の願をたのみたてまつらば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをはるとも、すみやかに往生をとぐべし。また念佛のまうされんも、たゞいまさとりをひらかんずる期の、ちかづくにしたがひて、いよ〳〵彌陀

くらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。さればよきこともあしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信鈔にも、彌陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべきと、さふらふぞかし。本願にほこるこゝろのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。おほよそ惡業煩惱を斷じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひなくてよかるべきに、煩惱を斷じなば、すなはち佛になるとならば、佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん。本願ぼこりといましめらるゝひと〴〵も、煩惱不淨具足せられてこそさふらふげなれば、それは願にほこらるゝにあらずや。いかなる惡を本願ぼこりといふ。いかなる惡かほこらぬにてさふらふべきや、かへりてこゝろをさなきことか。

一　一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと。この條は十惡五逆の罪人、日ごろ念佛をまうさずして、命終のとき、はじめて善知識のおしへにて一念まうせば、八十億劫の罪を滅し、十念まうせば、十八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるが滅罪の利益なり。いまだわれ

生死—迷ひのこと

ことをおほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみ惡をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあしざまなることの、きこえさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて、毒をこのむべからずとこそ、あそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく惡は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて身にそなへざらん惡業は、よもつくられさふらはじものを。またうみかはにあみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりていのちをつなぐともがらも、あきなひをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなりと。さるべき業緣のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ、聖人はおほせさふらひしに、當時後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべきやうに、あるひは道場にはりぶみをして、なむ／＼のことしたらんものをば、道場へいるべからずなんどといふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虛假をいだけるものか。願にほこりてつ

卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりも一僅かのと云ふ譬

り。よきこゝろのおこるも、宿業のもよほすゆへなり。悪事のおもはれせらるゝも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくる罪の宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯圓坊は、わがいふことをば信ずるかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらふとまうしさふらひしかば、さらばわがいはんことたがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ、つゝしんで領狀まうしてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしと、おほせさふらひしとき、おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にては、ころしつべしともおぼえずさふらふと、まうしてさふらひしかば、さては親鸞がいふことを、たがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし。なにごともこゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども一人にてもころすべき業緣なきによりて、害せざるなり。我こころのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを、しらざる

ふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんとも、おぼえさふらひぬべけれ。かくまうせばとて、かならずひとにそしられんとにはあらず、佛のかねて信謗ともに、あるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときをかせたまふことを、まうすなりとこそさふらひしか。いまの世には、學文してひとのそしりをやめ、ひとへに論議問答をむねとせんと、かまへられさふらふにや、學問せばいよ〱如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて、往生はいかゞなんどと、あやぶまんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをも、とききかせられさふらはゞこそ、學生の甲斐にてもさふらはめ。たま〱なにごころもなく、本願に相應して念佛するひとをも、學文してこそなんどと云ひおどさるゝこと、法の魔障なり、佛の怨敵なり。みづから他力の信心かくるのみならず、他をまよはさんとす、つゝしんでおそるべし。先師の御こゝろにそむくことを、かねてあはれむべし。彌陀の本願にあらざることをと云云。

一彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡をおそれざるは、また本願ぼこりとて、往生かなふべからずといふこと。この條本願をうたがふ善惡の宿業をこゝろえざるな

自餘の教法―華天密禪等の教を云ふ

もさふらふべきや。當時專修念佛のひとと、聖道門のひと、法論をくはだてゝ、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗は、おとりなりといふほどに、法敵もいできたり、謗法もおこる。これしかしながら、みづからわが法を破謗するにあらずや。たとひ諸門こぞりて、念佛はかひなきひとのためなり、その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく、下根の凡夫一文不通のものの信ずれば、たすかるよしうけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがためには、器量およばざればつとめがたし。われもひとも、生死をはなれんことこそ、諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありて、あだをすべきや。かつは諍論のところには、もろ〳〵の煩惱おこる、智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、佛ときをかせたまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる。またひとありてそしるにて、佛說まことなりけりとしられさふらふ。しかれば往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり。あやまてそしるひとのさ

みづから―自力

經―淨土三部經
釋―七祖の御釋

にして、さらにことなることなきなり。つぎに、みづからのはからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけ、さはり二樣におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこゝろに往生の業をはげみて、まうすところの念佛をも、自行になすなり。このひとは名號の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへに、つゐに報土に生ずるは、名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなれば、たゞひとつなるべし。

一 經釋をよみ學せざるともがら、往生不定のよしのこと。この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ、念佛をまうさば佛になる。そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや。まことにこのことはりにまよひはんべらんひとは、いかにも〳〵學問して、本願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども、聖敎の本意をこゝろえざる條、もとも不便のことなり。一文不通にして、經釋のゆくちもしらざらんひとの、となへやすからんための名號にて、おはしますゆへに易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり、難行となづく。あやまて學問して、名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文

遼遠の洛陽—遠き京都といふ、京には祖師の住まはせらるゝ也

名字—南無阿彌陀佛

そもかの御在生のむかし、おなじこゝろざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を當來の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまはりしかども、そのひとぐにともなひて、念佛まうさるゝ老若、そのかずをしらずおはしますなかに、上人のおほせにあらざる異義どもを、近來はおほくおほせられあふてさふらふよし、つたへうけたまはる。いはれなき條々の子細のこと。

一 一文不通のともがらの、念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、また名號不思議を信ずるかと云ひおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはすこと。この條かへすぐもこゝろをとどめて、おもひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念佛まうさるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して、實報土に往生するなり。これは誓願の不思議を信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつ

他力の悲願—彌陀の本願也

久遠劫より—無始以來を云ふ

苦惱の舊里—娑婆を云ふ

ことを、よろこばぬにて、いよく往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへて、よろこばせざるは、煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよく たのもしく、おぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんと、こゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいままで、流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだむまれざる安養の淨土は、こひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の緣つきて、ちからなくして、をはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよく大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知さふらへ。踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなましと云云。

一　念佛には、無義をもて義とす。不可稱不可說不可思議のゆへにと、おほせさふらひき。

たまはりたる—廻向也

魔界—第六天の魔王の住處

唯圓坊—常陸國川田の人、親鸞聖人の弟子

るをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可說なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへす〳〵もあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をも知るべきなりと云云。

一 念佛者は無礙の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへに、無礙の一道なりと云云。

一 念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なりと云云。

一 念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろをろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓坊おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれば、天におどり地におどるほどに、よろこぶべき

存知—思量

世々生々—過去世の間に於て

順次生—次の生のこと

六道—地獄餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、

四生—胎生、卵生、濕生、化生

荒凉—無遠慮

く、衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛まうすのみぞ、するとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云云。

一親鸞は父母の孝養のためとて、念佛一返にてもまうしたることいまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれもこの順次生に佛になりて、たすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を迴向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云云。

一專修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。そのゆへはわがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒凉のことなり。つくべき緣あればともなひ、はなるべき緣あれば、はなるゝことのあ

自力作善—己がつとに善をなす

生死—迷

ならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮ずるところ愚身が信心にをきてはかくのごとし。このうへは念佛をとりて信じたてまつらんともまたすてんとも、面々の御はからひなりと云云。

一善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひとつねにいはく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をや。この條一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人はとおほせさふらひき。

一慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみかなしみはぐくむなり。しかれどもおもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごと

南都—奈良
北嶺—比叡山
ゆうしき—勝れたる
自餘の行—念佛次外

こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたらんと、こゝろにくゝおぼしめしおはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき學生だち、おほく座せられさふらふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり。親鸞にをきては、たゞ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行もはげみて、佛になるべかりける身が、念佛をまうして、地獄におちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說敎虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば、善導の御釋虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまこと

先師―如信上人を云ふ
有緣の知識―相承相續の知識
十餘箇國―下總、武藏、相模、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江、山城を云ふ

歎異鈔

竊廻愚案粗勘古今、歎異先師口傳之眞信、思有後學相續疑惑。幸不依有緣知識者、爭得入易行一門哉。全以自見覺悟、莫亂他力宗旨。仍親鸞聖人御物語之趣、所留耳底聊註之、偏爲散同心行者之不審也。云云。

一彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には、老少善惡のひとをえらばず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云云。

一各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御

無上覺―佛果のこと

ぎりは、他力にはあらず、自力なりときこへてさふらふ。また他力とまうすは、佛智不思議にてさふらふなるときに、煩惱具足の凡夫の、無上覺のさとりをえさふらふなることをば、佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふ。しかれば義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすことは、自力のひとのはからひをまふすなり。他力には、しかれば義なきを義とすとさふらふなり。このひと〴〵のおほせのやうは、これにはつや〳〵としらぬことにてさふらへば、とかくまふすべきにあらずさふらふ。また來の字は、衆生利益のためには、きたるとまふす方便なり。さとりをひらきてはかへるとまふす。ときにしたがひてきたるとも、かへるともまふすとみへてさふらふ。なにごとも〳〵またまた〳〵ふすべくさふらふ。

二月九日　　親鸞

慶西御坊　御返事

無礙光佛―阿彌陀佛のことをよく何ものにもさえられざる光明を放ちてらし給ふ故に名く

咨嗟―佛が彌陀の本願を稱揚する事

證誠―諸佛が我我のために證據に立たるゝこと

等正覺―正しき覺即ち佛果に等しき位

大師聖人―源空法然聖人

ろしてさふらふ。詮ずるところは、無礙光佛とまふしまいらせさふらふことを、本とせさせたまふべくさふらふ。無礙光佛はよろづのものゝあさましきわるきことには、さはりなくたすけさせたまはんれうに、無礙光佛とまふすと、しらせたまふべくさふらふ。

あなかしこ〳〵

十月二十一日　　　　親鸞

唯信御坊御返事

諸佛稱名の願とまふし、諸佛咨嗟の願とまふしさふらふなるは、十方衆生をすゝめんためときこへたり。また十方衆生の疑心をとゞめんれうときこへてさふらふ。彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにてきこへたり。詮ずるところは、方便の御誓願と信じまいらせさふらふ。念佛往生の願は、如來の往相廻向の正業正因なりとみへてさふらふ。まことの信心あるひとは、等正覺の彌勒とひとしければ、如來とひとしとも、諸佛のほめさせたまひたりとこそ、きこへてさふらへ。また彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには、義なきを義とすとこそ、大師聖人のおほせにてさふらへ、かやうに義のさふらふらんか

まふべき、たゞひがふたる世のひと〴〵をいのり、彌陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはゞ、佛の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし。よく〳〵御こゝろにいれて、まふしあはせたまふべくさふらふ。聖人の二十五日の御念佛も、詮ずるところは、かやうの邪見のものをたすけんれうにこそ、まふしあはせたまへとまふすことにてさふらへば、よく〳〵念佛そしらんひとをたすかれとおぼしめして、念佛しあはせたまふべくさふらふ。またなにごともたび〳〵の便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便うれしうてまふしさふらふ。あなかしこ〳〵。

入西御坊のかたへもまふしたうさふらへども、おなじことなれば、このやうをつたへたまふべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

親鸞

性信御坊へ

ひと〴〵のおほせられてさふらふ、十二光佛の御ことのやう、かきしるしてくだしまいらせさふらふ。くはしくかきまいらせさふらふべきやうもさふらはず、をろ〳〵かきし

おぼえさふらへ。よく〳〵唯信鈔、後世物語なんどを御覧あるべくさふらふ。年ごろ信ありとおほせられあふて、さふらひけるひと〴〵は、みなそらごとにて、さふらひけりと、きこへさふらふ。あさましくさふらふ。〳〵。なにごとも〳〵また〳〵まふしさふらふべし。

正月九日　親鸞

眞淨御坊

くだらせたまひてのち、なにごとかさふらふらん、この源藤四郎殿に、おもはざるにあひまいらせてさふらふ。便のうれしさにまふしさふらふ。そののちなにごとかさふらふ。念佛のうたへのことしづまりてさふらふよし、かた〴〵よりうけたまはりさふらへば、うれしうこそさふらへ。いまはよく〳〵念佛もひろまりさふらはんずらんと、よろこびいりてさふらふ。これにつけても御身のれうは、いまさだまらせたまひたり、念佛を御こころにいれてつねにまふして、念佛そしらんひと〴〵、この世のちの世までのことをいのりあはせたまふべくさふらふ。御身どものれうは、御念佛はいまはなにかはせさせた

信坊なんども不便におぼえさふらふ。鎌倉にながゐしてさふらふらん、不便にさふらふ。當時それもわづらふべくてぞさてもさふらふらん、ちからをよばずさふらふ。奥郡のひとびとの慈信坊にすかされて、信心みなうかれあふておはしましさふらふなること、かへすがへすあはれにかなしふおぼえさふらふ。これもひと〴〵をすかしまふしたるやうにきこへさふらふこと、かへす〴〵あさましくおぼえさふらふ。それも日ごろひと〴〵の信のさだまらずさふらひけることの、あらはれてきこえさふらふ。かへす〴〵不便にさふらひけり。慈信坊がまふすことによりて、ひと〴〵の日ごろの信のたぢろぎあふておはしましさふらふも、詮ずるところは、ひと〴〵の信心のまことならぬことのあらはれてさふらふ。よきことにてさふらふ。それをひと〴〵は、これよりまふしたるやうにおぼしめしあふてさふらふこそ、あさましくさふらへ。日ごろやう〳〵の御ふみどもを、かきもちておはしましあふてさふらふかひもなくおぼえさふらふ。唯信鈔やう〳〵の御文どもは、いまは詮なくなりてさふらふとおぼえさふらふ。よく〳〵かきもたせたまひてさふらふ法門は、みな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたがひて。めでたき御文どもはすてさせたまひあふてさふらふと、きこへさふらふこそ、詮なくあはれに

なにかくるしくさふらふべき。餘のひと〳〵を縁として、念佛をひろめんとはからひおはせたまふこと、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。そのところに念佛のひろまりさふらはんことも、佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊、かやう〳〵にまふしさふらふなるによりて、ひと〳〵も、御こゝろどもの、やう〳〵にならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへす〳〵不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひにまかせまいらせさせたまふべし。そのところの縁つきておはしましさふらはゞ、いづれのところにても、うつらせたまひてさふらふておはしますやうに、御はからひさふらふべし。慈信坊がまふしさふらふことを、たのみおぼしめして、これよりは餘の人、強縁として、念佛ひろめよとまふすこと、ゆめ〳〵まふしたることさふらはず、きはまれるひがごとにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かねて佛のときをかせたまひてさふらへば、をどろきおぼしめすべからず、やう〳〵に慈信坊がまふすことを、これよりまふしさふらふと、御こゝろえさふらふ。ゆめ〳〵あるべからずさふらふ、法門のやうもあらぬさまにまふしなしてさふらふなり。御耳にきゝいれらるべからずさふらふ。きはまれるひがごとどものきこへさふらふ、あさましくさふらふ。入

慈信御坊

眞佛坊、性信坊、入信坊、このひと〴〵のことうけたまはりさふらふ。かへす〴〵なげきおぼえさふらへども、ちからをよばずさふらふ。また餘のひと〴〵のおなじこゝろならずさふらふらんも、ちからをよばずさふらふ。ひと〴〵のおなじこゝろならずさふらへば、とかくまふすにをよばず、いまはひとのうへもまふすべきにあらずさふらふ。よくよくこゝろえたまふべし。

親鸞

慈信御坊

さては念佛のあひだのことによりて、ところせきやうにうけたまはりさふらふ。かへすがへすこゝろぐるしくさふらふ。詮ずるところ、そのところの緣ぞつきさせたまひさふらふらん。念佛をさへらるなんどまふさんことに、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ。念佛とゞめんひとこそ、いかにもなりさふらはめと、まふしたまふひとは

とにてありけりとて、かた〴〵やう〳〵にまふすなることこそ、かへす〴〵不便のことにてきこへさふらへ。やう〳〵ふみどもをかきもてるを、いかにみなしてさふらふやらん、かへす〴〵おぼつかなくさふらふ。慈信坊のくだりて、わがきゝたる法文こそまことにてはあれ、ひごろの念佛は、みないたづらごとなりとさふらへばとて、おほぶの中太郎のかたのひとは、九十なん人とかや。みな慈信坊のかたへとて、中太郎入道をすてたるとかやきゝさふらふ。いかなるやうにて、さやうにさふらふぞ。詮ずるところ、信心のさだまらざりけるときゝさふらふ。いかやうなることにて、さほどにおほくのひとびとのたぢろぎさふらふらん、不便のやうとやきゝさふらふ。またかやうのきこへなんどさふらへば、そらごともおほくさふらふべし。また親鸞も偏頗あるものときゝさふらへば、ちからをつくして唯信鈔、後世物語、自力他力の文のこゝろども、二河の譬喩なんどかきて、かた〴〵へひと〴〵にくだしてさふらふも、みなそらごとになりてさふらふときこへさふらふは、いかやうにすゝめられたるやらん、不可思議のことゝきゝさふらふこそ、不便にさふらへ。よく〳〵きかせたまふべし。あなかしこ〳〵。

十一月九日　　親鸞

九月二日　　　　　　　　　　親鸞

慈信坊　御返事

入信坊、眞淨坊、法信坊にも、このふみをよみきかせたまふべし。かへす〴〵不便のことさふらふ。性信坊には、春のぼりてさふらひしに、よく〳〵まふしてさふらふ。くげどのにもよく〳〵よろこびまふしたまふべし。このひと〴〵のひがごとをまふしあふてさふらへばとて、道理をばうしなはれさふらはんとこそおぼえさふらへ、世間のことにもさることのさふらふぞかし。領家、地頭、名主のひがごとすればとて、百姓をまどはすことはさふらはぬぞかし。佛法をばやぶるひとなし、佛法者のやぶるにたとへたるには、師子の身中のむしの、しゝをくらふがごとしとさふらへば、念佛者をば佛法者のやぶりさまたげさふらふなり。よく〳〵こゝろえたまふべし。なを〳〵御ふみにはまふしつくすべくもさふらはず。

九月二十七日の御文、くわしくみさふらひぬ。さては御こゝろざしの錢伍貫文、十一月九日にたまはりてさふらふ。さてはゐなかのひと〴〵、みな年來念佛せしはいたづらご

五濁增時云々ー末世には佛法を聞き修行する人をそしり嫌ひ怨みなどするに至るをいふ

こゝろ病と、身よりおこる病とはかはるべければ、こゝろよりおこりて死ぬるひとのことを、よく〳〵御はからひさふらふべし。信願坊がまふすやうは、凡夫のならひなれば、わるきこそ本なればとて、おもふまじきことをこのみ、身にもすまじきことをし、口にもいふまじきことをまふすべきやうにまふされさふらふこそ、信願坊がまふしやうとは、こゝろえずさふらふ。往生にさはりなければとて、ひがごとをこのむべしとはまふしたることさふらはず、かへす〴〵こゝろえずおぼえさふらふ。詮ずるところひがごとまふさんひとは、その身ひとりこそ、ともかくもなりさふらはめ、すべてよろづの念佛者のさまたげとなるべしとはおぼえずさふらふ。また念佛をとゞめんひとは、そのひとばかりこそいかにもなりさふらはめ。よろづの念佛するひとを、とがとなるべしとはおぼえずさふらふ。五濁增時多疑謗、道俗相嫌不用聞、見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨と、まのあたり善導の御おしへさふらふぞかし。釋迦如來は名無眼人、名無耳人ととかせたまひてさふらふぞかし。かやうなるひとにて念佛をもとゞめ、念佛者をもにくみなんどすることにてもさふらふらん。それはかのひとをにくまずして、念佛をひと〴〵まふして、たすけんとおもひあはせたまへとこそおぼえさふらへ。あなかしこ〳〵。

もさふらふべし。なを〳〵念佛せさせたまふひと〴〵、よく〳〵この文を御覽じとかせたまふべし。あなかしこ〳〵。

九月二日　　　　親鸞

念佛之人々御中

文かきてまいらせさふらふ。このふみをひと〴〵にもよみてきかせたまふべし。遠江の尼御前の御こゝろにいれて沙汰さふらふらん、かへす〴〵めでたく、あはれにおぼえさふらふ。よく〳〵京よりよろこびまふすよしをまふしたまふべし。信願坊がまふすやう、かへす〴〵不便のことなり、わるき身なればとて、ことさらにひがごとをこのみて、師のため、善知識のためにあしきことを沙汰し、念佛のひと〴〵のためにとがとなるべきことをしらずば、佛恩をしらず、よく〳〵はからひたまふべし。またものにくるふて死せんひと〴〵のことをもちて、信願坊がことをよしあしとまふすべきにはあらず。念佛するひとの死にやうも、身より病をするひとは往生のやうをまふすべからず。こゝろより病をするひとは天魔ともなり、地獄にもおつることにてさふらふべし。こゝろよりお

り。つぎに念佛せさせたまふひと〴〵の、彌陀の御ちかひは、煩惱具足のひとのためなりと信ぜられさふらふは、めでたきやうなり。たゞしわるきものゝためなりとて、ことさらにひがごとをこゝろにもおもひ、身にも口にもまふすべしとは、淨土宗にまふすことならねば、ひと〴〵にもかたることさふらはず、おほかたは煩惱具足の身にて、こゝろをもとゞめがたくさふらひながら、往生をうたがはずせんとおぼしめすべしとこそ、師も善知識もまふすことにてさふらふに、かゝるわるき身なれば、ひがごとをことさらにこのみて、念佛のひと〴〵のさはりとなり、師のためにも、善知識のためにも、とがとなさせたまふべしとまふすことは、ゆめ〳〵なきことなり。彌陀の御ちかひにまうあひがたくして、あひまいらせて、佛恩を報じまいらせんとこそおぼしめすべきに、念佛をとゞめらるゝことに、沙汰しなされてさふらふらんこそ、かへす〴〵こゝろえずさふらふ。あさましきことにさふらふ。ひと〴〵のひがざまに御こゝろえどものさふらふゆへ、あるべくもなきことどもきこへさふらふ。まふすばかりなくさふらふ。たゞし念佛のひとひがごとをまふしさふらはゞ、その身ひとりこそ地獄にもおち、天魔ともなりさふらはめ、よろづの念佛者のとがになるべしとおぼえずさふらふ。よく〳〵御はからひと

御名—名號、南無阿彌陀佛

神は、かげのかたちにそへるがごとくして、まもらせたまふことにてさふらへば、念佛を信じたる身にて、天地の神をすてまふさんとおもふこと、ゆめ〳〵なきことなり。神祇等だにもすてられたまはず、いかにいはんや、よろづの佛菩薩をあだにもまふし、をろかにおもひまいらせさふらふべしや。よろづの佛を、をろかにまふさば、念佛信ぜず、彌陀の御名をとなへぬ身にてこそさふらはんずれ、詮ずるところは、そらごとをまふし、ひがごとをことにそれて、念佛をとゞめんとするところの領家、地頭、名主の御はからひどもさふらふらんこと、よく〳〵やうあるべきことなり。そのゆへは釋迦如來のみことには、念佛するひとをそしるものをば、名無眼人ととき、名無耳人とおほせをかれたることにさふらふ。善導和尙は五濁增時多疑謗、道俗相嫌不用聞、見有修行起瞋毒、方便破壞競生怨と、たしかに釋しをかせたまひたり。この世のならひにて、念佛をさまたげん人は、そのところの領家、地頭、名主のやうあることにてこそさふらはめ。とかくまふすべきにあらず。念佛せんひと〴〵は、かのさまたげをなさんひとをばあはれみ、をなじ不便におもふて、念佛をもねんごろにまふして、さまたげなさんをたすけさせたまふべしとこそ、ふるきひとはまふされさふらひしか。よく〳〵御たづねあるべきことな

まうあひ―遇の字の訓

あるべからずさふらふ。なを〳〵一念のほかにあまるところの御念佛を、法界衆生に廻向すとさふらふは、釋迦彌陀如來の御恩を報じまいらせんとて、十方衆生に廻向せられさふらふらんは、さあるべくさふらへども、二念三念まふして往生せんひとを、ひがごととはさふらふべからず、よく〳〵唯信鈔を御覽さふらふべし。念佛往生の御ちかひなれば、一念十念も往生はひがごとにあらずとおぼしめすべきなり。あなかしこ〳〵。

十二月二十六日　　親鸞

敎忍御坊御返事

まづよろづの佛菩薩をかろしめまいらせ、よろづの神祇冥道をあなづりすてたてまつるとまふす、このことゆめ〳〵なきことなり。世々生々に、無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死をいでずありしゆへに、曠劫多生のあひだ、諸佛菩薩の御すゝめによりて、いままうあひがたき彌陀の御ちかひにあひまいらせてさふらふ。御恩をしらずして、よろづの佛菩薩をあだにまふさんは、ふかき御恩をしらずさふらふべし。佛法をふかく信ずるひとをば、天地におはしますよろづの

有念無念―有念とは亂動の心を以て修するをいひ、無念とは散亂の念を離れて修すると

まはりてさふらへ。かならず一念ばかりにて往生すといひて、多念をせんは、往生すまじきとまふすことは、ゆめ／＼あるまじきことなり、唯信鈔をよく／＼御覽さふらふべし。また有念無念とまふすことは、他力の法門にはあらぬことにてさふらふ。聖道門にまふすことにてさふらふなり、みな自力聖道の法文なり。阿彌陀如來の選擇本願は、有念の義にもあらず、無念の義にもあらずとまふしさふらふなり。いかなる人まふしさふらふとも、ゆめ／＼もちゐさせたまふべからずさふらふ。聖道にまふすことをあしざまにきゝなして、淨土宗にまふすにてぞさふらふらん。さら／＼ゆめ／＼もちゐさせたまふまじくさふらふ。また慶喜とまふしさふらふことは、他力の信心をえて、往生を一定してむずとよろこぶこゝろをまふすなり。常陸國中の念佛者のなかに、有念無念の念佛沙汰のきこへさふらふは、ひがごとにさふらふとまふしさふらひにき。たゞ詮ずるところは、他力のやうは行者のはからひにてはあらずさふらへば、有念にあらず、無念にあらずとまふすことをあしうきゝなして、有念無念なんどまふしさふらひけるとおぼえさふらふ。彌陀の選擇本願は、行者のはからひのさふらはねばこそ、ひとへに他力とはまふすことにてさふらへ。一念こそよけれ、多念こそよけれなんどまふすことも、ゆめ／＼

唯信鈔―選擇集に據り念佛往生の義を明す書、聖覺法印の選述

七月九日　　　　　　　　親鸞

性信御坊

護念坊のたよりに、教忍御坊より錢二百文、御こゝろざしのもの、たまはりてさふらふ。さきに念佛のすゝめのもの、かた〴〵の御なかよりとて、たしかにたまはりてさふらひき。人々によろこびまふさせたまふべくさふらふ。この御返事にて、おなじ御こゝろにまふさせたまふべくさふらふ。さてはこの御たづねさふらふことは、まことによき御うたがひどもにてさふらふべし。まづ一念にて、往生の業因はたれりとまふしさふらふは、まことにさるべきことにてさふらふべし。さればとて一念のほかに、念佛をまふすまじきことにはさふらはず、そのやうは唯信鈔にくはしくさふらふ、よく〳〵御覽さふらふべし。一念のほかにあまるところの念佛は、十方の衆生に廻向すべしとさふらふも、さあるべきことにてさふらふべし。十方の衆生に廻向すればとて、二念三念せんは、往生にあしきこととおぼしめされさふらはゞ、ひがごとにてさふらふべし。念佛往生の本願とこそおほせられてさふらへば、おほくまふさんも一念一稱も、往生すべしとこそうけた

は、ふることにてさふらふ。さればとて念佛をとゞめられさふらひしが、よにくせごとのをこりさふらひしかば、それにつけても念佛をふかくたのみて、よくいのりにこゝろにいれて、まふしあはせたまふべしとぞおぼえさふらふ。御文のやう、おほかたの陳狀よく御はからひともさふらひけり、うれしくさふらふ。詮じさふらふところは、御身にかぎらず念佛まふさん人々は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし。往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふべし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞおぼえさふらふ。よく／＼御案さふらふべし。このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえずさふらふ。なを／＼とく御くだりのさふらふこそ、うれしふさふらへ。よく／＼御こゝろにいれて、往生一定とおもひさだめられさふらひなば、佛の御恩をおぼしめさんには、こと事はさふらふべからず。御念佛をこゝろにいれてまふさせたまふべしとおほえさふらふ。あなかしこ／＼。

故聖人—法然聖人

かやうのことをこゝろえぬ人々は、そのことゝなきことをまふしあはれてさふらふ。よくよくつゝしみたまふべし。かへす〴〵。

二月三日　　親鸞

六月一日の御文くわしくみさふらひぬ。さては鎌倉にての御うたへのやうは、をろ〳〵うけたまはりてさふらふ。この御文にたがはずうけたまはりてさふらひしに、別のことはよもさふらはじとおもひさふらひしに、御くだりうれしくさふらふ。おほかたはこのうたへのやうは、御身ひとりのことにはあらずさふらふ。すべて浄土の念佛者のことなり。このやうは故聖人の御とき、この身どものやう〳〵にまふされさふらひしことなり。こともあたらしきうたへにてさふらふなり。性信坊ひとりの沙汰のあるべきことにはあらず、念佛まふさんひとは、みなおなじこゝろ御沙汰あるべきことなり。御身をわらひまふすべきことにはあらずさふらふべし。念佛者のものにこゝろえぬは、性信坊のとがにまふしなさんは、きはまれるひがごとにさふらふべし。念佛まふさん人は、性信坊のかたことにこそなりあはせたまふべけれ。母姉妹なんど、やう〳〵にまふさるゝこと

親鸞聖人御消息集

なにごとよりは如來の御本願の、ひろまらせたまひてさふらふこと、かへす〴〵めでたくうれしくさふらふ。そのことにをの〳〵ところ〴〵に、われはといふことをおもふて、あらそふことゆめ〳〵あるべからずさふらふ。京にも一念多念なんどまふすあらそふことのおほくさふらふやうにあること、さら〳〵さふらふべからず。たゞ詮ずるところは、唯信鈔、後世物語、自力他力この御文どもをよく〳〵つねにみて、その御こゝろにたがへずおはしますべし。いづかたの人々にも、このこゝろをおほせられさふらふべし。なをおぼつかなきことあらば、今日までいきてさふらへば、わざともこれへたづねたまふべし。鹿嶋行方、そのならびの人々にも、このこゝろをよく〳〵おほせらるべし。一念多念のあらそひなんどのやうに、詮なきこと論じごとをのみ、まふしあはれてさふらふぞかし。よく〳〵つゝしむべきことなり。あなかしこ〳〵。

講讃之儀、則云給云恰不測不期、爾者兩師定垂納受者、小賓宜協知見歟。而已時也、晦日右毫粗述卑懷耳。　釋從覺

今建武五歳戊寅夷則三日、於西山草扃馳筆畢。先年書寫安置之本、宿坊炎上之時忽成灰燼之間借渡二轉之本重叅書寫之者也矣。

沙門慈俊四十四

凡斯御消息者、念佛成佛之咽喉、愚癡愚迷之眼目也。可祕々々而已。

慈俊（春秋四十四）

于時文安四年丁卯二月晦日

奉書寫訖　右筆蓮如

正慶第二歲癸酉卯月廿五日、鴨河之西、鳳闕之畔、暫時旅所之間、敬終書功。寫本者撰取日來安置之三四本、聚得當時拜見之一二帖、訖。而於年號前後不同、至日付錯亂參差、仍糾歲月日時之相違、守鉤索鏁鈴之次第、勘之編之。部類覃廿二通、筆跡限六八丁。短慮尙多所貽歟、有恐々々有憚々々。抑斯御消息者、念佛成佛之咽喉也。專開諸門超勝之直路、愚癡愚迷之眼目也。非指餘流難思之要津乎。弟子染彼佛意於心底、倍懼自力修行之嶮難焉。挿此聖應於掌中、特歸他力往生之威德矣。悲喜相交侵、感淚最巨。抑者也。爰又當黑谷祖師之御緣日、忽遂筆硯之漸寫、迎當所聖人之御佛、事聊跂

安樂淨土にいりはつれば、すなはち大涅槃をさとるとも、また無上覺をさとるとも、滅度にいたるともまふせば、御名こそかはりたるやうなれども、これみな法身と申佛のさとりをひらくべき正因に、彌陀佛の御ちかひを法藏菩薩われらに廻向したまへるを、往相の廻向とまふすなり。この廻向せさせたまへる願を、念佛往生の願とは申なり。この念佛往生の願を、一向に信じてふたごころなきを、一向專修とは申なり。如來二種の廻向とまふすことは、この二種の廻向の願を信じ、ふたごころなきを眞實の信心とまふす。この眞實の信心のおこることは、釋迦彌陀の二尊の御はからひよりおこりたりとしらせたまふべし。穴賢々々。

寶號經にのたまはく、彌陀の本願は行にあらず善にあらず、たゞ佛名をたもつなり。名號はこれ善なり行なり。行といふは善をするについていふことばなり。本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには、善にあらず行にあらざるなり。かるがゆへに他力とまふすなり。本願の名號は能生する因なり、能生の因といふは、すなはちこれ父なり。大悲の光明はこれ所生の緣なり。所生の緣といふは、すなはちこれ母なり。

末燈鈔

金剛心—他力信心の堅固なるが故に金剛心といふ

行をもあなづりなんどしあはせたまふよしきゝ候こそあさましく候へ。すでに謗法のひとなり、五逆のひとなり、なれむつぶべからず。淨土論と申文には、かやうの人は佛法信ずるこゝろのなきより、このこゝろはおこるなりと候めり。また至誠心のなかには、かやうに惡をこのまんには、つゝしみてとをざかれ、ちかづくべからずとこそとかれて候へ。善知識同行には、したしみちかづけとこそときをかれて候へ。惡をこのむ人にもちかづきなんどすることは、淨土にまいりてのち、衆生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にもしたしみちかづくことは候へ、それもわがはからひにはあらず、彌陀のちかひによりて、御たすけにてこそおもふさまのふるまひも候はんずれ、當時はこの身どものやうにてはいかゞ候べかるらんとおぼえ候。よくく案ぜさせたまふべくさふらふ。往生の金剛心のおこることは、佛の御はからひよりおこりて候へば、金剛心をとりて候はん人は、よも師をそしり、善知識をあなづりなんどすることは候はじとこそおぼえ候へ。この文をもて、かしまなめかたの南の莊、いづかたにもこれにこゝろざしおはしまさん人には、おなじ御こゝろによみきかせたまふべく候。穴賢々々。

建長四年二月二十四日

流轉―生死の海に轉々すること

返不便におぼえ候へ。ゑひもさめぬさきになを酒をすゝめ、毒もきえやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんがごとし。くすりあり毒をこのめと候らんことは、あるべくもさふらはずとこそおぼえ候。佛の御名をもきゝ、念佛を申して、ひさしくなりておはしまさん人々は、後世のあしきことをいとふしるし、この身のあしきことをばいとひすてんと、おぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候へ。はじめて佛のちかひをきゝはじむる人々の、わが身のわろくこゝろのわろきをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わがこゝろの善惡をばさたせずむかへたまふぞとは申候へ。かくきゝてのち、佛を信ぜんとおもふこゝろふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとひ、流轉せんことをもかなしみて、ふかくちかひをも信じ、阿彌陀佛をもこのみまふしなんどする人は、もともこゝろのまゝにて惡事をもふるまひなんどせしと、おぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにても候はめ。また往生の信心は、釋迦彌陀の御すゝめによりて、おこるとこそみえて候へば、さりともまことのこころおこらせたまひなんには、いかゞむかしの御こゝろのまゝにては候べき。この御中の人々も、少々はあしきさまなることのきこえ候めり。師をそしり善知識をかろしめ、同

うやうに法文をいひかへて、身もまどひ人をもまどはして、わづらひあふて候めり。聖教のをしへをもみずしらぬをの〳〵のやうにおはしますひと〴〵は、往生にさはりなしとばかりいふをきゝて、あしざまに御こゝろえあることおほく候き、いまもさこそ候らめとおぼえ候。浄土の教もしらぬ信見房などが申ことによりて、ひがざまにいよ〳〵なりあはせたまひ候らんをきゝ候こそ、あさましく候へ。まづをの〳〵の昔は、彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしまし候しが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをきゝはじめておはします身にて候なり。もとは無明の酒にゑひて、貪欲瞋恚愚癡の三毒をのみ、このみめしあふて候つるに、佛のちかひをきゝはじめしより、無明の醉もやう〳〵すこしづつさめ、三毒をもすこしづつこのまずして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。しかるになをゑひもさめやらぬに、かさねて醉をすゝめ、毒もきえやらぬに、なを毒をすゝめられ候らんこそ、あさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、こゝろにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、こゝろにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもこゝろのまゝにてあるべしと、まふしあふて候らんこそ、返

明法御房の往生のことをきゝながら、あとをゝろかにせん人々は、その同朋にあらず候べし。無明の酒に醉たる人にいよ／＼ゑひをすゝめ、三毒をひさしくこのみくらふ人に、いよ／＼毒をゆるしてこのめと申しあふて候らん、不便のことに候。無明の酒に醉たることをかなしみ、三毒をこのみくふて、いまだ毒もうせはてず、無明のゑひもいまださめやらぬにおはしましあふて候ぞかし。よく／＼御こゝろえ候へし。方々よりの御こゝろざしの物ども、かずのまゝにたしかにたまはり候。明教房ののほられて候こと、ありがたきことに候。かた／＼の御こゝろざし申しつくしがたく候。明法御房の往生のこと、おどろきまふすべきにはあらねども、返々うれしく候。鹿嶋なめかたの奥郡、かやうの往生ねがはせたまふ人々のみなの御よろこびにて候。又ひらつかの入道殿の御往生のことき丶候こそ、返々申にかぎりなくおほえ候へ。めでたさ申つくすべくも候はず。をの／＼みな往生は一定とおほしめすべし、さりながらも往生をねがはせたまふ人々の御中にも、御こゝろえぬことも候き。いまもさこそ候らめとおほえ候。京にもこゝろえずして、やう／＼にまどひあふて候めり、國々にもおほくきこえ候。法然聖人の御弟子のなかにも、われはゆゝしき學生などとおもひあひたる人々も、この世にはみなや

たまひあふて候らん。淨土宗の義、みなかはりておはしましあふて候人々も、聖人の御弟子にて候へども、やう〲に義をもいひかへなどして、身もまどひ人をもまどはかしあふて候めり、あさましきことにて候なり。京にもおほくまどひあふて候めり、田舍はさこそ候らめとこゝろにくゝも候はず、なにごとも申しつくしがたく候。又々申候べし。この明教房ののぼられて候こと、まことにありがたきことゝおぼえ候。明法御房の御往生のことを、まのあたりきゝ候もうれしく候。人々の御こゝろざしもありがたくおぼえ候。かた〲この人々ののぼり不思議のことに候。この文をたれ〲にもおなじこゝろによみきかせたまふべく候。このふみは奧郡におはします同朋の御中に、みなおなじく御覽候べし、穴賢々々。年比念佛して往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこゝろをもおもひかへして、とも同朋にもねんごろにこゝろのおはしましあはゞこそ、世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ、よく〲御こゝろえ候べし。善知識ををろかにおもひ、師をそしるものをば、謗法のものと申なり。親をそしるものをば、五逆のものと申なり、同座せざれと候なり。されば北の郡に候し善乘房は、親をのり、善信をやう〲にそしり候しかば、ちかづきむつまじくおもひ候はで、ちかづけず候き。

故聖人―法然聖人なり

をおもひなんどしたるこゝろをも、ひるがへしなんどしてこそ候しか。われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることはあるべくも候はず。貪欲の煩惱にくるはされて欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり、愚癡の煩惱にまどはされて、おもふまじきことなどもおこることにてこそ候へ。めでたき佛の御ちかひのあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもふまじきことどもをもおもひなんどせんは、よく〳〵この世のいとはしからず、身のわろきことをおもひしらぬにて候へば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにもこゝろざしのおはしまさぬにて候へば、念佛せさせたまふとも、その御こゝろざしにては順次の往生もかたくや候べからん。よく〳〵このよしを人々にきかせまいらせさせたまふべく候。かやうにも申べくも候はねども、なにとなくこの邊のことを、御こゝろにかけあはせたまふ人々にておはしましあひて候へば、かくも申し候なり。この世の念佛の義はやう〳〵にかはりあふて候ひぬれば、とかく申におよばず候へども、故聖人の御をしへを、よく〳〵うけたまはりておはします人々は、いまももとのやうにかはらせたまふこと候はず、世かくれなきことなれば、きかせ

御文度々まいらせ候き、御覽ぜずや候ひけん。何事よりも明法の御房の、往生の本意とげておはしまし候こそ、常陸國うちのこれにこゝろざしおはします人々の御ために、めでたきことにて候へ。往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにても候はず、めでたき智者もはからふべきことにも候はず。大小の聖人だにも、ともかくもはからはで、たゞ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ。ましてをの〳〵のやうにおはします人々は、たゞこのちかひありときゝ、南無阿彌陀佛にあひまいらせたまふこそ、ありがたくめでたくさふらふ御果報にては候なれ。とかくはからはせたまふこと、ゆめ〳〵候べからず。さきに下しまいらせ候ひし唯信鈔、自力他力なんどの文どもにて御覽候べし。それこそこの世にとりては、よき人々にておはします。すでに往生をもしておはします人々にて候へば、その文どもにかゝれて候には、なにごとも〳〵すぐべくも候はず。法然聖人の御をしへをよく〳〵御こゝろえたる人々にておはしますに候き。さればこそ往生もめでたくしておはし候へ。おほかたは年比念佛まふしあはせたまふ人々のなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみ申あはれて候人々もさふらひき。いまもさぞ候らんとおぼえ候。明法房などの往生しておはしますも、もとは不可思議のひがごと

まふす。また諸佛の眞實信心をえてよろこぶをば、まことによろこびて、われとひとしきものなりと、とかせたまひて候なり。大經には釋尊のみことばに、見敬得大慶則我善親友とよろこばせたまひ候へば、信心をえたる人は、諸佛とひとしととかれて候めり。また彌勒をば、すでに佛にならせたまはんことあるべきに、ならせたまひて候へばとて、彌勒佛とまふすなり。しかればすでに他力の信をえたるひとをも、佛とひとしとまふすべしとみえたり。御うたがひあるべからず候。御同行の臨終を期してと、おほせられ候らんはちからおよばぬことなり。信心まことにならせたまひて候人は、誓願の利益にて候うへに、攝取してすてずと候へば、來迎臨終を期せさせたまふべからずとこそおぼえ候へ。いまだ信心さだまらぬ人は、臨終をも期し、來迎をもまたせたまふべし。この御文主の御名は、隨信房とおほせられ候はゞ、めでたくさふらふべし。この御ふみのかきやうめでたく候。御同行のおほせられやうはこゝろえず候。それをばちからおよばず候。あなかしこ〳〵。

十一月二十六日　　　　　　　　　　　　親鸞

隨信御房

十一月二十四日　　　　　　　　　　親鸞

他力のなかには、自力とまふすことはさふらふときゝ候ひき。他力のなかに、また他力とまふすことはきゝ候はず、他力のなかに自力とまふすことは、雑行雑修定心念佛をこゝろがけられて候人々は、他力のなかの自力のひと〴〵なり。他力のなかにまた他力とまふすことはうけたまはり候はず。なにごとも専信房のしばらくもゐたらんと候へば、そのとき申候べし。穴賢々々。

錢貳拾貫文慥給候。穴賢々々。

十一月二十五日　　　　　　　　　　親鸞

御たづね候ことは、彌陀他力の廻向の誓願にあひたてまつりて、眞實の信心をたまはりて、よろこぶ心のさだまるとき、攝取してすてられまいらせざるゆへに、金剛心になるときを、正定聚のくらゐに住すともまふす、彌勒菩薩とおなじくらゐになるとももとかれて候めり。彌勒とひとつくらゐになるゆへに、信心まことなる人をば佛とひとしとも

おもひなをしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、惡くるしからずといふこと、ゆめ〳〵あるべからず候。煩惱にくるはされて、おもはざるほかにすまじきことをもふるまひ、いふまじきことをもいひ、おもふまじきことをもおもふにてこそあれ。さはらぬことなればとて、ひとのためにもはらわろく、すまじきことをもし、いふまじきことをもいはゞ、煩惱にくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきことをもせば、返々あるまじきことなり。鹿嶋なめかたの人々のあしからんことをもいひとゞめ、その邊の人々のことにひがみたることをば制したまはゞこそ、この邊より出來しるしにては候はめ。ふるまひはなにともこゝろにまかせよといひつると候らん、あさましきことに候。この世のわろきをもすて、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとひ念佛まふすことにては候へ。としごろ念佛する人なんどの、人のためにあしきことをもし、またいひもせば、世をいとふしるしもなし。されば善導の御をしへには、惡をこのむ人をばつゝしんでとをざかれとこそ、至誠心のなかにはをしへおかせおはしまして候へ。いつかわがこゝろのわろきにまかせてふるまへとは候。おほかた經釋をもしらず、如來の御ことをもしらぬ身に、ゆめ〳〵その沙汰あるべくも候はず。あなかしこ〳〵。

南無阿彌陀佛をとなへてのうへに、無礙光如來をまふすは、あしきことなりと候なるこそ、きはまれるひがごとゝきこえ候へ。歸命は南無なり、無礙光佛は光明なり。智慧なり、この智慧はすなはち阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の御かたちをしらせたまはねば、その御かたちを、たしかに〳〵しらせまいらせんとて、世親菩薩御ちからをつくしてあらはしたまへるなり。このほかのことは、少々文字をなをしてまいらせさふらふなり。

慶信御房御返事　　親鸞

なによりも聖敎のをしへをもしらず、また淨土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものどものなかに、惡はおもふさまにふるまふべしとおほせられ候なるこそ、かへす〲あるべくも候はず。北の郡にありし善乘房といひしものに、つゐにあひむつるゝことなくて、やみにしをばみざりけるにや。凡夫なればとてなにごともおもふさまならば、ぬすみをもし、人をもころしなんどすべきかは。もとぬすみごころあらん人も、極樂をねがひ念佛をまふすほどのことになりなば、もとひがうたるこゝろをも

ふべき。

らたづねおほせられて候事、かへす〴〵めでたく候。まことの信心をえたるひとは、すでに佛になりたまふべき御身となりておはしますゆへに、如來とひとしき人と、經にとかれて候なり。彌勒はいまだ佛になりたまはねども、このたびかならず佛になりたまふべきによりて、彌勒をばすでに彌勒佛と申候なり。その定に眞實信心をえたるひとをば、如來とひとしとおほせられて候なり。又乘信房の彌勒とひとしと候も、ひがごとにては候はねども、他力によりて信をえてよろこぶ心は、如來とひとしと候を、自力なりと候らんは、いますこし乘信房の御こゝろのそこのゆきつかぬやうにきこえ候こそ、よく御案あるべくや候らん。自力のこゝろにて、わが身は如來とひとしと候はんは、まことにあしく候べし。他力の信心のゆへに、淨(本乘)信房のよろこばせたまひ候らんは、なにかは自力にて候べき。よく〳〵御はからひ候べし。このやうは、この人々にくはしく申候。乘信御房にとひまいらせさせたまふべくさふらふ。穴賢々々。

十月二十七日　　親鸞

一期—一生涯りこと

の信心ばかりにて、佛恩のふかさ師主の恩德のうれしさ、報謝のためにたゞ御名をとなふるばかりにて、日の所作とす。このやうひがざまにや候らん、一期の大事たゞこれにすぎたるはなし。しかるべくは、よく〳〵こまかにおほせをかうふり候はんとて、わづかにおもふばかりを記して、申上候。さては京にひさしく候しに、そう〳〵にのみ候ひて、こゝろしづかにおぼえず候しことの、なげかれ候ひて、わざといかにしてもまかりのぼりて、こゝろしづかにせめては、五日御所にさふらはゞやとねがひ候なり。噫かうまで申候も御恩のちからなり。

進上　聖人の御所へ蓮位の御房申せ給へ。

十月十日　　慶信　上　在判

追申上候。

念佛申候人々のなかに、南無阿彌陀佛ととなへ候ひまには、無礙光如來ととなへまいらせさふらふ人も候。これをきゝてあるひとの申し候ふなる、南無阿彌陀佛ととなへてのうへに、歸命盡十方無礙光如來ととなへまいらせ候ことは、おそれあることにてこそあれ、いまめかはしくと申しさふらふなる、このやういかゞさふ

十一二三の御誓ひ―四十八願中第十一必至滅度の願、第十二光明無量願、第十三壽命無量の願

なり。このゆへに大信心は佛性なり。佛性すなはち如來なりとおほせられて候やらん。これは十一二三の御ちかひとこゝろえられ候。罪惡のわれらがためにおこしたまへる大悲の御ちかひの、めでたくあはれみましますうれしさ、こゝろもおよばれず、ことばもたえて申しつくしがたきことかぎりなく候。無始曠劫よりこのかた、過去遠々に恒沙の諸佛の出世のみもとにて、大菩提心をおこすといへども、自力かなはで二尊の御方便にもよほされまいらせて、雜行雜修自力疑心のおもひなし。無礙光如來の攝取不捨の御あはれみのゆへに、疑心なくよろこびまいらせて、一念にて往生さだまりて、誓願不思議とこころえ候ひなんにはきゝみ候に、あかぬ淨土の聖教も、知識にあひまいらせんとおもはんことも、攝取不捨も信も念佛も、人のためとおほえられず候。いま師主の御をしへのゆへ、こゝろをぬきて御こゝろむきをうかゞひ候によりて、願意をさとり直道をもとめえて、まさしき眞實報土にいたり候はんこと、このたび一念聞名にいたるまで、うれしさ御恩のいたりに候。そのうへ彌陀經義集に、おろ〳〵あきらかにおほせられ候。しかるに世間の忽々にまぎれて、一時もしは二時三時おこたるといへども、晝夜にわすれず御あはれみをよろこぶ業力ばかりにて、行住座臥に時處の不淨をもきらはず、一向に金剛

るゝまでは候べしとみえ候なり。ともかくも行者のはからひ、ちりばかりもあるべからず候へばこそ、他力とまふす事にて候へ。あなかしこ〳〵。

十月六日　　　　　　　　　　親鸞　御判

眞佛御房御返事

畏申候

大無量壽經に信心歡喜と候。華嚴經をひきて、淨土和讃にも、信心よろこぶそのひとを、如來とひとしとときたまふ。大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なりと、おほせられて候に、專修の人のなかにあるひとの、こゝろえちがへて候やらん、信心よろこぶ人を如來とひとしと、同行達ののたまふは自力なり、眞言にかたよりたりと申候なるは、人のうへをしるべきに候はねども申候。また眞實信心うるひとは、すなはち定聚のかずにいる、不退のくらゐにいりぬれば、かならず滅度をさとらしむと候。滅度をさとらしむと候は、このたびこの身のおはり候はんとき、眞實信心の行者の心、報土にいたり候ひなば、壽命無量を體として、光明無量の德用はなれたまはざれば、如來の心光に一味

往生し候はんずれば、淨土にてかならず〱まちまいらせ候べし。あなかしこ〱。

七月十三日　親鸞

有阿彌陀佛御返事

攝取不捨事

たづねおほせられて候攝取不捨のことは、般舟三昧行道往生讃と申におほせられてさふらふを、みまゐらせ候へば、釋迦如來彌陀佛、われらが慈悲の父母にて、さま〱の方便にて、われらが無上の信心をばひらきおこさせたまふと候へば、まことの信心のさだまることは、釋迦彌陀の御はからひとみえて候ば、往生の心にうたがひなくなり候は、攝取せられまいらせたるゆへとみえて候。攝取のうへには、ともかくも行者のはからひあるべからず候。淨土へ往生するまでは、不退のくらゐにておはしまし候へば、正定聚のくらゐとなづけておはしますことにて候なり。まことの信心をば、釋迦如來、彌陀如來二尊の御はからひにて、發起せしめたまひ候とみえて候へば、信心のさだまるとまふすは、攝取にあづかるときにて候なり。そののちは正定聚のくらゐにて、まことに淨土へむま

信をはなれたる行なしと、おほしめすべし。これみな、彌陀の御ちかひと申ことをこゝろうべし。行と信とは御ちかひを申なり。穴賢々々。いのち候はゞかならずのぼらせたまふべし。

五月二十六日　　　　親鸞

尋仰られ候念佛の不審の事、念佛往生と信ずる人は、邊地の往生とてきらはれ候らんこと、おほかたこゝろえがたく候。そのゆへは、彌陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば、極樂へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるが、めでたきことにて候なり。信心ありとも、名號をとなへざらんには詮なく候。一向名號を、となふとも、信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。詮ずるところ名號をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは、邊地にむまるべし。本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは邊地の往生にて候べき。このやうをよく〳〵御こゝろえ候て、御念佛候べし。この身はいまはとしきはまりて候へば、さだめてさきだちて

候。佛智不思議と信ぜさせたまひ候なば、別にわづらはしく、とかくの御はからひあるべからず候。たゞ人のとかく申し候はんことをば、御不審あるべからず候。たゞ如來の誓願にまかせまいらせたまふべく候。とかくの御はからひあるべからずさふらふなり。あなかしこ〳〵。

五月五日　親鸞御判

淨信御房へ

他力と申しさふらふは、とかくのはからひなきを、まふしさふらふなり。

四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかに見さふらひぬ。さてはおほせられたること、信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆへは、行と申は、本願の名號を一聲となへて、往生すと申ことをきゝて、ひところゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをきゝて、うたがふこゝろの、すこしもなきを、信の一念とまふすなり。信と行と二ときけども、行をひところゑするぞときゝてうたがはねば、行をはなれたる信はなしときゝて候。また

親鸞

五月五日

教名御房

このふみをもて、ひと〴〵にもみせまいらせさせたまふべく候。他力には義なきを義とはまふしさふらふなり。

佛智不思議と可レ信事

御ふみくはしくうけたまはり候ぬ。さては御法門の御不審に、一念發起信心のとき、無礙の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに、つねに淨土の業因決定すとおほせられ候。これめでたく候。かくめでたくはおほせ候へども、これみなわたくしの御はからひになりぬとおぼえ候。たゞ不思議と信ぜさせたまひ候ぬるうへは、わづらはしきはからひあるべからず候。

またある人の候なること。

出世のこゝろおほく、淨土の業因すくなしと候なるは、こゝろえがたく候。出世と候も、淨土の業因と候も、みなひとつにて候なり。すべてこれなまじゐなる御はからひと存

心光―佛の大慈悲心より發せらるゝ光明

ね申たまふべし。またくはしくは、この文にてまふすべくも候はず。目もみえず候。なにごともみなわすれて候うへに、人などに、あきらかに申べき身にてもあらずさふらふ。よく〳〵淨土の學生にとひ申給べし。穴賢々々。

閏三月二日　　　親鸞

誓願名號同一事

御ふみくはしくうけたまはり候ひぬ。またさてはこの御不審しかるべしともおぼえず候。そのゆへは誓願名號と申て、かはりたること候はず、誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候。かく申候も、はからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべき、きゝわけ、しりわくるなど、わづらはしくはおほせられさふらふやらん。これみなひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候。往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候なり。あなかしこ〳〵。たゞ如來にまかせまいらせおはしますべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

淨土宗―聖道門の此土に於て聖に入り證を得る教に對し、淨土往生を期する宗派の總稱

頓教―修行の階級を經ず證果の速やかなるをいふ

漸教―修行の段階を經て漸次證果を得る教

法滅百歳―末法百年の後に至り經道滅するとき

三には應身の土、四には化土なり。いまこの安樂淨土は報土なり。三身といふは、一には法身、二には報身、三には應身なり。いまこの彌陀如來は報身如來なり。三寶といふは、一には佛寶、二には法寶、三には僧寶なり。いまこの淨土宗は佛寶なり。四乘といふは、一には佛乘、二には菩薩乘、三には縁覺乘、四には聲聞乘なり。いまこの淨土宗は菩薩乘なり。二教といふは、一には頓教、二には漸教なり。いまこの教は頓教なり。二藏といふは、一には菩薩藏、二には聲聞藏なり。いまこの教は菩薩藏なり。二道といふは、一には難行道、二には易行道なり。いまこの淨土宗は易行道なり。二行といふは、一には正行、二には雜行なり。いまこの淨土宗は正行を本とするなり。二超といふは、一には竪超、二には横超なり。いまこの淨土宗は横超なり。竪超は聖道自力なり。二縁といふは、一には無縁、二には有縁なり。いまこの淨土は有縁の教なり。二住といふは、一には止住、二には不住なり。いまこの淨土の教は、法滅百歳まで住したまひて、有情を利益したまふとなり。不住は聖道諸善なり、諸善はみな龍宮へかくれいりたまひぬるなり。思不思といふは、思不思議の法は、聖道八萬四千の諸善なり、不思といふは、淨土の教は不可思議の教法なり。これらは加樣にしるしまふしたり。よくしらん人にたづ

大師聖人—源空即ち法然聖人

佛とひとしとまふすことなり。また他力と申ことは、義なきを義とすとまふすなり。義とすとまふすことは、行者のをの〳〵のはからふことを義とは申すなり。如來の誓願は不可思議にましますゆへに、佛と佛との御はからひなり、凡夫のはからひにあらず。補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべき人は候はず。しかれば如來の誓願には、義なきを義とすとは、大師聖人のおほせに候き。このこゝろのほかに往生にいるべきこと候はずとこゝろえて、まかりすぎ候へば、人のおほせごとにはいらぬものにてさふらふなり。

二月二十五日　親鸞

淨信御房御返事

また五說といふは、よろづの經をとかれ候に、五種にはすぎず候なり。一には佛說、二には聖弟子の說、三には天仙の說、四には鬼神の說、五には變化の說といへり。この五のなかに佛說をもちゐて、かみの四種をたのむべからず候。この三部の經は、釋迦如來の自說にてましますとしるべしとなり。四土といふは、一には法身の土、二には報身の土、

不退の位—不退轉の位、正しく佛になると定りて退轉することなき事

諸佛等同と云事

往生はなにごとも〳〵凡夫のはからひならず、如來の御ちかひにまかせまいらせたればこそ、他力にては候らへ。様々にはからひあふて候らん、おかしく候。如來の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆへに、不退の位にさだまると御こゝろえさふらふべし。眞實信心のさだまると申も、金剛の信心のさだまるとまふすも、攝取不捨のゆへにまふすなり。さればこそ無上覺にいたるべき心のおこるとまふすなり。これを不退の位ともまふし、正定聚の位にいたるともまふし、等正覺にいたるともまふすなり。このこゝろのさだまるを、十方諸佛のよろこびて、諸佛の御こゝろにひとしとほめたまふなり。このゆへにまことの信心の人をば、諸佛とひとしとまふすなり、また補處の彌勒とおなじともまふすなり。この世にて眞實信心の人をまもらせたまへばこそ、阿彌陀經には十方恒沙の諸佛護念すとはまふすことにては候へ。安樂淨土へ往生してのちに、まもりたまふとまふすことにては候はず。娑婆世界にいたるほど護念すとはまふすことなり。信心まことなる人のこゝろを、十方恒沙の如來のほめたまへば、

たがはず候なり。としごろをの〳〵に申しさふらひしことたがはずこそ候へ。かまへて學匠沙汰せさせたまひさふらはで、往生をとげさせたまひ候べし。故法然聖人は、淨土宗の人は愚者になりて往生すと候しことを、たしかにうけたまはり候しうへに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覽じては、往生必定すべしとて、ゑませたまひしをみまいらせさふらひき。文沙汰してさか〳〵しきひとのまいりたるをば、往生いかんがあらんずらんと、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまでおもひあはせられ候なり。ひと〴〵にすかされさせたまはで、御信心たぢろかせたまはずして、をの〳〵御往生候べきなり。たゞしひとにすかされさせたまひ候はずとも、信心のさだまらぬ人は、正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。乘信房にかやうに申し候やうを、人々にもまふされ候べし。あなかしこ〳〵。

文應元年十一月十三日　　善信 八十八歳

乘信御房

この御消息の正本は、坂東下野國おほうちの御莊高田にこれあるなりと。云云

うは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくましします。かたちもましまさぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とまふすとぞきゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。

正嘉二年十二月十四日　　愚禿親鸞八十六歳

なによりもこぞことし、老少男女おほくの人々、死にあひて候らんこそあはれに候へ。ただし生死無常のことはり、くはしく如來のときをかせおはしまして候へば、おどろきおぼしめすべからず候なり。まづ善信が身には、臨終の善惡をばまふさず、信心決定の人は、うたがひなければ正定聚に住する事にて候なり。さればこそ愚癡無智の人も、おはりもめでたく候へ。如來の御はからひにて往生するよし、ひと〴〵申され候ける。すこしも

しもうたがふべきにあらす。これは如來とひとしといふ文ともあらはししるすなり。

正嘉元年丁巳十月十日　親鸞

眞佛御房

自然法爾事

自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、然といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに法爾といふ。法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひなりけるゆへに、おほよす行者のはからひのなきをもて、この法の德のゆへにしからしむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆへに義なきを義とすとしるべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とは申ぞときゝてさふらふ。ちかひのや

三會のあかつき—彌勒三回の大說法度生をいふ

勒はすでに無上覺に、その心さだまりてあるべきにならせたまふによりて、三會のあかつきとまふすなり。淨土眞實のひとも、このこゝろをこゝろうべきなり。光明寺の和尙の般舟讃には、信心のひとは、その心すでにつねに淨土に居すと釋したまへり。居すといふは、淨土に信心のひとのこゝろ、つねにゐたりといふこゝろなり。これは彌勒とおなじといふことをまふすなり。これは等正覺を彌勒とおなじとまふすによりて、信心のひとは如來とひとしとまふすこゝろなり。

正嘉元年丁巳十月十日　親鸞

性信御房

これは經の文なり。華嚴經に言、信心歡喜者與諸如來等といふは、信心をよろこぶひとは、もろ〱の如來とひとしといふなり。もろ〱の如來とひとしといふは、信心をえてことによろこぶひとを、釋尊のみことには、見敬得大慶則我善親友とときたまへり。また彌陀の第十七の願には、十方世界、無量諸佛、不悉咨嗟、稱我名者、不取正覺とちかひたまへり。願成就の文には、よろづの佛にほめられよろこびたまふとみえたり。すこ

補處—一生補處の略、其一生を過ぐれば佛處を補なふをいふ

土へ往生して、大涅槃のさとりをひらかんこと、佛恩よく〳〵御案ともさふらふべし。これさらに性信房親鸞がはからひまふすにはあらず候。ゆめ〳〵。

建長七歳乙卯十月三日　　愚禿親鸞八十三歳書之

此御書者、自性信聖之遺跡、以聖人御自筆之本、寫與彼門弟中云云。

信心をえたる人は、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに、等正覺の位と申なり。大無量壽經には、攝取不捨の利益にさだまるを正定聚となづけ、無量壽如來會には、等正覺とときたまへり。その名こそかはりたれども、正定聚等正覺は、ひとつこゝろひとつくらゐなり。等正覺とまふすくらゐは、補處の彌勒とおなじくらゐなり。彌勒とおなじく、このたび無上覺にいたるべきゆへに、彌勒とおなじとときたまへり。さて大經には次如彌勒とはまふすなり。彌勒はすでに佛にちかくましませば、彌勒佛と諸宗のならひはまふすなり。しかれば彌勒におなじくらゐなれば、正定聚の人は如來とひとしとも申なり。淨土の眞實信心の人は、この身こそあさましき不淨造惡の身なれども、心はすでに如來とひとしければ、如來とひとしとまふすこともあるべしとしらせたまへ。彌

金剛心—他力の信心の堅固なるをいふ

釋迦彌陀十方の諸佛みなおなじ御こゝろにて、本願念佛の衆生には、かげのかたちにそへるがごとくして、はなれたまはずとあかせり。しかればこの信心の人を、釋迦如來はわがしたしきともなりとよろこびまします。この信心の人を眞の佛弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は攝取してすてたまはざれば、金剛心をえたる人とまふすなり。この人を、上々人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人ともまふすなり。この人は正定聚のくらゐにさだまれるなりとしるべし。しかれば彌勒佛とひとしき人とのたまへり。これは眞實信心をえたるゆへに、かならず眞實の報土に往生するなりとしるべし。この信心をうることは、釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるべし。しかれば諸佛の御をしへをそしることなし。餘の善根を行ずる人をそしることなし。この念佛する人をにくみそしる人をも、にくみそしることあるべからず、あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべしとこそ、聖人はおほせごとありしか、あなかしこ、あなかしこ。佛恩のふかきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御ちかひのなかに、第十九第二十の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。佛恩のふかきことそのきはもなし。いかにいはんや眞實の報

なしとなり。しかればわがみのわるければ、いかでか如來むかへたまはんとおもふべからず。凡夫はもとより煩惱具足したるゆへに、わるきものとおもふべし。またわがこゝろよければ、往生すべしとおもふべからず。自力の御はからひにては、眞實の報土へむまるべからざるなり。行者のをの〳〵の自力のはからひにては、懈慢邊地の往生、胎生疑城の淨土までぞ、往生せらるゝことにてあるべきとぞうけたまはりたりし。第十八の本願成就のゆへに、阿彌陀如來とならせたまひて、不可思議の利益きはまりましまさぬ御かたちを、天親菩薩は盡十方無礙光如來とあらはしたまへり。このゆへによきあしき人をきらはず、煩惱のこゝろをえらばずへだてずして、往生はかならずするなりとしるべしとなり。しかれば惠心院の和尙の往生要集には、本願の念佛を信樂するありさまをあらはせるには、行住坐臥をえらばず、時處諸緣をきらはずとおほせられたり。眞實の信心をえたるひとは、攝取のひかりにおさめとられまいらせたりと、たしかにあらはせり。しかれば無明煩惱を具して、安養淨土に往生すれば、すなはち無上佛果にいたると、釋迦如來ときたまへり。しかるに五濁惡世のわれら、釋迦一佛のみことを信受せんことありがたかるべしとて、十方恒沙の諸佛證人とならせたまふと、善導和尙は釋したまへり。

善は方便假門なり。淨土眞宗は大乘の中の至極なり。方便假門の中に、また大小權實の敎あり。釋迦如來の御善知識は一百一十人なり、華嚴經にみえたり。

南無阿彌陀佛

建長三歳辛亥閏九月廿日　　愚禿親鸞七十九歳

かさまの念佛者のうかゞひとはれたること。それ淨土眞宗のこゝろは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家、淨土の祖師のおほせられたることなり。まづ自力とまふすことは、行者のをの〳〵の緣にしたがひて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのこゝろをもて、身口意のみだれごころをつくろひ、めでたうしなして、淨土へ往生せんとおもふを自力とまふすなり。また他力とまふすことは、彌陀如來の御ちかひのなかに、選擇攝取したまへる、第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力とまふすなり。如來の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき。義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆへに、さらに義

邊地懈慢界―化土のこと

の自力の行人は、來迎をまたずしては、邊地胎生懈慢界までもむまるべからず。このゆへに第十九の誓願に、もろ〳〵の善をして、淨土に廻向して、往生せんとねがふ人の臨終には、われ現じてむかへんとちかひたまへり。臨終をまつことと、來迎往生をたのむといふことは、この定心散心の行者のいふことなり。選擇本願は有念にあらず、無念にあらず、有念はすなはち色形をおもふにつきていふことなり。無念といふは、形をこゝろにかけず、色をこゝろにおもはずして念もなきをいふなり。これみな聖道のをしへなり。聖道といふは、すでに佛になりたまへる人の、われらがこゝろをすゝめんがために、佛心宗、眞言宗、法華宗、華嚴宗、三論宗等の大乘至極の敎なり。佛心宗といふは、この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗、成實宗、俱舍宗等の權敎小乘等の敎なり。これみな聖道門なり。權敎といふはすなはちすでに佛になりたまへる佛菩薩の、かりにさま〴〵の形をあらはして、すゝめたまふがゆへに權といふなり。淨土宗にまた有念あり無念あり。有念は散善の義、無念は定善の義なり。淨土の無念は聖道の無念にはにず。またこの聖道の無念のなかにまた有念あり、よく〳〵とふべし。淨土宗のなかに眞あり假あり。眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり。定散二

來迎―命終のとき佛菩薩が其のまへに現はれて淨土に迎へとる事

末燈鈔
（本願寺親鸞大師御己證幷邊州所々御消息等類聚鈔）

有念無念事

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし、いまだ眞實の信心をえざるがゆへなり。また十惡五逆の罪人を、はじめて善知識にあふて、すゝめらるゝにとりていふことなり。眞實信心の行人は、攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終をまつことなし、來迎をたのむことなし。信心のさだまるとき、往生またさだまるなり。來迎の儀式をまたず。正念といふは、本弘誓願の信樂さだまるをいふなり。この信心をうるゆへに、かならず無上涅槃にいたるなり。この信心を一心といふ、この一心を金剛心といふ、この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。又正念といふにつきて二あり。一には定心の行人の正念、二には散心の行人の正念あるべし。この二の正念は、他力のなかの自力の正念なり。定散の善は、諸行往生のことばにおさまるなり、この善は他力のなかの自力の善なり。こ

すゝめたまへるなり。一念に十八十億劫のつみをけすまじきにはあらねども、五逆のつみのおもきほどをしらせんがためなり。十念といふは、たゞ口に十返をとなふべしとなり、しかれば選擇本願には、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺とまふすは、彌陀の本願には下至といへるは、下は上に對して、とこゑまでの衆生かならず往生すとしらせたまへるなり。念と聲とはひとつこゝろなり。念をはなれたる聲なし、聲をはなれたる念なしとしるべし。この文どものこゝろは、おもふほどはまふさず、よからんひとにたづぬべし。ふかきことはこれにても、はからはせたまふべし。

南無阿彌陀佛

ゐなかのひと〴〵の、文字のこゝろもしらぬ、あさましき愚癡きはまりなきゆへに、やすくこゝろへさせんとて、おなじことをたび〳〵とりかへし〳〵、かきつけたり。こゝろあらんひとは、おかしくおもふべし、あざけりをなすべし。しかれどもおほかたのそしりをかへりみず、ひとすぢにおろかなるものをこゝろえさせんとて、しるせるなり。

正嘉元歳丁巳八月十九日

愚禿親鸞八十五歳書之

きひとをきらはずとなり。このやうはかみにくはしくあかせり、よくみるべし。乃至十念若不生者不取正覺といふは、選擇本願の文なり。この文のこゝろは、乃至十念のちかひの名號をとなへんひと、もしわがくににむまれずば、佛にならじとちかひたまへるなり。乃至は、かみしも、おほきすくなき、ちかきとおき、ひさしき、みなおさむることばなり。多念にこゝろをとゞめ、一念にとゞまるこゝろを、やめんがために、未來の衆生をあはれみて、法藏菩薩かねて願じまします御ちかひなり、よく／＼こゝろうべし。慶樂すべきなり。非權非實といふは、法華宗のおしへなり、淨土眞宗のこゝろにあらず。聖道家のこゝろなり。易行道のこゝろにあらず。かの宗のひとにたづぬべし。汝若不能念といふは、五逆十惡の罪人、不淨說法のもの、やまひのくるしみにとぢられて、こゝろに彌陀を稱念したてまつらずば、たゞ口に南無阿彌陀佛ととなへよと、すゝめたまへるみのりなり。これは口稱を本願とちかひたまへるをあらはさんとなり。應稱無量壽佛とのたまへるは、このこゝろなり。應稱はとなふべしとなり。具足十念、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫、生死之罪といふは、五逆の罪人は、その身につみをもてること、十八十億劫のつみをもてるゆへに、十念南無阿彌陀佛ととなふべしと、

淨土をねがふひとは、あらはにかしこきすがた、善人のかたちを、ふるまはざれ、精進なるすがたをしめすことなかれとなり。そのゆへは内懐虚假なればなり。内はうちといふ、こゝろのうちに煩惱を具せるゆへに、虚なり假なり。虚はむなしく實ならず、假ばはかりにして、眞ならず。しかればいまこの世を如來のみのりに、末法惡世とさだめたまへるゆへは、一切有情まことのこゝろなくして、師長を輕慢し、父母に孝せず、朋友に信なくして、惡をのみこのむゆへに、世間出世みな心口各異言念無實なりとおしへたまへり。心口各異といふは、こゝろとくちにいふこと、みなおの〳〵ことなり。言念無實といふは、ことばとこゝろのうちと、實なしといふなり。實はまことゝいふことばなり。この世のひとは、無實のこゝろのみにして、淨土をねがふひとは、いつはりへつらひのこゝろのみなりときこへたり。世をすつるも、名のこゝろ利のこゝろをさきとするゆへなり。しかれば、善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のこゝろもなし。懈怠のこゝろのみにして、うちはむなしくいつはり、へつろふこゝろのみつねにして、まことなるこゝろなき身としるべし、斟酌すべしといふは、ことのありさまにしたがひて、はからふべしといふこゝろなり。不簡破戒罪根深といふは、もろ〳〵の戒をやぶり、つみふか

胎生邊地—淨土中の化土

此三心といふは、みつのこゝろを具すべしとなり。必得往生といふは、必はかならずといふ、得はうるといふ、うるといふは往生をうるとなり。若少一心といふは、若はもしといふ、ごとしといふ。少はかくるといふ、すくなしといふ。一心かけぬれば、むまるゝものなしとなり。一心かくるといふは、信心のかくるなり。信心かくるといふは、本願眞實の三信心のかくるなり。觀經の三心をえてのちに、大經の三信心をうるを、一心うるとはいふなり。このゆへに大經の三信をえざるを、一心かくるといふなり。この一心かけぬれば、實報土にむまれずとなり。觀經の三心は、定機散機の自力の心なり。定散の二善を廻して、大經の三信をえんとねがふ、方便の深心と至誠心としるべし。眞實の三信心をえざれば、實の報土にむまれず。眞の報土にむまれざれば、即不得生といふなり。卽はすなはちといふ。不得生は、むまるゝことをえずといふなり。定機散機のひと、雜修して三信心かけたるゆへに、多生曠劫をへて、三信心をえてのちに、むまるべきゆへに、すなはちむまれずといふなり。もし胎生邊地にむまれても、五百歳をへ、あるひは億千萬衆のなかに、ときにまれに一人まことの報土にはすゝむとみへたり。三信心えんことを、よく／＼こゝろえねがふべきなり。不得外現賢善精進之相といふは、

芬陀利華—梵音
白蓮華

こぶこゝろたえずして、憶念つねなるなり。踊躍するなり。踊は天におどるといふ。躍は地におどるといふ。よろこぶこゝろの、きはまりなきかたちをあらはすなり。信心をえたるひとは、芬陀利華にたとへたまへり。この信心をえがたきことを、大經には、若聞斯經、信樂受持、難中之難、無過此難とおしへたまへり。小經には、極難信法とみへたり。この文のこゝろは、この經をきゝて信ずること、かたきがなかにかたし。これにすぎてかたきことなしとなり。釋迦牟尼如來、五濁惡世にいでて、この難信の法を行じて、無上涅槃にいたれりと、ときたまふ。さてこの智慧の名號を、濁惡の衆生にあたへたまへり。十方諸佛の證誠、恒沙如來の護念、ひとへに眞實信心のひとのためなり。釋迦は慈父、彌陀は悲母、われらがちゝはゝとして、信心をおしへたまへりとしるべきなり。過去久遠に、三恒河沙の諸佛の、世にいでたまひしみもとにして、自力の大菩提心をおこしき。恒沙の善根を修せしめしによりて、いま大願業力にまふあふことをえたり。他力の三信心をえたらんひとは、ゆめ〳〵餘の善をそしり、餘の佛聖をいやしふすることなかれとなり。具三心者、必生彼國といふは、三心を具すれば、かならずかのくににむまるとなり。しかれば具此三心、必得往生也、若少一心、卽不得生とのたまへり。具

念佛往生の本願の三信心—至心信樂欲生なり
觀經の三心—至心、發願、欲生
願作佛心—佛にならんと欲する心

專は、一行を修すべしとなり。復はまたといふ、かさぬといふ。しかればまた專といふは、一心なれとなり。一行一心をもはらなれとなり。專は一といふことばなり、ともかくもうつるこゝろなきを、專といふなり。この一行一心なるひとを、彌陀攝取して、すてたまはざれば、阿彌陀となづけたてまつると、光明寺の和尚はのたまへり。この一心は、橫超の信心なり。橫はよこさまといふ。超はこえてといふ。よろづの法にすぐれて、すみやかにとく、生死の大海をこえて、無上覺にいたるゆへに、超とまふすなり。すなはち如來大悲、誓願力なるがゆへなり。この信心は、攝取のゆへに、金剛となる。これは念佛往生の本願の三信心なり、觀經の三心にはあらず。この眞實信心を、世親菩薩は願作佛心とのたまへり。これ淨土の大菩提心なり。しかれば、この願作佛心は、すなはち度衆生心なり。この度衆生心とまふすは、すなはち衆生をして、生死の大海をわたすこゝろなり。この信樂は衆生をして、無上大涅槃にいたらしむるこゝろなり。すなはち大慈大悲心なり。この信心佛性なり。すなはち如來なり。この信心をうるを慶喜といふ。慶喜するひとは、諸佛ひとしきひととなづく、慶はうべきことをえて、のちによろこぶこゝろなり。信心をえてのちによろこぶこゝろなり。喜はこゝろのうちに、つねによろ

應化―衆生の機類に應じて示現せる佛身及び機に應じ形を變へて現はれたる身をいふ

有情―衆生といふに同じ

礙の智慧光をはなたしめたまふゆへに、盡十方無礙光佛とまふす。ひかりの御かたちにて、いろもましまさず、かたちもましまさず。すなはち法性法身におなじくして、無明のやみをはらひ、惡業にさへられず、このゆへに無礙光とまふすなり。無礙は有情の惡業煩惱にさへられずとなり。しかれば阿彌陀佛は光明なり。光明は智慧のかたちなりとしるべし。隨緣雜善恐難生といふは、隨緣は衆生のおの〳〵の緣にしたがひて、もろもろの善を修するを、極樂に廻向するなり。すなはち八萬四千の法門なり。これはみな自力の善根なるゆへに、實報土にむまれずときらはるゝゆへに、恐難生といへり。恐はおそるといふ。實報土に雜善自力の善むまるといふことをおそるゝなり。難生はむまれがたしとなり。故使如來選要法といふは、釋迦如來よろづの善のなかより、名號をえらびとりて、五濁惡時惡世界惡衆生邪見無信のものにあたへたまへるなりとしるべし。これを選といふ、ひろくえらぶといふこゝろなり。要はもはらといふ、ちぎるといふなり。法といふは名號なり。敎念彌陀專復專といふは、敎はおしふといふ、のりといふ、釋尊の敎勅なり。念は心におもひさだめて、ともかくもはたらかぬこゝろなり。すなはち選擇本願の名號を一向專修なれとおしへたまふみことなり。專復專といふは、はじめの

實相—又は法相、ありのまゝのすがたなり

法性—諸法即ち一切萬物の體性なり、眞如のこと

法性法身—佛菩薩が眞如法性を證得して本有の理體を顯したる無色無形の法身

方便法身—法性眞如より形を現じて衆生を利益する佛身

報身如來—因位の本願に報ひて願はれたまへる萬德圓滿の佛身なり

くはしくまふすにあたはず、おろ〳〵その名をあらはすべし。涅槃をば、滅度といふ、無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ。佛性すなはち如來なり。この如來、微塵世界にみちみちたまへり。すなはち一切群生海のこゝろなり。草木國土こと〴〵く成佛すととけり。この一切有情の心に、方便法身の誓願を信樂するがゆへに、この信心すなはち佛性なり。この佛性すなはち法性なり。法性すなはち法身なり。しかれば佛について二種の法身まします。ひとつには法性法身とまふす。ふたつには方便法身とまふす。法性法身とまふすは、いろもなし、かたちもましまさず。しかればこゝろもおよばず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身とまふす。その御すがたに、法藏比丘となりたまひて、不可思議の四十八願を、おこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに、光明無量の本願、壽命無量の弘誓をあらはしたまへる御かたちを、世親菩薩は、盡十方無礙光如來となづけたてまつりたまへり。この如來すなはち、誓願の業因にむくひたまひて、報身如來とまふす。すなはち阿彌陀如來とまふす。報といふは、たねにむくひたるゆへなり。この報身より、應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無

無爲―爲作造作をはなれたるに名づく

こがねにかへなさしむと、たとへたまへるなり。あきびと獵師などは、いしかはらつぶてのごとくなるを、如來攝取のひかりにおさめとりたまひて、すてたまはず。これひとへに、まことの信心のゆへなればなりとしるべし。攝取のひかりとまうすは、無礙光佛の御こゝろのうちに、おさめとりたまふゆへに、金剛の信心とまうすなり。文のこゝろは、おもふほどはまふしあらはしさふらはねども、あら〱まふすなり。ふかきことは、よからんひとにもとはせたまふべし。この文は慈愍三藏とまふす天竺の聖人の釋なり。震旦には慧日三藏とまふすなり。

極樂無爲涅槃界　隨緣雜善恐難生
故使如來選要法　敎念彌陀專復專

極樂無爲涅槃界といふは、極樂とまふすは、かの安樂淨土なり。よろづのたのしみつねにして、くるしみまじはらざるなり。かのくにをば安養といへり。曇鸞和尚は、ほめたてまつりて、安養とまふすとのたまへり。また論には、蓮華藏世界といへり。無爲ともいへり。涅槃界といふは、無明のまどひをひるがへして、無上覺をさとるなり。界はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとしるべし。涅槃とまふすに、その名無量なり。

おさめとりたまふゆへに、金剛の信心となるなり。このゆへに多念佛とまふすなり。多は大のこゝろなり、勝のこゝろなり、増上のこゝろなり。大はおほきなり。勝はすぐれたり、よろづの善にすぐれたるなり。これすなはち他力本願のゆへなり。自力のこゝろをすつといふは、やう〳〵さま〳〵大小の聖人、善悪の凡夫の、みづからが身をよしとおもふこゝろをすて、身をたのまず、あしきこゝろをさかしくかへりみず、またひとをあしよしとおもふこゝろをすてゝ、ひとすぢに具縛の凡夫、屠沽の下類、無礙光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛といふは、よろづの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、惱はこゝろをなやますといふ。屠はよろづのいきたるものをころしほふるもの、これは獵師といふものなり。沽はよろづのものを、うりかふものなり。これはあきびとなり。これらを下類といふなり。かやうのあしきひと、獵師さま〳〵のものは、みないしかはら、つぶてのごとくなるわれらなり。能令瓦礫變成金といふは、能はよくといふ。令はせしむといふ。瓦はかはらといふ。礫はつぶてといふ。變成金、變成はかへなすといふ、金はこがねといふ。如來の本願を信ずれば、かはらつぶてのごとくなるわれらを、

る圓頓戒のこと、此の戒を一たび受得して永く犯失せざるを金剛の堅固なるにたとふ
三聚淨戒―聚は集の義、一切の大乘の戒を攝する清淨の戒なり攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒をいふ
梵網―經名なり
闡提―梵語、斷善根と譯す

戒等、すべて道俗の戒品、これらをたもつを持といふ。これらの戒品をやぶるを破といふなり。かやうのさま〲の大小の戒品をたもてるいみじきひと〲も、他力眞實の信心をえてのちに、眞實の報土には往生をとぐるなり。みづからのおの〱の戒善、おのの自力の信、自力の善にては、實の報の淨土にはむまれずとしるべし。不簡破戒罪根深といふは、破戒はかみにあらはすところの、よろづの道俗の戒品をうけて、やぶりすてたるもの、これらをきらはずとなり。罪根深といふは、十惡五逆の惡人、謗法闡提の罪人、おほよそ善根すくなきもの、惡業おほきもの、善心あさきもの、惡心ふかきもの、かやうのあさましき、さま〲のつみふかきひとを、深といふ、ふかしといふことばなり。すべてよきひと、あしきひと、たふときひと、いやしきひと、無礙光佛の御ちかひには、えらばずこれをみちびきたまふを、さきとしむねとするなり。眞實信心をうれば、實報土にむまるとおしへたまへるを、淨土眞宗とすとしるべし。總迎來といふは、すべてみな眞實信樂あるものを、淨土へむかへてかへらしむとなり。但使廻心多念佛といふは、但使廻心は、ひとへに廻心せしめよといふことばなり。廻心といふは、自力の心をひるがへしすつるをいふなり。實報土にむまるゝひとは、かならず無礙光佛の心中に

一心金剛法戒―天台等にて傳ふ

はせり。憶念といふは、信心まことなるひとは、本願をつねにおもひいづるこゝろの、たえずつねなるなり。總迎來といふは、總はふさねてといふ、すべてみなといふこゝろなり。迎はむかふるといふ、まつといふ、他力をあらはすこゝろなり。來はかへるといふ、きたるといふ、法性のみやこへむかへて、かへらしむとなり。法性のみやこより、衆生利益のために、娑婆界にきたりたまふゆへに、來をきたるといふなり。經には從如來生とのたまへり。從如といふは、眞如よりとまふす。來生といふは、きたり生ずといふなり。不簡貧窮將富貴といふは、不簡はえらばずといふ、きらはぬこゝろなり。貧窮はまづしくたしなきなり。將はまさにといふ、もてといふ、ゐてゆくといふ。富貴はとめるといふ、よきひとといふ。これらをまさにもてえらばず、淨土へゐてゆくとなり。不簡下智與高才といふは、下智は、智慧あさく、せばく、すくなきものなり。高才は、才學ひろきもの、これらをえらばずとなり。不簡多聞持淨戒といふは、多聞は、聖教をひろくおほくきゝ信ずるなり。持はたもつといふ。たもつといふは、ならひまなぶこゝろをうしなはず、ちらさぬなり。淨戒は大乘小乘のもろ〳〵の戒品、五戒、十善戒、小乘の具足戒、三千の威儀、六萬の齊行、大乘の一心金剛法戒、三聚淨戒、梵網の五十八

善導法照禪師とまふす聖人の御釋なり。この和尚をば法道和尚と、慈覺大師はのたまへり。またつたへて廬山の彌陀和尚ともまふす。淨業和尚ともまふす。唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり。このゆへに後善導とまふすなり。

彼佛因中立弘誓　聞名念我總迎來
不簡貧窮將富貴　不簡下智與高才
不簡多聞持淨戒　不簡破戒罪根深
但使迴心多念佛　能令瓦礫變成金

彼佛因中立弘誓、このこゝろは彼はかのといふ、佛は阿彌陀佛なり。因中は法藏菩薩とまふしゝときなり。立弘誓は、立はたつといふ、なるといふ。弘はひろしといふ、ひろまるといふ。誓はちかひといふ。法藏比丘、超世無上の、ちかひをおこして、ひろめたまふとなり。超世は餘の佛の御ちかひに、すぐれたまへりとなり。超はこえたりといふ、うへなしといふ。如來、弘誓をおこしたまへるやうは、この唯信鈔にくはしくあらはせり。聞名念我といふは、聞はきくといふ、信心をあらはすみのりなり。名は如來のちかひの名號なり。念我とまふすは、このみなを憶念せよとなり。諸佛稱名の悲願にあら

するを普賢の徳といふ

等正覺―佛のさとりに等しき位をいふ、菩薩の最上位なり他力眞實の信心を獲たる人は此位にあり

補處―一生補處の略、即ちこの一生を過ぐれば佛處を補ふこと

證誠護念―證誠は諸佛誠實の言を以て證據に立つこと、護念とは佛の大悲心を以て念佛行者を護ること

心をきゝて、一念もうたがふこゝろなければ、眞實信心といふ。この信心をうれば、等正覺にいたりて、補處の彌勒におなじくて、無上覺をなるべしといへり。すなはち正定聚のくらゐにさだまるなり。このゆへに信心やぶれず、かたぶかず、みだれぬこと金剛のごとくなり。しかれば金剛の信心といふなり。大經には願生彼國、即得往生、住不退轉とのたまへり。願生彼國は、かのくににうまれんとねがふべきなり。即得往生は信心をうれば、すなはち往生すといふ。すなはち往生すといふは、不退轉に住するをいふ。不退轉に住すといふは、すなはち正定聚のくらゐにさだまるなり。成等正覺ともいへり。これを即得往生といふなり。即はすなはちといふ、すなはちといふは、ときをへだてず、ひをへだてぬをいふなり。おほよそ十方世界にあまねくひろまることは、法藏菩薩の四十八の大願のなかに、第十七の願に、十方無量の諸佛に、わがなを、ほめられんと、ちかひたまへる、一乘大海の誓願を、成就したまへるによりてなり。阿彌陀經の證誠護念のありさまにてあきらかなり。證誠護念の御こゝろは、大經にもあらはれたり。すでに稱名の本願は、選擇の正因たること、悲願にあらはれたり。この文のこゝろは、おもふほどはまふさず。これにてをしはからせたまふべし。この文は後

慈父悲母—釋迦を父にたとへ、彌陀を母にたとふ

法性—諸法の體性即ち眞如のこと

法身—眞如法性の理佛なり

無爲—爲作造作をはなれたる意涅槃の異名なり

普賢の德—佛の慈悲を司る普賢菩薩の行德といふことより弘く衆生濟度のため此の世界へ還來

とりて、まほらせたまふによりて、行人のはからひにあらず、金剛の信心となるゆへに、正定聚のくらゐに住すといふ。このこゝろなれば、憶念の心自然におこるなり。この信心のおこることも、釋迦の慈父、彌陀の悲母の方便によりて、無上の信心を發起せしめたまふとみへたり。これ自然の利益なりとしるべし。來迎といふは、來は淨土にきたらしむといふ、これすなはち若不生者のちかひをあらはすみのりなり。穢土をすてゝ眞實の報土にきたらしむとなり。すなはち他力をあらはすみことなり。また來はかへるといふ。かへるといふは、願海にいりぬるによりて、かならず大涅槃にいたるを、法性のみやこへかへるとまふすなり。法性のみやことまふすは、法身といふ如來のさとりを、自然にひらくなり。さとりひらくときを、法性のみやこへかへるとまふすなり。これを眞如實相を證すともいふ。無爲法身ともいふ。滅度にいたるともいふ。法性の常樂を證すともいふ。無上覺にいたるともまふすなり。このさとりをうれば、すなはち大慈大悲きはまりて、生死海にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを、普賢の德に歸せしむといふなり。この利益におもむくを來といふ。これを法性のみやこへ、かへるといふなり。迎といふは、むかへといふ、まつといふこゝろなり。選擇本願の尊號、無上智慧の信

り。觀音勢至自來迎といふは、この不可思議の智慧光佛のみなを、信受して憶念すれば、觀音勢至は、かならずかげのかたちにそへるがごとくなり。この無礙光佛は觀音とあらはれ、勢至としめす。ある經には、觀音を寶應聲菩薩となづけて、日天子としめす。これはよろづの衆生の無明黑闇をはらはしむ。勢至を寶吉祥菩薩となづけて、月天子とあらはれ、生死の長夜をてらして、智慧をひからしむるなり。自來迎といふは、自はみづからといふ、彌陀無數の化佛、無數の化觀世音、化大勢至等の無量無數の聖衆、みづからつねにときをきらはず、ところをへだてず、眞實信心をえたるひとにそひたまひて、まほりたまふゆへに、みづからとまふすなり。また自はおのづからといふ。おのづからといふは、自然といふ。自然といふは、しからしむといふ。しからしむといふは、行者はじめてともかくもはからはざるに、過去、今生、未來の一切のつみを善に轉じかへなすといふなり。轉ずといふは、つみをけしうしなはずして、善になすなり。よろづのみづ大海にいりぬれば、すなはち、うしほとなるがごとし。彌陀の願力を信ずるゆへに、如來の功德をえしむるがゆへに、しからしむといふ。はじめて功德をえんとはからはざれば、自然といふなり。誓願眞實の信心をえたるひとは、攝取不捨の御ちかひにおさめ

みな―御名即ち南無阿彌陀佛

陀佛なり。尊はたふとくすぐれたりとなり、號は佛になりたまふてのちの御名をまふす。名はいまだ佛になりたまはぬときの御名をまふすなり。この如來の尊號は、不可稱不可說不可思議にましますゆへに、一切衆生をして、無上大般涅槃にいたらしめたまふ、大慈大悲のちかひの御名なり。この佛の御名は、よろづの如來の名號にすぐれたまへり。これすなはち誓願なるがゆへなり。甚分明といふは、甚ははなはだといふ、すぐれたりといふこゝろなり。分はわかつといふ、よろづの衆生とわかつこゝろなり。明はあきらかなりといふ、十方一切衆生をことごとくわかち、たすけみちびきたまふことすぐれたまへりとなり。十方世界普流行といふは、普はあまねくひろくきはなしといふ。流行は十方微塵世界にあまねくひろまりて、佛敎をすゝめ行ぜしめたまふなり。しかれば大乘の聖人、小乘の聖人、善人惡人、一切の凡夫、みなともに自力の智慧をもては、大涅槃にいたることなければ、無礙光佛の御かたちは、智慧のひかりにてましますゆへに、この如來の智願海にすゝめいれたまふなり。一切諸佛の智慧をあつめたまへる御かたちなり。光明は智慧なりとしるへし。但有稱名皆得往といふは、但有はひとへにみなをとなふるひとのみ、みな極樂淨土に往生すとなり。かるがゆへに稱名皆得往とのたまへるな

無礙光如來—無礙の光明を放ちて一切衆生を救ひたまふ佛即ち阿彌陀佛のこと

唯信鈔文意

唯信鈔といふは、唯はたゞこのことひとつといふ、ふたつならぶことを、きらふことばなり。また唯は、ひとりといふこゝろなり。信はうたがふこゝろなきなり。すなはちこれ眞實の信心なり。虚假はなれたるこゝろなり。虚はむなしといふ、假はかりなりといふ。虚は實ならぬをいふ、假は眞ならぬをいふなり。本願他力をたのみて、自力をすつるをいふなり。これを唯信といふ。鈔はすぐれたることをぬきいだしあつむることばなり。このゆへに唯信鈔といふなり。また唯信は、これ他力の信心のほかに、餘のことならはずとなり。すなはち本弘誓願なるがゆへなればなり。

如來尊號甚分明　十方世界普流行
但有稱名皆得往　觀音勢至自來迎

如來尊號甚分明、このこゝろは如來とまふすは無礙光如來なり。尊號といふは南無阿彌

すくこゝろえさせむとて、おなじことをとりかへしく〳〵かきつけたり。こゝろあらむひとは、おかしくおもふべし、あざけりをなすべし。しかれども、ひとのそしりをかへりみず、ひとすぢにおろかなるひと〴〵を、こゝろえやすからんと、しるせるなり。

正嘉元歳丁巳八月六日書寫之

愚禿親鸞 八十五歳

進み行かんと思ふ、忽ち東岸に聲あり。汝此の道をすゝめ必ず死の難なからんと、又西岸に人あり、汝一心正念にして直に來れ、我よく汝を護らんと喚ぶ、此の人疑ひなく西に進みて永く諸難を免れたりとの喩、水火は衆生の貪瞋にたとへ、東岸の聲は釋尊の遺教、西岸の聲は極樂の阿彌陀佛の救ひにたとふ

本弘誓願及稱名號といふは、如來のちかひを信知すとまうすこゝろなり。信といふは金剛心なり。知といふはしるといふ。煩惱惡業の衆生をみちびきたまふとしるなり。また知といふは觀なり。こゝろにうかべおもふを觀といふ。こゝろにうかべしるを知といふなり。及稱名號といふは、及はをよぶといふ。をよぶといふは、かねたるこゝろなり。稱は御なをとなふるとなり、また稱は、はかりといふこゝろなり。はかりといふは、もののほどをさだむることなり。名號を稱すること、とこゑひとこゑ、きくひと、うたがふこゝろ一念もなければ、實報土へむまるとまうすこゝろなり。また阿彌陀經の七日もしは一日、名號をとなふべしとなり。これは多念の證文なり。おもふやうにはまうしあらはさねども、これにて一念多念のあらそひあるまじきことは、をしはからせたまふべし。淨土眞宗のならひには、念佛往生とまうすなり。またく一念往生、多念往生とまうすことなし。これにてしらせたまふべし。

南無阿彌陀佛

ゐなかのひと〴〵の、文字のこゝろもしらず、あさましき愚癡きはまりなきゆへに、や

水火二河のたとへ—善導の釋中にあり、人あり西に向ひて進むに忽ち南に火の河北に水の河を見る、中間に幅せまき白道ありて水火交々來り犯す、加之群賊惡獸後より迫る其の人往くも還るも死を免れず寧ろこの白道を

世俗のならひにも、くにの王のくらゐにのぼるをば、卽位といふ。位といふは、くらゐといふ。これを東宮のくらゐにいるひとは、かならず王のくらゐにつくがごとく、正定聚のくらゐにつくは、東宮のくらゐのごとし。王にのぼるは卽位といふ、これはすなはち無上大涅槃にいたるをまうすなり。信心のひとは、正定聚にいたりて、かならず滅度にいたると、ちかひたまへるなり。これを致とすといふ。むねとすとまうすは、涅槃のさとりをひらくをむねとすとなり。凡夫といふは、無明煩惱われらがみにみち〳〵て、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこゝろ、おほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とゞまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。かかるあさましきわれら、願力の白道を、一分二分やう〳〵づつあゆみゆけば、無礙光佛のひかりの御こゝろにおさめとりたまふがゆへに、かならず安樂淨土へいたれば、彌陀如來とおなじく、かの正覺のはなに化生して、大般涅槃のさとりをひらかしむるを、むねとせしむべしとなり。これを致使凡夫念卽生とまうすなり。二河のたとへに、一分二分ゆくといふは、一年二年すぎゆくにたとへたるなり。諸佛出世の直說、如來成道の素懷は、凡夫は彌陀の本願を念ぜしめて、卽生するをむねとすべしとなり。今信知彌陀

はまうあふといふ。まうあふといふは、本願力を信ずるなり。無はなしといふ。空はむなしくといふ。過はすぐるといふ。者はひと〴〵といふ。むなしくすぐるひとなしといふは、信心あらんひと、むなしく生死にとゞまることなしとなり。能はよくといふ。令はせしむといふ、よしといふ。速はすみやかにといふ、ときことゝいふなり。滿はみつといふ。足はたりぬといふ。功德とまうすは名號なり。大寶海は、よろづの善根功德みちきはまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信ずるひとのこゝろのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大寶、そのみにみちみつがゆへに、大寶海とたとへたるなり。致使凡夫念卽生といふは、致はむねとすといふ。むねとすといふは、これを本とすといふことばなり。いたるといふ。いたるといふは、實報土にいたるとなり。使はせしむといふ。凡夫はすなはちわれらなり。本願力を信樂するをむねとすべしとなり。念は如來の御ちかひを、ふたごころなく信ずるをいふなり。卽はすなはちといふ。ときをへず、日をへだてず、正定聚のくらゐにさだまるを、卽生といふなり。生はむまるといふ。これを念卽生とまうすなり。また卽はつくといふ。つくといふは、くらゐにかならずのぼるべきみといふなり。

報身—因位の本願と修行とに酬報して成就したる萬德圓滿の佛身

り。一實眞如とまうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなはち法性なり。法性すなはち如來なり。寶海とまうすは、よろづの衆生をきらはず、さはりなくへだてず、みちびきたまふを、大海のみづの、へだてなきにたとへたまへるなり。この一如寶海よりかたちをあらはして、法藏菩薩となのりたまひて、無礙のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに、報身如來とまうすなり。これを盡十方無礙光佛となづけたてまつるなり。この如來を南無不可思議光佛ともまうすなり。この如來を方便法身とはまうすなり。方便とまうすは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまうすなり。すなはち阿彌陀佛なり。この如來は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光佛とまうすなり。この如來、十方微塵世界にみち〳〵たまへるがゆへに、無邊光佛とまうす。しかれば世親菩薩は盡十方無礙光如來となづけたてまつりたまへり。淨土論曰、觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海とのたまへり。この文のこゝろは、佛の本願力を觀ずるに、まうあふてむなしくすぐるひとなし。よくすみやかに功德の大寶海を滿足せしむとのたまへり。觀は願力をこゝろにうかべみるとまうす、またしるといふこゝろなり。遇

八萬四千の法門―衆生の煩惱大約八萬四千あるを以て、之を治すに八萬四千の法門あり。佛一代の教法の總稱
要門―弘願念佛に對して定散二善を要門といふ
定善散善―淨土和讃に出づ、息慮凝心を定といひ、廢惡修善を散といふ

すなり。所以はゆへといふことばなり。興出於世といふは、佛のよにいでたまふとまうすなり。欲はおほしめすとまうすなり。拯はすくふといふ。群萠はよろづの衆生といふ。惠はめぐむとまうす。眞實之利とまうすは、彌陀の誓願をまうすなり。しかれば、諸佛のよゝにいでたまふゆへは、彌陀の願力をときて、よろづの衆生をめぐみすくはんとおぼしめすを、本懐とせんとしたまふがゆへに、眞實之利とはまうすなり。しかれば、これを諸佛出世の直說とまうすなり。おほよそ八萬四千の法門は、みなこれ淨土の方便の善なり。これを要門といふ。これを假門となづけたり。この要門假門といふは、すなはち無量壽佛觀經一部にときたまへる、定善散善これなり。定善は十三觀なり。散善は三福九品の諸善なり。これみな淨土方便の要門なり。これを假門ともいふ。この要門假門より、もろもろの衆生をすゝめこしらへて、本願一乘圓融無礙、眞實功德大寶海にをしへすゝめいれたまふがゆへに、よろづの自力の善業をば、方便の門とまうすなり。いま一乘とまうすは本願なり。圓融とまうすは、よろづの功德善根みち〳〵てかくることなし。自在なるこゝろなり。無礙とまうすは、煩惱惡業にさへられず、やぶれぬをいふなり。眞實功德とまうすは名號なり。一實眞如の妙理圓滿せるがゆへに、大寶海にたとへたまふな

ぬなり。別といふは、ひとつなることを、ふたつにわかちなすことばなり。解はさとるといふ、とくといふことばなり。念佛をしながら、自力にさとりなすなり。かるがゆへに、別解といふなり。また助業をこのむもの、これすなはち自力をはげむひとなり。自力といふはわがみをたのみ、わがこゝろをたのむ、わがちからをはげみ、わがさま〴〵の善根をたのむひとなり。上盡一形といふは、上はかみといふ、すゝむといふ、のぼるといふ、いのちをはらんまでといふ。盡はつくるまでといふ。形はかたちといふ、あらはすといふ。念佛せんこと、いのちをはらんまでとなり。十念三念五念のものも、むかへたまふといふは、念佛の遍數によらざることをあらはすなり。直爲彌陀弘誓重といふは、直はたゞしきなり、如來の直說といふなり。諸佛のよにいでたまふ本意とまうすを、直說といふなり。爲はなすといふ、もちゐるといふ、さだまるといふ、かれといふ、これといふ、あふといふ。あふといふは、かたちといふこゝろなり。重はかさなるといふ、をもしといふ、あつしといふ。誓願の名號、これをもちゐる、さだめなしたまふこと、かさなれりとおもふべきことを、しらせんとなり。しかれば大經には、如來所以、興出於世、欲拯群萠、惠以眞實之利とのたまへり。この文のこゝろは、如來とまうすは、諸佛をまう

みな—名號のこと

弘誓—弘く一切衆生を救はんとの佛の誓願

聖道—佛教中の自力門

ごとく咨嗟してわが名を稱せずば、佛にならじとちかひたまへるなり。咨嗟とまうすは、よろづの佛にほめられたてまつるとまうす御ことなり。一心專念といふは、一心は金剛の信心なり。專念といふは、一向專修なり。一向は餘の善にうつらず、餘の佛を念ぜず、專修は本願のみなをふたごころなく、もはら修するなり。修はこゝろのさだまらぬをつくろひなをしをこなふなり。專はもはらといふ、一といふなり。もはらといふは、餘善他佛にうつるこゝろなきをいふなり。行住坐臥不問時節久近といふは、行はあるくなり。住はとゞまるなり。坐はゐるなり。臥はふすなり。不問はとはずといふ。時はときなり、十二時なり。節はときなり、十二月四季なり。久はひさしき、近はちかしとなり。ときをえらばざれば、不淨のときをへだてず、よろづのことをきらはざれば、不問といふなり。是名正定之業、順彼佛願故といふは、弘誓を信ずるを報土の業因とさだまるを、正定の業となづくといふ。佛の願にしたがふがゆへにとまうす文なり。一念多念のあらそひをなすひとをば、異學別解のひとゝまうすなり。異學といふは、聖道外道にをもむきて、餘行を修し、餘佛を念ず。吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは、外道なり。これらはひとへに自力をたのむものなり。別解は念佛をしながら、他力をたのま

易往易行—往き易き極樂淨土、行じ易き他力念佛の行

一念の證文なり。おもふほどはあらはしまうさず、これにてをしはからせたまふべきなり。

多念をひがごととおもふまじき事

本願の文に、乃至十念とちかひたまへり。すでに十念とちかひたまへるにてしるべし。一念にかぎらずといふことを、いはんや乃至とちかひたまへり。稱名の徧數さだまらずといふことを、この誓願はすなはち易往易行のみちをあらはし、大慈大悲のきはまりなきことをしめしたまふなり。阿彌陀經に、一日乃至七日名號をとなふべしと、釋迦如來ときをきたまへる御のりなり。この經は無問自說經とまうす。この經をときたまひしに、如來にとひたてまつる人もなし。これすなはち釋尊出世の本懷を、あらはさんとおぼしめすゆへに、無問自說とまうすなり。彌陀選擇の本願、十方諸佛の諸誠、諸佛出世の素懷、恒沙如來の護念は、諸佛咨嗟の御ちかひをあらはさんとなり。諸佛稱名の誓願、大經にのたまはく、設我得佛、十方世界、無量諸佛、不悉咨嗟、稱我名者、不取正覺と願じたまへり。この悲願のこゝろは、たとひわれ佛をえたらんに、十方世界無量の諸佛、こと

はうべきことをえてのちによろこぶこゝろなり。樂はたのしむこゝろなり。これは正定聚のくらゐをうるかたちをあらはすなり。乃至は稱名の徧數のさだまりなきことをあらはす。一念は功德のきはまり、一念に萬德ことごとくそなはる、よろづの善みなおさまるなり。當知此人といふは、信心のひとをあらはす御のりなり。爲得大利といふは、無上涅槃をさとるゆへに、則是具足無上功德とものたまへるなり。則といふは、すなはちといふ、のりとまうすことばなり。如來の本願を信じて、一念するに、かならずもとめざるに、無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益をうるなり。自然にさまざまのさとりを、すなはちひらく法則なり。法則といふは、はじめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあづかること、自然のありさまとまうすことを、しらしむるを法則とはいふなり。一念信心をうるひとのありさまの、自然なることをあらはすを、法則とはまうすなり。經に無諸邪聚及不定聚といふは、無はなしといふ、諸はよろづのことをいふことばなり。邪聚といふは、雜行雜修萬善諸行のひと、報土にはなければなりといふなり。及はをよぶといふ。不定聚は自力の念佛、疑惑の念佛の人は、報土にはなしといふなり。正定聚の人のみ、眞實報土にむまるればなり。この文どもはこれ

増上縁—すぐれたる強き縁の意

御のりなり。總不論照攝餘雜業行者といふは、總はみなといふなり。不論はいはずといふこゝろなり。照攝はてらしおさむと。餘の雜業といふは、もろ〳〵の善業なり。雜行を修し、雜修をこのむものをば、すべてみなてらしおさむといはず、まもらずとのたまへるなり。これすなはち本願の行者にあらざるゆへに、攝取の利益にあづからざるなりとしるべしとなり。このよにてまもらずとなり。此亦是現生護念といふは、このよにてまもらせたまふとなり。本願業力は、信心のひとの强縁なるがゆへに、増上縁とまうすなり。信心をうるをよろこぶ人をば、經には諸佛とひとしきひとゝときたまへり。首楞嚴院の源信和尙のたまはく、我亦在彼攝取之中、煩惱障眼雖不能見、大悲無倦常照我身と、この文のこゝろは、われまたかの攝取のなかにあれども、煩惱まなこをさへて、みたてまつるにあたはずといへども、大悲ものうきことなくして、つねにわがみをてらしたまふとのたまへるなり。其有得聞彼佛名號といふは、本願の名號を信ずべしと、釋尊ときたまへる御のりなり。歡喜踊躍乃至一念といふは、歡喜はうべきことをえてむずとさきだちて、かねてよろこぶこゝろなり。踊は天にをどるといふ、躍は地にをどるといふ、よろこぶこゝろのきはまりなきかたちなり。慶樂するありさまをあらはすなり。慶

波旬―梵音、殺者と譯す、魔王の名なり

佛衆生、彼佛心光、常照是人、攝護不捨、總不論照攝、餘雜業行者、此亦是現生、護念增上緣とのたまへり。この文のこゝろは、但有專念阿彌陀佛衆生といふは、ひとすぢに彌陀佛を信じたてまつるとまうす御ことなり。彼佛心光とまうすは、彼はかれとまうす。佛心光とまうすは、無礙光佛の御こゝろとまうすなり。常照是人といふは、常はつねなること、ひまなくたえずといふなり。照はてらすといふ、ときをきらはず、ところをへだてず、ひまなく眞實信心のひとをば、つねにてらしまもりたまふなり。かの佛心につねにひまなくまもりたまへば、彌陀佛をば不斷光佛とまうすなり。是人といふは、是は非に對することばなり。眞實信樂のひとをば、是人とまうす。虛假疑惑のものをば、非人といふ。非人といふは、ひとにあらずときらひ、わるきものといふなり。是人はよきひとゝまうす。攝護不捨とまうすは、攝はおさめとるといふ、護はところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらはず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは、異學異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさへられず、天魔波旬におかされず、惡鬼惡神なやますことなしとなり。不捨といふは、信心のひとを智慧光佛の御こゝろにおさめまもりて、心光のうちに、ときとしてすてたまはずと、しらしめんとまうす

分陀利華—梵音白蓮華と譯す

光明寺の和尚—眞宗七高僧の第五善導大師

のくにの清淨安樂なるをきゝて、剋念してむまれんとねがふひとと、またすでに往生をえたるひとも、すなはち正定聚にいるなり。これはこれかのくにの名字をきくに、さだめて佛事をなす、いづくんぞ思議すべきやとのたまへるなり。安樂淨土の不可稱不可說不可思議の德を、もとめずしらざるに、信ずる人にえしむとしるべしとなり。また王日休のいはく、念佛衆生便同彌勒といへり。念佛衆生は金剛の信心をえたる人なり。便はすなはちといふ、たよりといふ。信心の方便によりて、すなはち正定聚のくらゐに住せしめたまふがゆへにとなり。同はおなじきなりといふ。念佛の人は、無上涅槃にいたること、彌勒におなじきひとゝまうすなり。また經にのたまはく、若念佛者當知此人、是人中分陀利華とのたまへり。若念佛者とまうすは、もし念佛せんひとゝまうすなり。當知此人、是人中分陀利華といふは、まさにこのひとはこれ、人中の分陀利華なりとしるべしとなり。これは如來のみことに、分陀利華を念佛のひとにたとへたまへるなり。このはなは人中の上上華なり、好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なりとほめたまへり。光明寺の和尚の御釋には、念佛のひとをば、上上人、好人、妙好人、希有人、最勝人とほめたまへり。また現生護念の利益ををしへたまふには、但有專念、阿彌陀

行者とも退きては邪定の人ともなるべき不定の徒をいふ自力念佛の機なり
阿毘跋致—梵語なり不退轉と譯す
阿惟越致—阿毘跋致に同じ
妙覺—佛果を云ふ

さだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、等正覺をなるともとき、阿毗跋致にいたるとも、阿惟越致にいたるともときたまふ。卽時入必定ともまうすなり。この眞實信樂は、他力横超の金剛心なり。しかれば念佛のひとをば、大經には、次如彌勒とときたまへり。彌勒は竪の金剛心の菩薩なり。竪とまうすは、たてさまとまうすことばなり。これは聖道自力の難行道の人なり。横はよこさまにといふなり。超はこえてといふなり。これは佛の大願業力のふねに乘じぬれば、生死の大海をよこさまにこえて、眞實報土のきしにつくなり。次如彌勒とまうすは、次はちかしといふ、つぎにといふ。ちかしといふは、彌勒は大涅槃にいたりたまふべきひとなり。このゆへに彌勒のごとしとのたまへり。念佛信心の人も、大涅槃にちかづくとなり。つぎにといふは、釋迦佛のつぎに、五十六億七千萬歲をへて、妙覺のくらゐにいたりたまふべしとなり。如はごとしといふ。ごとしといふは、他力信樂のひとは、このよのうちにて不退のくらゐにのぼりて、かならず大般涅槃のさとりをひらかんこと、彌勒のごとしとなり。淨土論曰、經言、若人但聞彼國土、淸淨安樂、剋念願生、亦得往生、卽入正定聚、此是國土、名字爲佛事、安可思議とのたまへり。この文のこゝろは、もしひと、ひとへにか

定聚—詳しくは正定聚なり、正しく佛になると定まりたる輩、即ち他力念佛の人

法藏菩薩—阿彌陀佛因位の名

邪定聚—眞實報土の正因にあらざる雜善を修して淨土に往生せんとするもの

不定聚—邪に非ず正にあらず、進んでは眞實の

をもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。しかれば必至滅度の誓願を、大經にときたまはく、設我得佛、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺と願じたまへり。また經にのたまはく、若我成佛、國中有情、若不決定、成等正覺、證大涅槃者、不取菩提とちかひたまへり。この願成就を釋迦如來ときたまはく、其有衆生、生彼國者、皆悉住於、正定之聚、所以者何、彼佛國中、無諸邪聚、及不定聚とのたまへり。これらの文のこゝろは、たとひわれ佛をえたらんに、くにのうちの人天、定聚にも住して、かならず滅度にいたらずば、佛にならじとちかひたまへるこゝろなり。またのたまはく、もしわれ佛にならんに、くにのうちの有情、もし決定して等正覺をなりて、大涅槃を證せずば、佛にならじとちかひたまへるなり。かくのごとく法藏菩薩ちかひたまへるを、釋迦如來、五濁のわれらがために、ときたまへる文のこゝろは、それ衆生ありて、かのくににむまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆへはいかんとなれば、かの佛國のうちには、もろもろの邪定聚をよび不定聚はなければなりとのたまへり。この二尊の御のりをみたてまつるに、すなはち往生すとのたまへるは、正定聚のくらゐにさだまるを、不退轉に住すとはのたまへるなり。このくらゐに

名號をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をきゝて、うたがふこゝろなきを聞といふなり。またきくといふは、信心をあらはす御のりなり。信心歡喜、乃至一念といふは、信心は如來の御ちかひをきゝて、うたがふこゝろのなきなり。歡喜といふは、歡はみをよろこばしむるなり、喜はこゝろによろこばしむるなり。うべきことをえてむずと、かねてさきよりよろこぶこゝろなり。乃至は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねおさむることばなり。一念といふは、信心をうるときの、きはまりをあらはすことばなり。至心廻向といふは、至心は眞實といふことばなり。眞實は阿彌陀如來の御こゝろなり。廻向は本願の名號をもて、十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。願生彼國といふは、願生はよろづの衆生、本願の報土へむまれんとねがへとなり。彼國はかのくにといふ、安樂國ををしへたまへるなり。卽得往生といふは、卽はすなはちといふ、ときをへず日をもへだてぬなり。また卽はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得はうべきことをえたりといふ、眞實信心をうれば、すなはち無礙光佛の御こゝろのうちに、攝取してすてたまはざるなり。攝はおさめたまふ、取はむかへとるとまうすなり。おさめとりたまふとき、すなはちとき日

一念多念證文

一念をひがごとゝおもふまじき事

恒願一切臨終時、勝縁勝境悉現前といふは、恒はつねにといふ、願はねがふといふなり。いまつねにといふは、たえぬこゝろなり。おりにしたがふて、とき〴〵もねがへといふなり。いまつねにといふは、常の義にはあらず。常といふは、つねなることひまなかれといふこゝろなり。ときとしてたえず、ところとしてへだてずきらはぬを常といふなり。一切臨終時といふは、極樂をねがふよろづの衆生、いのちをはらんときまでといふことばなり。勝縁勝境といふは、佛をもみたてまつり、ひかりをもみ、異香をもかぎ、善知識のすゝめにもあはむとおもへとなり。悉現前といふは、さま〴〵のめでたきことども、めのまへにあらはれたまへとねがへとなり。無量壽經の中に、あるひは諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、卽得往生、住不退轉とときたまへり。諸有衆生といふは、十方のよろづの衆生とまうすこゝろなり。聞其名號といふは、本願の

とすとなり。義といふは行者のはからふこゝろなり、このゆへに自力といふなり。よくよくこゝろうべしと。

建長七歳乙卯六月二日

愚禿親鸞八十三歳書二寫之一

れら、無上大涅槃にいたるなりとしるべし。凡聖逆謗齊廻入といふは、小聖凡夫五逆謗法無戒闡提みな廻心して、眞實信心海に歸入しぬれば、衆水海にいりてひとつあぢわいとなるがごとしとなり。これを如衆水入海一味といふなり。攝取心光常照護といふは、無礙光佛の心光、つねにてらしまもりたまふゆへに、無明のやみはれ、生死のながき夜すでにあかつきとなりぬとしるべし。已能雖破無明闇といふは、このこゝろなり。信心をうればあかつきになりぬとしるべし。貪愛瞋憎之雲霧、常覆眞實信心天といふは、われらが貪愛瞋憎をくもきりにたとへたり。貪愛のくも瞋憎のきり、つねに信心の天をおほへるなりとしるべし。譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇といふは、日月のくもきりにおほはるれども、やみはれてくもきりのしたあかきがごとく、貪愛瞋憎のくもきりに信心はおほはるれども、往生にさはりあるべからずとなり。獲信見敬得大慶といふは、この信心をえて、おほきによろこびうやまふひとゝいふなり。卽横超截五惡趣といふは、信心をうれば、すなはち横に五惡趣をきるなりとしるべしとなり。横超といふは、横は如來の願力他力をまふすなり。超は生死の大海をやすくこえて、無上大涅槃のみやこにいるなりと、信心を淨土宗の正意としるなり。このこゝろをえつれば、他力は義なきを義

阿耨菩提―阿耨多羅三藐三菩提の略、梵音、譯して無上正遍智とす、佛の覺

成等覺―等覺を成ずるなり、菩薩の最上位にして、一段を上れば妙覺即ち佛果に至る、眞實信心の人は此の一生を過ぐれば佛果に至るなり

必至滅度の願―阿彌陀佛の四十八願中の第十一願、

闡提―梵音斷善根又は信不具足と譯す

の御おしへの恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報ずべしとなり。身をくだきても恩をむくふべしとなり。よく〳〵この和尚のこのおしへを御覽ずべしと。

愚禿親鸞正信偈にいはく、

本願名號正定業といふは、選擇本願の行なり。至心信樂願爲因といふは、彌陀如來廻向の眞實心を、阿耨菩提の因とすべしとなり。成等覺證大涅槃といふは、成等覺といふは、正定聚のくらゐなり。このくらゐを龍樹菩薩は、即時入必定とのたまへり。曇鸞和尙は、入正定聚之數とおしへたまへり。これはすなはち彌勒のくらゐとひとしとなり。證大涅槃とまふすは、必至滅度の願成就のゆへに、かならず大般涅槃をさとるとしるべし。如來所以興出世といふは、諸佛のよにいでたまふゆへと、まふすことなり。唯說彌陀本願海といふは、諸佛のよにいでたまふ御本懷は、ひとへに願海一乘の法をとかむとなり。しかれば大經には、如來所以、興出於世、欲拯群萠、惠以眞實之利とときたまへり。五濁惡時群生海、應信如來如實言といふは、よろづの衆生、如來のこのみことをふかく信受すべしとなり。能發一念喜愛心といふは、一念慶喜の眞實信よく發すれば、かならず本願の實報土にむまるとしるべし。不斷煩惱得涅槃といふは、煩惱具足せるわ

ろうべしとなり。然我大師聖人といふは、聖覺和尚は、聖人をわが大師聖人とあおぎたのみたまふ御ことばなり。爲釋尊之使者弘念佛之一門といふは、源空聖人は、釋迦如來の御つかひとして、念佛一門をひろめたまふとしるべしとなり。爲善導之再誕勸稱名之一行といふは、聖人は善導和尚の後身として、稱名の一行をすゝめたまふなりとしるべしとなり。專修專念之行自此漸弘無間無餘之勤といふは、一向專修とまふすことは、これよりひろまるとしるべしとなり。然則破戒罪根之輩、加肩入往生之道といふは、破戒無戒の人、罪業ふかきもの、みな往生すとしるべしとなり。下智淺才之類、振臂赴淨土之門といふは、無智無才のものは、淨土門におもむくべしとなり。誠知無明長夜之大燈炬也、何悲智眼闇といふは、まことにしりぬ、彌陀の誓願は、無明長夜のおほきなるともしびなり。なむぞ智慧のまなこくらしと、かなしまむやとおもへとなり。生死大海之大船筏也、豈煩業障重といふは、彌陀の願力は生死大海のおほきなるふねいかだなり。極惡深重のみなりともなげくべからずとのたまへるなり。倩思教授恩徳實等彌陀悲願者といふは、師主のおしへをおもふに、彌陀の悲願にひとしとなり。大師聖人のおしへの恩おもくふかきことを、おもひしるべしとなり。粉骨可報之摧身可謝之といふは、大師聖人

これすなはち佛心、眞言、法華、華嚴等のさとりをひらくなり。機有奢促者といふは、機に奢促あり。奢はおそきこゝろなるものあり。促はときこゝろなるものあり。このゆへに行有難易といへり。行につきて難あり、易ありとなり。難は聖道門自力の行なり、易は淨土門他力の行なり。當知聖道諸門漸敎也といふは、すなはち難行なり。また漸敎なりとしるべしとなり。淨土一宗者といふは、頓敎なり、また易行なりとしるべしとなり。所謂眞言止觀之行といふは、眞言は密敎なり、止觀は法華なり。獼猴情難覺といふは、われらがこゝろを、さるのこゝろにたとへたるなり。さるのこゝろのごとくさだまらずとなり。このゆへに眞言法華の行は、修しがたく行じがたしとなり。三論法相之敎牛羊眼易迷といふは、われらがまなこを、うしひつじのまなこにたとへて、三論法相宗等の聖道自力の敎にはまどふべしと、のたまへるなり。然至我宗者といふは、聖覺和尚ののたまはく、わが淨土宗は彌陀の本願の實報土の正因として、十聲稱念すれば、無上菩提にいたるとおしへたまふ。善導和尚の御おしへには、三心を具すれば、かならず安樂にむまるとのたまへるなりと、聖覺和尚ののたまへるなり。雖非利智精進といふは、智慧もなく精進のみにもあらず、鈍根懈怠のものも、專修專念の信心をえつれば、往生すとこゝ

六道—地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

三祇—三阿僧祇劫の略、菩薩が佛果を得る迄に經る修行の年時

修すべしとなり。正定之業者、即是稱佛名といふは、正定の業因は、すなはちこれ佛名を稱するなり。正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねとまふすなり。稱名必得生、依佛本願故といふは、佛のみなを稱するは、かならず安養淨土に往生をうるなり。佛の本願によるがゆへなりとのたまへり。

又曰、當知生死之家といふは、まさにしるべし生死のいゑといふなり。以疑爲所止といふは、大願の不思議力をうたがふこゝろをもて、六道四生二十五有にとゞまるなり。いまにまよふとしるべしとなり。涅槃之城といふは、安養淨刹をまふすなり。これを涅槃のみやことはまふすなり。以信爲能入といふは、眞實の信心をえたる人のみ、本願の實報土によくいるとしるべしとなり。

法印聖覺和尚ののたまはく、

夫根有利鈍者といふは、それ衆生の根性に利鈍ありとなり。利といふは、こゝろのときひとなり。鈍といふは、こゝろのにぶきひとなり。教有漸頓といふは、衆生の根性にしたがふて、佛教に漸頓ありとなり。漸はやうやく佛道を修して、三祇百大劫をへて、佛になるなり。頓はこの娑婆世界にして、このみにて、たちまちに佛になるとまふすなり。

聖道門―佛教中の自力門、諸善萬行を修しこの土に於て聖果をうる道をいふ
淨土門―佛教中の他力門、阿彌陀佛の本願の力に乘じて極樂淨土に往生せしむる敎
正行雜行正業助業―詳しく高僧和讃に出づ

を釋したまへるなり。

日本源空聖人ののたまはく、

選擇本願念佛集にいはく、南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本といふは、安養淨刹の往生の正因は、念佛を本とすとまふすみことなり。正因といふは淨土へむまるゝたねとまふすなり。

又曰、夫速欲離生死といふは、それすみやかにとく生死をはなれんとおもへといふなり。二種勝法中且閣聖道門といふは、二種勝法は聖道淨土の二門なり。且閣聖道門は、且閣はしばらくさしおけとなり。しばらく聖道門をさしおくべしとなり。選入淨土門といふは、選入はえらびていれとなり。よろづの善法の中に、えらびて淨土門にいるべしとなり。欲入淨土門といふは、淨土門にいらむとおもはゞといふなり。正雜二行中且抛諸雜行といふは、正雜二行ふたつのなかに、しばらくもろ〳〵の雜行をなげすてさしおくべしとなり。選應歸正行といふは、えらびて正行に歸すべしとなり。欲修於正行正助二業中猶傍於助業といふは、正行を修せむとおもはゞ、正業助業のふたつのなかに、助業をさしおくべしとなり。選應專正定といふは、えらびて正定の業をふたごころなく

雜行雜修―高僧和讃に出づ

ず、攝取不捨したまふゆへなり。攝護不捨といふは、おさめまもりてらすとなり。總不論照攝餘雜業行者といふは、總はすべてといふ、みなといふ。すべて雜行雜修の人をばみなてらさず、おさめまもりたまはずとなり。てらしまもりたまはずとまふすは、攝取不捨の利益にあづからずとなり。本願の行者にあらざるゆへなりとしるべし。しかれば攝護不捨と釋したまはず。現生護念增上緣といふは、このよにてまもりたまふとまふすみことなり。增上緣はすぐれたる强緣なりとなり。

首楞嚴院源信和尚ののたまはく、

我亦在彼攝取之中といふは、われまたかの攝取のなかにありとのたまへるなり。煩惱障眼といふは、われら煩惱にまなこさへらるとなり。雖不能見といふは、煩惱のまなこにて、佛をみたてまつることあたはずといへどもといふなり。大悲無倦といふは、大慈大悲の御めぐみ、ものうきことましまさずとまふすなり。常照我身といふは、常はつねにといふ、照は無礙の光明、信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは、つねにまもりたまふとなり。我身はわがみを大慈大悲心ものうきことなく、つねにまもりたまふとおもへとなり。攝取不捨のこゝろをあらはしたまふ。念佛衆生攝取不捨の文

金剛心ー他力眞實の堅固なる信心をいふ

たる金剛心をえたる人なれば、正定聚に住するゆへに、臨終のときにあらず、かねて尋常のときより、つねに攝護してすてたまはざれば、攝得往生とまふすなり。このゆへに攝生增上緣となづくるなり。またまことに尋常のときより信なからむ人は、ひごろの稱念の功によりて、最後臨終のとき、はじめて善知識のすゝめにあふて、信心をえむとき、願力攝して往生をうるものもあるべしとなり。臨終の來迎をまつものはかくのごとくなるべしと。

又曰 言護念增上緣者といふは、まことの信心をえたるひとを、このよにてつねにまもりたまふとまふすことなり。但有專念阿彌陀佛衆生といふは、ひとすぢにふたごころなく、彌陀佛を念じたてまつるとまふすなり。彼佛心光 常照是人といふは、彼はかのといふ。佛心光は無礙光佛の御こゝろとまふすなり。常照はつねにてらすとまふす。つねといふは、ときをきらはず、日をへだてず、ところをわかず、まことの信心ある人をば、つねにてらしたまふとなり。てらすといふは、かの佛心光におさめとりたまふとなり。佛心光は、すなはち阿彌陀佛の御こゝろにおさめとりたまふとしるべし、是人は信心をえたる人なり。つねにまもりたまふとまふすは、天魔波旬にやぶられず、惡鬼惡神にみだられ

とこゑ―十聲
聞名―名號のいはれをきゝひらくこと
尋常のとき―平生のとき

すこゝろなり。如無量壽經四十八願中說といふは、如來の本願をときたまへるみことなりとしるべしとなり。若我成佛とまふすは、法藏菩薩ちかひたまはく、もしわれ佛になりたらむときとなり。十方衆生といふは、十方のよろづの衆生なり、すなはちわれらなり。願生我國といふは、安養淨刹にむまれむとねがへとなり。稱我名字といふは、われ佛にならむに、わがなをとなへられむとなり。下至十聲といふは、名字をとなへられむこと、しもとこゑせむものとなり。下至といふは、十聲にあまれるもの、一念二念聞名のものを、往生にもらさず、きらはぬことをあらはししめすなり。乘我願力といふは、乘はのるべしといふ。また智なり。智といふは願力にのせたまふとしるなり。願力にのせて安養淨刹にむまれしむるとなり。若不生者、不取正覺といふは、ちかひを信じたるもの、もし本願の實報土にむまれずば、佛にならじとちかひたまへる御のりなり。此卽是願往生行人といふは、これすなはち往生をねがふ人といふなり。命欲終時といふは、いのちおはらむとせむときといふ。願力攝得往生といふは、大願業力攝取して、往生をえしむといへるこゝろなり。すでに尋常のとき信樂をえたる人なり。臨終のときはじめて信心決定して、攝取にあづかるものにあらず。ひごろかの心光に攝護せられまひらせ

尊號眞像銘文　末

善導和尚ののたまはく、　言南無者といふは、　南無はすなはち歸命とまふすことなり。　歸命はすなはち、釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひ、めしにかなふとまふすことばなり。　このゆへに卽是歸命とのたまへり。　亦是發願迴向之義といふは、二尊のめしにしたがふて、安樂淨土にむまれむと、ねがふこゝろなりと、　のたまへるなり。　言阿彌陀佛者といふは、卽是其行とのたまへり。　卽是其行は、　これすなはち法藏菩薩の選擇の本願なり。　安養淨土の正定の業因なりと、のたまへるこゝろなり。以斯義故といふは、　この義をもてのゆへにといへるこゝろなり。　必得往生といふは、　かならず往生をえしむといふなり。　必はかならずといふ、　かならずといふは、　自然のこゝろをあらはす。　自然ははじめてはからはずとなり。

又曰言攝生增上緣者といふは、　攝生は十方衆生を誓願におさめとりたまふと、　まふ

みな—御名也、南無阿彌陀佛
化物—衆生を化益すること

勢至等の聖衆なり。明知稱名とまふすは、あきらかにしりぬ。佛のみなをとなふれば、往生すといふことを、要術といふ。往生の要には、如來のみなをとなふるにすぎたることなしとなり。宜哉源空とまふすは、宜哉はよしといふなり。源空は聖人の御ななり。慕道化物といふは、慕道は無上道をねがひしたふといふなり。化物といふは、衆生を利益すとまふすなり。信珠在心といふは、金剛の信心をめでたきたまにたとへたまふ。信心のたまをこゝろにえたる人は、生死のやみにまどはざるゆへに、心照迷境といふなり。心照迷境といふは、信心のたまをもて、愚癡のやみをはらひ、あきらかにてらすとなり。疑雲永晴といふは、疑雲は願力をうたがふこゝろ、くもにたとへたるなり。永晴といふは、うたがふこゝろのくもをながくはらしぬれば、安樂淨土へかならずむまるゝなり。無碍光佛の攝取不捨の心光をもて、信心をえたるひとを、つねにてらしたまふゆへに、佛光圓頂といへり。佛光圓頂といふは、佛心のひかりあきらかに、信心のひとのいただきを、つねにてらしたまふとほめたまへるなり。

莊嚴—かざること

の化身なりとのたまへり。稱佛六字といふは、南無阿彌陀佛の六字をとなふるとなり。卽嘆佛といふは、すなはち南無阿彌陀佛をとなふるは、ほめたてまつることばになるとなり。また卽懺悔といふは、南無阿彌陀佛をとなふるは、すなはち無始よりこのかたの、罪業を懺悔するになるとまふすなり。卽發願廻向といふは、南無阿彌陀佛をとなふるは、すなはち安樂淨土に往生せむとおもふになるなり。一切善根莊嚴淨土といふは、阿彌陀の三字に、一切善根をおさめたまへるゆへに、名號をとなふれば、淨土を莊嚴するになるとしるべしとなり。智榮禪師、善導をほめたまへるなり。

日本源空聖人の銘にいはく、

四明山權律師劉官讚、普勸道俗念彌陀佛といふは、普勸はあまねくすゝむとなり。道俗は道にふたりあり、俗にふたりあり。道のふたりは、一には僧、二には比丘尼なり。俗にふたりは、一には佛のみのりを信じ行ずる男なり、二には佛のみのりを信じ行ずる女なり。念彌陀佛とまふすは、尊號を稱念するなり。能念皆見化佛菩薩とまふすは、能念はよく尊號を念ずといふ、よく念ずといふは、ふかく信ずるなり。皆見といふは、化佛菩薩をみむとおもふ人は、みなみたてまつるなり。化佛菩薩とまふすは、彌陀の化佛觀音

大乘―佛果の大涅槃を求むる道
乘は運載の意、因人を載せて證果に到らしむる故にいふ
小乘―聲聞緣覺の如き小涅槃を求むる道

大乘あり、また小乘あり、みな修多羅とまふす。いま修多羅とまふすは、大乘なり、小乘にはあらず。いまの三部の經典は、大乘修多羅なり。この三部大乘によるとなり。眞實功德相といふは、誓願の尊號なり。說願偈總持といふは、本願のこゝろをあらはすことばを、偈といふなり。總持といふは智慧なり、無碍光の智を總持とまふすなり。與佛敎相應といふは、この論のこゝろは、釋尊の敎勅、彌陀の誓願にあひかなへりとなり。觀彼世界相勝過三界道といふは、かの安樂世界をみそなはすに、ほとりきはなきこと、虛空のごとし、ひろくおほきなること虛空のごとしとなり。觀佛本願力、遇無空過者といふは、如來の本願力をみそなはすに、願力を信ずるひとはむなしくこゝにとゞまらずとなり。能令速滿足、功德大寶海といふは、能はよしといふ。令はせしむといふ。速はすみやかにとしといふ。よく本願力を信樂するひとは、すみやかにとく功德の大寶海を、信者のそのみに滿足せしむるなり。如來の功德のきはなくひろくおほきなることを、大海のみづの、みちみてるがごとしと、たとへたてまつれるなり。

光明寺善導和尙の銘にいはく、

智榮とまふすは、震旦の聖人なり。善導の別德をほめたまふていはく、善導は阿彌陀佛

十方微塵刹土―十方無數の國土

またいまは世親菩薩とまふす。論曰は世親菩薩、彌陀の本願を釋したまへる御ことを、論といふなり。曰はこゝろをあらはすことばなり。この論をば淨土論といふ。また往生論といふなり。世尊我一心といふは、世尊は釋迦如來なり。我といふは、世親菩薩のわがみとのたまへるなり。一心といふは、敎主世尊のみことを、ふたごころなくうたがひなしとなり。すなはちこれまことの信心なり。歸命盡十方無礙光如來とまふすは、歸命は南無なり。歸命とまふすは、如來の勅命にしたがひたてまつるなり。盡十方無礙光如來とまふすは、すなはち阿彌陀如來なり。この如來は光明なり。盡十方といふは、盡はつくすといふ、こと〴〵くといふ。十方世界をつくしてこと〴〵くみちたまへるなり。無礙といふはさはることなしとなり。衆生の煩惱惡業にさへられざるなり。光如來とまふすは、阿彌陀佛なり。この如來は、すなはち不可思議光佛とまふす。この如來は智慧の相なり。十方微塵刹土にみちたまへりとしるべしとなり。願生安樂國といふは、世親菩薩かの無礙光佛の願行を信じて、安樂國にむまれむとねがひたまへるなり。我依修多羅眞實功德相といふは、我は天親論主のわれとなのりたまへる御ことばなり。依はよるといふ、修多羅によることとなり。修多羅は天竺のことば、佛の經典をまふすなり。佛敎に、

無上涅槃—佛のさとり
實報土—本願に報ひ顯はれたる眞實報土、即ち極樂淨土
源信和尚—眞宗七高僧の第六
震旦—印度より支那をいふ稱

生死をとづるゆへに、自然閉といふなり。閉はとづといふ。本願の業因にひかれて、自然に安樂にむまるゝなり。昇道無窮極といふは、昇はのぼるといふ。のぼるといふは、無上涅槃にいたる、これを昇といふなり。道は大涅槃道なり。無窮極といふは、きはまりなしとなり。易往而無人といふは、易往はゆきやすしとなり。本願力に乘ずれば、本願の實報土にむまるゝこと、うたがひなければ、ゆきやすきなり。無人といふは、ひとなしといふ。ひとなしといふは、眞實信心の人は、ありがたきゆへに、實報土にむまるる人まれなりとなり。しかれば源信和尚は、報土にむまるゝ人はおほからず、化土にむまるゝ人はすくなからずとのたまへり。其國不逆違、自然之所牽といふは、其國は、そのくにといふ、不逆違はさかさまならずといふ、たがはずとなり。逆はさかさまといふ。違はたがふといふなり。眞實信をえたるひとは、大願業力のゆへに、自然に淨土の業因たがはずして、かの業力にひかるゝゆへに、ゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきはまりなしとのたまへるなり。しかれば自然之所牽とまふすなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくとなり。

婆藪般豆菩薩論曰といふは、婆藪般豆は天竺のことばなり、震旦には天親菩薩とまふす

不退の位─信心決定して必ず成佛すると定まりて退轉することなき位

五惡趣─地獄、餓鬼、畜生、人間、天上

四生─胎生、卵生、濕生、化生、

生のはからひにあらず、しからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり。自然といふことばなり。致といふは、いたるといふ、むねとすといふ。如來の本願の御名を信ずるひとは、自然に不退のくらゐにいたらしむるを、むねとすとおもへとなり。不退といふは、佛にかならずなるべきみとさだまるくらゐなり。これすなはち、正定聚のくらゐにいたるをむねとすと、ときたまへるみのりなり。必得超絶去往生安養國といふは、必は、かならずといふ。かならずといふは、自然といふこゝろなり。得は、えたりといふ。超は、こえてといふ。絶はたちはなるといふ。去は、すつといふ、ゆくといふ、さるといふ。娑婆世界をたちすて、流轉生死をこえはなれて、安養淨土に往生をうべしとなり。安養といふは安樂淨土なり。横截五惡趣、惡趣自然閉といふは、横はよこざまといふ。よこざまといふは、如來の願力を信ずるゆへに、行者のはからひにあらず、五惡趣を自然にたちすて、四生をはなるゝを横といふ。他力とまふすなり。これを横超といふなり。横は竪に對することばなり。超は迂に對することばなり。竪と迂とは自力聖道のこゝろなり。横と超はすなはち他力眞宗の本意なり。截といふは、きるといふ。五惡趣のきづなをよこざまにきるなり。惡趣自然閉といふは、願力に歸命すれば、五道

稱念―稱名念佛

正定聚―正しく佛になると定まりたる位

唯信鈔―聖覺の撰、念佛往生の要義を明にす

五逆―殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血

刹―梵語刹多羅の略、國土と譯す

不退轉の位―必ず成佛すると定りて退轉することなき位、信心決定の身

を、衆生にしらせむとおぼしめして、乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへるなり。如來より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからず。たゞ如來の至心信樂をふかくたのむべし。この眞實信心をえむとき、攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらゐにさだまるとみえたり。若不生者、不取正覺といふは、若不生者は、もしむまれずばといふみことなり。不取正覺は、佛にならじとちかひたまへる御のりなり。この本願のやうは、唯信鈔によく〳〵みえたり。唯信とまふすは、すなはちこの眞實信樂をひとすぢにとるこゝろをまふすなり。唯除五逆、誹謗正法といふは、唯除はたゞのぞくといふことばなり。五逆のつみびとをきらひ、謗法のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生、みなもれず往生すべしと、しらせむとなり。其佛本願力といふは、彌陀の本願力とまふすなり。聞名欲往生といふは、聞といふは如來のちかひの御なを、信ずとまふすなり。欲往生といふは、安樂淨刹にむまれむとおもへとなり。皆悉到彼國といふは、御ちかひのみなを信じて、むまれむとおもふ人は、みなもれずかの淨土にいたるとまふす御ことなり。自致不退轉といふは、自はおのづからといふ。おのづからといふは、衆

大無量壽經―無量壽經上下二卷をいふ、曹魏天竺三藏康僧鎧の譯也

四十八願―阿彌陀佛衆生濟渡の爲に建てられたる誓願

乃至十念―十念とは十念南無阿彌陀佛を稱ふること、乃至は一多包容の語にて稱名の遍數に定まらぬをいふ

尊號眞像銘文　本

大無量壽經言といふは、四十八願をときたまへる經なり。設我得佛といふは、もしわれ佛になりたらむときといふ御ことばなり。十方衆生といふは、十方のよろづの衆生といふなり。至心信樂といふは、至心は眞實とまふすなり。眞實とまふすは、如來の御ちかひの眞實なるを、至心とまふすなり。煩惱具足の衆生は、もとより眞實の心なし、淸淨の心なし、濁惡邪見のゆへなり。信樂といふは、如來の本願眞實にましますを、ふたごころなくふかく信じて、うたがはざれば信樂とまふすなり。この至心信樂は、すなはち十方の衆生をして、わが眞實なる誓願を信樂すべしと、すゝめたまへる御ちかひの至心信樂なり、凡夫自力のこゝろにはあらず。欲生我國といふは、他力の至心信樂をもて、安樂淨土にむまれんとおもへとなり。乃至十念とまふすは、如來のちかひの名號をとなへむことをすゝめたまふに、返數のさだまりなきほどをあらはし、時節をさだめざること

佛、是諸人等、皆爲昔緣疑悔所致乃至佛告彌勒、如是如是若有隨於疑悔種諸善根希求佛智乃至廣大智、於自善根不能生信、由聞佛名起信心故、雖生彼國於蓮華中不得出現、彼等衆生處華胎中、猶如園苑宮殿之想乃至略出

光明寺釋云、含華未出、或生邊界或墮宮胎已上憬興師云、由疑佛智、雖生彼國、而在邊地、不被聖化事、若胎生宜之重捨已上

これらの眞文にて、難思往生とまふすことを、よく〳〵こゝろえさせたまふべし。

康元二年三月二日書寫之

愚禿親鸞八十五歳

慈氏菩薩—彌勒菩薩の譯語

化生—凡夫が他力信心によりて如來正覺の華の中より極樂に化生するをいふ

阿逸多—梵音、無能勝と譯す彌勒菩薩の字なり

中、受諸快樂、如忉利天上、亦皆自然。爾時慈氏菩薩、白佛言、世尊何因何緣、彼國人民、胎生化生。佛告慈氏、若有衆生、以疑惑心、修諸功德、願生彼國、不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智、於此諸智疑惑不信。然猶信罪福、修習善本、願生其國。此諸衆生、生彼宮殿、壽五百歲、常不見佛、不聞經法、不見菩薩聲聞聖衆。是故彼國土謂之胎生。乃至彌勒當知、彼化生者智慧勝故、其胎生者皆無智慧。乃至佛告彌勒、譬如轉輪聖王有七寶牢獄、種種莊嚴、張設牀帳、懸諸繒幡、若諸小王子、得罪於王、輒內彼獄中、繫以金鎖。乃至佛告彌勒、此諸衆生、亦復如是、以疑惑佛智故、生彼胎宮。乃至若此衆生、識其本罪、深自悔責、求離彼處、乃至彌勒當知、其有菩薩生疑惑者、爲失大利。略抄

又無量壽如來會言、佛告彌勒、若有衆生、隨於疑悔積集善根、希求佛智普遍智不思議智無等智威德智廣大智、於自善根不能生信、以此因緣、於五百歲住宮殿中。乃至阿逸多汝觀殊勝智者、彼因廣慧力故、受彼化生、於蓮華中結跏趺座、汝觀下劣之輩、乃至不能修習諸功德故、無因奉事無量壽

の願なり淨土に往生せんと欲して諸の德本を植ゑ、至心に廻向するものをいつかは其望みを果遂せしめんとの誓願
七寶の牢獄—疑城胎宮のこと
德號—南無阿彌陀佛のこと
難思往生—弘願他力の難思議往生に對し議の字を省きて之を區別す
由旬—印度里數の名

號をえらびて、萬善諸行の少善をさしおく。しかりといへども、定散自力の行人は、不可思議の佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號をおのれが善根として、みづから淨土に迴向して、果遂のちかひをたのむ。不可思議の名號を稱念しながら、不可稱不可說不可思議の大悲の誓願をうたがふ。そのつみふかくおもくして、七寶の牢獄にいましめられて、いのち五百歲のあひだ、自在なることのたはず。三寶をみたてまつらず、つかへたてまつることなしと、如來はときたまへり。しかれども如來の尊號を稱念するゆへに、胎宮にとゞまる。德號によるがゆへに、難思往生とまふすなり。不可思議の誓願疑惑するつみによりて、難思議往生とはまふさずとしるべきなり。

植諸德本願文。大經言、
設我得佛、十方衆生、聞我名號、係念我國、植諸德本、至心迴向欲生我國、不果遂者不取正覺、文。
同本異譯無量壽如來會言、若我成佛、無量國中所有衆生、聞說我名、以己善根迴向極樂、若不生者不取菩提、文。
願成就文。經言、其胎生者、所處宮殿、或百由旬、或五百由旬。各於其

道場樹の願—四十八願中の第二十八なり、淨土の菩薩功徳少なき者と雖も高四百萬里の道場樹を見ることを得んと誓ひ給ふ
月光摩尼—珠の名、熱毒を病むものこの珠にふるれば病いゆ
持海輪寶—道場樹をかざる寶の名
法忍—諸智の認可決定
六根—眼、耳、鼻、舌、身、意の六
那由他—印度の數名千億といひ或は萬億とも譯す
報の淨土—眞實報土のこと
化の淨土—方便化土のこと
植諸徳本の願—四十八願中第二

道場樹願成就文。經言、又無量壽佛、其道場樹高四百萬里。其本周圍五十由旬。枝葉四布二十萬里。一切衆寶自然合成。以月光摩尼持海輪寶衆寶之王而莊嚴之。周匝條間垂寶瓔珞。百千萬色種種異變。無量光炎照耀無極。珍妙寶網羅覆其上。乃至一切皆得甚深法忍住不退轉。至成佛道六根清徹無諸惱患。已上略出

首楞嚴院要集、引感禪師釋いはく、問、菩薩處胎經第二說、西方去此閻浮提十二億那由他有懈慢界。乃至發意衆生欲生阿彌陀佛國者、深著懈慢國土、不能前進生阿彌陀佛國、億千萬衆時有一人能生阿彌陀佛國云云、以此經準難可得生。答、群疑論引善導和尚前文而釋此難。又自助成云、此經下文言、何以故、皆由懈慢執心不牢固。是知、雜修之者爲執心不牢之人。故生懈慢國也。若不雜修專行此業、此卽執心牢固定生極樂國。乃至又報淨土生者極少。化淨土中生者不少故、經別說實不相違也。已上略出

これらの文のこゝろにて、雙樹林下往生とまうすことを、よく〳〵こゝろえたまふべし。

彌陀經往生といふは、植諸徳本の誓願によりて、不果遂者の眞門にいり、善本徳本の名

願生彼國、凡有三輩、其上輩者捨家棄欲而作沙門、發菩提心一向專念無量壽佛、修諸功德願生彼國、此等衆生臨壽終時、無量壽佛與諸大衆現其人前、乃至阿難其有衆生、欲於今世見無量壽佛、應發無上菩提之心、修行功德願生彼國、佛語阿難、其中輩者十方世界諸天人民、其有至心願生彼國、雖不能行作沙門大修功德、當發無上菩提之心、一向專念無量壽佛、多少修善、奉持齋戒、起立塔像、飯食沙門、懸繒燃燈、散華燒香、以此廻向願生彼國、其人臨終乃至具如眞佛、與諸大衆、現其人前、乃至佛告阿難、其下輩者、十方世界諸天人民、其有至心欲生彼國、假使不能作諸功德、當發無上菩提之心、一向專意乃至十念念無量壽佛願生其國。若聞深法歡喜信樂、不生疑惑、乃至一念念於彼佛、以至誠心願生其國。此人臨終夢見彼佛、亦得往生、功德智慧、次如中輩者也。已上略抄

大經言、設我得佛、國中菩薩乃至少功德者、不能知見其道場樹無量光色高四百萬里者、不取正覺、文。

成就大悲心故。これは大無量壽經の宗致としたまへり。これを難思議往生とまふすなり。

觀經往生といふは、修諸功德の願により、至心發願のちかひにいりて、萬善諸行の自善を廻向して、淨土を忻慕せしむるなり。しかれば無量壽佛觀經には、定善散善、三福九品の諸善、あるひは自力の稱名念佛をときて、九品往生をすゝめたまへり。これは他力の中に自力を宗致としたまへり。このゆへに觀經往生とまふすは、これみな方便化土の往生なり。これを雙樹林下往生とまふすなり。

至心發願の願、大經に言、設我得佛、十方衆生發菩提心、修諸功德、至心發願欲生我國、臨壽終時、假令不與大衆圍繞現其人前者、不取正覺、文。

又悲華經大施品言、願我成阿耨多羅三藐三菩提已、其餘無量無邊阿僧祇諸佛世界所有衆生、若發阿耨多羅三藐三菩提心、修諸善根、欲生我界者、臨終之時、我當與大衆圍繞現其人前、其人見我、即於我前得心歡喜、以見我故、離諸障閡、即便捨身、來生我界、文。

至心發願の願成就文。大經言、佛告阿難、十方世界諸天人民、其有至心

修諸功德の願—彌陀四十八願中の第十九の願なり、諸の功德を積みて至心に發願するものあらば臨終の時現前して淨土へ導びかんとの願

方便化土—懈慢邊地のこと、極樂の邊境をいふ、彌陀の淨土に眞實報土と方便化土とあるなり

阿僧祇—印度の大數の名、無數と譯す

至心發願の願—修諸功德の願に同じ

の根機に九品あるをいふ

三界の繋業―衆生諸の業によりて三界に繋縛さるゝをいふ

莊嚴淸淨功德成就者、偈言觀彼世界相勝過三界道故。此云何不思議。有凡夫人煩惱成就、亦得生彼淨土、三界繫業畢竟不牽、則是不斷煩惱得涅槃分、焉可思議。已上抄要

この阿彌陀如來の往相廻向の選擇本願をみたてまつるなり。これを難思議往生とまふす。これをこゝろえて、他力には義なきを義とすと、しるべし。

二に還相廻向といふは、淨土論曰、以本願力廻向故、是名出第五門。これは還相の廻向なり。一生補處の悲願にあらわれたり。大慈大悲の願大經にのたまはく、設我得佛、他方佛土諸菩薩衆、來生我國、究竟必至一生補處、除其本願自在所化、爲衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脫一切、遊諸佛國、修菩薩行、供養十方諸佛如來、開化恒沙無量衆生、使立無上正眞之道、超出常倫、諸地之行現前、修習普賢之德。若不爾者、不取正覺文。この悲願は如來の還相廻向の御ちかひなり。如來の二種の廻向によりて、眞實の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに、他力とまふすなり。しかれば無量壽經優婆提舍願生偈曰、云何廻向、不捨一切苦惱衆生、心常作願、廻向爲首得

正定聚—正しく佛になると定まりたるともがらなり他力信心の人をいふ

邪定聚—報土の正因にあらざる雜善を修して淨土に往生せんとするもの

不定聚—正にあらず邪にあらず進んでは他力信心の人ともなるべく退きては邪聚に陷るべき不定の人をいふ

正覺淨華の化生—他力眞實の行者の往生する相を示す、淨土和讃大經章に出づ

三三之品—衆生

於正定之聚、所以者何、彼佛國中、無諸邪聚及不定聚。文又如來會言、彼國衆生、若當生者、皆悉究竟無上菩提、到涅槃處、何以故、若邪定聚及不定聚、不能了知建立彼因故。已上抄要 この眞實の稱名と眞實の信樂をえたる人は、すなわち、正定聚のくらゐに住せしめむと、ちかひたまへるなり。この正定聚に住するを等正覺をなるとも、のたまへるなり。等正覺とまふすは、すなわち、補處の彌勒菩薩とおなじくらゐとなるとときたまへり。しかれば大經には、次如彌勒とのたまへり。淨土論曰、莊嚴妙聲功德成就者、偈言梵聲悟深遠微妙聞十方故、此云何不思議、經言、若人但聞彼國土淸淨安樂、剋念願生、亦得往生。即入正定聚。此是國土名字爲佛事、安可思議。至乃莊嚴眷屬功德成就者、偈言如來淨華衆正覺華化生故。此云何不思議、凡是雜生世界、若胎、若卵、若濕、若化、眷屬若干、苦樂萬品、以雜業故。彼安樂國土、莫非是阿彌陀如來正覺淨華之所化生。同一念佛無別道故。遠通夫四海之内皆爲兄弟也。眷屬無量、焉可思議、又言。願往生者本則三三之品、今無一二之殊、亦如淄澠食陵反一味、焉可思議、已上 又論曰、

至心信樂―淨土和讚大經章に出づ
佛刹―佛の國土

また眞實信心あり。すなはち念佛往生の悲願にあらわれたり。信樂の悲願は、大經にのたまはく、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆誹謗正法文。

同本異譯無量壽如來會言、若我證得無上覺時、餘佛刹中諸有情類、聞我名已、所有善根心心迴向、願生我國、乃至十念、若不生者、不取菩提、唯除造無間惡業、誹謗正法及諸聖人文。

また眞實證果あり。すなはち、必至滅度の悲願にあらわれたり。證果の悲願、大經にのたまはく、設我得佛、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺文。

同本異譯無量壽如來會言、若我成佛、國中有情、若不決定成等正覺、證大涅槃者、不取菩提文。

無量壽如來會言、他方佛國所有衆生、聞無量壽如來名號、能發一念淨信、歡喜愛樂、所有善根迴向、願生無量壽國者、隨願皆生、得不退轉乃至無上正等菩提、除五無間誹謗正法、及謗聖者。

必至滅度證大涅槃願成就文。大經言、其有衆生、生彼國者、皆悉住

大經—大無量壽經

難思議往生—凡夫が他力の信心一つで極樂へ往生することは言說思慮の及ぶ能はざる所なるが故にいふ

淨土三經往生文類

大經往生といふは、如來選擇の本願、不可思議の願海、これを他力とまふすなり。これすなわち、念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる。これは、阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるがゆへに、無上涅槃のさとりをひらく。これを大經の宗致とす。このゆへに大經往生とまふす。また難思議往生とまふすなり。この如來の往相廻向につきて、眞實の行業あり。すなわち諸佛稱名の悲願にあらわれたり。稱名の悲願は、大無量壽經にのたまはく、設我得佛、十方世界無量諸佛、不悉咨嗟稱我名者、不取正覺文。

稱名信樂悲願成就文。經言、十方恒沙諸佛如來、皆共讃嘆無量壽佛威神功德不可思議、諸有衆生聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、卽得往生、住不退轉、唯除五逆誹謗正法文。

大師聖人—源空法然聖人なり

といへり。これは還相の廻向ときこえたり。このこゝろは、一生補處の大願にあらはれたり。

大慈大悲の誓願は、大經に言はく、設我得佛、他方佛土諸菩薩衆、來生我國、究竟必至一生補處、除其本願、自在所化、爲衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脱一切、遊諸佛國、修菩薩行、供養十方諸佛如來、開化恒沙無量衆生、使立無上正眞之道、超出常倫、諸地之行現前、修習普賢之德、若不爾者、不取正覺、文。この悲願は如來の還相廻向の御ちかひなり。

これらを如來の二種の廻向とまふすなり。他力の往相還相の廻向なれば、自利利他ともに行者の願樂にあらず、大願より自然にうるなり。しかれば他力には義なきをもて義とすと、大師聖人はおほせごとありき。つくぐ\この選擇悲願をこゝろえたまふべしと。

南無阿彌陀佛

康元元丙辰十一月二十九日

愚禿親鸞八十四歲書之

眞實證果といふは、必至滅度の悲願にあらはれたり。證果の悲願、大經に言はく、設我得佛、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺、文。これらの本誓悲願を選擇本願ともふすなり。これを往相廻向とまふすなり。この必至滅度の大願をおこしたまひて、この眞實信心をえたらん人は、すなはち正定聚のくらゐに住せしめんと、ちかひたまへり。同本異譯の無量壽如來會に言はく、若我成佛、國中有情、若不決定成等正覺、證大涅槃者、不取正覺、文。この悲願は、すなはち決定して等正覺にならしめんと、ちかひたまへりとなり。等正覺といふは、すなはち正定聚のくらゐなり。等正覺とまふすは、補處の彌勒菩薩とおなじからしめんと、ちかひたまへるなり。しかれば、眞實信樂の念佛者は、彌勒菩薩とおなじと、龍舒淨土文にあらはせり。しかれば大經には、次如彌勒とのたまへり。

これらの大願を、往相廻向とまふすとみえたり。

二には還相廻向といふは、淨土論に曰く、以本願力廻向故、是名出第五門といへり。又曰く、生彼國已、還起大悲、廻入生死教化衆生、亦名廻向也

往相―衆生が極樂へ往生する相、還相―一度往生したるものが衆生濟度のため此の世界へ再び還來すること　廻向―往相も還相も共に佛智他力より廻施したまふ、廻は轉趣向の義

往相廻向還相廻向文類

往相廻向之文

無量壽經優婆提舍願生の偈に曰、云何廻向、不レ捨二一切苦惱衆生一、心常作レ願、廻向爲レ首、得レ成二就大悲心一故、文。

この本願力の廻向をもて、如來の廻向に二種あり。一には往相廻向、二には還相廻向なり。往相廻向につきて、眞實の行業あり、眞實の信心あり、眞實の證果あり。

眞實行業といふは、諸佛稱名の悲願にあらはれたり。稱名の悲願、大經に言はく、

設我得レ佛、十方世界無量諸佛、不下悉咨嗟稱中我名上者、不レ取二正覺一、文。

眞實信心といふは、念佛往生の悲願にあらはれたり。信樂の悲願大經に言はく、

設我得レ佛、十方衆生、至レ心信樂、欲レ生二我國一、乃至十念、若不レ生者、不レ取二正覺一、唯除二五逆誹謗正法一、文。

おほそらごとのかたち―以上の如く和讃に多くの文學を列べしは物知り顔に見ゆと謙遜の辭

ましまさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とぞきゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるべし。

これは佛智の不思議にてあるなり。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな　まことのこゝろなりけるを
善惡の字しりがほは　おほそらごとのかたちなり

是非しらず邪正もわかぬこのみなり。
小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。

御筆―此の二字は後の人附加したるなり

行者―佛道を修行するひと

法爾―法の德として然らしむること、彌陀の願力にはからはるるをいふ

親鸞八十八歲御筆

獲の字は、因位のときうるを獲といふ。得の字は、果位のときにいたりてうることを得といふなり。名の字は、因位のときのなを名といふ。號の字は、果位のときのなを號といふ。自然といふは、自はおのづからといふ。行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり。然といふは、しからしむといふことば、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに。法爾といふは、如來の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ。この法爾は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに他力には、義なきを義とすとしるべきなり。

自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞときゝてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはまふさず。かたちも

善光寺の如來―金銅の阿彌陀佛像なり、釋尊在世の時天竺月蓋長者の持佛なりと傳ふ、欽明天皇十三年百濟國より我國難波に渡來す

ほとをりけ―暖氣、物部守屋佛の金像を燒きたるに暖氣ありし故に名く

○善光寺の如來の　われらをあはれみまし〱て
なにはのうらにきたります　御名をもしらぬ守屋にて
○そのときほとをりけとまふしける　疫癘あるひはこのゆへと
守屋がたぐひはみなともに　ほとをりけとぞまふしける
○やすくすゝめんためにとて　ほとけと守屋がまふすゆへ
ときの外道みなともに　如來をほとけとさだめたり
○この世の佛法のひとはみな　守屋がことばをもとゝして
ほとけとまふすをたのみにて　僧ぞ法師はいやしめり
○弓削の守屋の大連　邪見きはまりなきゆへに
よろづのものをすゝめんと　やすくほとけとまふしけり

無戒名字の比丘—僧の體となるべき戒を持たず、たゞ名のみあること
舍利弗、目連—釋尊十大弟子中の二尊者
南都—奈良
北嶺—叡山

○罪業もとよりかたちなし　妄想顚倒のなせるなり
心性もとよりきよけれど　この世はまことのひとぞなき

○末法悪世のかなしみは　南都北嶺の佛法者の
輿かく僧達力者法師　高位をもてなす名としたり

○佛法あなづるしるしには　比丘比丘尼を奴婢として
法師僧徒のたふとさも　僕従ものゝ名としたり

已上十六首、これは愚禿がかなしみなげきにして、述懐としたり。この世の本寺本山の、いみじき僧とまふすも、法師とまふすも、うきことなり。

釋親鸞書レ之

五濁增—末世五濁の心增上するをいふ

提婆—詳しくは提婆達多といふ、釋尊の從弟にして初め其弟子たり、後釋尊の威勢を嫉み別立し阿闍世王と結びて其國の教權を奪はんとして成らず遂に病死す

梵士—梵天の法を承習する一類

尼乾士—梵行無繫子と譯す、裸體にて飲を少欲の行として苦行をなす外道の一類

○五濁增のしるしには　この世の道俗ことごとく
外儀は佛教のすがたにて　内心外道を歸敬せり

○かなしきかなや道俗の　良時吉日えらばしめ
天神地祇をあがめつゝ　卜占祭祀つとめとす

○僧ぞ法師のその御名は　たふときことゝきゝしかど
提婆五邪の法にて　いやしきものになづけたり

○外道梵士尼乾志に　こゝろはかはらぬものとして
如來の法衣をつねにきて　一切鬼神をあがむめり

○かなしきかなやこのごろの　和國の道俗みなともに
佛教の威儀をもとゝして　天地の鬼神を尊敬す

○五濁邪惡のしるしには　僧ぞ法師といふ御名を
奴婢僕使になづけてぞ　いやしきものとさだめたる

○無戒名字の比丘なれど　末法濁世の世となりて
舍利弗目連にひとしくて　供養恭敬をすゝめしむ

外儀—外部の相なり、御心に對す
もゝはし—百端也、數の多きこと
修善も雜毒—貪瞋邪僞の心より修する善根は雜毒の善なり
彌陀の廻向の御名—萬善萬行功德の總體を南無阿彌陀佛の六字にをさめて吾人に廻施したまふをいふ

愚禿悲歎述懐

○淨土眞宗に歸すれども　眞實の心はありがたし
虚假不實のわが身にて　清淨の心もさらになし

○外儀のすがたはひとごとに　賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪僞おほきゆへ　奸詐もゝはし身にみてり

○惡性さらにやめかたし　こゝろは蛇蝎のごとくなり
修善も雜毒なるゆへに　虚假の行とぞなづけたる

○無慚無愧のこの身にて　まことのこゝろはなけれども
彌陀の廻向の御名なれば　功德は十方にみちたまふ

○小慈小悲もなき身にて　有情利益はおもふまじ
如來の願船いまさずば　苦海をいかでかわたるべき

○蛇蝎奸詐のこゝろにて　自力修善はかなふまじ
如來の廻向をたのまでは　無慚無愧にてはてぞせん

善惡淨穢もなかりけり―佛智に信賴すること一つにて心の善惡形の淨穢をとはず極樂に往生し得

上宮皇子―聖德太子

○久遠劫よりこの世まで　あはれみましますしるしには
佛智不思議につけしめて　善惡淨穢もなかりけり

○和國の教主聖德皇　廣大恩德謝しがたし
一心に歸命したてまつり　奉讚不退ならしめよ

○上宮皇子方便し　和國の有情をあはれみて
如來の悲願を弘宣せり　慶喜奉讚せしむべし

○多生曠劫この世まで　あはれみかふれるこの身なり
一心歸命たへずして　奉讚ひまなくこのむべし

○聖德皇のおあはれみに　護持養育たへずして
如來二種の廻向に　すゝめいれしめおはします

已上聖德奉讚　十一首

皇太子―聖徳太子

補處―前に出づ

多々阿摩―梵語也、父母のこと

二種の廻向―往相と還相の二つなり

皇太子聖徳奉讃

愚禿善信作

○佛智不思議の誓願を　聖徳皇のめぐみにて
正定聚に歸入して　補處の彌勒のごとくなり

○救世觀音大菩薩　聖徳皇と示現して
多々のごとくすてずして　阿摩のごとくにそひたまふ

○無始よりこのかたこの世まで　聖徳皇のあはれみに
多々のごとくにそひたまひ　阿摩のごとくにおはします

○聖徳皇のあはれみて　佛智不思議の誓願に
すゝめいれしめたまひてぞ　住正定聚の身となれる

○他力の信をえんひとは　佛恩報ぜんためにとて
如來二種の廻向を　十方にひとしくひろむべし

○大慈救世聖徳皇　父のごとくにおはします
大悲救世觀世音　母のごとくにおはします

○佛智の不思議を疑惑して　罪福信じ善本を
修して淨土をねがふをば　胎生といふとときたまふ
○佛智うたがふつみふかし　この心おもひしるならば
くゆるこゝろをむねとして　佛智の不思議をたのむべし
已上二十三首、佛不思議の彌陀の御ちかひを、うたがふつみとがを、しらせんと、あらはせるなり。

方便化土―方便は眞實に對し化土は眞佛土に對す、懈慢邊地疑城胎宮などをいふ

慈氏菩薩―梵語彌勒菩薩の事

何因何縁―いかなるいはれと問ふ言葉

胎生化生―疑心の人邊地の宮殿に生れて蓮華に包まること恰も兒の母胎にあるが如し之を胎生といふ、凡夫が眞佛土に往生して智慧すぐれ神通自在となるを化生といふ

○罪福ふかく信じつゝ　善本修習するひとは
疑心の善人なるゆへに　方便化土にとまるなり

○彌陀の本願信ぜねば　疑惑を帶してむまれつゝ
はなはすなはちひらけねば　胎に處するにたとへたり

○ときに慈氏菩薩の　世尊にまふしたまひけり
何因何縁いかなれば　胎生化生となづけたる

○如來慈氏にのたまはく　疑惑の心をもちながら
善本修するをたのみにて　胎生邊地にとゞまれり

○佛智疑惑のつみゆへに　五百歳まで牢獄に
かたくいましめおはします　これを胎生とときたまふ

○佛智不思議をうたがひて　罪福信ずる有情は
宮殿にかならずむまるれば　胎生のものとときたまふ

○自力の心をむねとして　不思議の佛智をたのまねば
胎宮にむまれて五百歳　三寶の慈悲にはなれたり

含花未出—佛智を疑ひながら念佛又は諸行を修せし人が淨土に往生して後蓮花の内に包まれて三寶を見聞すること能はざるをいふ

胎生—疑心の往生者が淨土の邊地に止まりて三寶を見聞すること能はず智慧のひらけざるを胎生といふ

三寶—佛法僧

みづから云々—自身で疑惑の罪を作りて

○自力諸善のひとはみな　佛智の不思議をうたがへば
自業自得の道理にて　七寶の獄にぞいりにける

○佛智不思議をうたがひて　善本德本たのむひと
邊地懈慢にむまるれば　大慈大悲はえざりけり

○本願疑惑の行者には　含花未出のひともあり
或生邊地ときらひつゝ　或墮宮胎とすてらるゝ

○如來の諸智を疑惑して　信ぜずながらなをもまた
罪福ふかく信ぜしめ　善本修習すぐれたり

○佛智を疑惑するゆへに　胎生のものは智慧もなし
胎宮にかならずむまるゝを　牢獄にいるとたとへたり

○七寶の宮殿にむまれては　五百歳のとしをへて
三寶を見聞せざるゆへ　有情利益はさらになし

○邊地七寶の宮殿に　五百歳までいでずして
みづから過咎をなさしめて　もろ〳〵の厄をうくるなり

不了佛智—佛智の廣大なるを明了に信ぜざる意
善本—諸善の根本卽ち念佛也、こゝは自力の稱名念佛をいふ
邊地—淨土の邊境なり
疑城胎宮—佛智を疑ふ人が其の疑の罪により生ずるところ
轉輪皇—人壽無量歲より八萬歲の間に出でて輪寶を須彌四天下に轉じて化益をなす王
七寶の獄—疑城胎宮のこと
みつから云々—身で淫惑の罪を作り

○不了佛智のしるしには　如來の諸智を疑惑して
罪福信じ善本を　たのめば邊地にとまるなり

○佛智の不思議をうたがひて　自力の稱念このむゆへ
邊地懈慢にとゞまりて　佛恩報ずるこゝろなし

○罪福信ずる行者は　佛智の不思議をうたがひて
疑城胎宮にとゞまれば　三寶にはなれたてまつる

○佛智疑惑のつみにより　懈慢邊地にとまるなり
疑惑のつみのふかきゆへ　年歲劫數をふるとく

○轉輪皇の王子の　皇につみをうるゆへに
金鎖をもちてつなぎつゝ　牢獄にいるがごとくなり

○自力稱名のひとはみな　如來の本願信ぜねば
うたがふつみのふかきゆへ　七寶の獄にぞいましむる

○信心のひとにおとらじと　疑心自力の行者も
如來大悲の恩をしり　稱名念佛はげむべし

末法―釋尊滅後千五百年を經て後一萬年の間をいふ佛法次第に衰微する時也
三朝淨土の大師―日本支那印度に出でられし淨土教の大師、即ち印度の龍樹天親、支那の曇鸞道綽善導及び我國の源信源空等をさす

さとりうるもの末法に　一人もあらじとときたまふ

○三朝淨土の大師等　哀愍攝受したまひて
眞實信心すゝめしめ　定聚のくらゐにいれしめよ

○他力の信心うるひとを　うやまひおほきによろこべば
すなはちわが親友ぞと　教主世尊はほめたまふ

○如來大悲の恩德は　身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も　ほねをくだきても謝すべし

已上正像末法和讃　五十八首

報土ー阿彌陀佛の因願に報ひ顯はれたる佛土

化土ー彌陀の淨土中三寶を見る能はざる處

聖道門ー諸善萬行を修し此土上に於て聖果を得る道、即ち佛教中の自力門なり

如來二種の迴向の　恩德まことに謝しがたし

○報土の信者はおほからず　化土の行者はかずおほし

自力の菩提かなはねば　久遠劫より流轉せり

○南無阿彌陀佛の迴向の　恩德廣大不思議にて

往相迴向の利益には　還相迴向に迴入せり

○往相迴向の大慈より　還相迴向の大悲をう

如來の迴向なかりせば　淨土の菩提はいかゞせん

○彌陀觀音大勢至　大願のふねに乘じてぞ

生死のうみにうかみつゝ　有情をよばふてのせたまふ

○彌陀大悲の誓願を　ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく　南無阿彌陀佛をとなふべし

○聖道門のひとはみな　自力の心をむねとして

他力不思議にいりぬれば　義なきを義とすと信知せり

○釋迦の教法ましませど　修すべき有情のなきゆへに

眞實報土の正因—佛力の信心

二尊のみこと—釋迦彌陀の御言なり

證誠—念佛往生のうたがふべからざるを諸佛が證據に立つなり

まうあはぬ—不遇の字訓なり、

化生—明信佛智の人は七寶華中より化生する故に名づく

無始流轉—無始の無明がもとゝなりて生死の苦界に流轉するを

八萬劫中大苦惱　ひまなくうくとぞときたまふ

○眞實報土の正因を　二尊のみことにたまはりて
正定聚に住すれば　かならず滅度をさとるなり

○十方無量の諸佛の　證誠護念のみことにて
自力の大菩提心の　かなはぬほどはしりぬべし

○眞實信心うることは　末法濁世にまれなりと
恒沙の諸佛の證誠に　えがたきほどをあらはせり

○往相還相の廻向に　まうあはぬ身となりにせば
流轉輪廻もきはもなし　苦海の沈淪いかゞせん

○佛智不思議を信ずれば　正定聚にこそ住しけれ
化生のひとは智慧すぐれ　無上覺をぞさとりける

○不思議の佛智を信ずるを　報土の因としたまへり
信心の正因うることは　かたきがなかになをかたし

○無始流轉の苦をすてゝ　無上涅槃を期すること

信心の智慧なかりせば
いかでか涅槃をさとらまし

○無明長夜の燈炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障おもしとなげかざれ

○願力無窮にましませば
罪業深重もおもからず
佛智無邊にましませば
散亂放逸もすてられず

○如來の作願をたづぬれば
苦惱の有情をすてずして
廻向を首としたまひて
大悲心をば成就せり

○眞實信心の稱名は
彌陀廻向の法なれば
不廻向となづけてぞ
自力の稱念きらはるゝ

○彌陀智願の廣海に
凡夫善惡の心水も
歸入しぬればすなはちに
大悲心とぞ轉ずなる

○造惡このむわが弟子の
邪見放逸さかりにて
末世にわが法破すべしと
蓮華面經にときたまふ

○念佛誹謗の有情は
阿鼻地獄に墮在して

補處—前に出づ
像法のとき—前に出づ
法藏—阿彌陀佛因位の名

補處の彌勒におなじくて　無上覺をさとるなり
○像法のときの智人も　自力の諸教をさしおきて
時機相應の法なれば　念佛門にぞいりたまふ
○彌陀の尊號となへつゝ　信樂まことにうるひとは
憶念の心つねにして　佛恩報ずるおもひあり
○五濁惡世の有情の　選擇本願信ずれば
不可稱不可說不可思議の　功德は行者の身にみてり
○無礙光佛のみことには　未來の有情利せんとて
大勢至菩薩に　智慧の念佛さづけしむ
○濁世の有情をあはれみて　勢至念佛すゝめしむ
信心のひとを攝取して　淨土に歸入せしめけり
○釋迦彌陀の慈悲よりぞ　願作佛心はえしめたる
信心の智慧にいりてこそ　佛恩報ずる身とはなれ
○智慧の念佛うることは　法藏願力のなせるなり

他力の信水―まことの信心を水にたとふ

二種の廻向―往相廻向と還相廻向なり、往相とは極樂へ往生すること、還相とは極樂淨土より衆生濟度のため再び此の世界へ出て來る事、

等正覺―佛の正しき覺にひとしき位

憶念の心―前に出づ

彌勒菩薩―釋尊滅後五十六億七千萬年を經て此世へ佛として出づ、今や都率天に在はす

廻向の信樂うるひとは　大般涅槃をさとるなり

○如來の廻向に歸入して　願作佛心をうるひとは
自力の廻向をすてはてゝ　利益有情はきはもなし

○彌陀の智願海水に　他力の信水いりぬれば
眞實報土のならひにて　煩惱菩提一味なり

○如來二種の廻向を　ふかく信ずるひとはみな
等正覺にいたるゆへ　憶念の心はたへぬなり

○彌陀智願の廻向の　信樂まことにうるひとは
攝取不捨の利益ゆへ　等正覺にいたるなり

○五十六億七千萬　彌勒菩薩はとしをへん
まことの信心うるひとは　このたびさとりをひらくべし

○念佛往生の願により　等正覺にいたるひと
すなはち彌勒におなじくて　大般涅槃をさとるべし

○眞實信心うるゆへに　すなはち定聚にいりぬれば

頓教—凡夫が彌陀の願力に乘じて頓速に迷界を離脱する教

底下—末世の衆生の下劣なること

三恒河沙の諸佛—印度の恒河(がんぢす河)の沙の數ほど多く此の世へ出でたまひし佛

頓教毀滅のしるしには　生死の大海きはもなし

○正法の時機とおもへども　底下の凡愚となれる身は
清淨眞實のこゝろなし　發菩提心いかゞせん

○自力聖道の菩提心　こゝろもことばもおよばれず
常沒流轉の凡愚は　いかでか發起せしむべき

○三恒河沙の諸佛の　出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども　自力かなはで流轉せり

○像末五濁の世となりて　釋迦の遺教かくれしむ
彌陀の悲願ひろまりて　念佛往生さかりなり

○超世無上に攝取し　選擇五劫思惟して
光明壽命の誓願を　大悲の本としたまへり

○淨土の大菩提心は　願作佛心をすゝめしむ
すなはち願作佛心を　度衆生心となづけたり

○度衆生心といふことは　彌陀智願の廻向なり

壽命制限あるに至りたる當初を八萬歳とす百年に一つづつ減じて二萬歳の時より五濁惡世となる以下人壽十歳まで下る、今や定命五十一歳二歳の交なり

依正二報—依報とは山河、大地、衣服等衆生の所依となる果報、正報とは衆生の肉體精神、これ衆生各自の業因によりて與へられたる正しき果報なるが故也

九十五種—外道の種類

五濁惡邪まさるゆへ　毒蛇惡龍のごとくなり

○無明煩惱しげくして　塵數のごとく遍滿す
愛憎違順することは　高峯岳山にことならず

○有情の邪見熾盛にて　叢林棘刺のごとくなり
念佛の信者を疑謗して　破壞瞋毒さかりなり

○命濁中夭刹那にて　依正二報滅亡し
背正歸邪まさるゆへ　横にあたをぞおこしける

○末法第五の五百年　この世の一切有情の
如來の悲願を信ぜずは　出離その期はなかるべし

○九十五種世をけがす　唯佛一道きよくます
菩提に出到してのみぞ　火宅の利益は自然なる

○五濁の時機いたりては　道俗ともにあらそひて
念佛信ずるひとをみて　疑謗破滅さかりなり

○菩提をうまじきひとはみな　專修念佛にあたをなす

行證―敎の通り修行することと及其の修行の結果として證りをひらくことと

正像末の三時―釋尊入滅後五百年の間を正法の時といひ、次で千年の間を像法、其後一萬年の間を末法の時といふ

第五の五百年―此和讃製作の年次は釋尊入滅後二千二百六十年にて第五番目五百年の中葉に當る

白法―善法

數萬歲―人間の

正像末淨土和讚

愚禿善信集

○釋迦如來かくれまし〳〵て　二千餘年になりたまふ
正像の二時はおはりにき　如來の遺弟悲泣せよ

○末法五濁の有情の　行證かなはぬときなれば
釋迦の遺法こと〴〵く　龍宮にいりたまひにき

○正像末の三時には　彌陀の本願ひろまれり
像季末法のこの世には　諸善龍宮にいりたまふ

○大集經にときたまふ　この世は第五の五百年
鬪諍堅固なるゆへに　白法隱滯したまへり

○數萬歲の有情も　果報やうやくおとろへて
二萬歲にいたりては　五濁惡世の名をえたり

○劫濁のときうつるには　有情やうやく身小なり

正像末和讃

康元二歳丁巳二月九日夜寅時夢告云

○彌陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
攝取不捨の利益にて
無上覺をばさとるなり

預參—臨終に先ちて參集せしこと

如來涅槃の儀—釋尊入滅の儀式

震旦—印度より支那を指して呼ぶ稱

かの淸淨の善身にえたり—名號中に攝在せる衆善をば信の一念に悉く我身に攝得せりとの意

○道俗男女預參し　卿上雲客群集す
頭北面西右脇にて　如來涅槃の儀をまもる

○本師源空命終時　建暦第二壬申歲
初春下旬第五日　淨土に還歸せしめけり

已上源空聖人

已上七高僧和讃　一百十七首

○五濁惡世の衆生の　選擇本願信ずれば
不可稱不可說不可思議の　功德は行者の身にみてり

天竺 龍樹菩薩 天親菩薩　震旦 曇鸞和尚 道綽禪師 善導禪師　和朝 源信和尚 源空聖人　已上七人

聖德太子 敏達天皇元年正月一日誕生　當佛滅後一千五百二十一年也

南無阿彌陀佛をとけるには　衆善海水のごとくなり
かの淸淨の善身にえたり　ひとしく衆生に迴向せん

疑情—佛智を疑ふ心、之れ生死迷界にさまよふ原因なり

往生三たび—三度目の淨土往生衆生濟度のため三度此世へ出でたる也

靈山會上—靈鷲山釋尊說法の會座

頭陀—梵語、抖擻と譯す、惡業煩惱を拂ひ除く修行

化度—敎化濟度の略

○眞の知識にあふことは　かたきがなかになをかたし
流轉輪廻のきはなきは　疑情のさはりにしくぞなき

○源空光明はなたしめ　門徒につねにみせしめき
賢哲愚夫もえらばれず　豪貴鄙賤もへだてなし

○命終その期ちかづきて　本師源空のたまはく
往生みたびになりぬるに　このたびことにとげやすし

○源空みづからのたまはく　靈山會上にありしとき
聲聞僧にまじはりて　頭陀を行して化度せしむ

○粟散片州に誕生して　念佛宗をひろめしむ
衆生化度のためにとて　この土にたび〲きたらしむ

○阿彌陀如來化してこそ　本師源空としめしけれ
化緣すでにつきぬれば　淨土にかへりたまひにき

○本師源空のおはりには　光明紫雲のごとくなり
音樂哀婉雅亮にて　異香みぎりに映芳す

禪定博陸―世塵を遁れて佛道に入りたる人を禪門といふ、博陸は攝政關白の唐名、こゝは藤原兼實公
綽和尚―道綽大師

○源空三五のよはひにて　無常のことはりさとりつゝ
厭離の素懐をあらはして　菩提のみちにぞいらしめし

○源空智行の至德には　聖道諸宗の師主も
みなもろともに歸せしめて　一心金剛の戒師とす

○源空存在せしときに　金色の光明はなたしむ
禪定博陸まのあたり　拜見せしめたまひけり

○本師源空の本地をば　世俗のひと〴〵あひつたへ
綽和尚と稱ぜしめ　あるひは善導としめしけり

○源空勢至と示現し　あるひは彌陀と顯現す
上皇群臣尊敬し　京夷庶民欽仰す

○承久の太上法皇は　本師源空を歸敬しき
釋門儒林みなともに　ひとしく眞宗に悟入せり

○諸佛方便ときいたり　源空ひじりとしめしつゝ
無上の信心おしへてぞ　涅槃のかどをばひらきける

本願名號信受して　寤寐にわするゝことなかれ
○極悪深重の衆生は　他の方便さらになし
ひとへに彌陀を稱してぞ　淨土にむまるとのべたまふ
已上源信大師

源空聖人　付釋文　二十首

○本師源空世にいでて　弘願の一乘ひろめつゝ
日本一州こと〴〵く　淨土の機縁あらはれぬ
○智慧光のちからより　本師源空あらはれて
淨土眞宗をひらきつゝ　選擇本願のべたまふ
○善導源信すゝむとも　本師源空ひろめすは
片州濁世のともがらは　いかでか眞宗をさとらまし
○曠劫多生のあひだにも　出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずは　このたびむなしくすぎなまし

靈山聽衆—靈山とは印度の靈鷲山なり、釋尊多くこゝに說法す
報化二土—眞實報土と方便化土となり
專雜—念佛專修と助業雜修なり

念佛一門ひらきてぞ　濁世末代おしへける
靈山聽衆とおはしける　源信僧都のおしへには
報化二土をおしへてぞ　專雜の得失さだめたる

○本師源信和尙は　懷感禪師の釋により
處胎經をひらきてぞ　懈慢界をばあらはせる

○專修のひとをほむるには　千無一失とおしへたり
雜修のひとをきらふには　萬不一生とのべたまふ

○報の淨土の往生は　おほからずとぞあらはせる
化土にむまるゝ衆生をば　すくなからずとおしへたり

○男女貴賤ことごとく　彌陀の名號稱ずるに
行住坐臥もえらばれず　時處諸緣もさはりなし

○煩惱にまなこさへられて　攝取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらすなり

○彌陀の報土をねがふひと　外儀のすがたはことなりと

生盲闡提—生盲は生れつきのめくら闡提は梵語断善根又は信不具足と譯す

無爲—涅槃のさとり

○本願毀滅のともがらは　生盲闡提となづけたり
大地微塵劫をへて　ながく三塗にしづむなり

○西路を指授せしかども　自障障他せしほどに
曠劫已來もいたづらに　むなしくこそはすぎにけれ

○弘誓のちからをかふらずは　いづれのときにか娑婆をいでん
佛恩ふかくおもひつゝ　つねに彌陀を念ずべし

○娑婆永劫の苦をすてゝ　淨土無爲を期すること
本師釋迦のちからなり　長時に慈恩を報ずべし

已上善導大師

源信大師 付二釋文一 十首

○源信和尚ののたまはく　われこれ故佛とあらはれて
化縁すでにつきぬれば　本土にかへるとしめしけり

○本師源信ねんごろに　一代佛教のそのなかに

心光攝護—彌陀の大慈悲心より光明を放ちて念佛の衆生をおさめ取り護りたまふこと

五濁増—末法に至り惡事の増長するを云ふ

○金剛堅固の信心の　さだまるときをまちえてぞ
彌陀の心光攝護して　ながく生死をへだてける

眞實信心えざるをば　一心かけぬとおしへたり
一心かけたるひとはみな　三信具せずとおもふべし

○利他の信樂うるひとは　願に相應するゆへに
敎と佛語にしたがへは　外の雜縁さらになし

○眞宗念佛きゝえつゝ　一念無疑なるをこそ
希有最勝人とほめ　正念をうとはさだめたれ

○本願相應せざるゆへ　雜縁きたりみだるなり
信心亂失するをこそ　正念うすとはのべたまへ

○信は願より生ずれば　念佛成佛自然なり
自然はすなはち報土なり　證大涅槃うたがはず

○五濁増のときいたり　疑謗のともがらおほくして
道俗ともにあひきらひ　修ずるをみてはあたをなす

經道—釋尊一代經のこと
邪業繫—惡業その衆生を三界に繫縛するよりいふ
增上緣—すぐれたる強緣
報土—彌陀の因願（四十八の本願）に報ひ顯はれたる淨土
法性—諸法の體性即ち眞如
三品の懺悔—罪惡を懺悔する上中下の三種の品

○經道滅盡ときいたり　如來出世の本意なる
弘願眞宗にあひぬれば　凡夫念じてさとるなり

○佛法力の不思議には　諸邪業繫さはらねば
彌陀の本弘誓願の　增上緣となづけたり

○願力成就の報土には　自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら　如來の弘誓に乘ずなり

○煩惱具足と信知して　本願力に乘ずれば
すなはち穢身すてはてゝ　法性常樂證せしむ

○釋迦彌陀は慈悲の父母　種種に善巧方便し
われらが無上の信心を　發起せしめたまひけり

○眞心徹倒するひとは　金剛心なりければ
三品の懺悔するひとゝ　ひとしと宗師はのたまへり

○五濁惡世のわれらこそ　金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてゝ　自然の淨土にいたるなれ

法照少康—二師ともに善導の再

功徳藏—名號をさす

要門—定散二善より弘願念佛に入るをいふ

定散—定善の機散善の機

助正—讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚歎、供養の五行中第四の稱名を往生の正業とし他の四を助業とす

一心—他力の信心

佛號—名號也

千中無一—千人中一人眞實報土に往生するものなし

貪瞋二河—信仰に就き二河白道の喩

○世世に善導いでたまひ　法照少康としめしつゝ
功徳藏をひらきてぞ　諸佛の本意とげたまふ

○彌陀の名願によらざれば　百千萬劫すぐれども
いつゝのさはりはなれねば　女身をいかでか轉ずべき

○釋迦は要門ひらきつゝ　定散諸機をこしらへて
正雜二行方便し　ひとへに專修をすゝめしむ

○助正ならべて修するをば　すなはち雜修となづけたり
一心をえざるひとなれば　佛恩報ずるこゝろなし

○佛號むねと修すれども　現世をいのる行者をば
これも雜修となづけてぞ　千中無一ときらはるゝ

○こゝろはひとつにあらねども　雜行雜修これにたり
淨土の行にあらぬをば　ひとへに雜行となづけたり

○善導大師證をこひ　定散二心をひるがへし
貪瞋二河の譬喩をとき　弘願の信心守護せしむ

在此起心立行―娑婆世界に就て菩提心を起し三學六度の行を立つる事

一形―一生

若不生者―我が名號を稱ふるもの若し極樂へ生れずば自己も佛にならじとの阿彌陀佛の誓

ひとりも證をえじとこそ　教主世尊はときたまへ

○鸞師のおしへをうけつたへ　綽和尚はもろともに

在此起心立行は　此是自力とさだめたり

○濁世の起惡造罪は　暴風駛雨にことならず

諸佛これらをあはれみて　すゝめて淨土に歸せしめり

○一形惡をつくれども　專精にこゝろをかけしめて

つねに念佛せしむれば　諸障自然にのぞこりぬ

○縱令一生造惡の　衆生引接のためにとて

稱我名字と願じつゝ　若不生者とちかひたり

已上道綽大師

善導大師 付二釋文一　二十六首

○大心海より化してこそ　善導和尚とおはしけれ

末代濁世のためにとて　十方諸佛に證をこふ

如實修行相應—教への如く信じ行ずること
萬行諸善の小路—自力修行の難行道
本願一實の大道—他力眞實の易行道
涅槃の廣業—道綽禪師の涅槃經四十卷を幾度も講ぜられしをい

○決定の信をえざるゆへ　信心不淳とのべたまふ
如實修行相應は　信心ひとつにさだめたり

○萬行諸善の小路より　本願一實の大道に
歸入しぬれば涅槃の　さとりはすなはちひらくなり

○本師曇鸞大師をば　梁の天子蕭王は
おはせしがたにつねにむき　鸞菩薩とぞ禮しける

已上曇鸞和尚

道綽禪師 付釋文 七首

○本師道綽禪師は　聖道萬行さしおきて
唯有淨土一門を　通入すべきみちととく

○本師道綽大師は　涅槃の廣業さしおきて
本願他力をたのみつゝ　五濁の群生すゝめしむ

○末法五濁の衆生は　聖道の修行せしむとも

本則三三等ー娑婆にては三々九品の機相あれど浄土に到れば一二杯の品位階次なきをいふ

不如實修行ー敎の實義に契はずして修行すること

餘念間故ー彌陀佛を念じ名號を稱へながら、時々餘佛に心を掛くる故、具念相續せずと也

三信ー淳心、一心、相續心

○安樂佛國にいたるには　無上寶珠の名號と
眞實信心ひとつにて　無別道故ときたまふ

○如來淸淨本願の　無生の生なりければ
本則三三の品なれど　一二もかはることぞなき

○無礙光如來の名號と　かの光明智相とは
無明長夜の闇を破し　衆生の志願をみてたまふ

○不如實修行といへること　鸞師釋してのたまはく
一者信心あつからず　若存若亡するゆへに

○二者信心一ならず　決定なきゆへなれば
三者信心相續せず　餘念間故とのべたまふ

○三信展轉相成す　行者こゝろをとゞむべし
信心あつからざるゆへに　決定の信なかりけり

○決定の信なきゆへに　念相續せざるなり
念相續せざるゆへ　決定の信をえざるなり

て慈悲を以て普く一切衆生を濟度するをいふ
論主—淨土論の作者天親菩薩のこと
滅度—涅槃
畢竟成佛の道路—成佛の終局の道、絶對無二の最上法

○盡十方の無礙光は　無明のやみをてらしつゝ
一念歡喜するひとを　かならず滅度にいたらしむ

○無礙光の利益より　威德廣大の信をえて
かならず煩惱のこほりとけ　すなはち菩提のみづとなる

○罪障功德の體となる　こほりとみづのごとくにて
こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに德おほし

○名號不思議の海水は　逆謗の屍骸もとゞまらず
衆惡の萬川歸しぬれば　功德のうしほに一味なり

○盡十方無礙光の　大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば　智慧のうしほに一味なり

○安樂佛國に生ずるは　畢竟成佛の道路にて
無上の方便なりければ　諸佛淨土をすゝめけり

○諸佛三業莊嚴して　畢竟平等なることは
衆生虛誑の身口意を　治せんがためとのべたまふ

圓頓一乘—彌陀の本願、あらゆる善根功德を攝して缺くる所なく、又信ずる一念に速かに大利を得る故にいふ

悲願—大悲の本願

諸有—二十五の迷の世界

普賢の德—普賢菩薩は釋尊の右の脇士にて慈悲を司る菩薩、凡

○天親菩薩のみことをも　鸞師ときのべたまはずは
他力廣大威德の　心行いかでかさとらまし

○本願圓頓一乘は　逆惡攝すと信知して
煩惱菩提體無二と　すみやかにとくさとらしむ

○いつゝの不思議をとくなかに　佛法不思議にしくぞなき
佛法不思議といふことは　彌陀の弘誓になづけたり

○彌陀の廻向成就して　往相還相ふたつなり
これらの廻向によりてこそ　心行ともにえしむなれ

○往相の廻向ととくことは　彌陀の方便ときいたり
悲願の信行えしむれば　生死すなはち涅槃なり

○還相の廻向ととくことは　利他敎化の果をえしめ
すなはち諸有に廻入して　普賢の德を修するなり

○論主の一心ととけるをば　曇鸞大師のみことには
煩惱成就のわれらが　他力の信とのべたまふ

魏の主―東魏の孝靜帝

淨業―淨土參りの行業、即ち念佛

○鸞師こたへてのたまはく　わが身は智慧あさくして
いまだ地位にいらざれば　念力ひとしくおよばれず
○一切道俗もろともに　歸すべきところぞさらになき
安樂勸歸のこゝろざし　鸞師ひとりさだめたり
○魏の主勅して幷州の　大巖寺にぞおはしける
やうやくをはりにのぞみては　汾州にうつりたまひにき
○魏の天子はたふとみて　神鸞とこそ號せしか
おはせしところのその名をば　鸞公巖とぞなづけたる
○淨業さかりにすゝめつゝ　玄忠寺にぞおはしける
魏の興和四年に　遙山寺にこそうつりしか
○六十有七ときいたり　淨土の往生とげたまふ
そのとき靈瑞不思議にて　一切道俗歸敬しき
○君子ひとへにおもくして　勅宣くだしてたちまちに
汾州汾西秦陵の　勝地に靈廟たてたまふ

度衆生心—願作佛の心中に衆生濟度利他の心を具す

願土—極樂淨土

四論—中論、百論、十二門論、大智度論、共に三論宗所依の書

度衆生の心はこれ　利他眞實の信心なり
○信心すなはち一心なり　一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心　この心すなはち他力なり
○願土にいたればすみやかに　無上涅槃を證してぞ
すなはち大悲をおこすなり　これを廻向となづけたり

已上天親菩薩

曇鸞和尚 付釋文 三十四首

○本師曇鸞和尚は　菩提流支のおしへにて
仙經ながくやきすてゝ　淨土にふかく歸せしめき
○四論の講說さしおきて　本願他力をときたまひ
具縛の凡衆をみちびきて　涅槃のかどにぞいらしめし
○世俗の君子幸臨し　勅して淨土のゆへをとふ
十方佛國淨土なり　なにゝよりてか西にある

唯佛與佛の知見—唯佛と佛とが知ろしめすと云ふ事

天人不動の聖衆—淨土へ往生したる菩薩方のこと

無礙光—阿彌陀佛

願作佛心—佛にならんとねがふ心

煩惱成就のわれらには　彌陀の弘誓をすゝめしむ

○安養淨土の莊嚴は　唯佛與佛の知見なり
究竟せること虛空にして　廣大にして邊際なし

○本願力にあひぬれば　むなしくすぐるひとぞなき
功德の寶海みち〳〵て　煩惱の濁水へだてなし

○如來淨華の聖衆は　正覺のはなより化生して
衆生の願樂こと〴〵く　すみやかにとく滿足す

○天人不動の聖衆は　弘誓の智海より生ず
心業の功德淸淨にて　虛空のごとく差別なし

○天親論主は一心に　無礙光に歸命す
本願力に乘ずれば　報土にいたるとのべたまふ

○盡十方の無礙光佛　一心に歸命するをこそ
天親論主のみことには　願作佛心とのべたまへ

○願作佛の心はこれ　度衆生のこゝろなり

弘誓—弘く一切衆生を救濟せんと誓へる彌陀の本願

因地—菩薩初發心の地位

○不退のくらゐすみやかに　えんとおもはんひとはみな
恭敬の心に執持して　彌陀の名號稱すべし

○生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば
彌陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける

○智度論にのたまはく　如來は無上法皇なり
菩薩は法臣としたまひて　尊重すべきは世尊なり

○一切菩薩ののたまはく　われら因地にありしとき
無量劫をへめぐりて　萬善諸行を修せしかど

○恩愛はなはだたちがたく　生死はなはだつきがたし
念佛三昧行じてぞ　罪障を滅し度脫せし

已上龍樹菩薩

天親菩薩 付二釋文一 十首

○釋迦の教法おほけれど　天親菩薩はねんごろに

高僧和讃

高僧和讃

愚禿親鸞作

龍樹菩薩 附釋文 十首

○本師龍樹菩薩は　智度十住毘婆娑等
つくりておほく西をほめ　すゝめて念佛せしめたり

○南天竺に比丘あらん　龍樹菩薩となづくべし
有無の邪見を破すべしと　世尊はかねてときたまふ

○本師龍樹菩薩は　大乗無上の法をとき
歡喜地を證してぞ　ひとへに念佛すゝめける

○龍樹大士世にいでて　難行易行のみちおしへ
流轉輪廻のわれらをば　弘誓のふねにのせたまふ

○本師龍樹菩薩の　おしへをつたへきかんひと
本願こゝろにかけしめて　つねに彌陀を稱すべし

西—西方彌陀の淨土

有無の邪見—前に註す

歡喜地—將來必ず佛となるに定まり喜びの心を生ずる位

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

教主世尊—釋尊
佛—久遠古成の阿彌陀佛
この身—勢至の自稱
現前當來—現在と未來と
染香人—念佛者を喩へていふ
香光莊嚴—念佛を香光に喩ふ念佛三昧の事也
無生忍—正定聚不退の位のこと

○教主世尊にまふさしむ　往昔恒河沙劫に
佛世にいでたまへりき　無量光とまふしけり

○十二の如來あひつぎて　十二劫をへたまへり
最後の如來をなづけてぞ　超日月光とまふしける

○超日月光この身には　念佛三昧おしへしむ
十方の如來は衆生を　一子のごとく憐念す

○子の母をおもふがごとくにて　衆生佛を憶すれば
現前當來とをからず　如來を拜見うたがはず

○染香人のその身には　香氣あるがごとくなり
これをすなはちなづけてぞ　香光莊嚴とまふすなり

○われもと因地にありしとき　念佛の心をもちてこそ
無生忍にはいりしかば　いまこの娑婆界にして

○念佛のひとを攝取して　淨土に歸せしむるなり
大勢至菩薩の　大恩ふかく報ずべし

○これらの善神みなともに　念佛のひとをまもるなり
○願力不思議の信心は　大菩提心なりければ
天地にみてる惡鬼神　みなこと〴〵くおそるなり
○南無阿彌陀佛をとなふれば　觀音勢至はもろともに
恒沙塵數の菩薩と　かげのごとくに身にそへり
○無礙光佛のひかりには　無數の阿彌陀まし〳〵て
化佛おの〳〵こと〴〵く　眞實信心をまもるなり
○南無阿彌陀佛をとなふれば　十方無量の諸佛は
百重千重圍繞して　よろこびまもりたまふなり

已上現世利益

首楞嚴經によりて大勢至菩薩和讃したてまつる　八首

○勢至念佛圓通して　五十二菩薩もろともに
すなはち座よりたゝしめて　佛足頂禮せしめつゝ

定業—生るゝ時より定まれる業報

四天大王—須彌山の四方に住する帝釋の臣下

堅牢地祇—神の名、大地を堅固ならしむ

流轉輪廻のつみきへて
定業中夭のぞこりぬ
○南無阿彌陀佛をとなふれば
梵王帝釋歸敬す
諸天善神こと〴〵く
よるひるつねにまもるなり
○南無阿彌陀佛をとなふれば
四天大王もろともに
よるひるつねにまもりつゝ
よろづの惡鬼をちかづけず
○南無阿彌陀佛をとなふれば
堅牢地祇は尊敬す
かげとかたちとのごとくにて
よるひるつねにまもるなり
○南無阿彌陀佛をとなふれば
難陀跋難大龍等
無量の龍神尊敬し
よるひるつねにまもるなり
○南無阿彌陀佛をとなふれば
炎魔法王尊敬す
五道の冥官みなともに
よるひるつねにまもるなり
○南無阿彌陀佛をとなふれば
他化天の大魔王
釋迦牟尼佛のみまへにて
まもらんとこそちかひしか
○天神地祇はこと〴〵く
善鬼神となづけたり

金光明ー經名

山家ー傳敎大師は比叡山の草創者なるが故にいふ

七難ー日月失度難、星宿失度難、災火難、雨水變異難、惡風難、亢陽難、惡賊難

○信心よろこぶそのひとを　如來とひとしとときたまふ
大信心は佛性なり　佛性すなはち如來なり

○衆生有礙のさとりにて　無礙の佛智をうたがへば
曾婆羅頻陀羅地獄にて　多劫衆苦にしづむなり

已上諸經意

現世利益和讃　十五首

○阿彌陀如來來化して　息災延命のためにとて
金光明の壽量品　ときおきたまへるみのりなり

○山家の傳敎大師は　國土人民をあはれみて
七難消滅の誦文には　南無阿彌陀佛をとなふべし

○一切の功德にすぐれたる　南無阿彌陀佛をとなふれば
三世の重障みななながら　かならず轉じて輕微なり

○南無阿彌陀佛をとなふれば　この世の利益きはもなし

百千倶胝―十萬億のこと

易往―凡夫の自力を用ひず、佛の願力に乘じて極樂往生する故往き易き也

一子地―一切衆生を平等に我一子の如く憐む心を起す位

○無明の大夜をあはれみて　法身の光輪きはもなく
無礙光佛としめしてぞ　安養界に影現する

○久遠實成阿彌陀佛　五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟尼佛としめしてぞ　迦耶城には應現する

○百千倶胝の劫をへて　百千倶胝のしたをいだし
したごと無量のこゑをして　彌陀をほめんになをつきじ

○大聖易往とときたまふ　淨土をうたがふ衆生をば
無眼人とぞなづけたる　無耳人とぞのべたまふ

○無上上は眞解脫　眞解脫は如來なり
眞解脫にいたりてぞ　無愛無疑とはあらはるゝ

○平等心をうるときを　一子地となづけたり
一子地は佛性なり　安養にいたりてさとるべし

○如來すなはち涅槃なり　涅槃を佛性となづけたり
凡地にしてはさとられず　安養にいたりて證すべし

○十方微塵世界の
念佛の衆生をみそなはし
攝取してすてざれば
阿彌陀となづけたてまつる

○恒沙塵數の如來は
萬行の少善きらひつゝ
名號不思議の信心を
ひとしくひとへにすゝめしむ

○十方恒沙の諸佛は
極難信ののりをとき
五濁惡世のためにとて
證誠護念せしめたり

○諸佛の護念證誠は
悲願成就のゆへなれば
金剛心をえんひとは
彌陀の大恩報ずべし

○五濁惡時惡世界
濁惡邪見の衆生には
彌陀の名號あたへてぞ
恒沙の諸佛すゝめたる

已上彌陀經意

諸經のこゝろによりて

彌陀和讃　九首

自力の三心―至誠心、深心、廻向發願心

不宜住此と奏してぞ　闍王の逆心いさめける

○耆婆大臣おさへてぞ　却行而退せしめつゝ

闍王つるぎをすてしめて　韋提をみやに禁じける

○彌陀釋迦方便して　阿難目連富樓那韋提

達多闍王頻婆娑羅　耆婆月光行雨等

○大聖おの〳〵もろともに　凡愚底下のつみひとを

逆惡もさらぬ誓願に　方便引入せしめけり

○釋迦韋提方便して　淨土の機緣熟すれば

雨行大臣證として　闍王逆惡興ぜしむ

○定散諸機各別の　自力の三心ひるがへし

如來利他の信心に　通入せんとねがふべし

已上觀經意

彌陀經意　五首

自然の淨土—無爲自然、眞實報土をいふ

光臺現國—光明の金臺に諸佛の國土を現ずること

旃陀羅—禽獸を殺して渡世する種族

○念佛成佛これ眞宗　萬行諸善これ假門
權實眞假をわかずして　自然の淨土をえぞしらぬ

○聖道權化の方便に　衆生ひさしくとゞまりて
諸有に流轉の身とぞなる　悲願の一乘歸命せよ

已上大經意

觀經意　九首

○恩德廣大釋迦如來　韋提夫人に勅してぞ
光臺現國のそのなかに　安樂世界をえらばしむ

○頻婆娑羅王勅せしめ　宿因その期をまたずして
仙人殺害のむくひには　七重のむろにとぢられき

○阿闍世王は瞋怒して　我母是賊としめしてぞ
無道に母を害せんと　つるぎをぬきてむかひける

○耆婆月光ねんごろに　是旃陀羅とはぢしめて

至心廻向欲生—念佛を稱へたる功力にて淨土に往生せんとすること
善本德本—名號のこと
一乘の機—念佛一法を乘物として彼岸に到らんとする機類の人

○至心廻向欲生と
十方衆生を方便し
名號の眞門ひらきてぞ
不果遂者と願じける

○果遂の願によりてこそ
釋迦は善本德本を
彌陀經にあらはして
一乘の機をすゝめける

○定散自力の稱名は
果遂のちかひに歸してこそ
おしへざれども自然に
眞如の門に轉入する

○安樂淨土をねがひつゝ
他力の信をえぬひとは
佛智不思議をうたがひて
邊地懈慢にとまるなり

○如來の興世にあひがたく
諸佛の經道きゝがたし
菩薩の勝法きくことも
無量劫にもまれらなり

○善知識にあふことも
おしふることもまたかたし
よくきくこともかたければ
信ずることもなをかたし

○一代諸教の信よりも
弘願の信樂なをかたし
難中之難とときたまひ
無過斯難とのべたまふ

無礙光佛—阿彌陀佛のこと
定聚—正定聚の略、前に出づ
不退—正定聚と同じ意
滅度—梵語涅槃の譯
發願欲生—自己に善行を修して極樂に往生せんと願ふこと、自力の願心
現其人前—命終らんとする時其人の前に來迎あること
定散—息慮凝心と廢惡修善と

○無礙光佛のひかりには　清淨歡喜智慧光
その徳不可思議にして　十方諸有を利益せり

○至心信樂欲生と　十方諸有をすゝめてぞ
不思議の誓願あらはして　眞實報土の因とする

○眞實信心うるひとは　すなはち定聚のかずにいる
不退のくらゐにいりぬれば　かならず滅度にいたらしむ

○彌陀の大悲ふかければ　佛智の不思議をあらはして
變成男子の願をたて　女人成佛ちかひたり

○至心發願欲生と　十方衆生を方便し
衆善の假門ひらきてぞ　現其人前と願じける

○臨終現前の願により　釋迦は諸善をこと〴〵く
觀經一部にあらはして　定散諸機をすゝめけり

○諸善萬行こと〴〵く　至心發願せるゆへに
往生淨土の方便の　善とならぬはなかりけり

阿難—釋尊の從弟にして十大弟子中の一人
かし—きの延音
大寂定—阿彌陀佛を念ずる定
問斯慧義—阿難の智慧勝れたる問を褒む
猶靈瑞華—優曇華の咲く如く稀なるをいふ
饒王佛—衆生を饒益する事の自在なる佛、世自在王佛の異名

淨土和讚

大經意　二十二首

愚禿親鸞作

○尊者阿難座よりたち　世尊の威光を瞻仰し
生希有心とおどろかし　未曾見とぞあやしみし

○如來の光瑞希有にして　阿難はなはだこゝろよく
如是之義ととへりしに　出世の本意あらはせり

○大寂定にいりたまひ　如來の光顏たへにして
阿難の慧見をみそなはし　問斯慧義とほめたまふ

○如來興世の本意には　本願眞實ひらきてぞ
難値難見とときたまひ　猶靈瑞華としめしける

○彌陀成佛のこのかたは　いまに十劫とときたれど
塵點久遠劫よりも　ひさしき佛とみへたまふ

○南無不可思議光佛　饒王佛のみもとにて
十方淨土のなかよりぞ　本願選擇攝取する

無漏—有漏に反對、漏は煩惱の異名
依果—依報と同じ
無量慧讃—佛の事
二智—權實の二智也
攝化隨緣—衆生の機に隨ひ種々の方法を以て救濟すること
無礙人—諸佛のこと
慶所聞—南無阿彌陀佛の謂れをきゝて喜ぶ事
乃暨—乃至といふに同じ

無漏の依果不思議なり　功德藏を歸命せよ
○三塗苦難ながくとぢ　但有自然快樂音
このゆへ安樂となづけたり　無極尊を歸命せよ
○十方三世の無量慧　おなじく一如に乘じてぞ
二智圓滿道平等　攝化隨緣不思議なり
○彌陀の淨土に歸しぬれば　すなはち諸佛に歸するなり
一心をもちて一佛を　ほむるは無礙人をほむるなり
○信心歡喜慶所聞　乃暨一念至心者
南無不可思議光佛　頭面に禮したてまつれ
○佛慧功德をほめしめて　十方の有緣にきかしめん
信心すでにえんひとは　つねに佛恩報ずべし

已上四十八首　愚禿親鸞作

阿彌陀如來　觀世音菩薩　大勢至菩薩
釋迦牟尼如來　富樓那尊者　大目犍連　阿難尊者
頻婆娑羅王　韋提夫人　耆婆大臣　月光大臣
提婆尊者　阿闍世王　雨行大臣　守門者

眞無量—阿彌陀佛

清淨樂—阿彌陀佛

本願功德聚—阿彌陀佛

八功德水—澄淨、清冷、輕軟、甘美、潤澤、安和、除患、增益の、德を備へたる水

慈悲方便不思議なり　眞無量を歸命せよ
○寶林寶樹微妙音　自然清和の伎樂にて
哀婉雅亮すぐれたり　清淨樂を歸命せよ
○七寶樹林くにゝみつ　光耀たがひにかゞやけり
華菓枝葉またおなじ　本願功德聚を歸命せよ
○清風寶樹をふくときは　いつゝの音聲いだしつゝ
宮商和して自然なり　清淨勳を禮すべし
○一一のはなのなかよりは　三十六百千億の
光明てらしてほがらかに　いたらぬところはさらになし
○一一のはなのなかよりは　三十六百千億の
佛身もひかりもひとしくて　相好金山のごとくなり
○相好ごとに百千の　ひかりを十方にはなちてぞ
つねに妙法ときひろめ　衆生を佛道にいらしむる
○七寶の寶池いさぎよく　八功德水みちみてり

不退─必ず成佛すべき位に定り更に退轉する事なきを云ふ

恒沙─恒河の砂の數ほど多きを云ふ

婆伽婆─梵音世尊と譯す、佛の異名

方便化身の淨土─眞實報土に對する語、他力信心の人は眞實報土に生れ諸行往生の人は方便化土に生る

不可思議尊─阿彌陀佛

佛の御名をきくひとは　ながく不退にかなふなり

○神力無極の阿彌陀は　無量の諸佛ほめたまふ

東方恒沙の佛國より　無數の菩薩ゆきたまふ

○自餘の九方の佛國も　菩薩の往覲みなおなじ

釋迦牟尼如來偈をときて　無量の功德をほめたまふ

○十方の無量菩薩衆　德本うへんためにとて

恭敬をいたし歌嘆す　みなひと婆伽婆を歸命せよ

○七寶講堂道場樹　方便化身の淨土なり

十方來生きはもなし　講堂道場禮すべし

○妙土廣大超數限　本願莊嚴よりおこる

清淨大攝受に　稽首歸命せしむべし

○自利々他圓滿して　歸命方便巧莊嚴

こゝろもことばもたへたれば　不可思議尊を歸命せよ

○神力本願及滿足　明了堅固究竟願

信樂―疑なく信じ愛樂する事

依正―依報正報のこと、依報とは安樂國土のあらゆる莊嚴をいひ正報とは彌陀觀音勢至等淨土の聖衆をいふ

法藏―阿彌陀佛の因位即ち修行中の名、

大心力―阿彌陀佛の異名

無稱佛―阿彌陀佛の異名

已今當―過去、未來、現在

邪定不定聚くにゝなし　諸佛讃嘆したまへり

○十方諸有の衆生は　阿彌陀至德の御名をきゝ
眞實信心いたりなば　おほきに所聞を慶喜せん

○若不生者のちかひゆへ　信樂まことにときいたり
一念慶喜するひとは　往生かならずさだまりぬ

○安樂佛土の依正は　法藏願力のなせるなり
天上天下にたぐひなし　大心力を歸命せよ

○安樂國土の莊嚴は　釋迦無礙のみことにて
とくともつきじとのべたまふ　無稱佛を歸命せよ

○已今當の往生は　この土の衆生のみならず
十方佛土よりきたる　無量無數不可計なり

○阿彌陀佛の御名をきゝ　歡喜讃仰せしむれば
功德の寶を具足して　一念大利無上なり

○たとひ大千世界に　みてらん火をもすぎゆきて

大心海―阿彌陀佛の事

虛無、無極―共に涅槃の異名
平等力―彌陀佛のこと
正定聚―他力信心を得て正しく佛になると定まりたる位

普賢の德に歸してこそ　穢國にかならず化するなれ

○十方衆生のためにとて　如來の法藏あつめてぞ
本願弘誓に歸せしむる　大心海を歸命せよ

○觀音勢至もろともに　慈光世界を照曜し
有緣を度してしばらくも　休息あることなかりけり

○安樂淨土にいたるひと　五濁惡世にかへりては
釋迦牟尼佛のごとくにて　利益衆生はきはもなし

○神力自在なることは　測量すべきことぞなき
不思議の德をあつめたり　無上尊を歸命せよ

○安樂聲聞菩薩衆　人天智慧ほがらかに
身相莊嚴みなおなじ　他方に順じて名をつらぬ

○顏容端政たぐひなし　精微妙軀非人天
虛無之身無極體　平等力を歸命せよ

○安樂國をねがふひと　正定聚にこそ住すなれ

大安慰—彌陀佛をいふ
三乘—聲聞、緣覺、菩薩なり
神光の離相—不思議なる光明のすぐれたる相
無稱光佛—阿彌陀佛の異名
無等等—無比無等の最上者の意、佛を云ふ
廣大會—阿彌陀佛のこと
一生補處—一生を過ぐれば補處を補ふべき位を云ふ

法喜をうとぞのべたまふ　大安慰を歸命せよ

○無明の闇を破するゆへ　智慧光佛となづけたり
一切諸佛三乘衆　ともに嘆譽したまへり

○光明てらしてたへざれば　不斷光佛となづけたり
聞光力のゆへなれば　心不斷にて往生す

○佛光測量なきゆへに　難思光佛となづけたり
諸佛は往生嘆じつゝ　彌陀の功德を稱ぜしむ

○神光の離相をとかざれば　無稱光佛となづけたり
因光成佛のひかりをば　諸佛の嘆ずるところなり

○光明月日に勝過して　超日月光となづけたり
釋迦嘆じてなをつきず　無等等を歸命せよ

○彌陀初會の聖衆は　算數のおよぶことぞなき
淨土をねがはんひとはみな　廣大會を歸命せよ

○安樂無量の大菩薩　一生補處にいたるなり

有量の諸相―身の大小、命の長短等分際のある一切の衆生
眞實明―阿彌陀佛の異名
有無―有無の二見、有の見とは、人はこゝに死しては彼處に生れ永遠に存續すと邪執する見、無の見とは、人は死して虚無に歸すと執する見
三塗―地獄、餓鬼、畜生の三道

法身の光輪きはもなく　世の盲冥をてらすなり

○智慧の光明はかりなし　有量の諸相ことごとく
光暁かふらぬものはなし　眞實明に歸命せよ

○解脱の光輪きはもなし　光觸かふるものはみな
有無をはなるとのべたまふ　平等覺に歸命せよ

○光雲無礙如虚空　一切の有礙にさはりなし
光澤かふらぬものぞなき　難思議を歸命せよ

○清淨光明ならびなし　遇斯光のゆへなれば
一切の業繫ものぞこりぬ　畢竟依を歸命せよ

○佛光照曜最第一　光炎王佛となづけたり
三塗の黒闇ひらくなり　大應供を歸命せよ

○道光明朗超絶せり　清淨光佛とまうすなり
ひとたび光照かふるもの　業垢をのぞき解脱をう

○慈光はるかにかふらしめ　ひかりのいたるところには

佛徳による異名を列ぬ

又號無礙光　難思議　又號無對光　畢竟依
又號光炎王　大應供　又號清淨光　又號歡喜光
大安慰　又號智慧光　又號不斷光　又號難思光
又號無稱光　號超日月光　無等等廣大會
大心海　無上尊　平等力　大心力
無稱佛　婆伽婆　講堂清淨大攝受
不可思議尊　道場樹　眞無量　清淨樂
本願功德聚　清淨動　功德藏　無極尊
南無不可思議光已上略鈔也

十住毘婆沙論曰　自在人我禮　清淨人歸命　無量德稱讚　已上

讃阿彌陀佛偈和讃　　愚禿親鸞作

南無阿彌陀佛

○彌陀成佛のこのかたは　いまに十劫をへたまへり

彌陀の名號―南無阿彌陀佛

憶念の心―本願を持ちて忘れざること

宮殿―佛智不思議を疑ひつゝ自力念佛する人の生るゝ所、疑城胎宮

無量光―以下三十七阿彌陀佛の

和讃

淨土和讃

○彌陀の名號となへつゝ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　佛恩報ずるおもひあり

○誓願不思議をうたがひて　御名を稱する往生は
宮殿のうちに五百歳　むなしくすぐとぞときたまふ

讃阿彌陀佛偈曰　曇鸞御造

南無阿彌陀佛　釋名無量壽傍經奉讃亦曰安養

成佛已來歷十劫　壽命方將無有量
法身光輪遍法界　照世盲冥故頂禮
一又號無量光眞實明　三又號無邊光平等覺

目録

親鸞聖人文集目錄

癡(痴)、最(㝡)、萠(万)、萌(萠)、他(佗)、記(記、記)、起(起)、寶(寳)等の誤字及び俗字を正誤統一したり。

チ。『淨土文類聚鈔』以下、原漢文なれど、こゝには和譯しぬ。

リ。頭註と索引とは編者の筆に成るもの也。

以上總ては本集の、他の此の種の書籍と異なる處ならんも、忽卒の際、急遽校訂編纂して上梓せしなれば、なほ多少の誤謬と意に滿たぬ個處あるは免れざるべし。特に讀者の寛恕を請ふ所なり。

大正三年七月

校訂者　華園兼秀

ば、之れは其の儘に存し、なほ原本になき處をも、宗祖の用ゐられしものに倣ひて之れを附し、總振假名となせり。

ニ。原本には、濁音半濁音の符、及び句讀一切を省きあれど、本集には諸書を參考して、嚴密に之れを施したり。

ホ。文中引用の漢文は、世間普通の反點に改め、傍訓は本字と並行せしむべく努めたり。

ヘ。形式も成る可く原形を維持したれども、編輯上、形の統一を圖らんが爲には間、私したる處あり、殊に漢文和譯のものに於て、其の處に意を用ゐたる多し。

ト。往(徃)、涅(𣵀)、無(无、旡)、礙(碍、㝵)、劫(刼)、場(塲)、讚(讃、賛、贊)、廻(迴、回、囘)、恒(恆)、

一。教行信證――六卷。廣く經論釋に亘りて、他力本願の實意を顯はし、念佛の奥義を大成するもの、淨土眞宗開闢の根本寶典なりとす。元仁元年一月十五日、五十二歳の選也。

三。次に本集の翻刻に關し、或は煩瑣の嫌ひなきにあらねど、古聖の教典を校訂することなれば、特に編輯の上に採りたる方針を摘記せんに、概ね次の如し。

イ。本集は、大體、大谷派本願寺本山の藏版に據れり。

ロ。原本は全部片假名なれど、今は總べて平假名に改む。

ハ。假名遣ひは、之れを現今のものに改めんには、たゞ振假名のみに止めず、文中の假名書きより、文法の上にまで及ばざるべからざれ

と共に不詳、覺如上人の集也。

一。歎異鈔――一卷。法語を鈔錄して一卷となすもの、選者異說あれども唯圓房とするが眞なるが如し、他力信仰の至極を赤裸々に表白するもの也。聖人の『文』にはあらねど特に入れたり。

一。淨土文類聚鈔――一卷。『敎行信證』一部六卷の中より、其の精髓を鈔出したるもの、建長七年七月十四日、八十三歲の編也。

一。愚禿鈔――二卷。敎義及び信仰につき、己證の領解を述べたるもの、建長七年八月二十七日、八十三歲の作也。

一。入出二門偈――一卷。往還二廻向の義を說き、願力成就の五念五功德を明かせるもの、建長八年三月二十三日、八十四歲の書也。

往生の勝劣を示せるもの、康元二年三月二日、八十五歳の輯也。

一。尊號眞像銘文——二卷。名號の偉徳と、傳師の鴻恩とを彰はすもの、建長七年六月二日、八十三歳の著也。

一。一念多念證文——一卷。一念往生、多念業成の偏執の非なるを示せるもの、正嘉元年八月六日、八十五歳の筆也。

一。唯信鈔文意——一卷。聖覺法印の『唯信鈔』に引用せる要文を詳解したるもの、正嘉元年八月十九日、八十五歳の文也。

一。末燈鈔——一卷。七十九歳以後、門弟に與へたる法語及び消息を聚めたるもの、正慶二年四月、從覺上人の纂也。

一。御消息集——一卷。『末燈鈔』と同種のもの、製作の年月、『歎異鈔』

二。其の聖人が一代の燃ゆるが如き信念は、筆に迸りて文字をなし、遺訓今に傳はる。茲に主なるものを輯めて一卷となす。載する處、順次簡單に解題して左に列ねん。

一。三帖和讃――三卷。報謝の意を以て、佛德讃嘆と經釋の義理を知り易からしめん爲に製作せられたるにて、『淨土和讃』、『高僧和讃』は七十六歲、寶治二年一月二十一日、『正像末和讃』は八十六歲、正嘉二年九月二十四日の作也。

一。往還廻向文類――一卷。經釋によりて往相廻向と還相廻向との義を明かすもの、康元元年十一月二十九日、八十四歲の撰也。

一。三經往生文類――一卷。三部經、異譯をも對照して、三經の眞假、

緒　言

一。絶對他力の念佛を標榜して、克く人生の歸趣を示し、我等の精神界を指導して、如來の大悲を我も信じ、人にも教へられたるは、淨土眞宗の祖、親鸞聖人なりとす。聖人、承安三年四月一日京に生れ、九歳の春出家して後、叡山に學ぶこと二十年なりしが、頑魯の凡夫、自力の行を以て、離脱の開悟を獲る能はずと覺り、建仁元年二月、寶幢の場を謙下して、吉水に源空上人の門を叩き、念佛の眞意義を解して他力信仰の人となり、慈光界裡に活き給ひしなりき。かくて滿九十歳の一生を、御同朋御同行の教化に送り、遂に弘長二年十一月二十八日、往生の素懐を遂げ給ひぬ。實に今を去る六百五十三年也。——(A.D. 1168—1257. 佛滅1645—1734.)——

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

親鸞聖人文集

全